柏倉遺跡群

前田遺跡 I

市之関

県営柏倉地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

巻頭図版１　市之関前田遺跡の細石器文化石器群

巻頭図版２　市之関前田遺跡の細石器文化石器群

序

宮城村は、群馬県の代名詞ともいえる赤城山の南麓中央に位置し、「花と緑とふれあいの郷」のキャッチフレーズにふさわしく桜やツツジをはじめとした四季折々の花が咲く風光明媚な所です。

自然豊かなこの村でも近年農業の大型機械化が進み、村民の要望に答えるべく昭和62年度から柏倉地区と市之関地区の一部を対象に県営の土地改良事業を実施してきました。

市之関前田遺跡は周知の縄文時代の遺跡地でしたが、今回土地改良事業に伴って発掘調査され、縄文時代のみならず旧石器時代から近世までの遺構や遺物が出土しました。特に、群馬県内で初めてまとまりをもって検出された野岳・休場型の細石器文化は、故相沢忠洋氏によって発掘調査された本村苗ケ島の桝形遺跡と共に旧石器時代最終末の在り方を研究するうえで貴重な資料であろうと考えられます。

桝形遺跡に加え、宮城村内で今までに実施された市之関遺跡や白山古墳といった学史的な発掘調査と同様に、本報告書が赤城山南麓地域の歴史解明の一助として少しでも寄与できれば幸いかと思います。

最後になりましたが、本発掘調査を実施するにあたり終始ご指導、ご協力いただきました多くの関係者の皆様に厚く感謝の意を表し、序にかえさせていただきます。

平成３年３月

宮城村教育委員会

教育長　茂　木　利　次

例　　言

1．本書は群馬県勢多郡宮城村大字市之関字前田795番地外に所在する柏倉遺跡群市之関前田遺跡の発掘調査報告書Ⅰ《旧石器時代編》である。本遺跡の調査報告書はⅡ《縄文時代編》・Ⅲ《平安時代以降編》により構成される。

2．「市之関前田遺跡」は発掘調査時および概報においては「前田遺跡」と呼称していたが、遺跡名の適正化を図り、遺跡所在地の大字・子字名を併記することとした。

3．発掘調査は県営柏倉地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、予備調査を含め三次にわたり実施した。

第一次調査　昭和62年11月6日～昭和63年1月22日（昭和62年度概報分）

第二次調査　昭和63年10月24日～平成元年3月31日

第三次調査　平成元年4月10日～同　年11月10日（旧石器時代については本報告）

また、整理作業ならびに本書の作成は発掘調査に継続して行った。

4．発掘調査ならびに整理作業は各年度の国宝重要文化財等保存整備費国庫補助金及び前橋土地改良事務所委託金を使用して、宮城村教育委員会が行った。

5．調査組織は次のとおりである。

事　務　局

教　育　長　茂木　利次

事務局長　斎藤　賢寿

係　　長　細井　輝子（平成2年3月転出）　大崎　キワ（平成2年4月着任）

文化財担当　松村　康平

調査担当　細野　高伯

調査補助員　小菅　将夫（明治大学大学院生・現笠懸町教育委員会）

6．本書の編集は細野が担当し、小菅、萩谷千明（明治大学大学院生）、諸星良一・伊藤秀一（明治大学学生）がこれを補佐した。また、執筆については細野・小菅・萩谷・諸星が分担して行い、目次にその文責を記した。

7．現場における遺跡の写真撮影は細野・小菅が行い、遺物写真については角田英夫・たつみ写真スタジオがこれを行った。また、航空写真については（有）青高館に依頼した。

8．土壌等の自然理科学分析については（株）パリノ・サーヴェイに業務委託を行った。

9．本報告にかかる出土品、調査記録図面および写真等は、一括して宮城村教育委員会が保存・管理をしている。

10．本遺跡の発掘および整理作業の参加者は次のとおりである。

発掘調査

阿久沢一郎、阿久沢うめ、阿久沢かつ子、阿久沢隆、阿久沢利子、阿久沢美知子、阿久沢美代、阿久沢洋子、阿久沢喜子、伊欲禮子、上野きよ江、大崎節子、狩野信子、北爪よし、小池記子、小島春雄、住谷みどり、高橋信二、高橋ふみ江、滝沢タツノ、引田ヨネ、深津佐喜子、深津せつ子、六本木こう

整理作業

小菅将夫、萩谷千明、吉井雅勇、諸星良一、折茂克哉、伊藤秀一

11．発掘調査および本書の作成に当たっては次の諸氏・諸機関より貴重な御指導・御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、50音順）

相田　薫、麻生敏隆、麻生　優、安蒜政雄、岩崎泰一、岡本東三、織笠　昭、栗島義明、小池　聡、小島純一、坂爪久純、櫻井美枝、白石典之、白石浩之、須藤隆司、大工原豊、田島　新、堤　隆、土肥　孝、中東耕志、巾　隆之、飛田野正佳、前原　豊、山下歳信、若月省吾

群馬県農政部、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、勢多郡社会教育部会文化財分会、宮城村土地改良課、柏倉地区土地改良区

目　　次

口　絵
序
例　言

第Ⅰ章　発掘調査にいたる経緯と経過……1
第Ⅱ章　遺跡の概要……2
　第1節　立地と環境……2
　第2節　宮城村の発掘調査史……2
　第3節　検出された遺構と遺物……7
　第4節　調査区の基本層序……8
第Ⅲ章　旧石器時代の調査……10
　第1節　調査の方法……10
　第2節　調査日誌……10
　第3節　石器群の分布……13
　　1．第1ブロック……15
　　2．第2ブロック……22
　　3．接合資料の分布……24
　　4．配石……26
　第4節　石器群の内容……29
　　1．細石刃関係の遺物……29
　　2．その他の遺物……60
　　3．旧石器調査区外出土の遺物……102
第Ⅳ章　成果と問題点……104
写真図版……107

執筆分担

細野　高伯　　第1章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第1節・第2節・第4節、第Ⅳ章
小菅　将夫　　第Ⅲ章第3節・第4節2、3
萩谷　千明　　第Ⅲ章第4節1
諸星　良一　　第Ⅲ章第3節

挿　図　目　次

第１図　各年度の調査地と細石器文化石器群調査地区
第２図　市之関前田遺跡と周辺の遺跡
第３図　赤城山南麓における細石器関連の遺跡
第４図　基本土層
第５図　調査区の地形とグリッド配置図
第６図　旧石器時代の遺物分布
第７図　第１ブロックの石器分布
第８図　第１ブロック黒耀石・珪質頁岩の石器分布
第９図　第１ブロック黒色安山岩・黒色頁岩・ホルンフェルス・チャートの石器分布
第10図　第１ブロック粗粒安山岩・砂岩の石器分布
第11図　第２ブロックの石器分布
第12図　第２ブロック黒耀石の石器分布
第13図　第２ブロック黒色安山岩・黒色頁岩・チャートの石器分布
第14図　第２ブロック粗粒安山岩・砂岩の石器分布
第15図　接合資料の分布
第16図　第１ブロック配石と礫の分布
第17図　第２ブロック配石と礫の分布
第18図　細石刃の観察
第19図　細石刃と微細な剥離痕との関係
第20図　細石刃（１）
第21図　細石刃（２）
第22図　細石刃（３）
第23図　細石刃（４）
第24図　細石刃（５）
第25図　細石刃（６）
第26図　細石刃（７）
第27図　細石刃（８）
第28図　細石刃（９）
第29図　細石核
第30図　細石核原形及び細石核素材
第31図　細石核調整剥片（１）
第32図　細石核調整剥片（２）
第33図　接合資料１
第34図　接合資料２・３
第35図　接合資料４・５・６
第36図　ナイフ形石器・スクレイパー（１）
第37図　スクレイパー（２）
第38図　スクレイパー（３）
第39図　スクレイパー（４）
第40図　スクレイパー（５）
第41図　楔形石器・二次加工痕を有する剥片
第42図　使用痕を有する剥片（１）
第43図　使用痕を有する剥片（２）
第44図　剥片（１）
第45図　剥片（２）
第46図　剥片（３）
第47図　剥片（４）
第48図　剥片（５）
第49図　剥片（６）
第50図　石核（１）
第51図　石核（２）
第52図　石核（３）
第53図　接合資料７
第54図　接合資料８
第55図　接合資料９
第56図　接合資料10
第57図　礫器（１）
第58図　礫器（２）
第59図　礫器（３）
第60図　礫器（４）
第61図　礫器（５）
第62図　礫器（６）
第63図　礫器（７）
第64図　敲石（１）
第65図　敲石（２）
第66図　敲石（３）・接合資料11
第67図　敲石（４）
第68図　敲石（５）
第69図　旧石器調査区外出土の石器

写真図版目次

図版１　市之関前田遺跡全景
図版２上　調査区土層断面
図版２下　板状褐色軽石上の炭化物・焼土
図版３　第１ブロック遺物出土状況
図版４上　第１ブロック礫全景
図版４下　第１ブロック礫中心部
図版５上　第１ブロック調査風景
図版５下　第１ブロック礫全景
図版６上　第２ブロック遺物出土状況
図版６下　第２ブロック礫全景
図版７上　細石核出土状況
図版７中　細石核出土状況
図版７下　ナイフ形石器出土状況
図版８　調査風景
図版９　細石刃（１）
図版10　細石刃（２）
図版11　細石刃（３）
図版12　細石刃（４）
図版13　細石刃（５）
図版14　細石刃（６）
図版15　細石刃（７）
図版16　細石刃（８）
図版17　細石核・細石核原形・細石核用素材
図版18　細石核調整剥片（１）
図版19　細石核調整剥片（２）・ナイフ形石器・楔形石器
図版20　接合資料１
図版21　接合資料２・３
図版22　接合資料４・５・６
図版23　スクレイパー（１）
図版24　スクレイパー（２）
図版25　スクレイパー（３）
図版26　スクレイパー（４）・二次加工痕を有する剥片・使用痕を有する剥片（１）
図版27　使用痕を有する剥片（２）
図版28　剥片（１）
図版29　剥片（２）
図版30　剥片（３）
図版31　剥片（４）
図版32　石核（１）
図版33　石核（２）
図版34　接合資料７・10
図版35　接合資料８・９
図版36　礫器（１）
図版37　礫器（２）
図版38　礫器（３）・敲石（１）
図版39　敲石（２）
図版40　旧石器調査区外出土の石器・調査前に採集された石器

市之関前田遺跡

第Ⅰ章　発掘調査にいたる経緯と経過

宮城村では、昭和59年度より大字柏倉・大字市之関の一部を対象に、10年計画で県営柏倉地区ほ場整備事業を実施して来た。その第６次（平成元年度）工事区域内に、縄文時代から中世にかけての埋蔵文化財散布地として群馬県遺跡台帳に№2241・№2249の２遺跡の記載があったため事前に現地踏査を行ったところ、縄文土器片・石器等を主体に多量の遺物散布が認められた。

そのため群馬県教育委員会、宮城村教育委員会と群馬県農政部耕地建設課、前橋土地改良事務所、宮城村土地改良課および地元地権者等各関係者間で協議の結果、宮城村教育委員会が主体となり、台帳№2249の散布地約8,000㎡を対象に遺構確認のための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、昭和62年11月６日から翌63年１月21日までの実質２カ月で行い、任意に約１m幅のトレンチを東西方向４本、南北方向１本の計５本を設定し、遺構の検出状況に応じて随時拡張するといった方法を採った。調査面積は約200㎡と小規模なものであったが、縄文時代中期の埋甕や中世の堀跡が検出され、遺構の存在が明確なものとなった（第一次調査：昭和62年度調査既報分）。

このため再度協議を行い、地権者等の協力を得て、昭和63年度に削平工事により遺構が破壊される場所を中心とした記録保存目的の発掘調査を前橋土地改良事務所から委託を受け実施することとなった。調査地の現状は桑畑が主体であったが、地権者の強い要望をうけ、調査時期は養蚕の終わる10月から工事年度に入る前の翌年３月までとした。なお協議事項として、廃土は土地改良工事に使用されるため搬出はせずに場内で処理を行うこととしたため、まずトレンチにより遺跡の範囲を確認し、遺構の存在しない場所を選定し廃土置場とすることとして発掘調査を開始した。ところがトレンチ調査の結果台地上全面が遺跡地であり、しかも平安時代以降、縄文時代中期、縄文時代前期以前の遺構確認面がそれぞれ異なった層序であることが判明し、予想を遙かに上回る土量を生じたため、台地中央部の調査をまず行い、廃土は調査終了地点へ順次送ることとした。この結果、縄文時代前・中期の竪穴式住居跡25軒、平安時代の土壙墓３基、中世の堀跡６条・地下式土壙２基、近世屋敷跡２棟・井戸跡、各時期の土壙数十基等の遺構を検出した（第二次調査）。

第二次調査により当初の予想以上に遺構数が多く、また遺跡もかなり広範囲にわたると推察されたため、土地改良工事の計画決定に従い、台帳№2241の散布地を初めとした隣接地についても道水路および削平される部分の遺構確認調査の必要性を各関係者に再認識してもらい試掘調査を実施したところ、遺跡が延びることが確認されたため、第二次調査時に最後まで廃土下で未調査の地域にこれらの部分を含め、平成元年度に発掘調査を継続して実施することとなった。ほ場整備が秋施工の工事のため、本来夏までは養蚕や小麦の収穫等の農作業が認められている地域が多く含まれていたが、工事に支障をきたし遅延すると困るといった観点から柏倉土地改良区を通じ地権者の協力を得、年度当初から面工事の始まる10月初めまでを発掘調査の期間に当てることとし、前橋土地改良事務所と委託契約を行った。ところが当初6,000㎡を予定していた調査面積が計画変更などにより倍増し、しかも工区の関係で前年度同様廃土を場内処理しなければならなかったため、委託契約および国庫補助金額の変更等を行い、同年11月10日までの実質165日間を費やし、約２万㎡という大規模な発掘調査の実施を余儀なくされた（第三次調査）。

このように市之関前田遺跡の発掘調査は、群馬県教育委員会、群馬県農政部耕地建設課および前橋土地改良事務所、地元市之関の住民をはじめとした村民各位の多大な協力を得て、昭和62年度から平成２年度の三次にわたり実施した。総日数で延べ336日を費やし、総調査面積は32,000㎡にのぼる。

第II章　遺跡の概要

第1節　立地と環境

宮城村は群馬県の代名詞ともいえる赤城山南麓のほぼ中央に位置し、東～南東を粕川村、南西～西を大胡町、北を富士見村に接しており、東西5km×南北12.5km、総面積は48.49km²である。もともとは純農村地域であったが、近年は県都前橋市の中心街まで南西約10kmと近いことから分譲住宅地として、また眺望が良く関越自動車道利用により都心から約2時間の距離にあることから別荘地としての開発等が進んでおり、現在建設中の県営ぐんまフラワーパーク等を中心に赤城山南麓開発の拠点となりつつある。

標高は赤城火山の外輪山である荒山山頂の1,572mを最高点とし、粕川村境の南西部における最低点180mまで実に1,392mの比高差をもつ。急傾斜の山腹部から、県指定重要文化財である赤城神社の鎮座する標高550m前後を傾斜転換点として、火山噴出物や河川の堆積物により形成された扇状地と発達した放射谷、その間に残る熔岩流原形面からなる緩傾斜の山麓部とに大別される。この扇状地形をもたらした河川としては、東から、カルデラ内の火口湖である小沼より流出し粕川村との境をなす粕川(粕川扇状地)、荒山下より流出する荒砥川（荒砥川扇状地）が挙げられ、大穴川や芳見沢川とそれぞれの支流、および豊富な地下水の湧出による神沢川等の小河川が逆扇状的に荒砥川・粕川に流れ込む。

市之関前田遺跡は、これら河川のうち大穴川と芳見沢川が合流し南下する右岸の台地上、標高280～300mの平坦部に位置する。この台地の西側には三本木清水と呼称される湧水が流れ、舌状台地状に発達しており、ほぼ台地上全面が遺跡地である。村内にはこのように舌状台地状に発達した台地が数多く見受けられるが、これらはほぼ例外なく遺跡地となっており、古くから石鏃をはじめとする石器や土器片の表採が盛んに行われてきたようである。

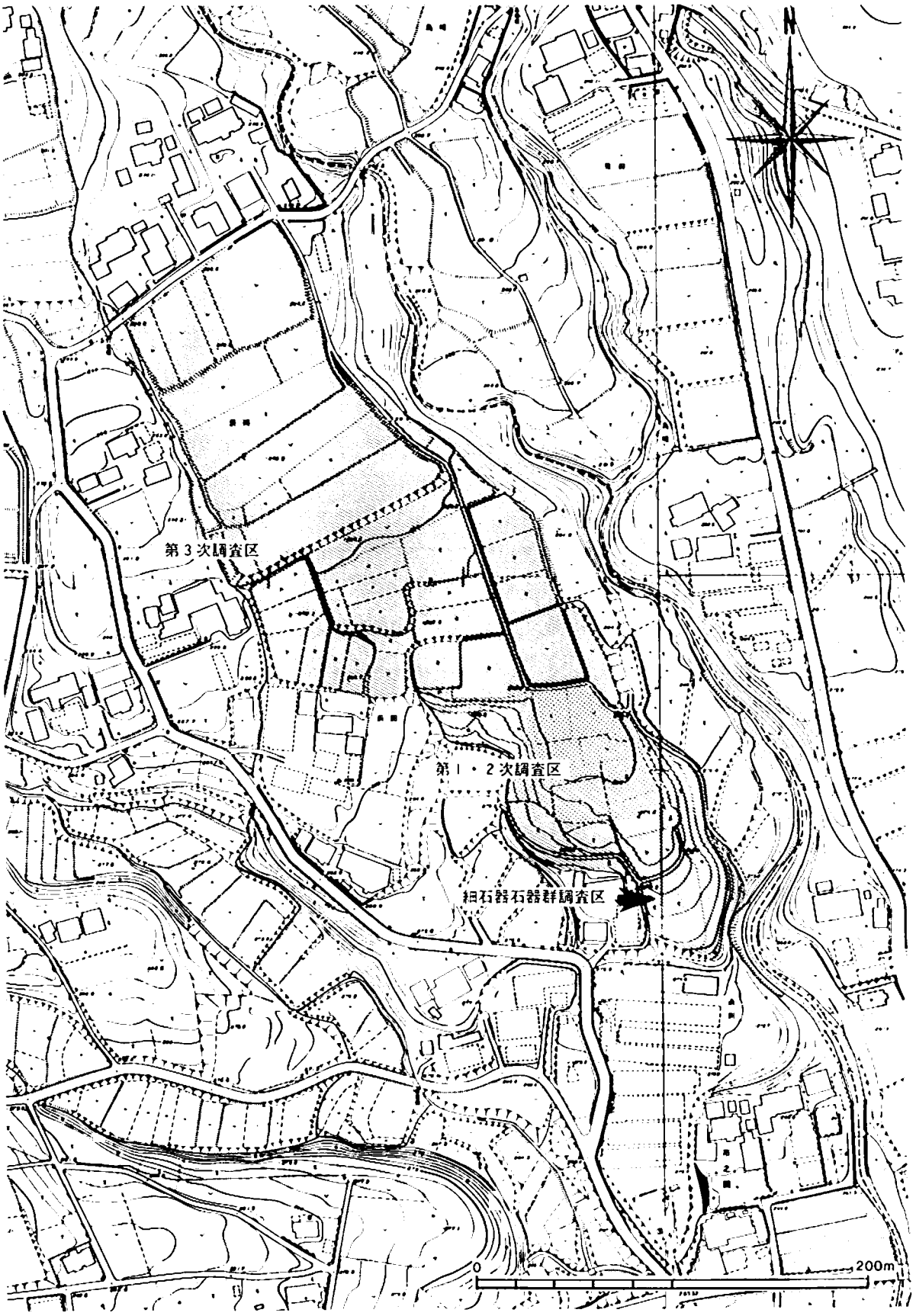
市之関前田遺跡の全体規模は約5万m²と考えられるが、同台地上800m北に位置し昭和29年に群馬大学尾崎喜左雄教授の研究室による発掘調査で、縄文時代前期関山式期の竪穴式住居跡を検出した市之関遺跡も本遺跡に連続すると考えれば、その総面積は10万m²を超えると推察される。

この他周辺の遺跡として、本台地中央に位置する市之関の砦（中世城館跡)、南西500mの市之関吉ケ沢遺跡（旧石器～縄文時代早期）等がある。また、桙形遺跡は本遺跡の北東約3.5kmに位置する。

また本村以外の周辺地域において細石器関係の遺物が出土している遺跡として(第3図)、前橋市頭無遺跡、勢多郡富士見村龍ノ口遺跡、勢多郡大胡町田ノ上遺跡、勢多郡粕川村栗原東遺跡、勢多郡新里村糸岸遺跡、同生目遺跡、同広間地遺跡、新田郡笠懸町稲荷山遺跡、同和田遺跡が挙げられる。これらを巨視的に見てみると、立地はいずれも台地上の平坦部であるが、舟底形石器が出土した龍ノ口遺跡や本村の桙形遺跡、柏倉芳見沢遺跡は標高400～450mと比較的高所に位置し、市之関前田遺跡のようないわゆる野岳・休場タイプに類似する石器群は標高300m以下の河川沿いに展開する傾向が窺える。また頭無遺跡の様に荒屋型に代表される削片系細石核を特徴とする遺跡は、同じ河川沿いの丘陵上でも比較的低所に営まれる傾向にある。

第2節　宮城村の発掘調査史

宮城村の発掘調査は、学史的にも著名な赤城桙形遺跡によって始まる。この調査は岩宿遺跡の発見以後精力的に赤城南麓の旧石器文化を探査していた故相沢忠洋氏により発見され、昭和26年9月の第一次調査によ



第１図　各年度の調査地と細石器文化石器群調査地区

り舟底形石器を主体とした石器群を検出したことは周知のとおりである。この桝形遺跡は昭和28年の補完調査、昭和48年に村道の改良拡幅による調査と計3回実施されている。

その後は群馬大学の尾崎喜左雄教授の研究室により村内の埋蔵文化財の踏査が行われ、昭和29年から昭和40年までの間に6遺跡で小規模な発掘調査が実施されている。この中には縄文時代前期関山式期の竪穴式住居跡1軒を検出した市之関遺跡、和銅開珎8枚や佐波理鋺、蕨手太刀等が出土した終末期古墳の白山古墳、平安時代の鍛冶工房跡である片並木遺跡の調査も含まれる。これらの遺跡はいずれも群馬県内における当該時期の初期の調査として、その後急速に増加した県内の発掘調査に与えた影響は大きい。

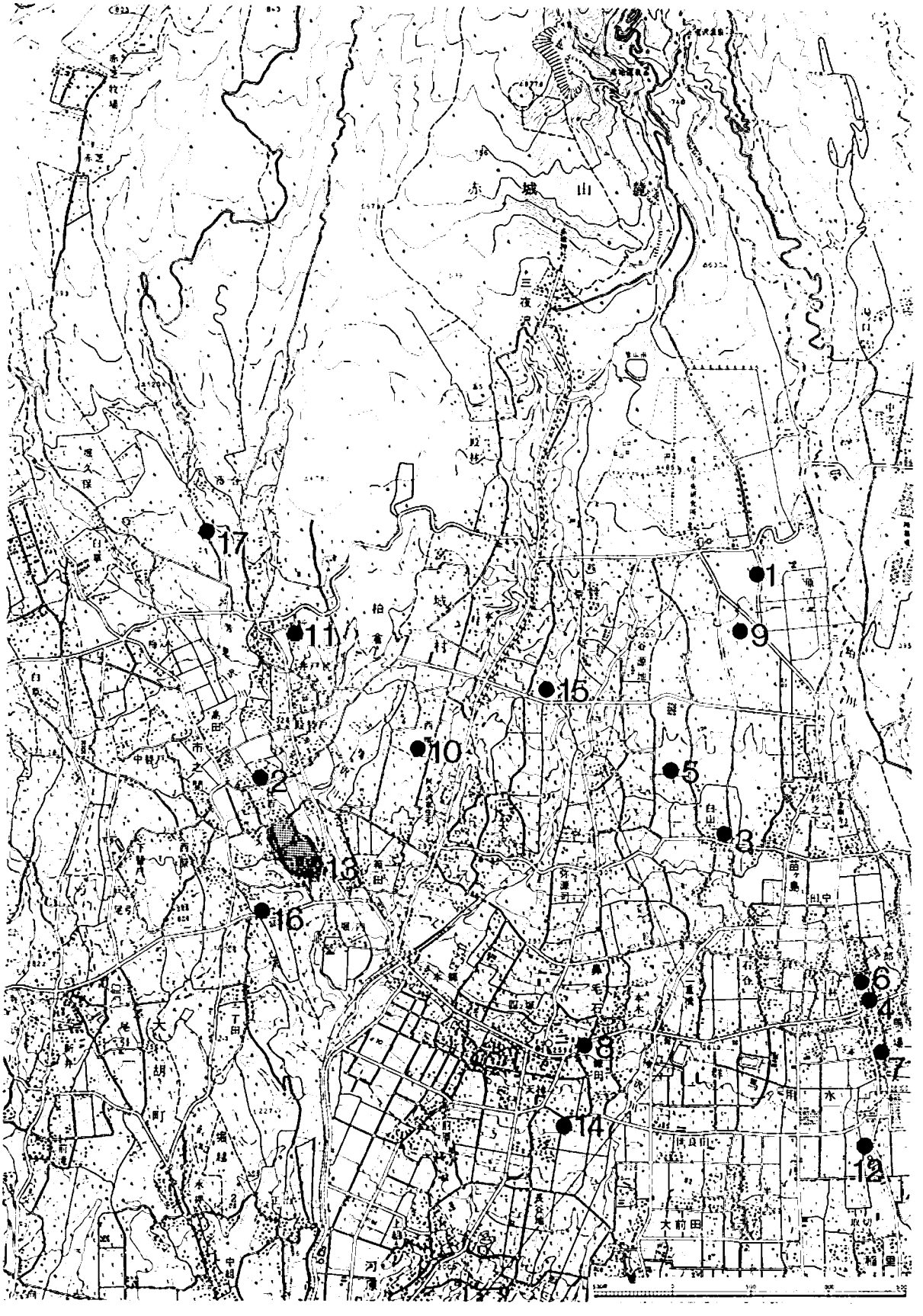
昭和43年になると、畑地灌漑を主目的とした農業用水である群馬用水幹線水路地域の埋蔵文化財緊急発掘調査が、群馬県教育委員会の手により苗ケ島白山、柏倉西房、柏倉新井橋、馬場矢次大前田の4遺跡において実施された。これらはいずれも2m幅のトレンチによる500m²程度の調査で、遺構としては白山で土壙、大前田でピットを検出したにすぎないが、各遺跡から旧石器～縄文時代後期の遺物が出土しており、今後の面的調査による遺跡の拡がりを示唆している。

この後は忘れ去られたように遺跡の発掘調査が行われず、昭和62年の市之関前田遺跡を待つこととなる。

このように、20年近くのブランクはあったものの戦後間もなく開始された本村の発掘調査も、県営ぐんまフラワーパーク建設に伴い群馬県教育委員会が平成元年度に発掘調査を実施した柏倉大沢遺跡に代表されるような大規模な開発が相次ぐ中、今新たな出発点に立っていると言えよう。

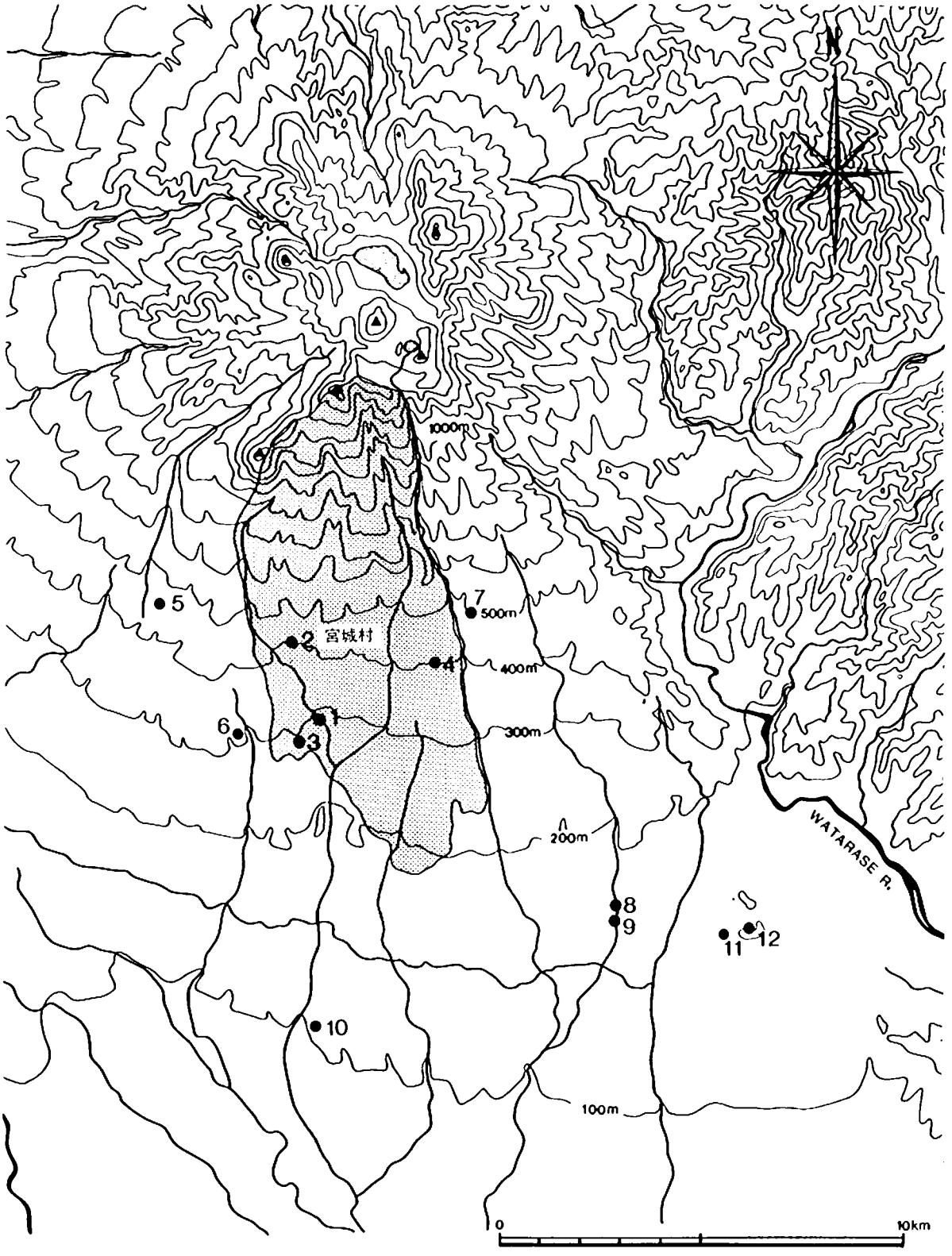
番号	遺跡名	所在地	調査年月日	調査体制	遺跡の概要
1	桝形遺跡	大字苗ケ島字原1,433	昭26～昭29・昭48	相沢　忠洋	舟底形石器を伴う細石器文化
2	市之関遺跡	大字市之関字中替戸365	昭29.5	群馬大学 尾崎 喜左雄	縄文前期竪穴式住居跡1軒
3	白山古墳	大字苗ケ島字白山1,660	昭29.10	同　上	和銅開珎8枚・佐波理鋺・蕨手太刀
4	新山1号古墳	大字馬場字新山	昭33.4	同　上	直刀・帯金具・鉄鏃
5	片並木遺跡	大字苗ケ島字片並木1,792	昭36.1、4	同　上	平安時代の鍛冶工房跡
6	新山II号古墳	大字馬場字新山	昭40	同　上	自然石乱石積　鉄鏃
7	古屋敷古墳	大字馬場字古屋敷	昭40.8	同　上	自然石乱石積　帯金具・鯉口
8	一本木土師遺跡	大字鼻毛石字一本木	昭41	松本　浩一	平安時代初頭の竪穴式住居跡
9	苗ケ島白山遺跡	大字苗ケ島字白山	昭43.8	群馬県教育委員会	縄文早期条痕文系土器
10	柏倉西房遺跡	大字柏倉字西房	昭43.8	同　上	縄文中期黒曜石製石鏃
11	柏倉新井橋遺跡	大字柏倉字新井	昭44.2	同　上	縄文草創期石槍
12	馬場矢經遺跡	大字馬場字矢經	昭45.11～12	同　上	縄文後期ピット・加曽利B式土器
13	市之関前田遺跡	大字市之関字前田　外	昭62.11～平1.11	宮城村教育委員会	旧石器～近世
14	鼻毛石鎌田遺跡	大字鼻毛石字鎌田	平1.8	同　上	縄文早期陥穴・土壙
15	柏倉大沢遺跡	大字柏倉字大沢	平1.10～11	群馬県教育委員会	縄文前期黒浜式期住居跡・土壙
16	市之関吉ケ沢遺跡	大字市之関字吉ケ沢	平2.1～4	宮城村教育委員会	旧石器～縄文早期Tピット群
17	柏倉芳見沢遺跡	大字柏倉字東堀久保　外	平2.4～11	同　上	旧石器～縄文中期

表1　これまで発掘調査された村内の遺跡



第２図　市之関前田遺跡と周辺の遺跡

（国土地理院発行 1/25,000 鼻毛石より作成・遺跡番号は表１による）



1．市之関前田遺跡　2．柏倉芳見沢遺跡　3．市之関吉ヶ沢遺跡　4．樹形遺跡　5．龍ノ口遺跡
6．田ノ上遺跡　7．栗原東遺跡　8．広間地遺跡　9．峯岸遺跡　10．頭無遺跡　11．和田遺跡
12．稲荷山遺跡

第3図　赤城山南麓における細石器関連の遺跡

第３節　検出された遺構と遺物

旧石器時代

本遺跡の南端にあたる場所で、群馬県内では初めていわゆる野岳・休場タイプの細石器文化層が検出された(本報告)。この外、遺跡中央部のグリッド遺物として黒耀石製の槍先形尖頭器、中世堀跡出土遺物として黒色頁岩製の石刃等があるが、いずれも単独出土であり、面的調査は実施していない。

また地元住民の表採遺物の中に黒色安山岩製の尖頭器等も見受けられ、周辺隣接地にも本時代の文化層があるものと思われる。なお、これら本時期に係る遺物に関しては後に詳述する。

縄文時代

この時代の遺構の検出数が一番多く、竪穴式住居跡は前期８軒、中期33軒を数える。前期の住居跡はいずれも台地の縁に位置し、関山式期に比定される。中期の住居跡は加曽利 E3・E4 式期のもので、E4 式期は全て敷石住居跡となっているのが特徴的である。今回の調査では６軒の敷石住居跡を調査したが、確認のみで調査を行わなかった敷石住居跡もあるため、単純に敷石住居跡のみで集落を構成していたとも推察される。また、これらの敷石住居跡が集中する地域のほぼ中心部には立石も認められた。住居跡の他には陥穴状のものも含めて土壙184基、屋外炉跡１基等を調査している。

地元住民の表採遺物には縄文時代の石鏃が最も多く、以前は周辺各戸で少なくとも一升枡２杯程度づつ所有していたそうである。現在では、一部を除きその殆どは無くなってしまっている。実見したものの中には、草創期の有舌尖頭器をはじめ後晩期の石鏃も多数含まれていたが、当該時期の遺構は検出されていない。

平安時代

調査区北西で竪穴式住居跡１軒と土壙（貯蔵穴）１基を検出した。この住居跡からは部材と思われる炭化材およびその周辺から多数の鉄釘が出土し、構築に鉄釘を使用していたのではないかと推察させられる。また、隣接する貯蔵穴の断面では木枠状の痕跡が認められ、炭化した粟と籾が取瓶状の須恵器坏を真ん中に左右に区分けされた状態で出土している。この須恵器坏とやはり貯蔵穴出土の土師器坏には「西」の墨書があり、宮城村においてもこの段階で既に文字階級の人々が生活していたことが認識される。土器の観察からこの竪穴式住居跡と貯蔵穴は９Ｃ後半の同一時期の所産であろう。後世の耕作等により明確な判断はしかねるが、調査時の所見では、この時代の集落は東側へは延びず、西側調査区外へ延びると思われる。

中　世

城郭とそれに伴う堀跡、土塁基槙面および版築面、喰違虎口等を検出している。これらは台地中央に位置する市之関の砦とは切り放し、南側部分だけを単独で三本木城として総括名称されている（1988：群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』）が、対城としての可能性もあるものの調査時の所見からは別段区別する必要性が認められないため、本台地上に占地する城郭関連の遺跡は六本木城と総称する。ただ、この六本木城は堀跡の走行に規格性が認められない所もあり、１軒の竪穴式住居跡１軒や、鞘の羽口、内耳、銅銭等の出土遺物から見ても、一種の環濠集落的要素も否定はできないと考えている。

また、中世から近世初頭に至る五輪塔が本遺跡南半を中心に大量に出土しており、特に南西隅の一段低く整地され湧水によって区画された部分には300個体を超える石造物が集中するため、地域住民の通り名である

阿弥陀畑と呼称し、墓域として遺跡区分をしている。関連遺構として、六道銭を配した土壙墓や集石土壙等も検出されている。

なお調査開始時に、かつて三本木寺なる寺院があったが火災により廃寺となったという言い伝えを知ったが、発掘調査では寺院跡による礎石、柱穴等の遺構や、直接寺院跡に関連するような遺物の出土は無かった。

近　世

館跡とそれに伴うと考えられる井戸跡3基を確認している。館跡は数回の建て替えがあったようである。井戸跡の内2基は素掘りのもので15cm程の高まりに区画された中に並列しており、切土の範囲内では井戸底まで確認に至らなかった。高まりの一カ所には水口状の窪みがあり、そこから排水に利用されたと考えられる溝状遺構が延びている。他の1基は石組の井戸跡である。

また、館跡の北側には遺物を一括廃棄したと思われる場所が検出されている。

出土遺物は、唐津や伊万里のものが多く、いずれも18世紀代に位置付けされよう。またその他に中世末の物とみられる天目茶碗も出土している。

第4節　調査区の基本層序

赤城山南麓地域においては、旧石器時代以前に形成された厚いローム層と、上位の黒ボク土に区分される火山灰土が認められる。市之関前田遺跡においても例外なく前記の様相を呈すが、現地表面から旧石器試掘ピットの底部まで5m近くになることや本報告書では旧石器を取り扱うことを考慮して、ここではローム層の基本層序についてのみ記載することとした。

なお、層序を初めとする自然理科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に調査を委託したため、その分析結果報告に若干の考察・変更を加え転載した。

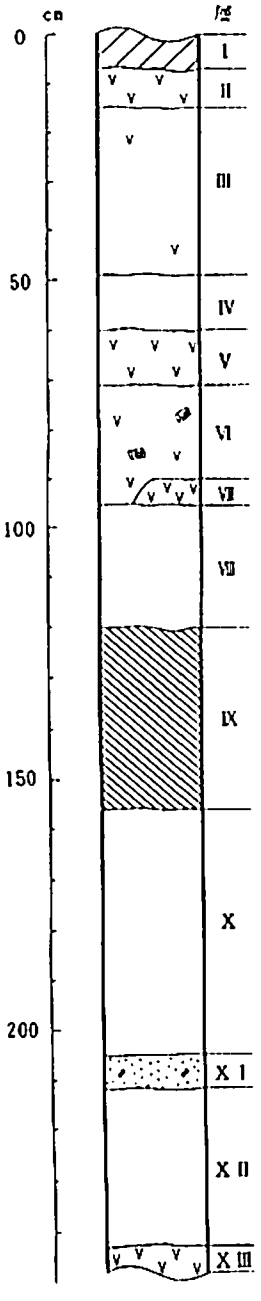
第Ⅰ層　黒ボク土

第Ⅱ層　ローム層最上部に濃集する黄色軽石粒である。軽石の最大径は6㎜で、よく発泡している。本軽石は、層位や岩相から約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間―板鼻黄色軽石（As―YP、新井、1962、町田ほか、1984）に対比される。

第Ⅲ層　淡褐色を呈する。遺物包含層であり、石器は主に下半部に集中する。白色の軽石粒が層中に散在しているが層は成していないため、正確な降灰層準を認定することは難しいが、鉱物分析によると本層中位の資料でわずかに角閃石が他の層準より多く産出する傾向が伺え、この付近に降灰層準があることを示唆している。軽石の最大径は2㎜で、よく発泡している。軽石の岩相や層位から、本軽石は約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間―白糸軽石（As―SP、町田ほか、1984）に由来すると考える。

第Ⅳ層　橙褐色を呈し、若干As―SPおよびAs―BPが混在する。

第Ⅴ層　橙色の降下軽石層である。層厚は11cmで、含まれる軽石の最大径は7㎜である。本テフラは層相か



第4図　基本土層

ら、約2.1～1.6万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石群(As—BPグループ、新井、1962、町田ほか、1984、早田、1989)の一つに対比される。

第VI層　橙褐色を呈し、As—BPグループの間層にあたる。焼土および多量の炭化物が本遺跡のみならず赤城西南麓において広く認められるため、遺構ではなく山火事等に起因するものと考えられる。

第VII層　橙色の降下軽石層である。層厚は6cm、含まれる軽石の最大径は4mmである。本テフラは層相から、約2.1～1.6万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石群(As—BPグループ、新井、1962、町田ほか、1984、早田、1989）の一つに対比される。

第VIII層　淡褐色を呈し、若干As—BP・小礫が混在する。本層の最下部はガラス質の細粒火山灰層である。市之関前田遺跡においては、野外で肉眼により確認することはできないが、洗い出しによってその火山ガラスを検出することができる。火山ガラスは平板状のいわゆるバブル型で、無色透明である。このテフラは火山ガラスの形態的な特徴や層位から、約2.1～2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976）に対比される。

第IX層　灰褐色を呈するいわゆる「暗色帯」である。

第X層　暗褐色を呈し、径1～5mmの白色軽石粒・小礫を若干含み、粘性に富む。

第XI層　灰色がかった紫色の降下火山灰層である。灰色の石質岩片が多く含まれている。層厚は7cm、含まれる石質岩片の最大径は3mmである。本テフラは層相から、約3.1～3.2万年前に赤城火山から噴出した赤城一　第4図　基本土層鹿沼テフラ層（Ag—K、新井、1962、町田ほか、1984）のうちの上部を占める水沼降下火砕岩層（水沼ラピリ、守屋、1968）に対比される。

なお、鹿沼土として有名な鹿沼軽石(Ag—KP)は、鹿沼テフラ層の下部に堆積する。

第XII層　褐色を呈し、径1～2cmの白色軽石粒を含む。粘性に富み、しまり強い。

第XIII層　黄色の降下軽石層である。層厚は5cm以上、含まれる軽石の最大径は19mmである。軽石の発泡は比較的よい。軽石には斑晶として角閃石や斜方輝石が含まれる。本テフラは層相などから、約4.1～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名一八崎軽石層（Hr—HP、新井、1962）に対比される。

第Ⅲ章　旧石器時代の調査

第１節　調査の方法

旧石器時代の調査区は、市之関前田遺跡の南東隅に当たり、本来は昭和63年度調査予定の地域であった。しかし、早くから地権者の了承を得られていたために、本調査に先駆け試掘調査を実施した結果、表土である黒ボク土の堆積が薄く、ローム層上面一面での調査で済むことなどが認識できた。そのため、当該年度の昭和63年度は台地中央部の縄文時代中期集落跡の調査を中心に行い、本調査区は残土は場内処理でまかなうという取り決めにより、発掘調査終了時まで継続的に廃土置き場として使用した。

平成元年度になり、本調査区を含め昭和63年度調査時に最後まで廃土置き場とした部分の表土除去を再開したところ、本調査区においては縄文時代早期の陥し穴、前期の竪穴式住居跡・土壙、中世の堀跡などが検出されたため、それらの遺構を完掘すべくジョレンによるプラン確認作業へと移行していった。ところが調査区中央での確認作業において、珪質頁岩製の使用痕のある剥片や黒耀石製の細石刃の出土が確認されたため周辺を精査してみたところ、数本の細石刃がある程度のまとまりをもって二カ所に散布することが判明し、旧石器時代の文化層の存在が予想された。そのため、まず前述の縄文時代から中世にいたる遺構を調査した後に、旧石器時代の調査を実施することとした。

旧石器時代の調査に際しては、まずこれまでの10m×10mグリッドから調査区全域を網羅すべく４m×４mグリッドに細分して設定し直し、西から東へ順にA～Ｉ、同様に南から北へ１～12のグリッド名を付し、A－１、A－２…と言うようにグリッドを呼称することとした。また確認の段階で細石刃のまとまりが見られた２ケ所の内、西側を第１ブロック、東側を第２ブロックとして取り扱うこととした。

調査は第１・第２ブロック同時並行で行い、ローム層最上面の浅間一板鼻黄色軽石層（As-YP）より順次配石となるような大形の礫を除く遺物の取り上げを行いながら掘り下げていった。しかし前述のように、中世の堀跡や縄文時代の陥し穴を初めとする多数の土壙などにより文化層がかなり乱されており、特に第２ブロックにおいては、縄文時代前期の竪穴式住居跡や中世の地下式土壙によりブロックの大半を切られているといった状態であった。

また表土の堆積が薄いことから、第１ブロック南側などで耕作による攪乱も一部見受けられた。

遺物は掘り初め当初から相当数出土したが、そのピークは浅間一白糸軽石(As－SP)前後にあり、浅間一板鼻褐色軽石層（As-BP）上面において出土しなくなるといった様相であったため、大部分のグリッドは浅間一板鼻褐色軽石層まで掘り下げて調査を行った。

また、土層観察および他の旧石器時代文化層の確認を目的として、第１ブロック南のD－７グリッドでは縄文時代早期の陥し穴状土壙を利用して榛名一八崎軽石層（Hr-HP）まで、第１・第２ブロックの中間にあたるF－８、G－８グリッドでは暗色帯下までそれぞれテスト・ピットの掘り下げを行ったが、他時期の旧石器時代文化層の検出にはいたらなかった。

第２節　調査日誌

旧石器時代の調査は８月14日から９月25日まで１月以上にわたり実施したが、台風の影響による雨の日が多かったため、実質の調査日数は29日である。なお、本来ならば調査日誌については第Ⅱ章で触れるところ

であるが、本報告書が旧石器時代編であるためここに記すこととした。

8月14日　調査区設定。西側を第1ブロック、東側を第2ブロックとする。

8月16日　グリッドを設定し、第1ブロックより調査に入る。黒耀石製の細石刃が多く出土。

8月17日　第1ブロック調査。遺物取り上げ。

8月18日　第1ブロック遺物取り上げ。第2ブロック調査開始。黒色安山岩製の細石核・細石刃出土。

8月19日　第1ブロック配石出土し始める。北側を拡張し調査。第2ブロック配石ほぼ完掘。第1・第2ブロックともに炭化物多い。

8月20日　第1ブロック南側を拡張し調査したところ黒色安山岩多く出土。またD-9グリッドより黒耀石製の細石核出土。D-7グリッド土層観察用テスト・ピット掘り下げ。第2ブロック遺物取り上げ、配石写真撮影、取り上げ。

8月21日　第1ブロック拡張、遺物取り上げ。第2ブロック精査。

8月22日　第1・第2ブロック精査。

8月23日　第1ブロック精査。D-9グリッドより黒耀石製の細石核出土。

8月24日　第1ブロック写真撮影の後D-9、E-9グリッド遺物取り上げ。E-7～H-6グリッドにかけ任意にテスト・トレンチを設定し調査。

8月28日　第1ブロックD-8グリッド遺物取り上げ。周辺テスト・トレンチ調査。

8月29日　第1ブロックD-8.9、E-9グリッド遺物取り上げ。周辺テスト・トレンチ調査。

8月30日　第1ブロックD-8.9、E-9グリッド精査。D-7グリッド土層断面写真撮影、土層サンプリング。第2ブロックH-8.9、I-8.9グリッド遺物取り上げ。第1・第2ブロックとも依然遺物多く出土。

8月31日　第1ブロックE-8グリッド遺物取り上げ後精査。第2ブロック精査。

9月1日　第1・第2ブロック精査。

9月2日　第1・第2ブロック精査。

9月4日　第1ブロックD-8、第2ブロックH-8.9、I-8.9グリッド遺物取り上げ。

9月5日　第1ブロックD-9.10グリッド遺物取り上げ。第2ブロック精査。依然遺物多く出土。

9月7日　第1・第2ブロック精査。一部遺物取り上げ。

9月8日　第1ブロック精査、一部遺物取り上げ。

9月9日　第1・第2ブロック精査。第1ブロック遺物取り上げ。第2ブロックよりナイフ形石器出土。

9月10日　第1ブロック精査。第2ブロックG-8グリッド暗色帯まで掘り下げる。

9月11日　第1ブロック精査。

9月12日　第1ブロックC-9.10、D-8～10グリッド遺物取り上げ、全景写真撮影。第2ブロックG-8グリッド写真撮影、土層断面図作成。

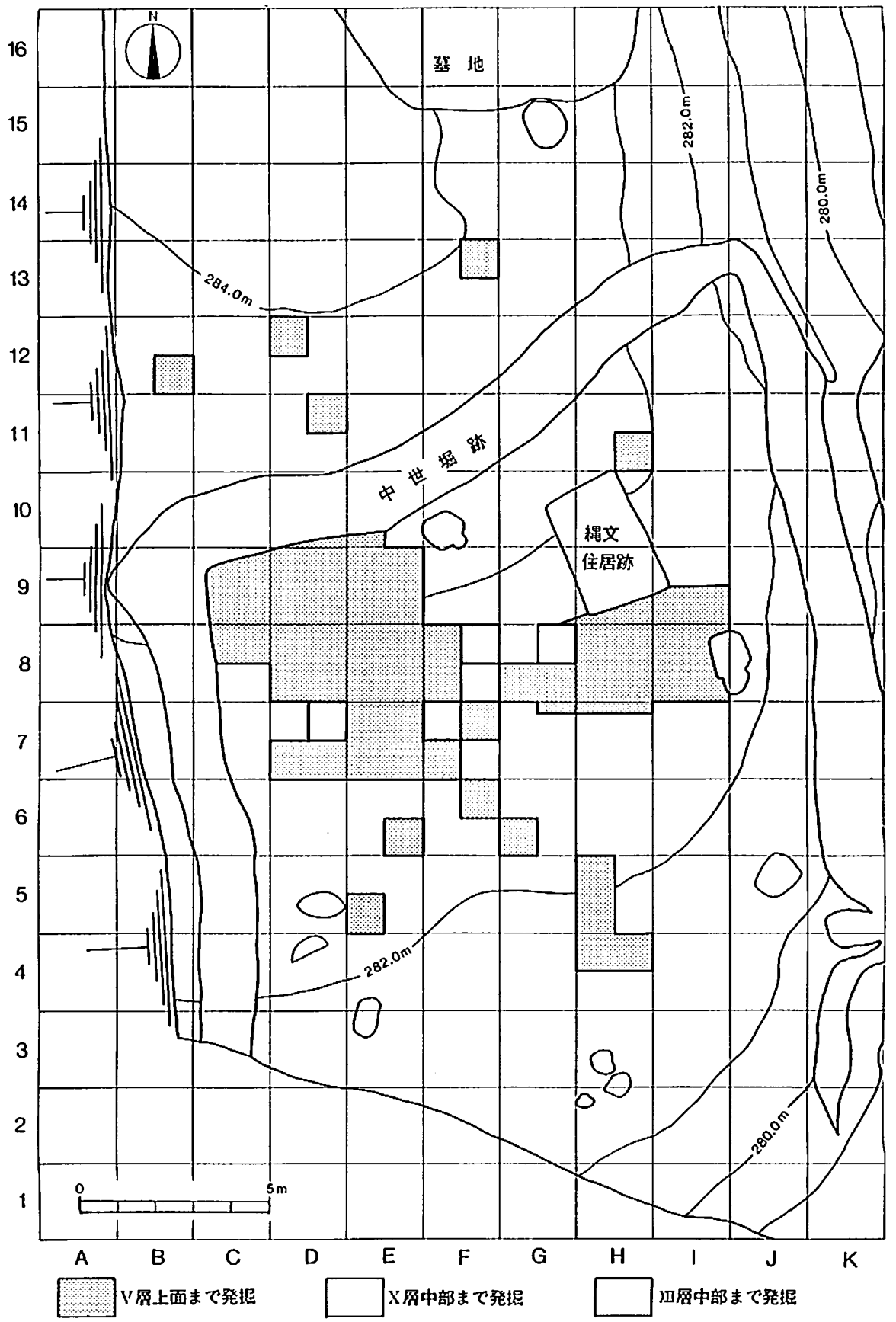
9月13日　第1ブロックE-7～10、D-7グリッド遺物取り上げ後精査。第2ブロック最終精査。周辺精査。

9月18日　第1ブロック配石全景写真撮影。

9月20日　第1ブロック配石図面。

9月21日　第1ブロック配石図面、取り上げ。

9月25日　第1ブロック図面。調査終了



第5図　調査区の地形とグリッド配置図

第３節　石器群の分布

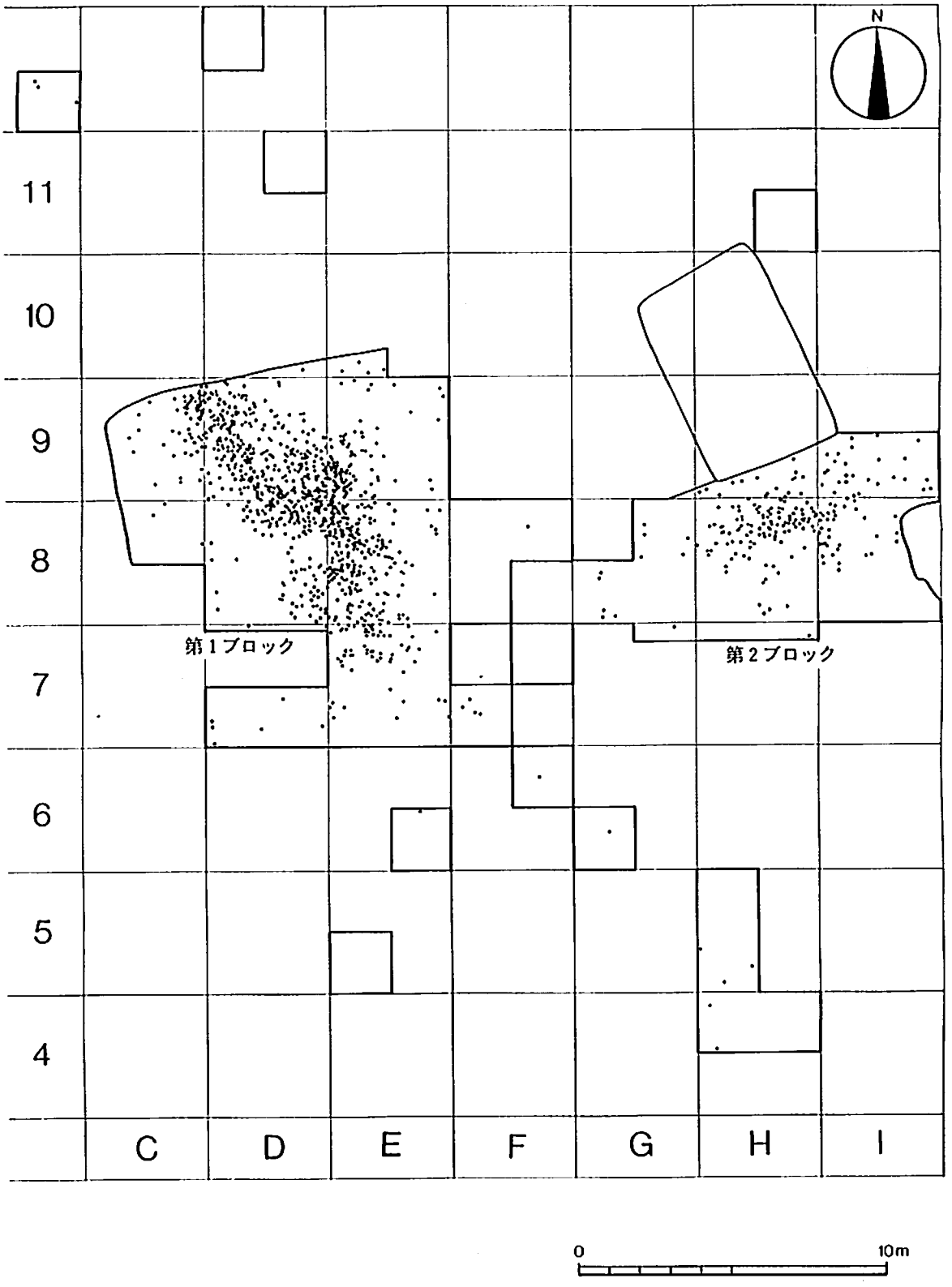
旧石器時代の調査区からは、総数1,291点の遺物が検出された。その内訳は、細石刃284点、細石核５点、細石核原形１点、ナイフ形石器１点、スクレイパー20点、楔形石器３点、二次加工痕を有する剥片５点、使用痕を有する剥片15点、剥片および砕片744点、石核８点、礫器14点、敲石17点の合計1,117点の石器群と174点の礫により構成される(第６図)。これら石器群の包含層はローム層最上部であり、主要な石器として細石刃が総数の二割以上を占めることから、本石器群は旧石器時代終末期のいわゆる細石器文化に対比されよう。

これらの細石刃を製作する技術的な特徴は、既に紹介したように（細野1990）矢出川技法によるものであり、細石核は野岳・休場タイプに分類されるものである。また石器群の組成としては、細石刃を主体としながら、中形のスクレイパーや大形の礫器・敲石を含むなど、当該期においても豊かなものであると言えよう。本石器群はその使用石材も豊富であり、細石刃を主体とする小形石器の製作には黒耀石、スクレイパーなど中形石器の製作には黒色安山岩、礫器や敲石といった大形石器の製作には輝石安山岩など粒子の粗い石材を用いるといったように、石器器種ごとに利用石材を変えるといった特徴が窺える。外にも黒色頁岩、珪質頁岩、チャート、ホルンフェルス、砂岩等がそれぞれ少数ではあるが、石器石材として用いられている。なお輝石安山岩等の粒子の粗い安山岩は、それらと質が違う玻璃質の黒色安山岩と区別するために、本報告では粗粒安山岩としている。

これらの石器群は主に２つのブロックから出土したが、共に細石刃を主体とするものであり、石材利用の在り方も基本的に共通している。また、両ブロック間で直接の接合関係は無いものの、同一の個体を共有していた可能性が高く、同一時期に両者が併存していたと考えられる。

	黒曜石	黒色安山岩	黒色頁岩	珪質頁岩	チャート	砂岩	ホルンフェルス	粗粒安山岩	小計
細石刃	278	2	1	3	0	0	0	0	284
細石核	4	1	0	0	0	0	0	0	5
細石核原形	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ナイフ形石器	1	0	0	0	0	0	0	0	1
スクレイパー	1	18	0	0	0	0	1	0	20
楔形石器	2	0	0	0	1	0	0	0	3
二次加工痕有剥片	1	4	0	0	0	0	0	0	5
使用痕有する剥片	6	7	1	1	0	0	0	0	15
剥片・砕片	234	467	18	1	8	11	0	5	744
石核	0	7	1	0	0	0	0	0	8
礫器	0	0	0	0	0	1	0	13	14
敲石	0	0	0	0	0	6	0	11	17
礫	0	0	0	0	0	0	0	174	174
合計	528	506	21	5	9	18	1	203	1,291

表２　市之関前田遺跡出土遺物組成表



第6図　旧石器時代の遺物分布

1．第1ブロック（第7～10、14図）

第1ブロックは、南北に尾根状に延びた台地上に立地する調査区内でも、尾根線上に当たる部分で検出された。耕作土下約20cmでローム層となり、その上面から石器が検出されはじめたが、耕作等によりローム層の上部および石器包含層の上部が多少削平されており、さらにC－9・10、D－10、E－10グリッドのブロック北側は中世の堀により一部失われていると考えられる。またD・E－7グリッドの一部では、東西方向の溝状に他より深耕された箇所があり、遺物分布の上でやや希薄な部分が認められた。このように若干の攪乱等は見受けられたものの、本ブロックは比較的良好な状況でその全体像を捉えられたものと考える。

このブロックは、北西から南東方向に主軸をもつ長楕円形の拡がりを持ち、その範囲はおおよそ北西～南東12m×北東～南西5mであり、調査グリッドではC～F－7～10がこれに該当する。石器は、中央部分にあたるC～E－8・9グリッドに集中して出土し、その周辺部からの出土状況は散漫である。また垂直方向の分布は、ローム層上端からⅣ層にわたり、最大で56cmの厚みを持ち、地形の傾斜に沿った薄い凸レンズ状を呈している。

本ブロック調査時に、石器分布中央部分のローム層がやや黒みを帯びた色調を呈していることが肉眼で確認され、土層断面の観察等を行ったが、明確な形状や掘り込みは確認できず、遺構としての認識までは至らなかった。しかし、遺物の分布状況や同時期の他の遺跡の事例を踏まえ、今後検討すべき課題であると考えている。

また本ブロックでは、遺物分布と重複して4基の配石が検出されている。

検出された遺物は1,015点と多く、細石刃、細石核、細石核原形、スクレイパー、礫器、敲石などの石器が出土し、使用石材も黒耀石、黒色安山岩、粗粒安山岩の外、黒色頁岩、珪質頁岩、チャート、砂岩、ホルンフェルスがあり、石器組成、石材組成ともに豊かであると言えよう。

ブロックの形状は、遺物が中央に集中する円形を呈するのが一般的であるが、本ブロックは一カ所に集中するのではなく、C－9グリッド東部～D－9グリッド西部（1a）、D－8・9～E－8・9グリッド境（1b）、E－8南西隅（1c）の三カ所を中心に比較的遺物の集中する部分が認められるため、全体の形状も楕円形を

	黒曜石	黒色安山岩	黒色頁岩	珪質頁岩	チャート	砂岩	ホルンフェルス	粗粒安山岩	小計
細石刃	232	0	1	3	0	0	0	0	236
細石核	4	0	0	0	0	0	0	0	4
細石核原形	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ナイフ形石器	0	0	0	0	0	0	0	0	0
スクレイパー	1	16	0	0	0	0	1	0	18
楔形石器	2	0	0	0	0	0	0	0	2
二次加工痕有剥片	1	4	0	0	0	0	0	0	5
使用痕有する剥片	5	7	1	1	0	0	0	0	14
剥片・砕片	189	317	15	1	6	10	0	4	572
石核	0	7	1	0	0	0	0	0	8
礫器	0	0	0	0	0	1	0	12	13
敲石	0	0	0	0	0	6	0	10	16
礫	0	0	0	0	0	0	0	126	126
合計	435	381	18	5	6	17	1	152	1,015

表3　第1ブロック出土遺物組成表

呈している。なお、第1ブロックを細分化したものとして、便宜的に1a、1b、1cと呼称しておきたい。

本石器群においては既述のとおり、細石刃あるいは小形の石器の製作には黒耀石、中形の石器製作には黒色安山岩、また大形の礫器や敲石の石材としては粗粒安山岩が用いられ、石器器種により特徴的な三種の石材を使い分けていることは明らかである。そのため、石材毎の分布状況は大・中・小形の石器の分布を意味し、器種別の使用や製作等の在り方を理解できる可能性があると考えられるため、その状況を検討することにより、本ブロックの内容および性格について考察して行きたいと考える。なお、珪質頁岩は細石刃が存在することから黒耀石と同一の図版（第8図）に、また黒色頁岩およびチャート、ホルンフェルスは中形の石器が主体であることから黒色安山岩の図版（第9図）に、砂岩は礫器や敲石に用いられていることから粗粒安山岩の図版（第10図）にそれぞれ示している。

細石刃の製作を主体とした黒耀石は、1a・b・cどのブロックにも存在しているが、1bブロックに最も多くの資料が含まれている（第8図）。

1aブロックは、細石刃もさほど多くなく、全体の資料としても少ない。しかし、細石核の原材と考えられるもの（290、291）、細石核の打面作出剥片（296，297）、打面再生剥片調整剥片（293、295）、細石核（283、285）やその一部（292）といった、原石から一連の細石刃製作工程に係る資料が多く含まれている。これらの分布の中心は1aブロックのやや北側にあると考えられる。

1bブロックには、細石刃を主体とした多くの黒耀石の資料と共に、黒色頁岩製の細石刃（14）が含まれている。これらは1bブロックの北東寄りに、細石核（284、286）を中心とするかのように分布し、この周辺で集中的に細石刃の剥離作業が行われたと考えることが可能であろう。また、そのやや南西部から細石核原形（288）も出土しており、全体として遺物の集中度は良いと考えられる。

1cブロックは、出土点数が少なく散漫な分布状況であり、細石核も含まれないが、細石刃は総点数の四分の一にあたる72点が出土している。また、細石刃（38、44、81）や使用痕を有する剥片（340）等の珪質頁岩の石器は、全資料が本ブロックから出土している。

スクレイパーなど中形石器の素材となった黒色安山岩は、どのブロックからも出土しているが、1bブロックに最も多く含まれる（第9図）。

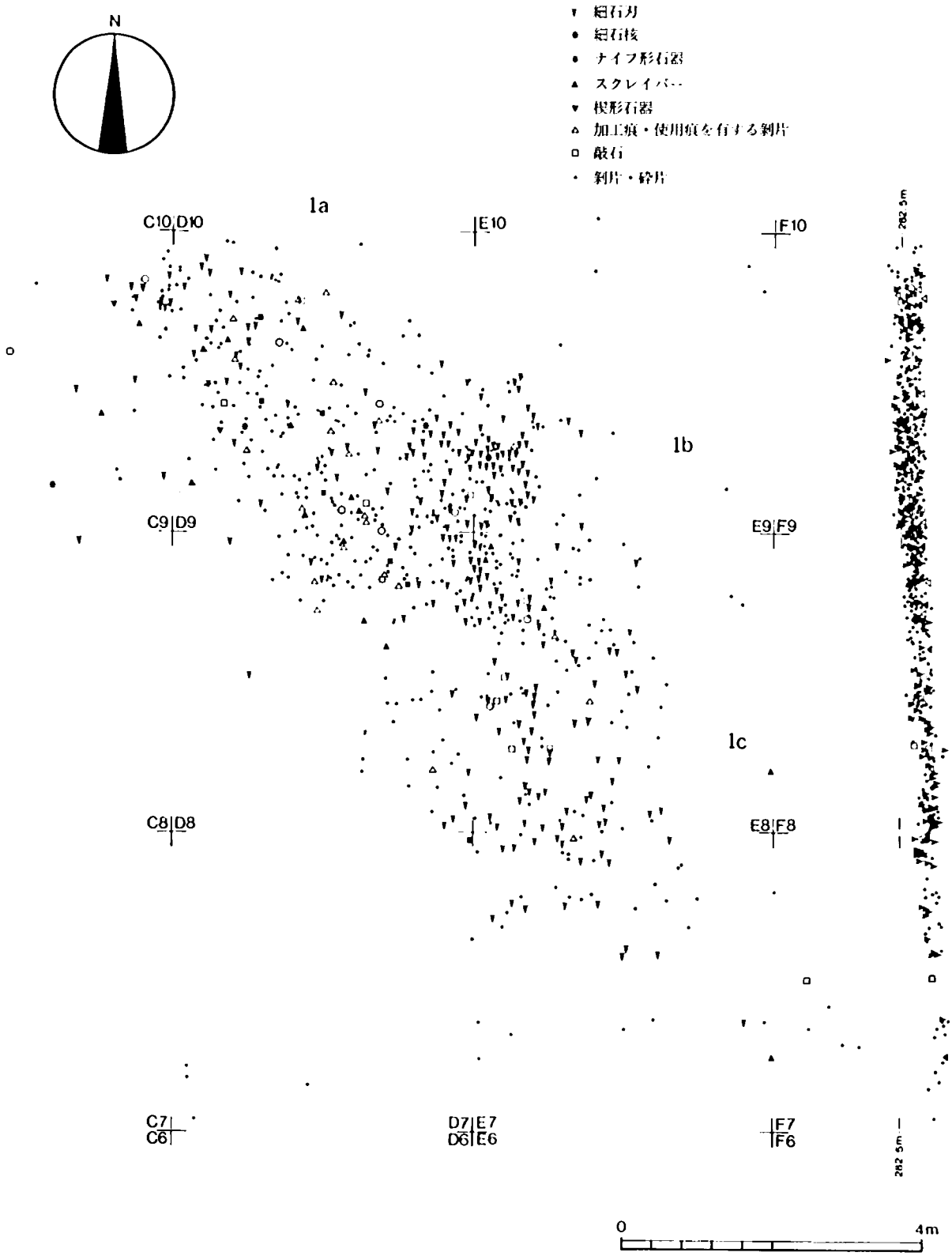
1aブロックでは黒耀石とやや分布が異なり、全体に南東側によって出土している。主な石器としては側縁に調整加工のあるスクレイパー（317、318）があり、サイコロ状の石核（372）も含まれている。また、黒色頁岩のチョッパー状の石核（373）とその同一個体の剥片類もすべて本ブロックからの出土である。

1bブロックには黒耀石同様多くの資料が含まれるが、全体に南西側によって出土しており、分布が異なる。主な石器として、スクレイパーでは端部に調整加工の施されるもの（312、313、314）、片側縁に調整加工を施したもの（323）などやや多様性があり、石核も縦長剥片を剥離したもの（378）、サイコロ状のもの（371）、亀甲状のもの（375）などやはりバラエティーに富んでいる。また、剥片類も多い。

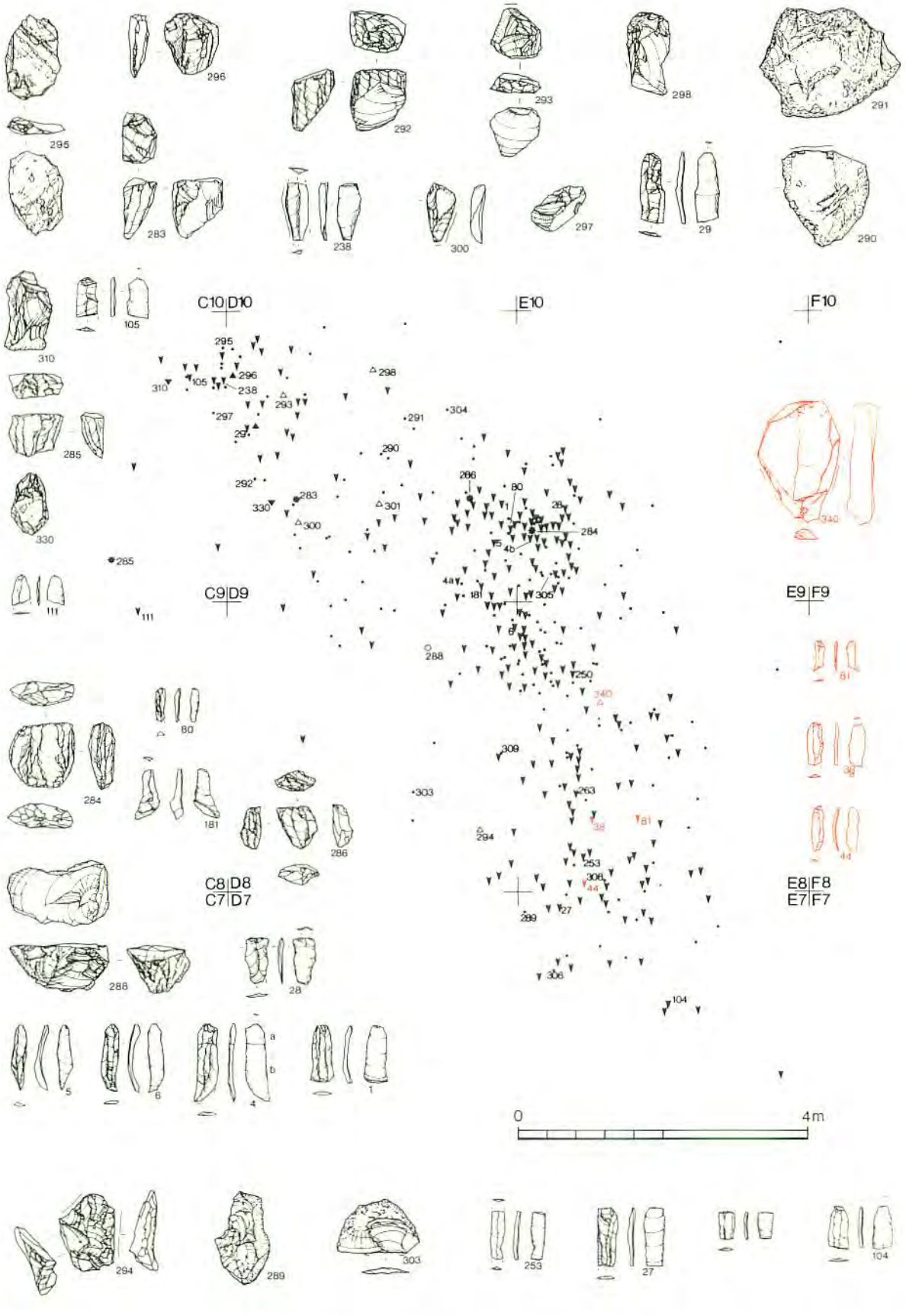
1cブロックは、あまり多くの資料が含まれておらず散漫な分布状況であるが、北側に集中する傾向が窺える。主な石器としては、尖刃のスクレイパー（316、320）などがあり、石核では亀甲状のもの（374）が出土している。また、黒色頁岩の縦長剥片やホルンフェルスのスクレイパー（315）も出土している。

礫器、敲石として用いられた粗粒安山岩は、識別の難しい調整剥片などは少なく、石器として認識できたものが殆どである。礫器および敲石は、1a・b・cの各ブロックに数点ずつ含まれているが、他の石器から見ると、全体に散漫な分布状況である（第10図）。

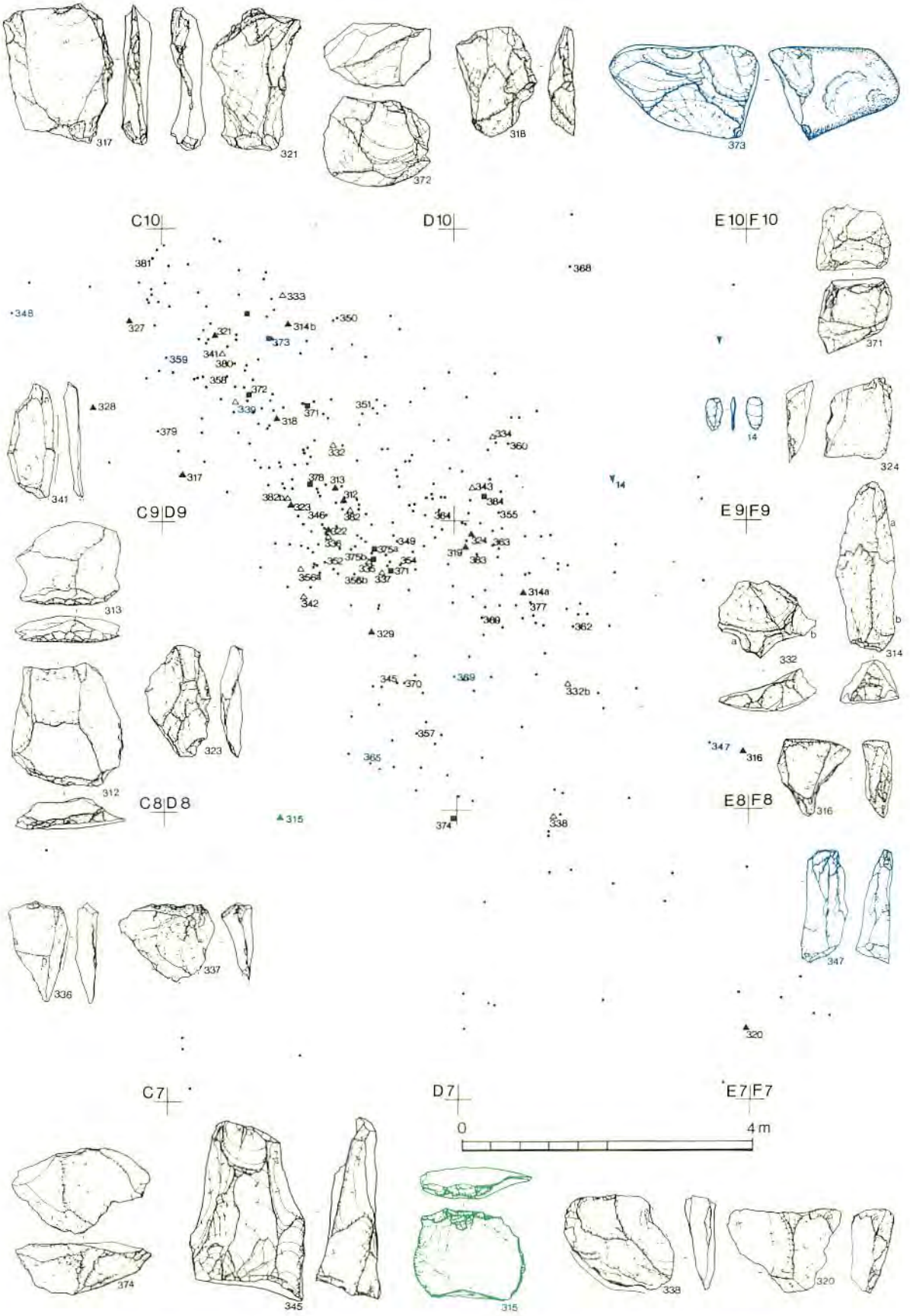
1aブロックでは、1bブロックに近い位置で多くの大形石器が出土している。



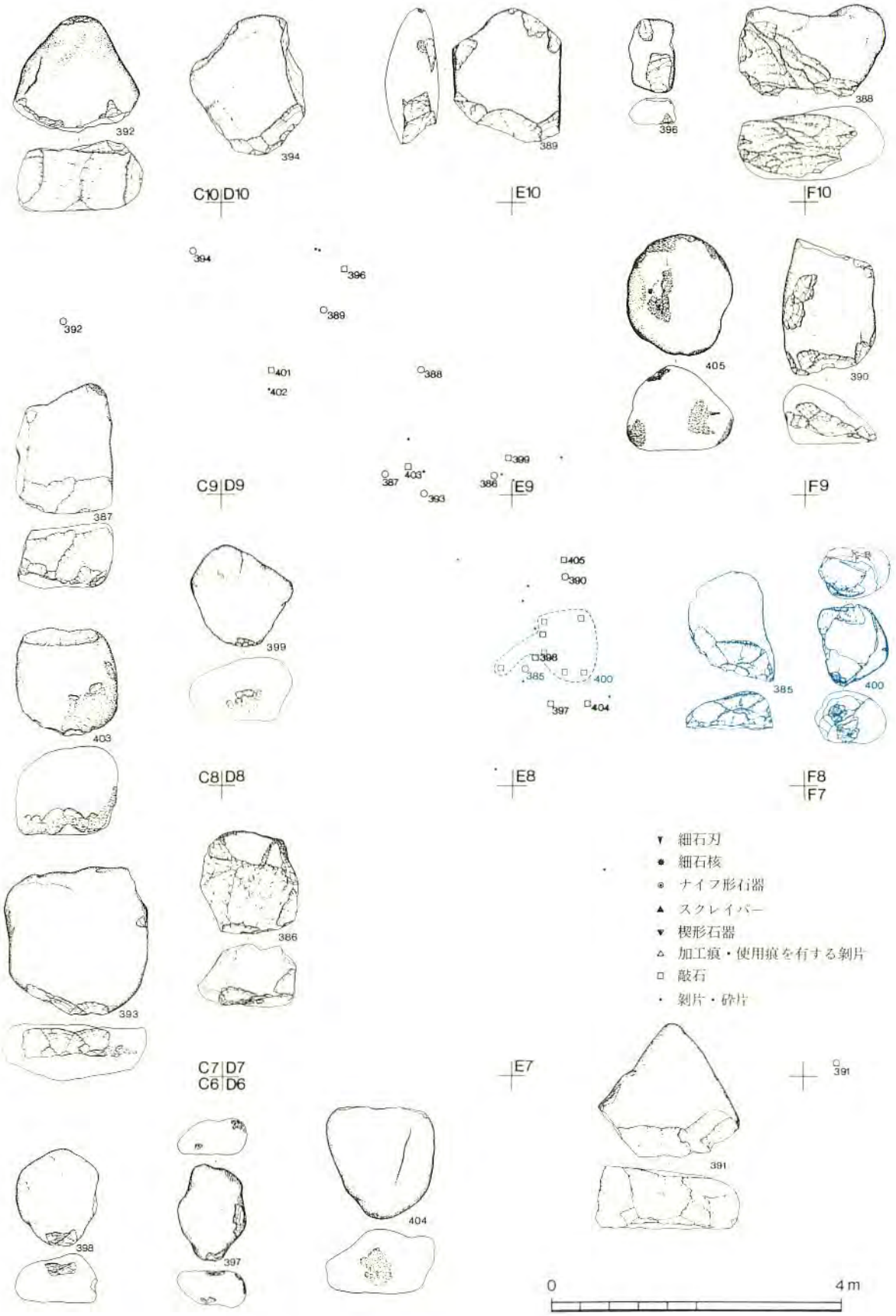
第7図　第1ブロックの石器分布



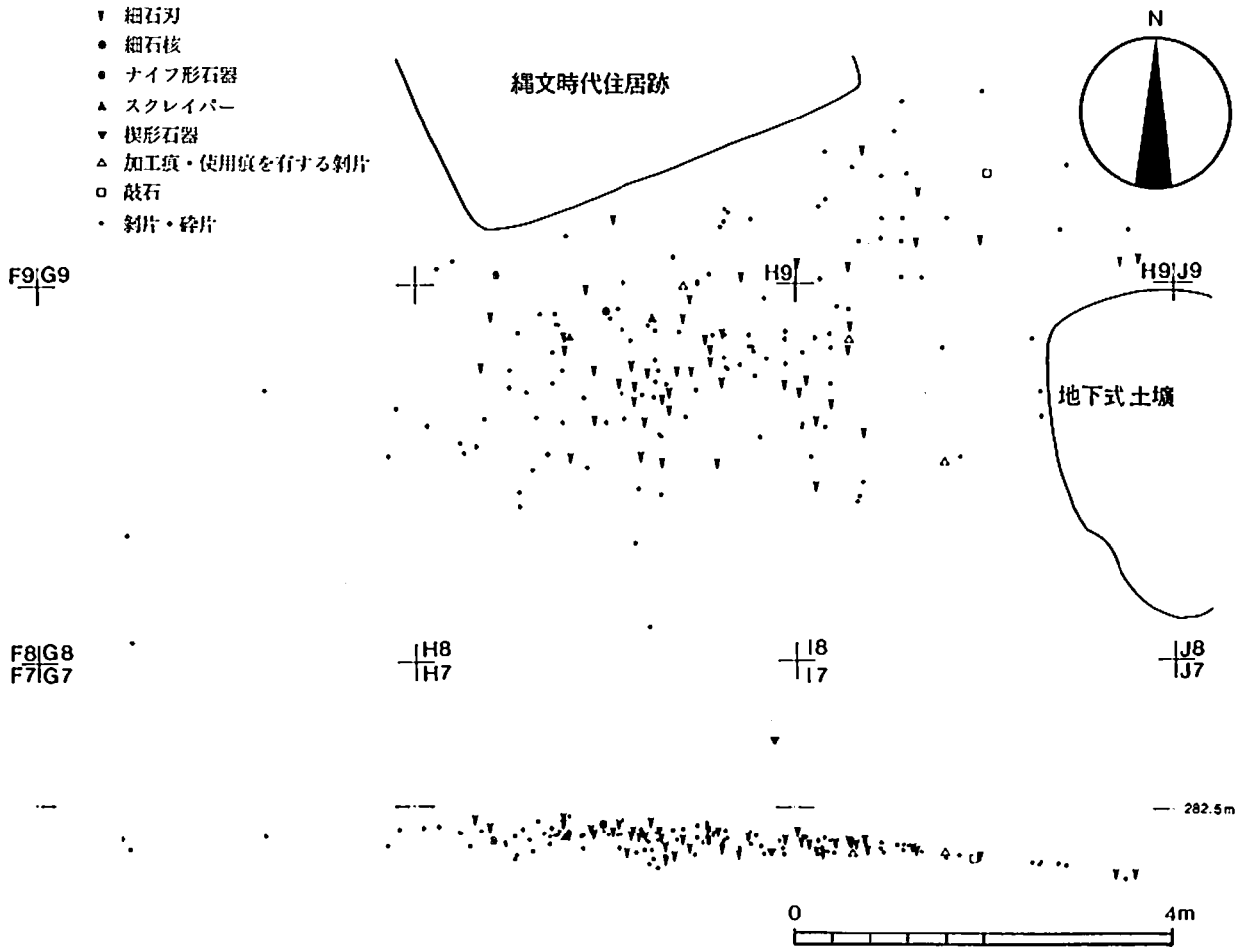
第８図　第１ブロック黒耀石・珪質頁岩の石器分布
（赤）



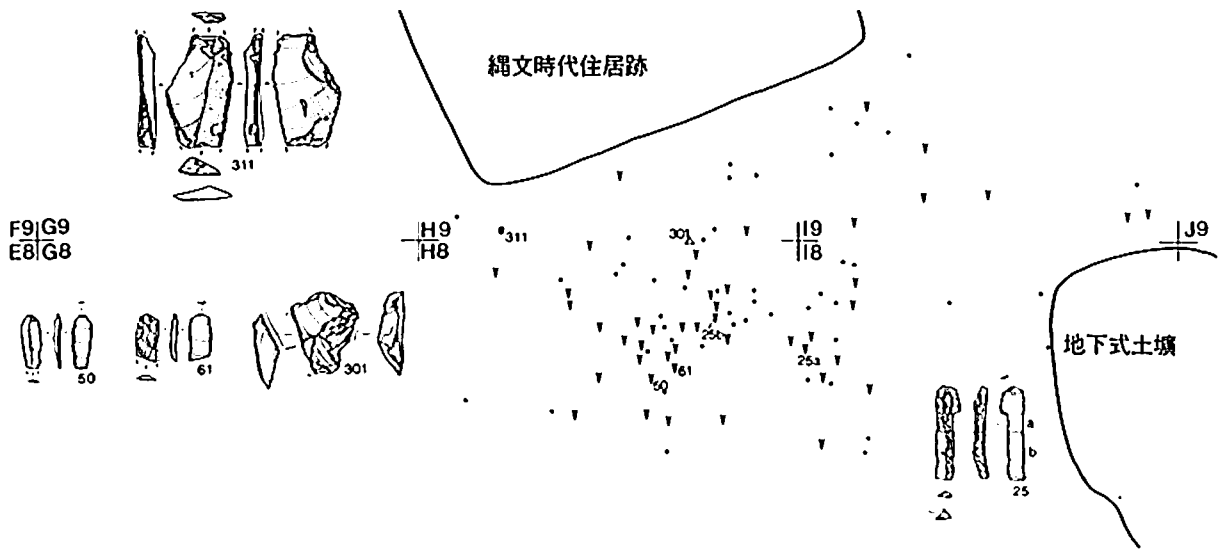
第9図　第1ブロック黒色安山岩・黒色頁岩・ホルンフェルス・チャートの石器分布
（青）　（緑）　（赤）



第10図　第１ブロック粗粒安山岩・砂岩の石器分布
（青）



第11図　第２ブロックの石器分布



第12図　第２ブロック黒耀石の石器分布

1bブロックでは、北東側の黒耀石と南西側の黒色安山岩の分布に挟まれた、中央のやや北西側の位置に集中して出土している。

1cブロックでは礫器が1点のみと少なく、ブロックのやや外側から出土している。また、砂岩製の敲石(400)が含まれている。

第1ブロックが三つの小ブロックに分割できる可能性があることは既述したが、それらは石器石材の分布状況から、小ブロック内でも小形、中形、大形の各石器の分布がやや異なることが言及できたと考える。また石器組成という観点では、1a・bブロックは共に豊かであり、1cブロックはスクレイパー、礫器が少なく細石核も含まれない、といった特徴が認められた。しかし全体として考えるならば、各小ブロックの石器組成はほぼ均一的な状況にあると言えよう。

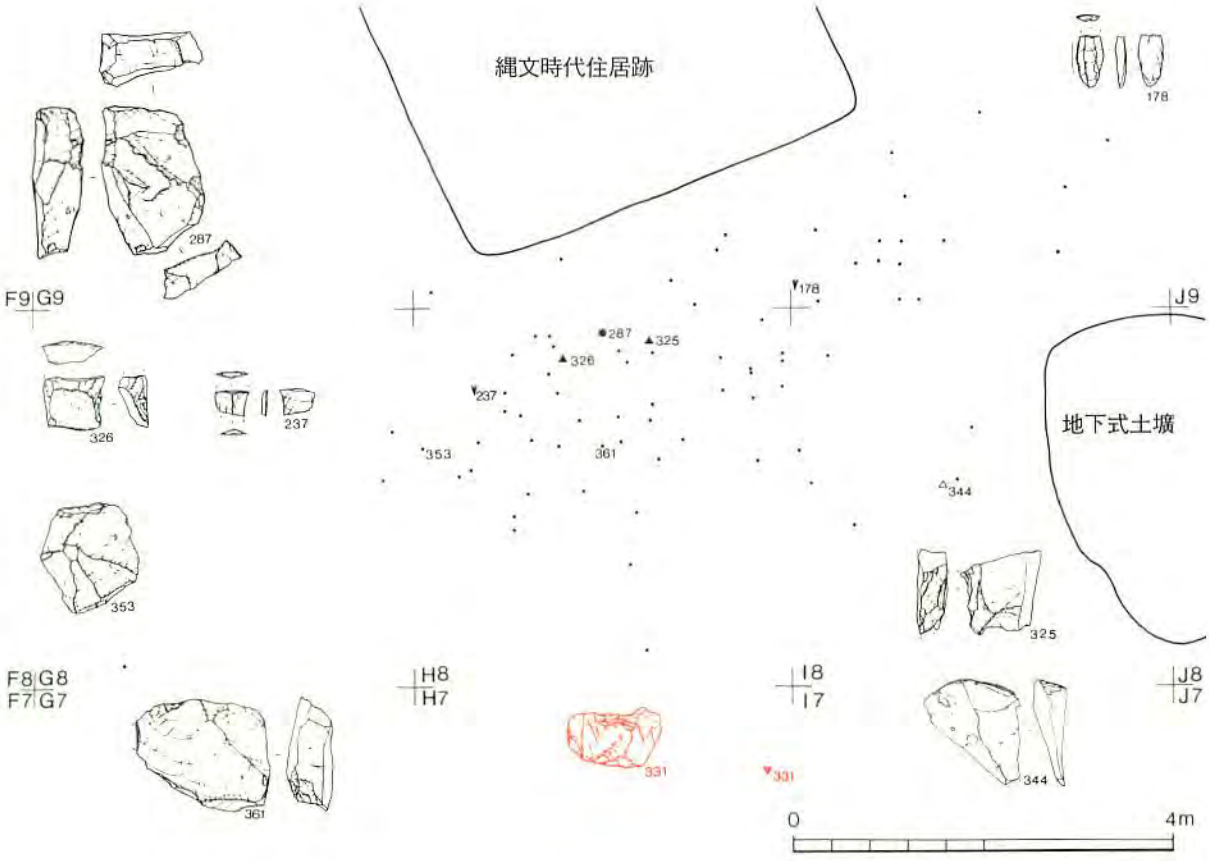
2．第2ブロック（第11～14、17図）

本ブロックは、調査区の位置する台地の東縁で、西から東への傾斜変換点で検出された。第1ブロックと同様に、耕作土下位のローム層上面から遺物が出土し始めたが、本ブロックにおいてもローム層上端と石器包含層の一部が削平されている可能性がある。特に北側のH・I－9グリッドの縄文時代前期竪穴式住居跡、東側I・J－8グリッドの地下式土壙によってブロックの一部が失われている可能性が高いと思われる。また、ブロック東側に分布する遺物の一部が、傾斜に沿って多少移動していると考えるべきかも知れない。しかし、本ブロックも比較的良好な遺存状況で検出されたと考えられる。

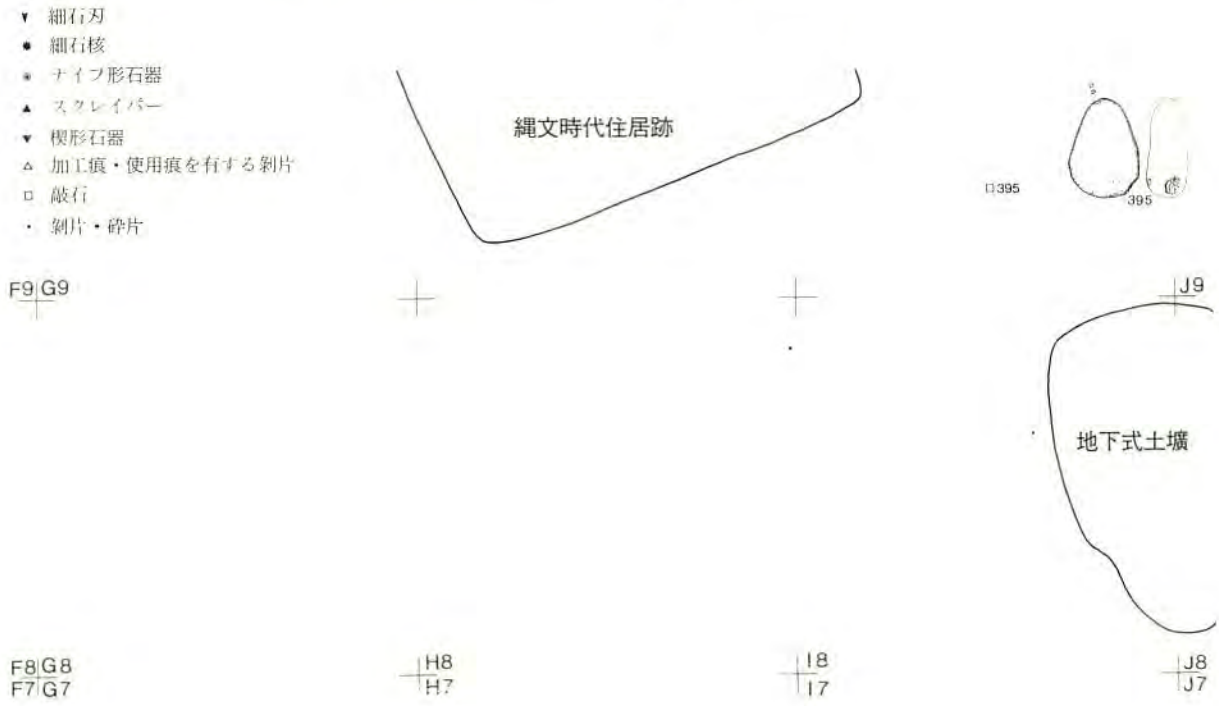
第2ブロックの全体的な広がりは、南西から北東方向に主軸をもつ楕円形を呈し、およそ南西～北東7m×南東～北西4mの範囲に分布し、調査グリッドとしてはG～I－7～9がこれに該当する。中央部にやや遺物の稀薄な部分があり、H－8グリッドの北部およびI－8グリッド北西部に遺物の集中する部分があるため、二つの小ブロックに分割される可能性もあるが、全体として一つのブロックとして理解すべきものと考えられる。垂直分布の状況は、第1ブロック同様にローム層上端からⅣ層まで石器の出土が見られ、最大で56cmの厚みをもち、ローム層に沿った薄い凸レンズ状を呈す。

	黒耀石	黒色安山岩	黒色頁岩	珪質頁岩	チャート	砂岩	ホルンフェルス	粗粒安山岩	小計
細石刃	45	2	0	0	0	0	0	0	47
細石核	0	1	0	0	0	0	0	0	1
細石核原形	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナイフ形石器	1	0	0	0	0	0	0	0	1
スクレイパー	0	2	0	0	0	0	0	0	2
楔形石器	0	0	0	0	1	0	0	0	1
二次加工痕有剥片	0	0	0	0	0	0	0	0	0
使用痕有する剥片	1	0	0	0	0	0	0	0	1
剥片・砕片	45	119	3	0	1	0	0	1	170
石核	0	0	0	0	0	0	0	0	0
礫器	0	0	0	0	0	0	0	0	0
敲石	0	0	0	0	0	0	0	1	1
礫	0	0	0	0	0	0	0	44	44
合計	92	124	3	0	2	1	0	46	268

表4　第2ブロック出土遺物組成表



第13図　第２ブロック黒色安山岩・黒色頁岩・チャートの石器分布
（青）　（赤）



第14図　第２ブロック粗粒安山岩・砂岩の石器分布

検出された石器は224点と少ないが、細石刃、細石核、ナイフ形石器、スクレイパー、楔形石器、使用痕を有する剥片、敲石など多くの器種を含んでいる。

石材別の石器の分布について考えてみると、まず、黒耀石ではナイフ形石器（311）がブロック北西部から出土しており、層位的見地などからも本ブロックに含まれるものと考えられる。また、黒耀石製の細石核は出土していないものの、細石刃剥離作業初期の稜付き細石刃（25a･b）を始め45点の細石刃が出土している。更に、細石核の調整剥片を用いたと考えられる使用痕を有する剥片（301）の出土も見られる（第12図）。

黒色安山岩は本ブロックにおいて最も多くの資料が出土しており、細石刃２点（178、237）に加え、細石核（287）も出土している。本石材による細石刃とその製作に係る資料は、細石核の形態的な特徴も含め、第１ブロックとやや相違があることを示していると考えられる。またその他、黒色頁岩の剥･砕片３点、チャートの楔形石器１点（331）などが出土している（第13図）。

粗粒安山岩では、小形の敲石（395）の他、数点の調整剥片が出土したにすぎない（第14図）。

３．接合資料の分布（第15図）

整理作業における接合作業が完全ではないが、25組の接合資料を確認している。これらの内、１例を除いた全ての接合資料は第１ブロックに属しており、第１・第２ブロック間に接合資料を介した関係は確認されていない。

黒耀石では、細石核の原材と考えられるものと楔形石器の接合例(接合１)、細石核と打面作出剥片の接合例（接合２)、細石核と細石刃の接合例（接合３・４)、細石核の打面調整剥片と打面再生剥片の接合例（接合５)、細石刃同士の接合例（接合６）などか確認できている。

黒色安山岩では、石核と剥片の接合例（接合７・10など)、剥片同士の接合例（接合８)、使用痕を有する剥片と剥片の接合例（接合９)、スクレイパーと調整剥片の接合例などがある。

粗粒安山岩では、敲石とその使用によって剥落した砕片の接合例（接合11）があり、また、砂岩では、敲石が細かく破砕したものが接合した例（400）や、礫器の調整剥片の接合例と考えられるものがある。

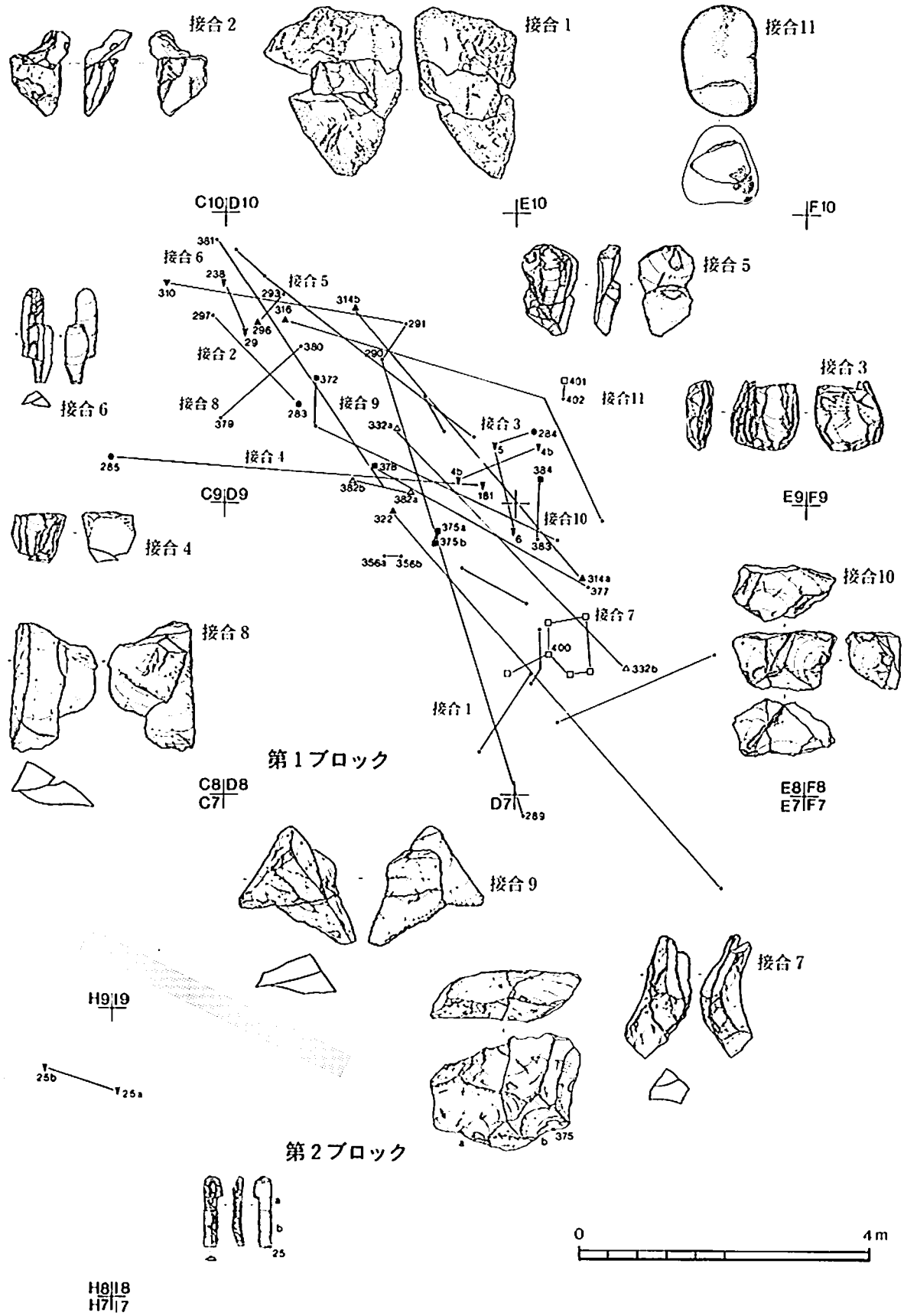
これら接合資料の分布は、第１ブロックでは、1a ブロック内で接合するもの４例、1b ブロック７例、1c ブロック４例の計15例あり、多くの場合小ブロック内で接合することが理解できる。

1a ブロック内で接合するものには細石刃の製作工程に係る黒耀石の資料が多く含まれている（接合２・４～６)。1b ブロックでは細石刃製作工程に係る資料(接合３)もあるが、黒色安山岩の剥片剥離工程を示す資料（接合７、10）が多く、粗粒安山岩の資料（接合11）も含まれている。1c ブロックも黒色安山岩の接合資料が多いが、砂岩製の敲石の接合例（400）も確認されている。

しかし、これら小ブロック相互にまたがる接合資料も比較的多く、1a ブロックと 1b ブロック間で６例、1b ブロックと 1c ブロックブロック間で２例、1a ブロックと 1c ブロック間で１例の計９例が確認されている。

1a ブロックと 1b ブロック間では、黒耀石の細石刃製作に係る資料(接合４)もあるものの、黒色安山岩の接合例が４例と多くみられる。1b ブロックと 1c ブロック間の２例の接合例も黒色安山岩の資料である。このような状況から、黒色安山岩が小ブロック間で頻繁に石器移動の対象とされていたことが理解できよう。黒耀石では、細石核調整過程の接合例はなく、原料の礫の分割時に係る資料（接合１）がある。黒耀石の場合、接合例は少ないものの、原料礫を分割した原材での移動と、細石核の調整過程、細石刃製作工程などが特定の小ブロック内で行われていたといった様な状況が、接合資料の分布の背後にあるのかもしれない。

これらの接合例から考察すると、第１ブロックに存する三つの小ブロックは独立して遺されたものではな



第15図　接合資料の分布

く、相互に頻繁に石器を交換しあうといった密接な関係にあったということが理解できる。

第２ブロックにおいては、細石刃剥離作業初期の稜付き細石刃（25a・b）の接合資料があるのみである。

４．配石（第14、17図）

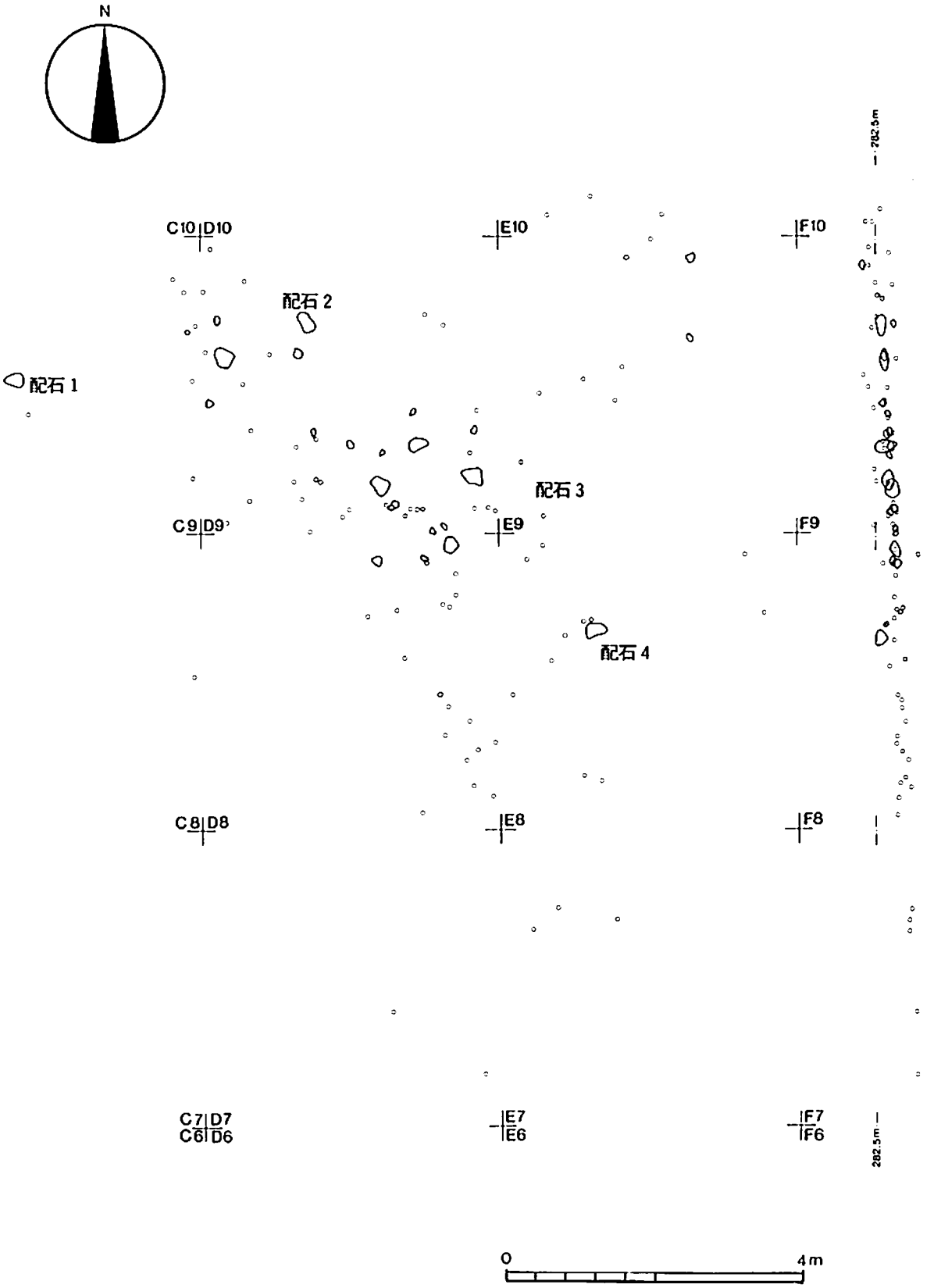
調査区内からは、石器の集中する部分と重なるように、明確な加工痕や使用痕を有さない粗粒安山岩の礫が出土している。石器群の出土した層位にはこういった礫は自然に存在しないものであり、何らかの理由で人為的に遺跡内に運び込まれたものと考えられる。層位的にはⅡ層～Ⅳ層にわたり、垂直分布としては約40cmの幅をもっている。これらの内には、最大長20cmを超える大形礫があり、それら大形のものを中心として最大長20～7cmの中形の礫が分布し、記号化して表示した７cm以下の小形の礫はやや散漫な分布を示している。これら二つのブロックに重なるように検出された礫は、大きさなどが一定ではなく、明確に人為的手段により焼かれた痕跡を有するものは少ないため、旧石器時代に多くみられる礫群として認定すべきものではないと考える。しかし、全体としては大形礫を中心としてあるまとまりをもっていると考えられるため、ここではそれらを配石としておきたい。本調査区においては、合計５カ所の配石を確認している。

第１ブロックでは、配石１～４が確認されている。この内、Ｃ－９グリッドのほぼ中央に位置する配石１およびＥ－８グリッドほぼ中央に位置する配石４は、１個の大形礫を中心とし、その周囲に小形の礫が分布して配石を構成している。これら配石の中心となる二つの大形礫には、共に明確ではないものの、敲打痕のような痕跡を観察することができる。配石２はＤ－９グリッドの北西部に位置し、60cm程離れて出土した二つの大形礫が中心となっている。この内西側のものは、表面がざらついており、剥離痕とも考えられそうな剥落が観察できる。配石３はＤ－９グリッドの南東部に位置し、直径80cm程の範囲に分布する４個の礫を中心に構成されている。これらの内２個には、明確ではないが、敲打痕と考えられるような傷痕が観察できるものがある。この配石３は、第１ブロック中央という位置関係や、構成する礫数も多いといった観点から、これら配石の中心的な意味合いを有していたと考察される。また、これらの配石に用いられた礫の内、配石２の大形礫１個と直径10cm程の中形礫４個はやや赤化していたが、ごく自然に存在する粗粒安山岩にやや赤化したものが多く見受けられる状況から、焼かれていると積極的に評価すべきものではないと考えている。

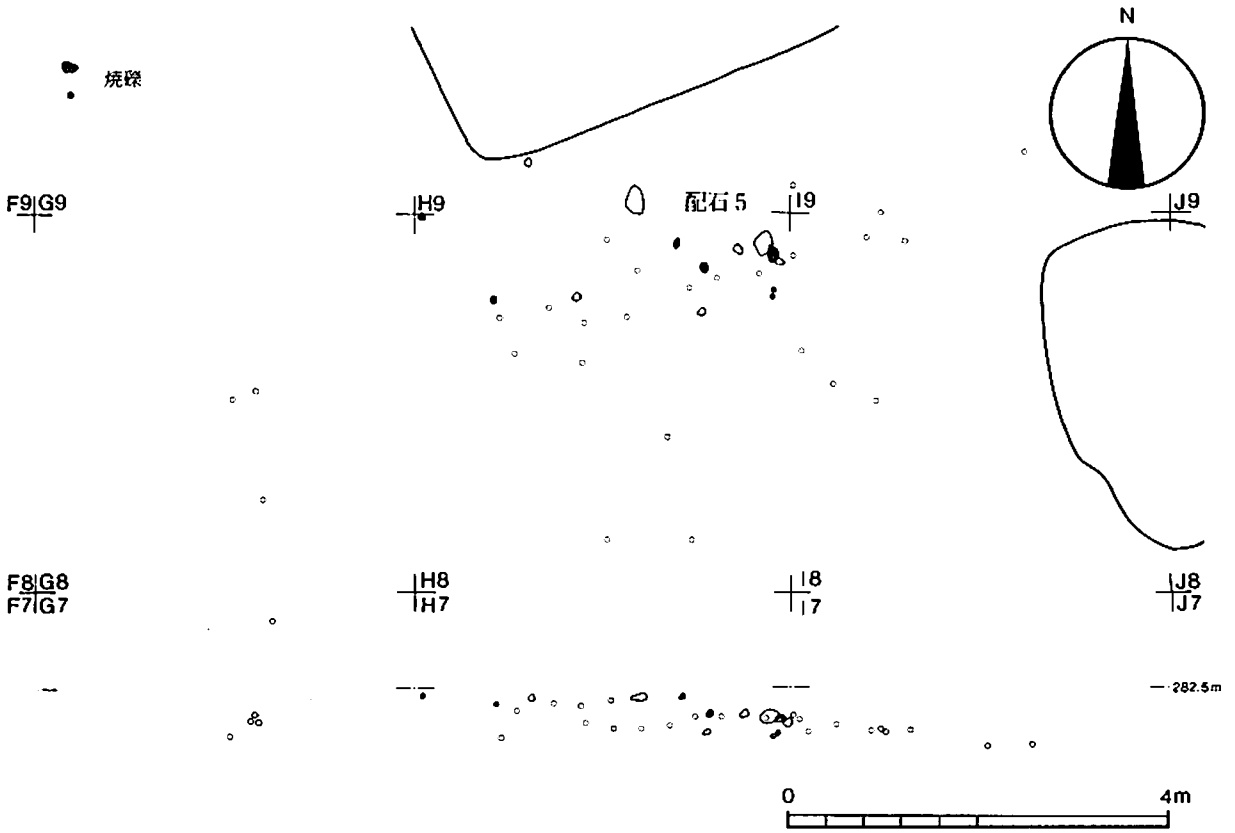
第２ブロックでも、遺物分布に重なるように粗粒安山岩の礫が出土し、それらがＨ－８グリッド北東部からＩ－９グリッド南端を中心にやや集中するため、配石５とした。大形礫２個が中心で、内Ｈ－８グリッドに位置するものには一部が剥落した状況が観察できる。また、第２ブロックに分布する礫の内、中形礫と小形礫の合計７点が焼けた状況を呈している。

前述のように、配石を構成する礫には、小形・中形のものの一部に焼けた痕跡を有するものがあり、大形のものでは敲打痕と考えられるものや剥落した形跡を有し、一般的には台石として認定されるべきものが含まれている。これらは、目的が必ずしも明確ではないにしろ、何らかの作業の場を反映している可能性が高いと考えられる。更に火を使用した形跡もあるとすれば、幾つかの作業が複合して行われていた可能性さえ考えられよう。

またこれらの配石は、配石１・２が1aブロック、配石３が1bブロック、配石４が1cブロックに重なり、配石５が第２ブロックに重複している。この状況から、配石が石器の製作や使用といった生活の単位と深く係りをもっていたと考えることも可能であろう。



第16図　第１ブロック配石と礫の分布



第17図　第2ブロック配石と礫の分布

第４節　石器群の内容

旧石器時代の調査区からは、総数1,291点の遺物が検出された。その内訳は、細石刃284点、細石核５点、細石核原形１点、ナイフ形石器１点、スクレイパー20点、楔形石器３点、二次加工痕を有する剥片５点、使用痕を有する剥片15点、剥片および砕片744点、石核８点、礫器14点、敲石17点の合計1,117点の石器群と174点（12.6%）の礫により構成される（表２）。主要な石器として細石刃が総数の二割以上を占めることから、本石器群は旧石器時代終末期のいわゆる細石器文化に対比されよう。

１．細石刃関係の遺物

細石刃とその剥離に関係したと考えられる遺物は、大部分が黒耀石をその石材としている。一部黒色安山岩や珪質頁岩など他の石材を用いたものもあるが、これらの石材はスクレイパーなどの大形の剥片石器やその素材となる剥片の剥離に関係しており、細石刃や細石核のような特徴的な形態をもつもの以外は細石刃の剥離に関係した遺物として認定することは困難である。その反面、本石器群においては黒耀石を石材とする遺物は細石刃の剥離に関係するものとしてほぼ限定できると考えられる。

これら黒耀石の遺物は、色調や夾雑物の混入状態などを基準として母岩別資料にすべく分類を行ったが、細石刃や細石核調整剥片など小さいものが大半を占めることや資料数が多いことなどから、全遺物を厳密に分類することが困難であり、肉眼上で下記ａ～ｆの８種類に分類した。

黒耀石ａ　透明
黒耀石ｂ　透明で白色のくもりのあるもの
黒耀石ｃ　透明で黒色の縞のみられるもの
黒耀石ｄ　黒色で半透明なもの
黒耀石ｅ　黒色で不透明なもの
黒耀石ｆ　黒色でごく微細な夾雑物が列状に混入するもの
黒耀石ｇ　不透明で黒色の縞のみられるもの
黒耀石ｈ　黒色で大粒の夾雑物が混入するもの

このうち、黒耀石ｇはナイフ形石器（255）１点のみであり、黒耀石ｈはほぼ接合資料１（289～291、310・第33図）に限定される。また黒耀石ｄ～ｆについては近似性が強く曖昧な部分も見受けられるため、再検討の必要もあると考えられる。

（１）細石刃（第20図～第28図）

細石刃は284点出土したが、うち４点は接合し２点の細石刃（4,25）となるため、実数としては282点を数える。石材は、珪質頁岩３点（38、44、81）、黒色安山岩２点（178、237）、黒色頁岩１点（14）の６点を除いてすべて黒耀石である。

細石刃は一般に、折断によって打瘤の膨らみや尾部の反り返った部分など不要な箇所を取り除いて、適宜な部分だけを用いたと考えられる石器であり（戸沢1964、杉原・小野1965ほか）、その遺存状態が重要視されている。そのため、本石器群もそれぞれ部位を頭部・中間部・尾部・上半部・下半部（第18図上）とし、その遺存状態を８つのパターンに分類（第18図中）してまとめることとした。

また、本遺跡より出土した282点の40%に当たる114点の細石刃側縁部に微細な剥離痕が肉眼により観察さ

れている。これらの微細な剥離痕は①～⑤に分類（第18図下）されるが、同一の細石刃にそれぞれ異なったパターンの剥離痕がみられるものもある。なお、④の「鋸歯状」剥離痕は①～③の組み合わせがみられるものである。

細石刃の遺存状態と微細な剥離痕との関係は次のとおりである。

完形の細石刃は24点（1～24）で、うち10点に微細な剥離痕が観察される。

尾部を欠損する細石刃は79点（25～103）で、うち57%にあたる45点に微細な剥離痕が観察される。剥離痕が観察された細石刃のうちの40%がこれに当たる。

下半部を欠損する細石刃は30点（104～133）で、うち15点に微細な剥離痕が観察される。

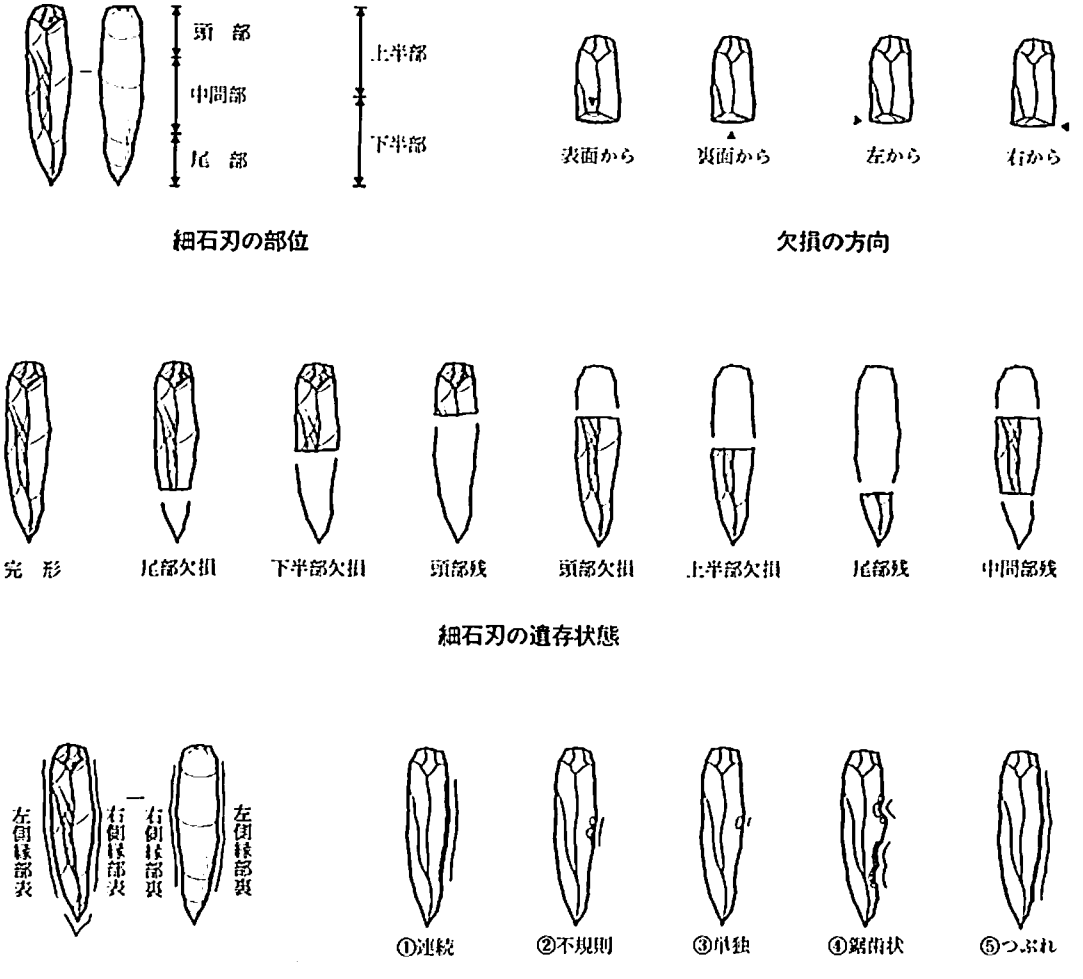
頭部のみを残す細石刃は22点（134～155）で、うち4点に微細な剥離痕が観察される。

頭部を欠損する細石刃は26点（156～181）で、うち12点に微細な剥離痕が観察される。

上半部を欠損する細石刃は14点（182～195）で、うち3点に微細な剥離痕が観察される。

尾部のみを残す細石刃は20点（196～215）で、うち1点に微細な剥離痕が観察される。

中間部を残す細石刃は67点（216～282）で、うち24点に微細な剥離痕が観察される。



第18図　細石刃の観察

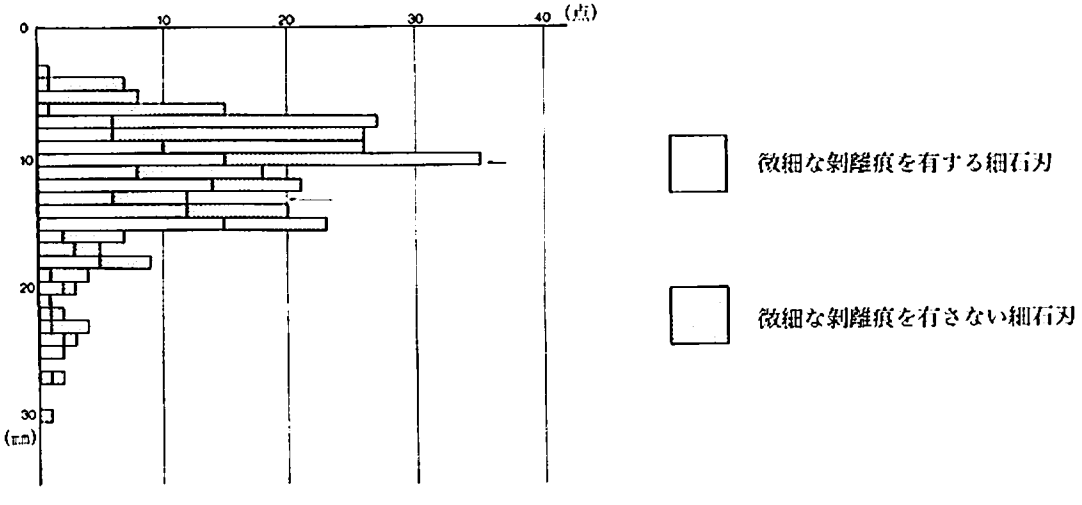
このように本石器群においては、頭部や尾部のみのようにごく一部が遺存するものを除いて、かなり確実な数量の細石刃に側縁部の微細な剥離痕が観察できる。このことから微細な剥離痕の有無は細石刃のいくつかの遺存状態をこえたある在り方と密接な関係をもつものと推察される。

そこで本石器群における細石刃の長さ・幅の法量と微細な剥離痕の関係をその実数282点から統計的な処理を行いヒストグラムとして示した（第19図）。

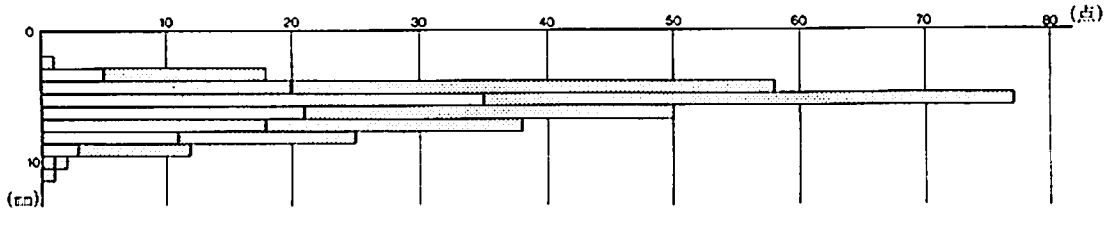
本石器群の細石刃は２～11㎜の幅をもち、平均値は5.60㎜である。微細な剥離痕が観察されたものについても幅３～11㎜、平均値5.68㎜とほぼ同様の在り方を示している。

一方長さについてみてみると、0.3～３cmを測り、平均値は1.09cmとなる。微細な剥離痕が観察された細石刃は0.4～2.8cmであり、平均値1.37cmと全体の平均値に比べ若干長くなる。こうした傾向はヒストグラムのピークからも読み取ることができる。

このように、細石刃に観察される微細な剥離痕の有無はその遺存状態の他に長さに重要な意味をもつと考えられる。どのような理由でこうした微細な剥離痕が細石刃の側縁部に残されたかについては今後の研究の進展に委ねるところが大であるが、細石刃（細刃器）という道具としての「使用痕」を確実に示すものと捉えるのであれば、今後長さなどの法量を含めた遺存状態全体を考慮していかなければならないと考えられる。



細石刃の長さと微細な剥離痕との関係



細石刃の幅と微細な剥離痕との関係

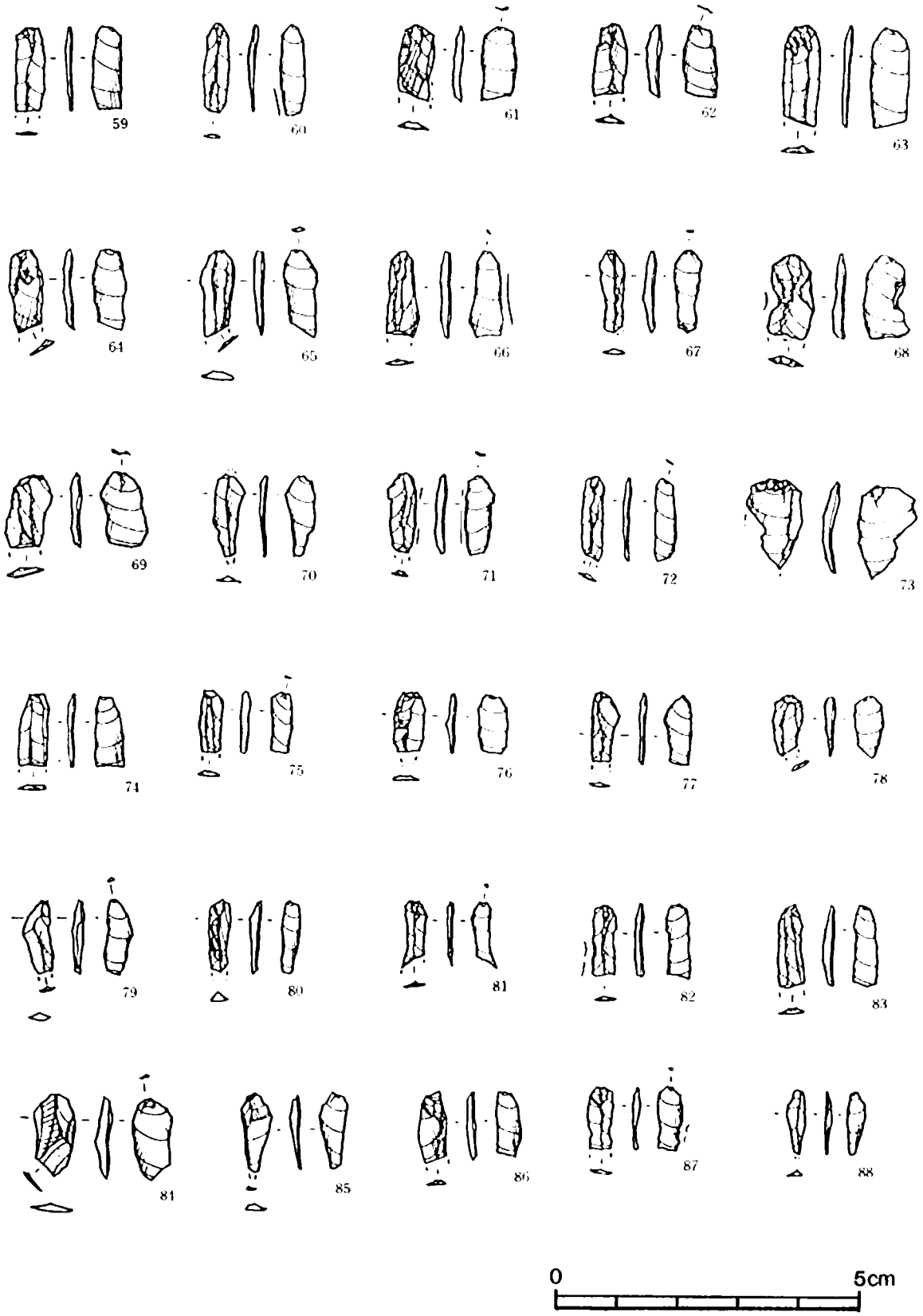
第19図　細石刃と微細な剥離痕との関係

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
5cm

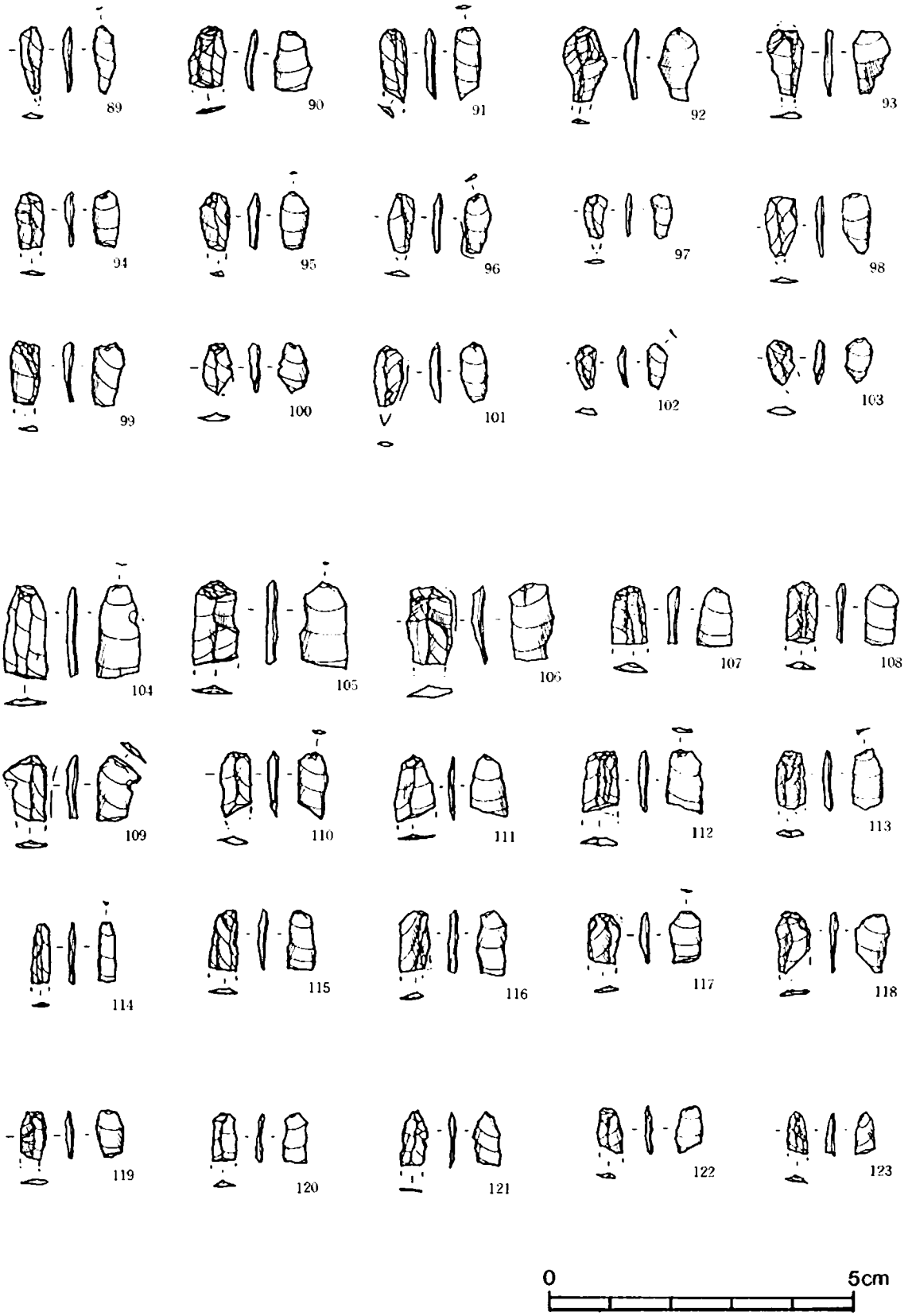
第20図　紐石刃（1）

29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
5cm

第21図　紅石刃（2）


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
5cm

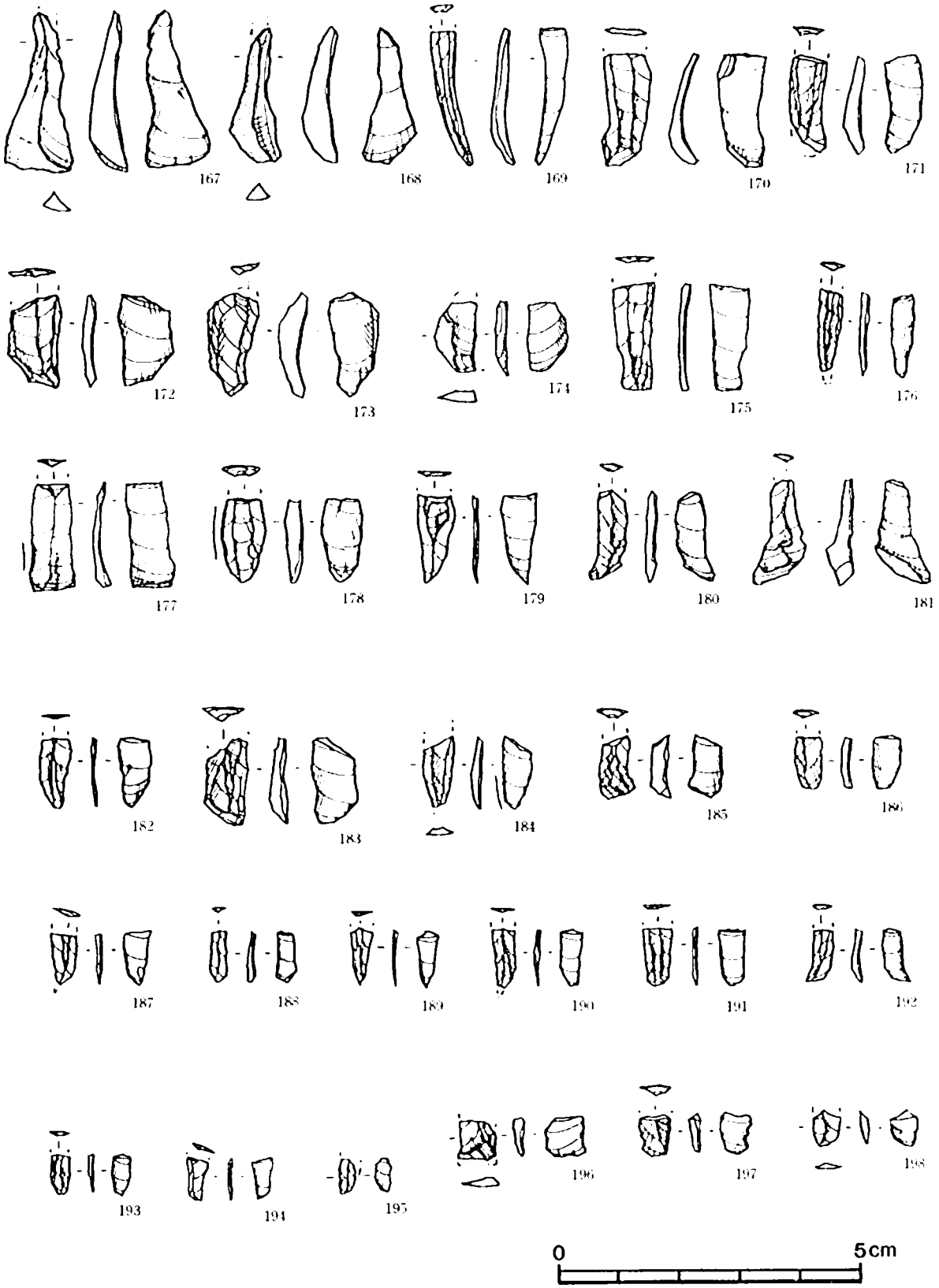
第22図　細石刃（3）


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
0
5cm

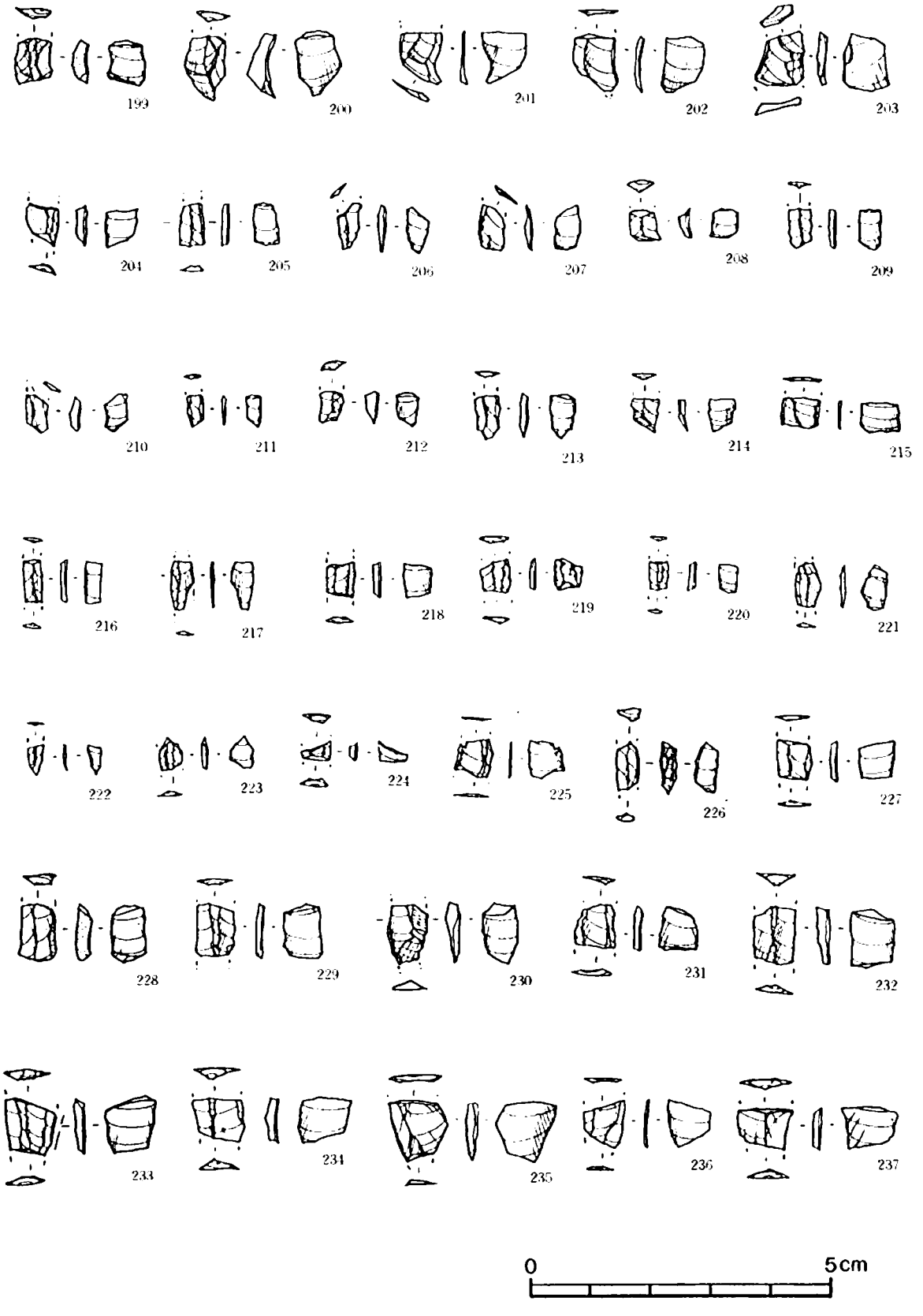
第23図　細石刃（4）

124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
0
5cm

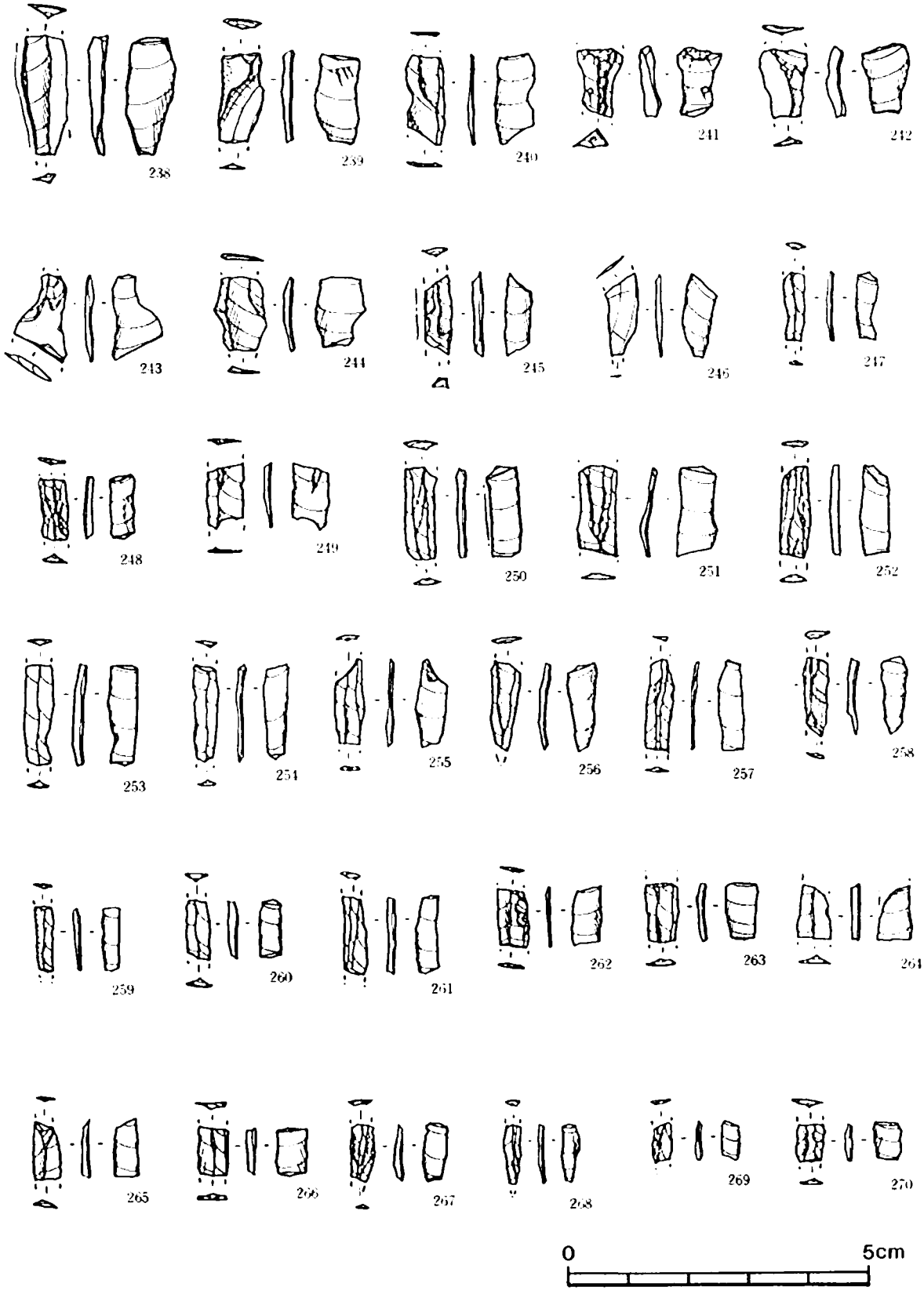
第24図　細石刃（5）


167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
0
5cm

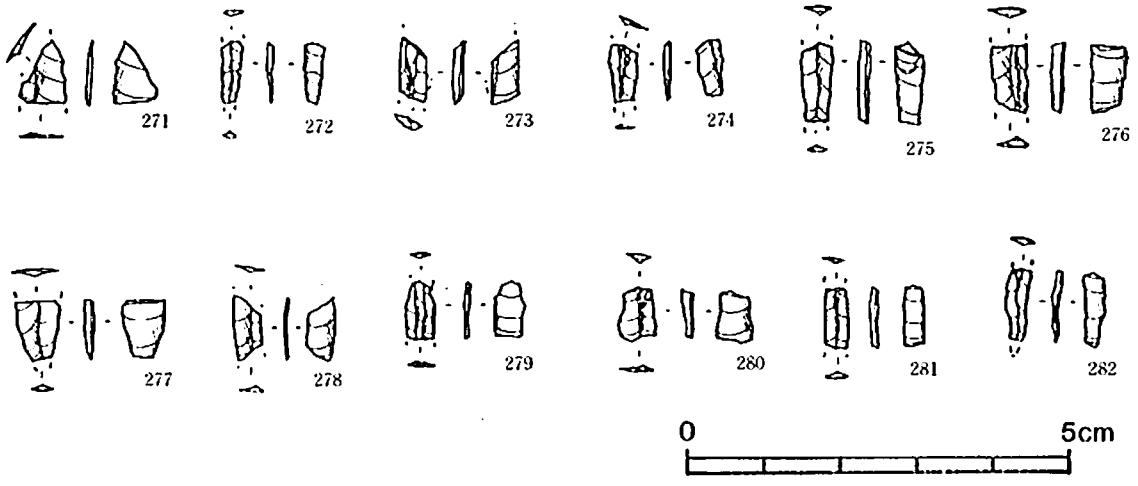
第25図　細石刃（6）


199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
0
5cm

第26図　細石刃（7）


238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
0
5cm

第27図　細石刃（8）



第28図　細石刃（9）

（2）細石核（第29図）

283～287の5点出土しており、石材は黒色安山岩の287を除いて、いずれも黒耀石である。

283は剥片を素材としており、剥片の尾部縁辺を主体に細石刃が剥離されている。なお、接合資料2にみられるように打面作出剥片（297）と接合している。

284は剥片を素材としており、素材となった剥片の頭部側縁辺と尾部側縁辺の両方向から素材の中央部方向に向かって細石刃の剥離作業が行われている。また、打面は石核の上下両端に設定され(両設打面)、接合資料3のように2点の細石刃（4、5）と接合する。なお、石核の背面には背面調整あるいは石核の稜調整痕が観察される。

285はその素材は不明であるものの、細石刃の剥離作業が他の細石核と同様に素材縁辺の両方向から中央部方向に向かって行われていることから、やはり剥片素材のものと考えられよう。

286はやはり剥片を素材としており、素材となった剥片の左側縁部から中央部方向に細石刃の剥離作業が行われている。なお、打面は上下両端に設定されている。

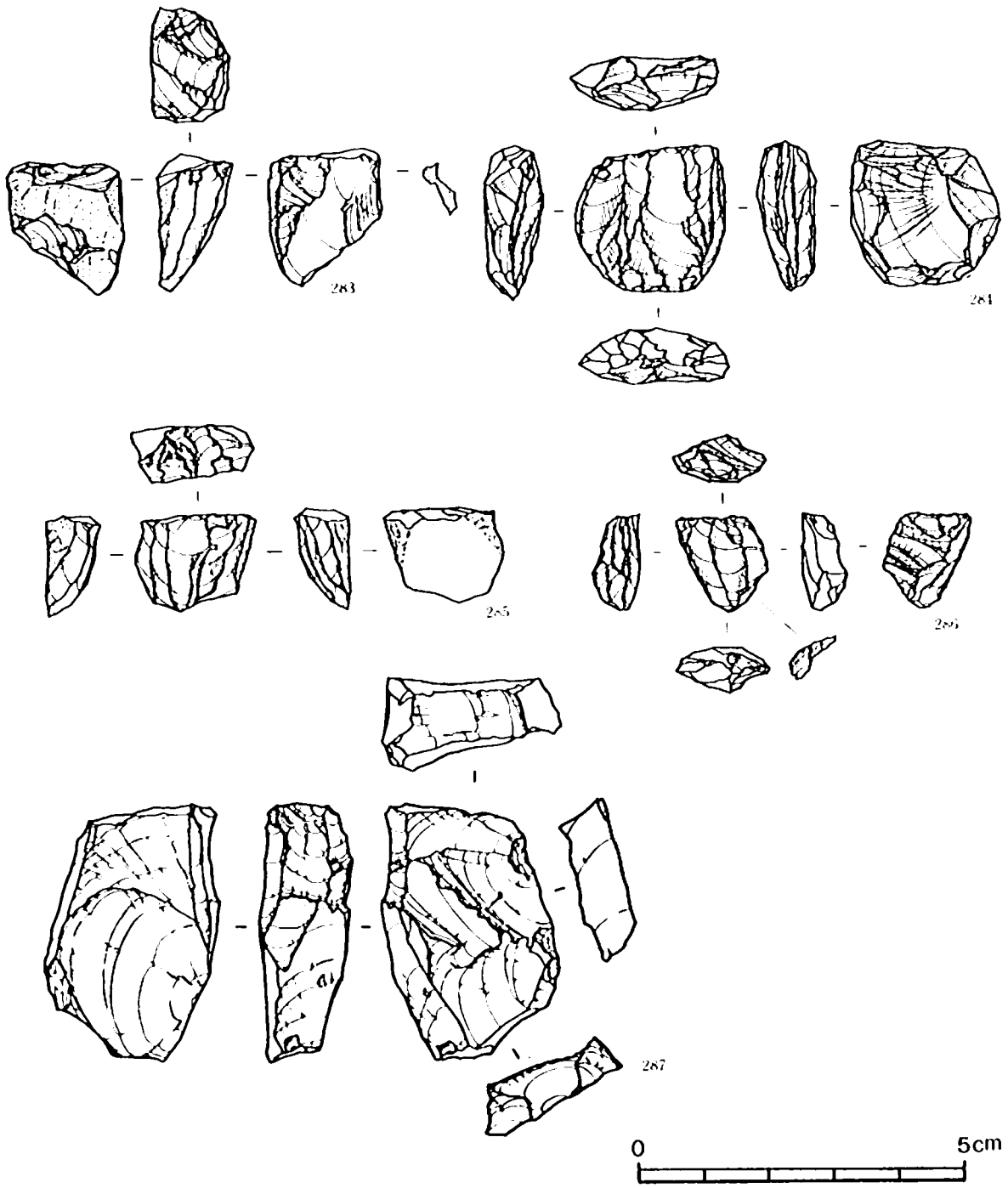
このように、283～286の4点はその素材の用い方や細石刃の剥離作業の在り方に共通する部分が多くみられ、同一形態の細石核として捉えられよう。

287は粗雑な「両面調整石器？」の縁辺部に数回樋状剥離を施したものである。細石核として認定するには若干の問題を含むが、2点の細石刃（178、237）が存在することから今回細石核として理解した。しかし、本来は彫器として捉えるべきものかも知れない。

（3）細石核原形と細石核の素材となり得る剥片（第30図）

288は黒耀石の剥片の主要剥離面を甲板面とし、側縁部に石核調整を行い粗雑な舟底形の石核原形としている。素材となった剥片の打面の部分からは、頭部調整と理解できる細かな調整剥離を行っている。こうした舟底形の石核原形があるということは、283～286とは素材の用い方が異なる細石核が本石器群に存在したことを示唆していると考えられる。

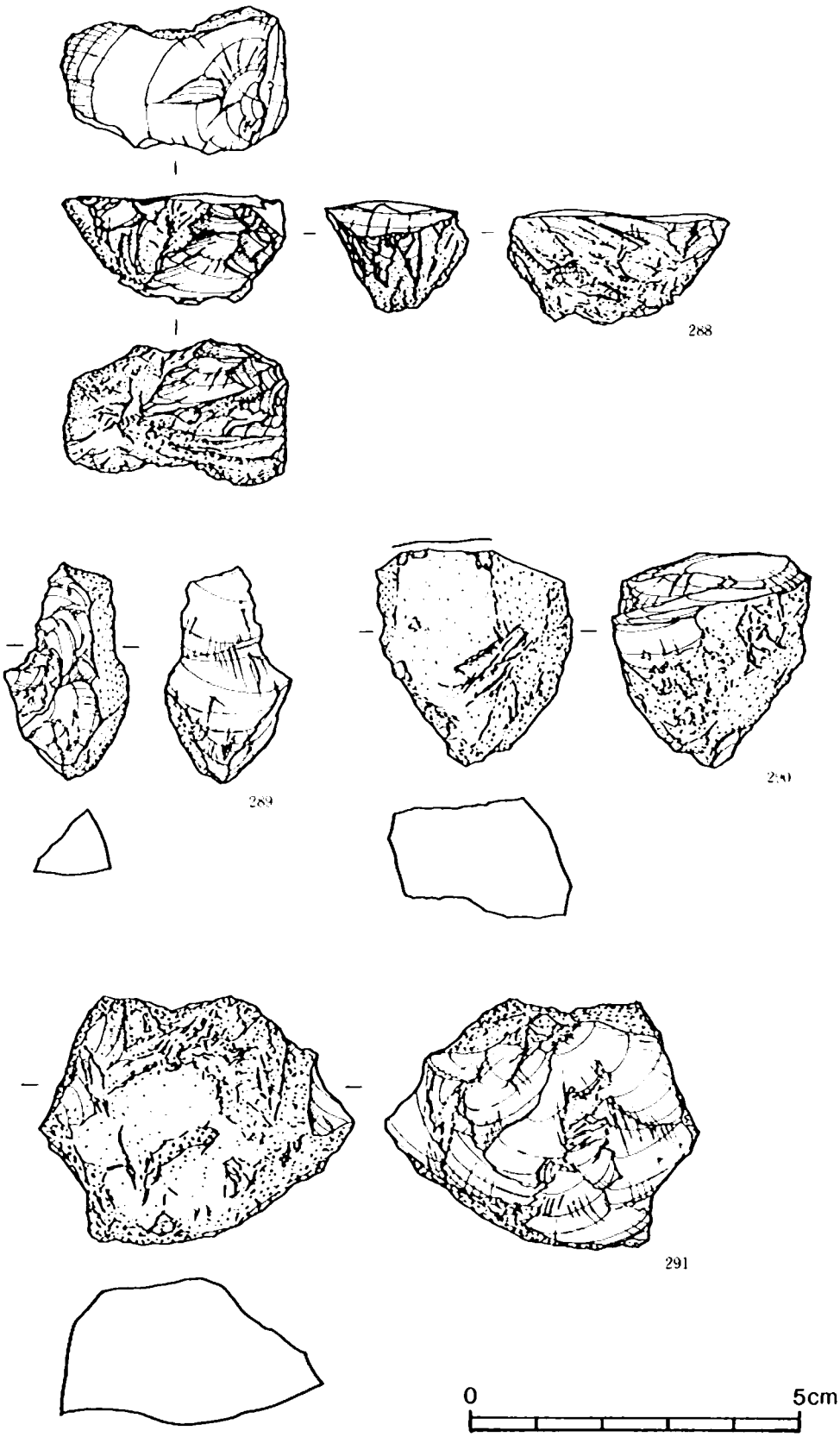
289～291はかなり厚みのある黒耀石の剥片で、ゴロゴロした印象をもち、細石核用の素材となり得るものと考えられる。290、291にはその縁辺部に微細な剥離痕が観察され、石核原形の準備を行ったものとも考えられる。これらの剥片は接合資料1とし、楔形石器（310）と接合する。



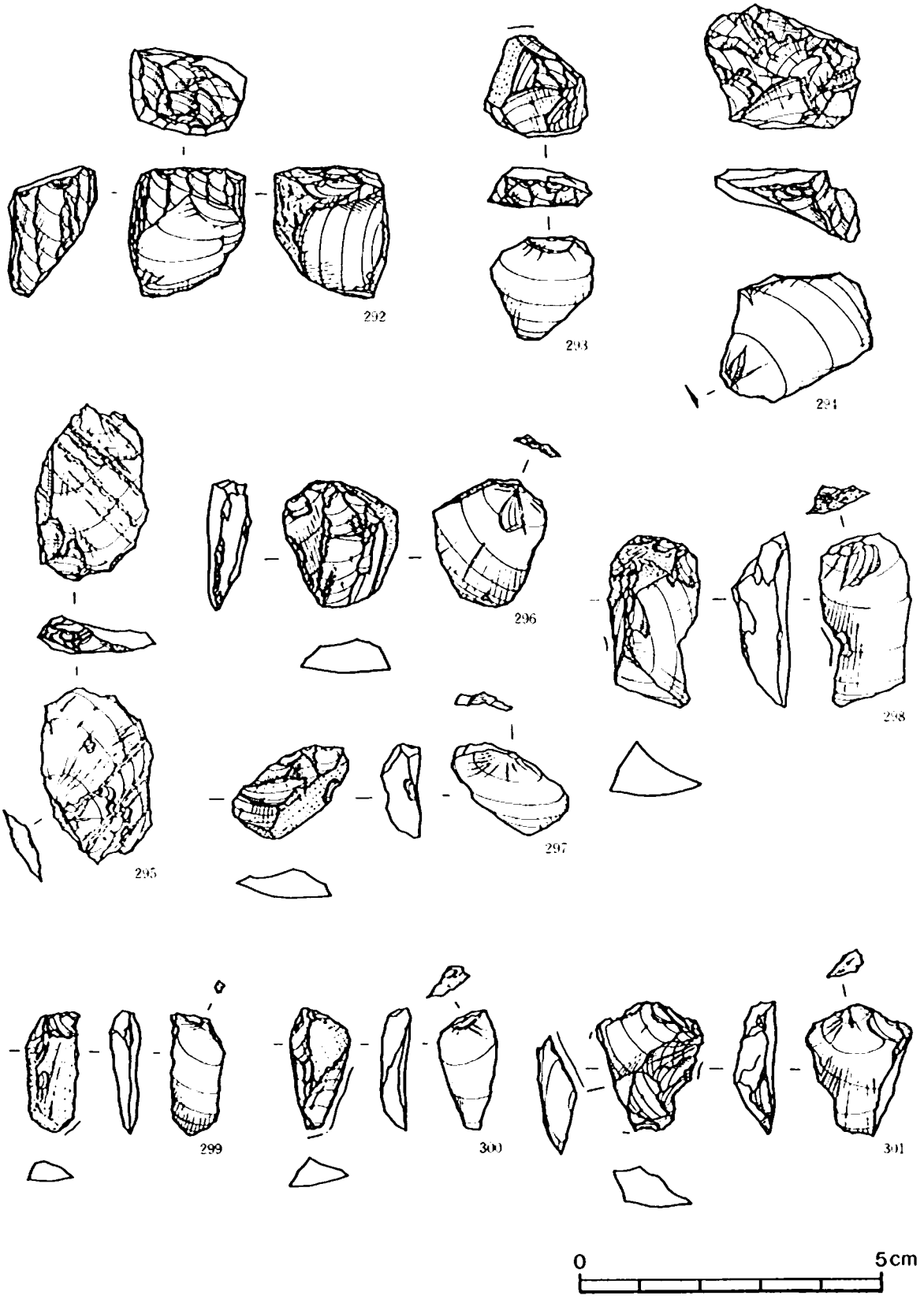
第29図　細石核

（４）細石核調整剥片（第31図・第32図）

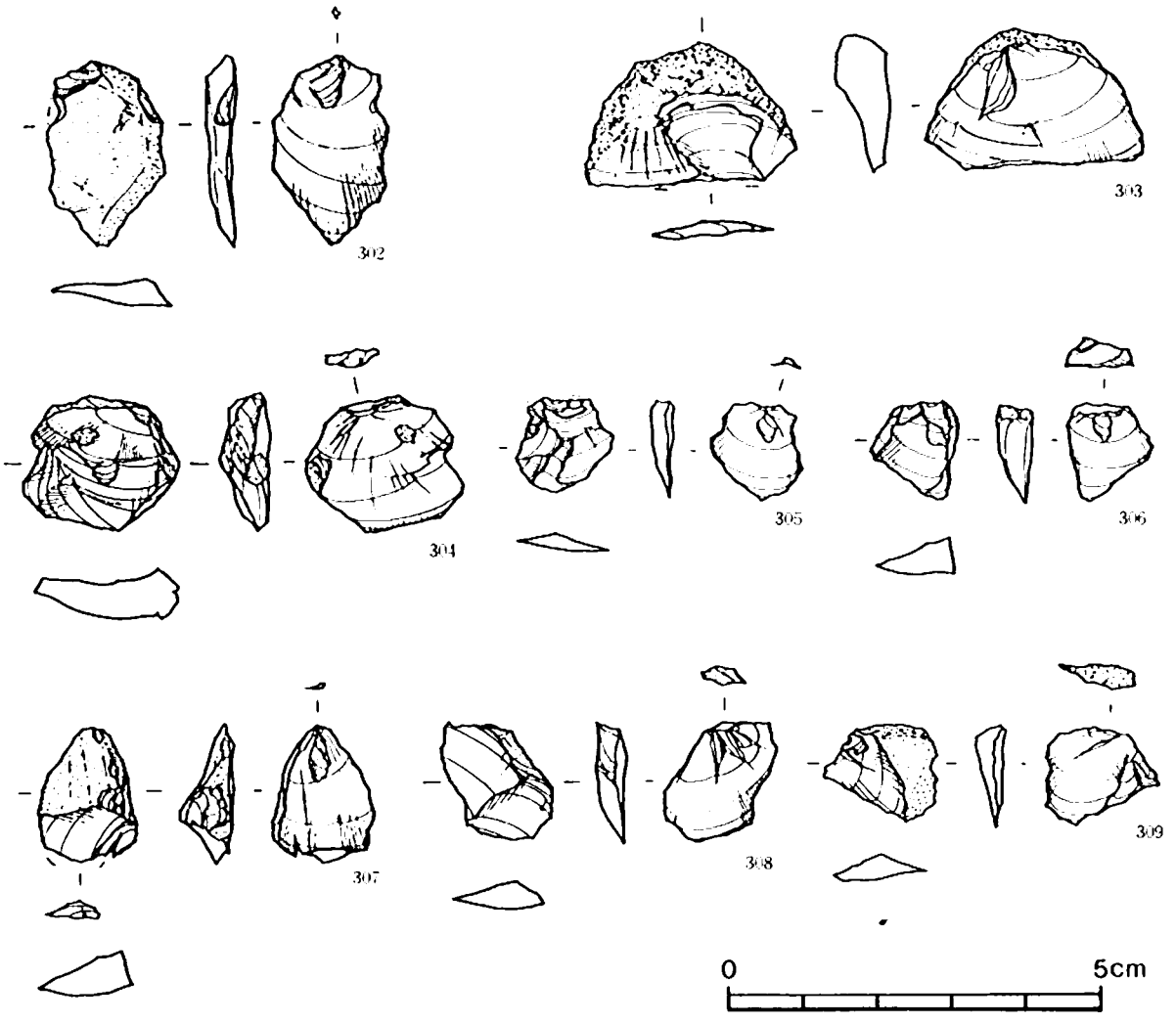
292～309はいずれも黒耀石を石材としており、細石核の調整剥片と考えられるものである。これらの中で、特に292～297は細石核と接合関係にある点やその形態などから、特定の性格を有しているものと判断される。292～295は細石核の打面再生剥片と考えられるものであり、293、294にはそれぞれ微細な剥離痕が観察される。また、292のような打面再生剥片からも283～286とは異なる素材の用い方の細石核が存在したことが窺え



第30図　細石核原形及び細石核素材



第31図　細石核調整剥片（1）



第32図　細石核調整剥片（2）

る。なお、接合資料5に示したように293と296は接合関係にある。

296は剥片の背面に細石刃の剥離作業面の一部を残しており、作業面の再生剥片（あるいは作業面更新剥片）として理解できるものであり、左側縁部に連続する微細な調整加工を行いスクレイパーに転用している。297は接合資料2のように細石核（283）と接合し、細石核の打面の作出に係わる剥片である。

298～300は縦長の細石核調整剥片で、いずれも微細な剥離痕が縁辺部に観察される。299および300はその形態から細石刃として理解してよいかもしれない。

301～309は横長あるいは寸詰まりの細石核調整剥片と考えられる資料である。このうち301にのみ微細な剥離痕が観察される。

（5）細石刃の剥離に関する接合資料（第33図～第35図）

接合資料1（第33図）

細石核の素材となり得る剥片3点（289～291）に楔形石器が接合する。黒耀石hを石材としているため、含まれる大粒の夾雑物によって不規則な剥離の仕方を示している。剥離の順番は、比較的大形の剥片（290、

291）を分割した後、剥片（289、310の素材など）が得られたものと考えられる。

接合資料２（第34図上）

細石核（283）と打面作出剥片（297）の接合である。この接合状態からすると、細石核の素材となった剥片は相当幅の広いものであったことがわかり、素材となった剥片の右側縁部を調整加工により打ち剥がしながら打面を作出し、楔形の細石核原形を準備し、更にこの石核原形の一端において細石刃の剥離作業が行われる、というように細石刃剥離に関する一連の作業進行が理解できうる資料である。

接合資料３（第34図下）

細石核（284）の一端に２点の細石刃（４、５）が接合する。細石核は稜調整若しくは石核調整が背面にまで及び、283の細石核とは異なった石核の準備を経ているが、素材の用い方は本石器群における他の細石核と共通する。

接合する細石刃は、いずれも背面に打面転移以前の細石刃剥離作業の痕跡を残しており、その接合状態は打面転移直後の細石刃剥離作業のあり方を示している。

また、細石核の剥離作業の移動は扁平・楔形の細石核の両端から中央へ向かっており、細石刃の剥離作業時における細石核の中央方向への移動は頻繁な打面調整と連動していたことをも示している。

接合資料４（第35図上）

細石核（285）の細石刃剥離作業面中央に頭部を欠損した細石刃（181）が接合する。細石刃は尾部が肥厚し、細石核の底部を取り去っている。この細石刃の剥離によって細石核は奥行きや作業面の長さが大きく減少し、細石核として用いることが出来なくなった結果、残核として廃棄されたものと考えられる。

接合資料２～４において、その素材の用い方などから283～286を同一形態の細石核として考えるとすれば、次のような段階差が模式的に理解できる。

細石核の素材の準備　→　細石核原形の準備と石核原形の端部からの細石刃の剥離［接合資料２］
（　→　打面転移・細石核端部からの細石刃の剥離［接合資料３］）
→　細石刃剥離の作業面中央への移動・廃棄［接合資料４］

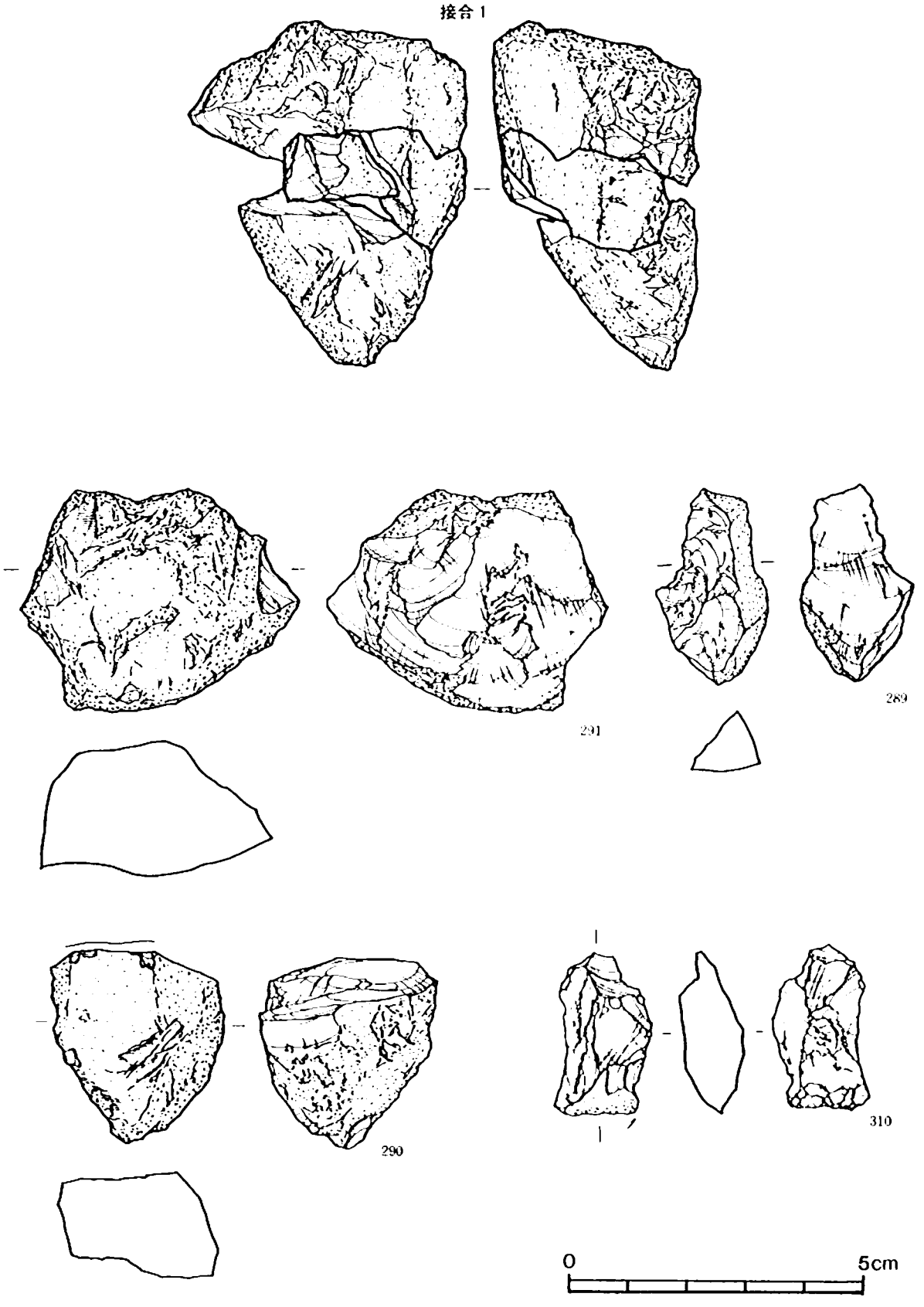
接合資料５（第35図中）

作業面再生剥片（296）と打面再生剥片（293）の接合である。この資料から、細石刃の剥離作業に90度方向の打面転移が行われていたことが理解できる。

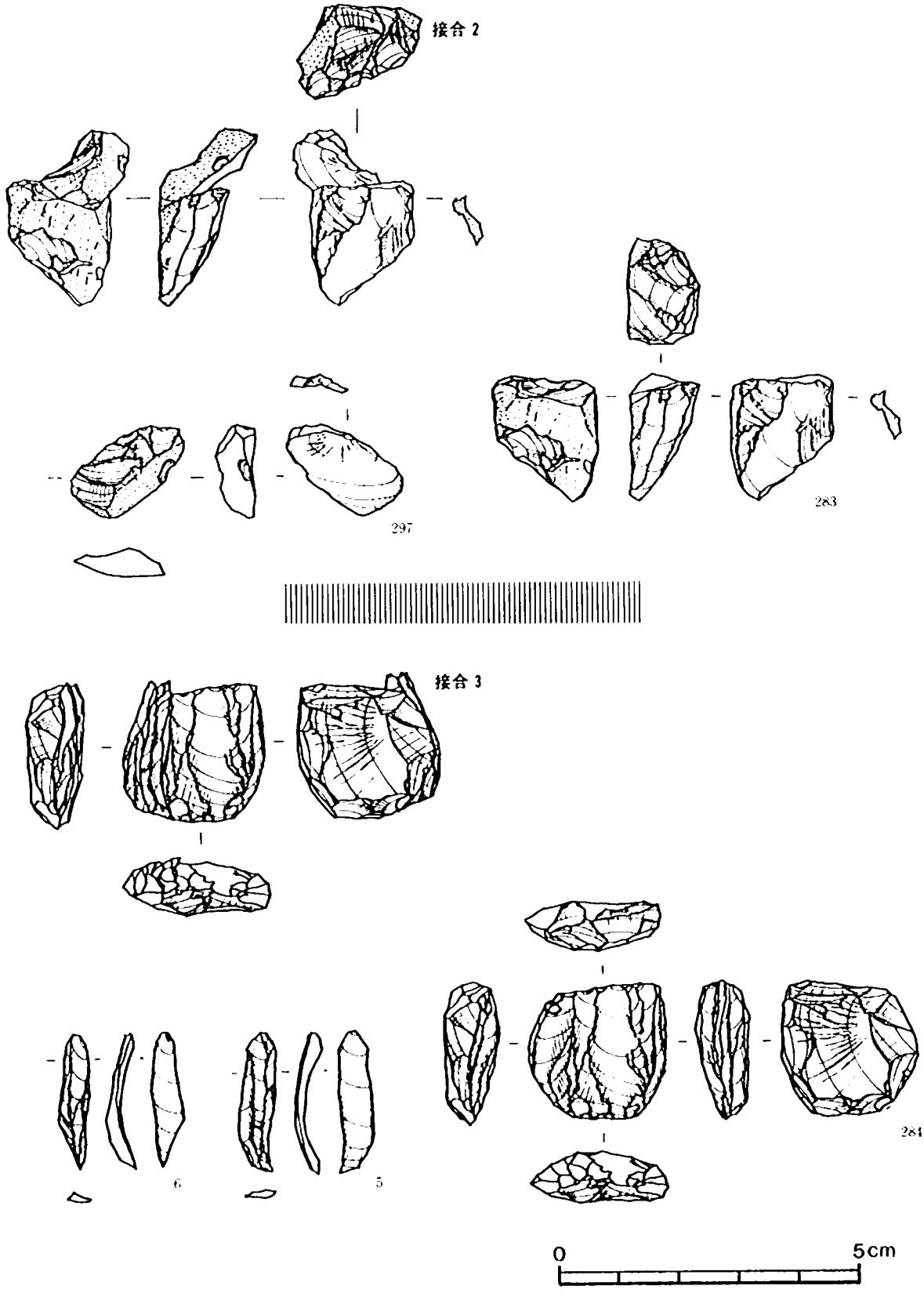
このように、本石器群の細石刃の剥離作業における細石核の打面のあり方には、単設打面、180度方向の打面転移を行った両設打面、90度方向の打面転移を行ったもの、とバラエティーに富む。

接合資料６（第35図下）

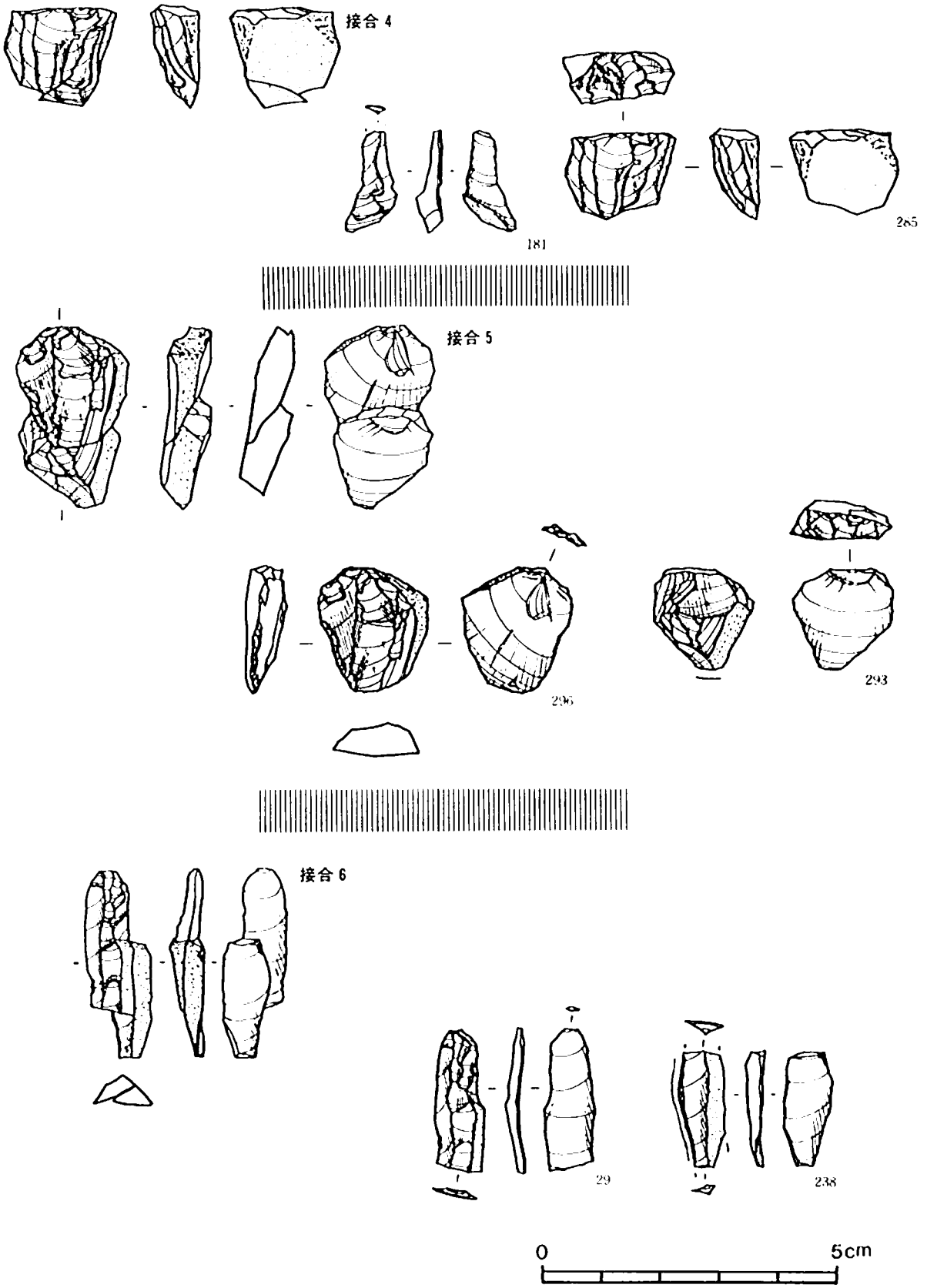
２点の細石刃（29，238）の接合である。接合状態の２点の細石刃の腹面（主要剥離面）の貝殻状裂痕（リング）の状況から、29が剥離された後、238が剥離されるまでに細石核の打面に調整が頻繁に行われ、石核の高さ（作業面長）が減少したことが窺える資料である。



第33図　接合資料 1



第34図　接合資料２・３



第35図　接合資料４・５・６

石刃計測表

番号	遺物No	所属	石材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備考
1	D9—85	1b	黒耀石a	完形	2.0	0.9	0.17	0.31		右表②／左裏①②	
2	F8—1	外	黒耀石b	完形	2.2	0.6	0.16	0.22		右裏③／③／③	
3	E8—90	1c	黒耀石b	完形	1.9	0.6	0.12	0.20			
4a	D9—7	1b	黒耀石a	頭部残	0.7	0.7	0.17	0.10		右裏①	
4b	E9—27	1b	黒耀石a	頭部欠損	2.0	0.7	0.17	0.32			
5	D9—27	1b	黒耀石b	完形	2.3	0.6	0.14	0.29			
6	D8—11	1b	黒耀石b	完形	2.2	0.5	0.13	0.20			接合3、尾部肥厚
7	E9—138	1b	黒耀石a	完形	2.3	0.9	0.19	0.30		左表①④／右裏①	接合3、尾部肥厚
8	E9—36	1b	黒耀石c	完形	1.5	0.6	0.12	0.12		右表①	
9	E9—26	1b	黒耀石a	完形	1.8	0.4	0.08	0.06		右裏②被熱	
10	E8—105	1c	黒耀石b	完形	1.5	0.6	0.10	0.14			
11	D8—116	1b	黒耀石b	完形	1.5	0.5	0.13	0.09			
12	E9—28	1b	黒耀石a	完形	1.6	0.4	0.09	0.08		左裏②	
13	E8—57	1c	黒耀石c	完形	1.3	0.5	0.08	0.11		右表①/右裏②/左裏②④	
14	E9—9	1b	黒色頁岩	完形	1.2	0.6	0.11	0.08			
15	E8—235	1c	黒耀石b	完形	1.1	0.6	0.12	0.07		左⑤	
16	D9—1	1b	黒耀石b	完形	1.1	0.3	0.09	0.02			
17	E9—43	1b	黒耀石b	完形	1.0	0.4	0.10	0.08			
18	E8—202	1c	黒耀石b	完形	0.8	0.4	0.08	0.02			
19	E9—7	1b	黒耀石a	完形	0.9	0.5	0.03	0.08			
20	E9—73	1b	黒耀石b	完形	1.1	0.8	0.19	0.14			
21	D9—269	1a	黒耀石a	完形	1.1	0.6	0.11	0.06		右裏②④	
22	E9—19	1b	黒耀石a	完形	0.9	0.5	0.06	0.03			
23	E8—123	1b	黒耀石b	完形	0.9	0.8	0.12	0.09			
24	E9—96	1b	黒耀石a	完形	0.7	0.7	0.04	0.02			
25a	I8—27	2	黒耀石d	頭部残	1.3	0.7	0.27	0.17	表		稜付
25b	H8—64	2	黒耀石d	中間部残	1.7	0.5	0.27	0.18	表／表		稜付
26	E7—24	1c	黒耀石a	尾部欠損	2.4	0.7	0.13	0.31	表	右裏③	
27	E7—3	1c	黒耀石d	尾部欠損	2.1	0.6	0.11	0.23	裏	右裏③	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
28	E9—55	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.6	0.9	0.13	0.15	破損		
29	D9—370	1a	黒耀石d	尾部欠損	2.5	0.9	0.22	0.59	左	左⑤	接合6
30	H8—17	2	黒耀石d	尾部欠損	2.5	0.8	0.14	0.30	裏	左⑤	
31	I9—7	2	黒耀石b	尾部欠損	2.4	0.6	0.14	0.18	裏	右裏①	
32	E7—10	1c	黒耀石b	尾部欠損	2.0	0.5	0.09	0.16	表		
33	E8—248	1c	黒耀石d	尾部欠損	1.8	0.7	0.16	0.20	表	右⑤／左表③	
34	E9—60	1b	黒耀石c	尾部欠損	1.7	0.6	0.16	0.20	表		
35	C9—18	1a	黒耀石d	尾部欠損	1.4	0.6	0.13	0.18	裏	左表①	
36	E8—225	1c	黒耀石d	尾部欠損	1.6	0.7	0.18	0.20	表		
37	E8—112	1c	黒耀石b	尾部欠損	1.6	0.6	0.10	0.09	表		
38	E8—224	1c	珪質頁岩	尾部欠損	1.9	0.5	0.14	0.14	表		
39	I8—17	2	黒耀石a	尾部欠損	1.9	0.5	0.11	0.15	裏	右裏②	
40	E9—140	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.5	0.5	0.09	0.07	右	左裏②④／右⑤	被熱
41	E9—51a	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.6	0.4	0.10	0.07	右	右⑤	
42	D9—262	1b	黒耀石d	尾部欠損	1.4	0.5	0.09	0.08	右	右⑤	
43	E7—2	1c	黒耀石a	尾部欠損	1.6	0.8	0.13	0.20	表		
44	E8—241	1c	珪質頁岩	尾部欠損	1.7	0.4	0.12	0.09	不明		
45	D9—222	1a	黒耀石d	尾部欠損	1.5	0.6	0.06	0.10	表	左表①④	
46	D8—77	1b	黒耀石b	尾部欠損	1.3	0.7	0.18	0.19	表	右裏①④	
47	E9—37	1b	黒耀石c	尾部欠損	1.3	0.8	0.15	0.11	不明	右裏①	
48	D9—385	1a	黒耀石d	尾部欠損	1.4	0.5	0.14	0.09	表	左表①	
49	E9—23	1b	黒耀石b	尾部欠損	1.5	0.6	0.17	0.11	表	右裏③	
50	H8—36	2	黒耀石c	尾部欠損	1.4	0.6	0.14	0.10	破損		
51	E8—231	1c	黒耀石e	尾部欠損	1.2	0.5	0.18	0.10	表	右裏①	
52	E9—119	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.2	0.4	0.11	0.08	左	左裏③	
53	E8—167	1c	黒耀石b	尾部欠損	1.3	0.5	0.13	0.08	表	右⑤	
54	E9—64	1b	黒耀石b	尾部欠損	1.4	0.5	0.13	0.09	表		
55	E8—139	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.2	0.5	0.14	0.09	破損	右裏①②	
56	E7—55	1c	黒耀石b	尾部欠損	0.9	0.5	0.08	0.04	表	左裏②④	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
57	E8—208	1c	黒曜石a	尾部欠損	0.7	0.3	0.05	0.02	表		
58	D9—25	1b	黒曜石b	尾部欠損	0.8	0.4	0.07	0.02	破損		
59	E8—73	1b	黒曜石b	尾部欠損	1.4	0.5	0.11	0.07	表	左裏②	
60	H8—22	2	黒曜石b	尾部欠損	1.5	0.4	0.10	0.08	破損	右裏②	
61	H8—128	2	黒曜石c	尾部欠損	1.3	0.6	0.12	0.11	表		
62	E8—143	1c	黒曜石a	尾部欠損	1.2	0.6	0.13	0.08	表	右⑤／左⑤	
63	D8—166	1c	黒曜石a	尾部欠損	1.7	0.7	0.13	0.16	裏	右裏③／左裏③	
64	E9—127	1b	黒曜石d	尾部欠損	1.4	0.6	0.12	0.10	表	左裏①④	
65	E8—242	1c	黒曜石c	尾部欠損	1.4	0.6	0.08	0.07	表	右裏③	
66	D9—125	1a	黒曜石d	尾部欠損	1.5	0.5	0.11	0.12	左	左裏①	
67	E9—91	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.3	0.5	0.09	0.07	表	左⑤	
68	E9—39	1b	黒曜石b	尾部欠損	1.4	0.5	0.13	0.15	表		
69	E9—15	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.2	0.7	0.13	0.13	表	右表③	
70	E7—6	1c	黒曜石a	尾部欠損	1.4	0.5	0.09	0.04	破損	左⑤／右⑤	
71	E8—197	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.3	0.5	0.09	0.09	表	右裏①	
72	D9—383	1a	黒曜石d	尾部欠損	1.4	0.4	0.09	0.06	表	左⑤／右⑤	
73	E8—103	1c	黒曜石e	尾部欠損	1.5	0.8	0.17	0.16	破損		
74	D9—166	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.2	0.5	0.10	0.08	裏	左⑤	
75	H8—6	2	黒曜石b	尾部欠損	1.0	0.4	0.05	0.04	裏	右⑤	
76	D8—39	1b	黒曜石b	尾部欠損	1.0	0.5	0.12	0.07	破損	左⑤	
77	H8—9	2	黒曜石a	尾部欠損	1.2	0.5	0.07	0.04	破損		
78	C9—40	1a	黒曜石d	尾部欠損	1.0	0.6	0.11	0.07	裏	右表①④	
79	E9—57	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.2	0.5	0.10	0.07	表		
80	D9—107	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.2	0.4	0.14	0.05	破損	右裏①②	稜付
81	E8—104	1c	珪質頁岩	尾部欠損	1.0	0.4	0.10	0.04	表		
82	E8—210	1c	黒曜石b	尾部欠損	1.2	0.4	0.09	0.09	表	左表①④	
83	E9—122	1b	黒曜石b	尾部欠損	1.3	0.4	0.07	0.05	破損		
84	E9—12	1b	黒曜石a	尾部欠損	1.3	0.7	0.10	0.11	表		
85	D9—161	1b	黒曜石c	尾部欠損	1.2	0.4	0.12	0.05	表		

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
86	E7−4	1c	黒耀石a	尾部欠損	1.2	0.5	0.15	0.09	表		
87	H8−12	2	黒耀石d	尾部欠損	1.0	0.5	0.08	0.03	表	左裏②④	
88	D9−84	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.0	0.6	0.07	0.01	破損		
89	E8−172	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.1	0.4	0.04	0.04	破損	右⑤	
90	E8−39	1b	黒耀石b	尾部欠損	1.0	0.6	0.13	0.08	表		
91	E8−69	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.4	0.5	0.11	0.07	表	左裏②	
92	H8−82	2	黒耀石b	尾部欠損	1.3	0.7	0.19	0.15	表		
93	D9−156	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.1	0.6	0.11	0.07	破損		
94	E9−94	1b	黒耀石b	尾部欠損	0.9	0.5	0.11	0.03	破損	右裏③	
95	I9−2	2	黒耀石a	尾部欠損	1.0	0.5	0.09	0.04	表	左⑤	
96	H8−74	2	黒耀石b	尾部欠損	1.0	0.4	0.09	0.04	破損		
97	H8−85	2	黒耀石d	尾部欠損	0.7	0.4	0.07	0.01	破損		
98	E7−42	1c	黒耀石a	尾部欠損	1.0	0.5	0.11	0.04	破損	右⑤	
99	E9−29	1b	黒耀石c	尾部欠損	1.1	0.6	0.12	0.07	破損		
100	E8−245	1c	黒耀石a	尾部欠損	0.7	0.5	0.14	0.07	裏		
101	D8−138	1b	黒耀石a	尾部欠損	1.0	0.6	0.17	0.09	破損		
102	H8−40	2	黒耀石c	尾部欠損	0.7	0.4	0.11	0.02	不明		
103	I8−34	2	黒耀石b	尾部欠損	0.7	0.5	0.11	0.03	破損		
104	E7−56	1c	黒耀石d	下半部欠	1.5	0.7	0.14	0.18	裏	右裏①	
105	C9−14	1a	黒耀石e	下半部欠	1.4	0.8	0.17	0.21	裏	左⑤／右表③	
106	D8−141	1b	黒耀石a	下半部欠	1.3	0.8	0.13	0.21	破損		
107	C9−26	1a	黒耀石f	下半部欠	1.0	0.7	0.23	0.16	表	右表①	
108	D8−140	1b	黒耀石d	下半部欠	1.0	0.5	0.13	0.09	裏	左裏①②④	
109	H9−17	2	黒耀石a	下半部欠	1.1	0.7	0.12	0.10	表	右表①	
110	E8−136	1b	黒耀石a	下半部欠	1.1	0.5	0.10	0.06	破損	左表①／右表①／右裏①	
111	C8−1	1a	黒耀石a	下半部欠	1.1	0.6	0.09	0.07	表		
112	E9−98	1b	黒耀石a	下半部欠	1.0	0.6	0.14	0.11	裏	右表③	
113	E8−91	1c	黒耀石c	下半部欠	1.0	0.5	0.11	0.07	表	左裏②④	
114	E8−106	1c	黒耀石c	下半部欠	1.0	0.3	0.10	0.03	裏		

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
115	E8—243	1c	黒耀石c	下半部欠	1.0	0.6	0.09	0.04	右		
116	E8—42	1b	黒耀石d	下半部欠	1.1	0.5	0.14	0.08	表		
117	I8—20	2	黒耀石a	下半部欠	0.9	0.5	0.08	0.04	表		
118	D9—58	1b	黒耀石a	下半部欠	1.0	0.6	0.10	0.06	表		
119	H8—31	2	黒耀石b	下半部欠	0.8	0.5	0.09	0.04	破損		
120	E7—22	1c	黒耀石f	下半部欠	0.8	0.4	0.15	0.02	表		
121	E7—31	1c	黒耀石c	下半部欠	0.9	0.4	0.09	0.02	左	右表②	
122	E8—99	1c	黒耀石a	下半部欠	0.8	0.3	0.05	0.03	裏		
123	E8—1	1b	黒耀石a	下半部欠	0.9	0.4	0.09	0.04	表	左⑤	
124	D9—111	1a	黒耀石f	下半部欠	1.1	0.4	0.10	0.06	表		
125	E8—265	1c	黒耀石a	下半部欠	0.9	0.6	0.12	0.09	破損	左表②	
126	D9—2	1b	黒耀石b	下半部欠	1.0	0.3	0.09	0.02	裏		
127	E8—238	1c	黒耀石c	下半部欠	0.9	0.6	0.10	0.06	破損		
128	D8—90	1b	黒耀石d	下半部欠	0.8	0.5	0.12	0.06	裏		
129	H8—69	2	黒耀石d	下半部欠	0.6	0.4	0.14	0.06	表	左表②	
130	D9—375	1a	黒耀石a	下半部欠	0.8	0.6	0.11	0.07	表	右表①④	
131	D9—152	1a	黒耀石e	下半部欠	0.7	0.4	0.05	0.03	裏		被熱
132	H8—43	2	黒耀石f	下半部欠	0.7	0.5	0.11	0.05	表	左表①／右裏③	
133	D9—120	1a	黒耀石f	下半部欠	1.2	0.8	0.20	0.18	裏	左表③	
134	D9—151	1a	黒耀石f	頭部残	0.4	0.7	0.12	0.03	裏		
135	H8—92	2	黒耀石e	頭部残	0.4	0.7	0.08	0.03	表		
136	H8—5	2	黒耀石a	頭部残	0.5	0.5	0.06	0.03	裏		
137	I9—15	2	黒耀石a	頭部残	0.6	0.6	0.11	0.04	右		
138	E8—94	1c	黒耀石c	頭部残	0.5	0.6	0.06	0.04	破損		
139	D9—26	1b	黒耀石a	頭部残	0.4	0.4	0.07	0.04	表		
140	E8—86	1c	黒耀石a	頭部残	0.4	0.5	0.13	0.01	表		
141	I8—18	2	黒耀石a	頭部残	0.6	0.4	0.11	0.15	不明		
142	I8—15	2	黒耀石a	頭部残	0.4	0.4	0.03	0.02	裏		
143	D8—167	1c	黒耀石d	頭部残	0.5	0.4	0.10	0.01	表		

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
144	E8−32	1c	黒曜石a	頭 部 残	0.7	0.4	0.11	0.02	表	左表①	
145	D9−13	1b	黒曜石b	頭 部 残	0.5	0.5	0.09	0.02	表		
146	E8−60	1c	黒曜石a	頭 部 残	0.7	0.8	0.04	0.03	右	左表①	
147	E8−111	1c	黒曜石a	頭 部 残	0.7	0.7	0.07	0.04	表		
148	I9−33	2	黒曜石c	頭 部 残	0.5	0.6	0.11	0.04	裏		
149	H9−12	2	黒曜石d	頭 部 残	0.7	0.8	0.12	0.08	裏	左表①／右裏①	
150	H8−101	2	黒曜石d	頭 部 残	0.6	0.8	0.12	0.09	表		被熱
151	E8−19a	1b	黒曜石a	頭 部 残	0.9	0.8	0.14	0.13	破損		
152	D9−43	1b	黒曜石a	頭 部 残	0.7	0.7	0.10	0.05	表	右表①	
153	D8−10	1b	黒曜石a	頭 部 残	0.9	0.8	0.14	0.10	表		
154	D9−379	1a	黒曜石d	頭 部 残	0.8	0.9	0.09	0.07	裏		
155	E9−31	1b	黒曜石c	頭 部 残	0.8	0.8	0.13	0.08	表		
156	D9−289	1b	黒曜石a	頭部欠損	1.8	0.6	0.15	0.08	破損		肥厚
157	E8−165	1c	黒曜石c	頭部欠損	1.7	0.5	0.12	0.13	裏	左⑤	
158	D9−228	1a	黒曜石a	頭部欠損	1.5	0.5	0.10	0.10	表	左表①④／右⑤	
159	E8−189	1b	黒曜石a	頭部欠損	1.4	0.5	0.07	0.08	右		
160	E8−185	1b	黒曜石b	頭部欠損	1.5	0.6	0.18	0.15	表	左表①/右表①②④/右裏②	
161	I8−30	2	黒曜石d	頭部欠損	1.8	0.6	0.23	0.32	破損	左表①／尾部末端裏①	稜付，被熱
162	E7−20	1c	黒曜石b	頭部欠損	1.2	0.7	0.13	0.11	破損	左⑤／右表③	
163	E8−133	1b	黒曜石a	頭部欠損	0.9	0.5	0.10	0.05	表	左⑤	
164	E9−5	1a	黒曜石a	頭部欠損	1.1	0.3	0.07	0.04	表		
165	E9−97	1b	黒曜石b	頭部欠損	0.8	0.2	0.04	0.01	不明		
166	I8−14	2	黒曜石a	頭部欠損	0.6	0.4	0.04	0.01	破損		
167	E8−6	1b	黒曜石b	頭部欠損	2.7	1.1	0.19	0.74	破損		肥厚
168	C9−13	1a	黒曜石d	頭部欠損	1.8	0.9	0.29	0.58	破損		肥厚
169	E7−9	1c	黒曜石c	頭部欠損	2.3	0.4	0.15	0.09	左		尾部に稜
170	D9−121	1a	黒曜石e	頭部欠損	1.9	0.8	0.12	0.38	裏		肥厚
171	E9−135	1b	黒曜石a	頭部欠損	1.5	0.6	0.12	0.24	裏	右表②	
172	H8−34	2	黒曜石a	頭部欠損	1.6	0.9	0.13	0.18	表		

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
173	E7—26	1c	黒耀石c	頭部欠損	2.4	0.7	0.13	0.43	表		
174	D9—223	1a	黒耀石c	頭部欠損	1.2	0.7	0.20	0.20	破損	左表①④、②／右裏②	石核調整剥片か
175	D9—377	1a	黒耀石e	頭部欠損	1.8	0.7	0.14	0.23	裏	右表①	
176	E9—51b	1b	黒耀石a	頭部欠損	1.4	0.4	0.12	0.07	表		
177	D8—40	1b	黒耀石a	頭部欠損	1.7	0.8	0.14	0.25	表	左表②④	肥厚
178	I9—1	2	黒安山岩	頭部欠損	1.4	0.7	0.20	0.31	表	左表①	
179	D9—164	1b	黒耀石a	頭部欠損	1.5	0.6	0.11	0.07	表	左裏③	
180	E8—70	1b	黒耀石a	頭部欠損	1.4	0.4	0.15	0.12	裏		
181	D9—317	1b	黒耀石c	頭部欠損	1.8	0.9	0.11	0.25	裏		接合4、肥厚
182	E8—107	1c	黒耀石b	頭部欠損	1.1	0.6	0.10	0.09	裏		
183	D9—234	1a	黒耀石d	上半部欠	1.4	0.8	0.21	0.24	表		
184	I9—16	2	黒耀石c	上半部欠	1.2	0.5	0.13	0.09	破損		
185	E8—221	1c	黒耀石a	上半部欠	1.0	0.6	0.15	0.09	表		
186	D9—14	1b	黒耀石a	上半部欠	0.8	0.5	0.09	0.02	表	右表③	
187	E8—95	1c	黒耀石d	上半部欠	0.9	0.5	0.11	0.04	表		
188	E9—42	1b	黒耀石c	上半部欠	0.9	0.3	0.10	0.04	表		
189	D8—120	1c	黒耀石b	上半部欠	0.9	0.4	0.05	0.03	表	右⑤	
190	H8—96	2	黒耀石a	上半部欠	1.0	0.4	0.07	0.01	裏	右⑤	
191	D9—215	1a	黒耀石e	上半部欠	1.0	0.5	0.09	0.05	表		
192	E8—84	1c	黒耀石a	上半部欠	0.9	0.3	0.08	0.03	表	左表③／右裏②	
193	D9—88	1b	黒耀石a	上半部欠	0.7	0.4	0.05	0.02	表		
194	H8—37	2	黒耀石a	上半部欠	0.7	0.3	0.08	0.02	右		
195	E8—38	1b	黒耀石a	上半部欠	0.6	0.3	0.03	0.01	破損		
196	E8—82	1c	黒耀石a	尾 部 残	0.7	0.7	0.12	0.06	破損		
197	E8—141	1c	黒耀石a	尾 部 残	0.8	0.6	0.14	0.06	表		
198	E8—226	1c	黒耀石d	尾 部 残	0.6	0.5	0.10	0.02	破損		
199	E9—89	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.8	0.7	0.19	0.11	表		肥厚
200	D9—384	1a	黒耀石a	尾 部 残	1.1	0.8	0.21	0.22	表	左表①	肥厚
201	D9—302	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.9	0.8	0.05	0.05	破損		

番号	遺物No.	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
202	D9−298	1b	黒耀石a	尾 部 残	1.0	0.8	0.07	0.08	裏		
203	D9−328	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.9	0.8	0.24	0.26	裏		
204	E8−19b	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.7	0.5	0.11	0.04	破損		
205	D9−49	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.7	0.4	0.06	0.03	表	左⑤／右表①	
206	D8−74	1b	黒耀石d	尾 部 残	0.8	0.4	0.10	0.02	表		
207	D8−172	1c	黒耀石d	尾 部 残	0.8	0.5	0.09	0.02	表		
208	D9−90	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.7	0.5	0.15	0.03	裏		
209	E8−2	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.7	0.4	0.10	0.02	表	右裏③	
210	E8−18	1c	黒耀石d	尾 部 残	0.6	0.4	0.07	0.02	表		
211	E9−67	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.5	0.3	0.03	0.01	表		
212	E9−82	1b	黒耀石b	尾 部 残	0.6	0.7	0.16	0.05	表		
213	D9−301	1b	黒耀石c	尾 部 残	0.7	0.4	0.10	0.05	破損		
214	D9−292	1b	黒耀石a	尾 部 残	0.8	0.5	0.11	0.03	表		
215	E9−16	1b	黒耀石b	尾 部 残	0.4	0.7	0.04	0.02	右		
216	E9−75	1b	黒耀石d	中間部残	0.7	0.4	0.09	0.04	表／表		
217	D8−118	1b	黒耀石b	中間部残	0.8	0.4	0.07	0.02	破損／破損		
218	E8−264	1c	黒耀石a	中間部残	0.6	0.5	0.09	0.04	破損／表		
219	H8−8	2	黒耀石a	中間部残	0.5	0.5	0.04	0.02	表／表		
220	D8−4	1b	黒耀石a	中間部残	0.4	0.3	0.04	0.01	表／表	右裏③	
221	D9−157	1b	黒耀石b	中間部残	0.8	0.4	0.08	0.03	破損／破損		
222	E8−3	1b	黒耀石c	中間部残	0.5	0.3	0.05	0.01	裏／不明		
223	D9−122	1a	黒耀石d	中間部残	0.6	0.4	0.06	0.02	不明／不明		
224	H8−11	2	黒耀石a	中間部残	0.3	0.5	0.09	0.01	表／裏		
225	D9−322	1b	黒耀石a	中間部残	0.8	0.7	0.04	0.02	裏／表		
226	E8−163	1c	黒耀石a	中間部残	0.9	0.4	0.19	0.07	裏／裏		
227	C9−48	1a	黒耀石d	中間部残	0.7	0.6	0.11	0.05	表／裏		
228	E9−81	1b	黒耀石a	中間部残	1.0	0.6	0.18	0.11	表／左		尾部付近肥厚
229	D9−69	1b	黒耀石c	中間部残	0.9	0.7	0.13	0.11	表／破損		被熱
230	D9−29	1b	黒耀石a	中間部残	1.0	0.7	0.25	0.14	破損／破損	左表②	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
231	H8—4	2	黒耀石a	中間部残	0.8	0.7	0.11	0.06	表／表		
232	D9—324	1a	黒耀石f	中間部残	2.3	0.6	0.14	0.29	表／表		
233	E9—131	1b	黒耀石c	中間部残	0.9	0.8	0.16	0.16	左／裏	右表①	
234	D9—146	1b	黒耀石f	中間部残	0.7	0.9	0.26	0.17	表／表		
235	D9—32	1b	黒耀石c	中間部残	1.0	1.0	0.14	0.12	表／裏	右⑤	
236	C9—24	1a	黒耀石f	中間部残	0.9	0.9	0.09	0.03	裏／表		
237	H8—25	2	黒安山岩	中間部残	0.7	1.0	0.20	0.14	表／表		
238	C9—41	1a	黒耀石d	中間部残	2.0	0.8	0.27	0.49	表／表	右表①④	接合6
239	D8—29	1b	黒耀石d	中間部残	1.5	0.7	0.16	0.19	表／表	左⑤	
240	D8—16	1b	黒耀石e	中間部残	1.5	0.7	0.07	0.10	表／裏		
241	C9—50	1a	黒耀石a	中間部残	1.2	0.8	0.26	0.26	球顆／左	右表③	
242	D9—68	1b	黒耀石b	中間部残	1.2	0.7	0.21	0.19	裏／表	右裏③	
243	D9—372	1b	黒耀石a	中間部残	1.5	0.9	0.14	0.16	破損／右		
244	E7—17	1c	黒耀石a	中間部残	1.2	0.9	0.10	0.16	表／表		
245	H8—35	2	黒耀石d	中間部残	1.4	0.5	0.14	0.10	表／裏	左表①③④	
246	D9—250	1a	黒耀石c	中間部残	1.4	0.5	0.07	0.05	表／表		
247	D9—285	1b	黒耀石d	中間部残	1.2	0.4	0.14	0.04	表／表	右裏③	
248	D8—103	1c	黒耀石a	中間部残	1.0	0.5	0.12	0.08	表／表		
249	E8—183	1b	黒耀石e	中間部残	1.1	0.6	0.12	0.07	表／裏		
250	E8—78	1b	黒耀石a	中間部残	1.5	0.6	0.15	0.16	表／表	右裏①	
251	D9—159	1b	黒耀石b	中間部残	1.5	0.7	0.12	0.24	破損／破損		
252	E9—74	1b	黒耀石b	中間部残	1.5	0.5	0.07	0.11	表／表	右表①	
253	E8—101	1c	黒耀石c	中間部残	1.8	0.5	0.13	0.13	表／表		
254	E9—118	1b	黒耀石a	中間部残	1.8	0.4	0.14	0.10	表／表	左表③／右表③	
255	D8—43	1b	黒耀石g	中間部残	1.5	0.5	0.10	0.09	表／表		
256	C9—38	1a	黒耀石b	中間部残	1.5	0.5	0.08	0.08	表／破損		
257	E8—213	1c	黒耀石b	中間部残	1.5	0.5	0.07	0.07	破損／左	右表①	
258	I9—35	2	黒耀石b	中間部残	1.3	0.5	0.13	0.11	裏／表		
259	E8—222	1c	黒耀石a	中間部残	1.1	0.3	0.13	0.02	裏／破損	右表③	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	欠損方向	剥離痕の位置と状態	備　　考
260	E9--54	1b	黒耀石a	中間部残	1.0	0.4	0.17	0.08	表／表		
261	H8—76	2	黒耀石a	中間部残	0.6	0.5	0.10	0.04	右／破損		
262	E8—45	1b	黒耀石b	中間部残	1.0	0.5	0.13	0.06	裏／表	右表②	
263	E8—215	1c	黒耀石b	中間部残	1.0	0.6	0.14	0.09	破損／表	左裏②	
264	E8--262	1c	黒耀石f	中間部残	0.9	0.7	0.13	0.08	表／表		
265	D8--64	1b	黒耀石d	中間部残	1.0	0.5	0.11	0.05	裏／裏		
266	E8—88	1c	黒耀石a	中間部残	0.8	0.5	0.10	0.06	表／表	左表②	
267	E7--59	1c	黒耀石c	中間部残	1.0	0.4	0.09	0.05	表／表		
268	H8—94	2	黒耀石d	中間部残	1.0	0.3	0.10	0.03	表／破損		
269	H8—75	2	黒耀石a	中間部残	0.6	0.5	0.10	0.04	表／表		
270	D9—249	1a	黒耀石d	中間部残	0.6	0.4	0.06	0.01	表／破損		
271	D9—3	1b	黒耀石a	中間部残	0.8	0.8	0.06	0.04	右／表		
272	C9—7	1a	黒耀石d	中間部残	0.8	0.3	0.05	0.01	裏／表		
273	E8--211	1c	黒耀石d	中間部残	0.8	0.4	0.14	0.05	破損／左		
274	D8—97	1c	黒耀石b	中間部残	0.7	0.4	0.08	0.03	裏／表	右⑤／左裏②	
275	E9—14	1b	黒耀石a	中間部残	1.1	0.4	0.10	0.04	表／表	左裏①⑤	
276	E8—66	1c	黒耀石a	中間部残	0.9	0.5	0.11	0.07	表／表	右裏③	
277	D9—12	1b	黒耀石c	中間部残	0.8	0.6	0.10	0.06	表／表	左⑤／右⑤	
278	E7--16	1c	黒耀石a	中間部残	0.9	0.4	0.07	0.02	表／表		
279	E6--1	外	黒耀石e	中間部残	0.7	0.4	0.10	0.03	表／表		
280	D9—239	1a	黒耀石e	中間部残	0.6	0.5	0.16	0.03	表／表		
281	E9—40	1b	黒耀石a	中間部残	0.8	0.3	0.06	0.01	表／表	左表③／右表③	
282	I9—5	2	黒耀石a	中間部残	1.0	0.3	0.05	0.01	表／破損	右裏①	

剥石核計測表

番号	遺物No	所属	石　材	長さ	幅	打面奥行	重量	打面	打面の状態	素　　材	備　　考
283	D9—150	1b	黒耀石e	2.1	1.0	1.6	3.7	単設	複剥離	剥片	接合2
284	E9—100	1b	黒耀石b	2.2	2.3	0.9／0.5	4.3	両設	複剥離／複剥離	剥片	接合3
285	C9—35	1a	黒耀石c	1.6	1.9	0.8	2.3	単設	複剥離	剥片カ	接合4

番号	遺物No	所属	石　材	長さ	幅	打面奥行	重量	打面	打面の状態	素　　材	備　　考
286	D9—37	1b	黒耀石d	1.5	0.9	1.0／0.4	1.0	両設	複剥離／複剥離	剥片	
287	H8—15	2	黒安山岩	2.6	1.4	2.1	15.7	単設	単剥離	両面調整石器カ	

扫石核原形計測表

番号	遺物No	所属	石　材	長さ	幅	打面奥行	重量	打面の状態	素　　材	備　　考
288	D8—51	1b	黒耀石a	1.7	1.9	3.4	11.5	素材剥片の主要剥離面	剥片	側面および頭部調整加工

細石核調整剥片類計測表

番号	遺物No	所属	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
289	E7—1	1c	黒耀石h	1.0	2.9	3.2	6.5	接合1，細石核用素材カ
290	D9—35	1a	黒耀石h	2.4	3.0	2.6	17.9	接合1，細石核用素材カ
291	D9—64	1a	黒耀石h	4.3	4.7	1.8	37.4	接合1，細石核用素材カ
292	D9—32	1b	黒耀石c	2.6	1.8	1.0	5.4	打面再生剥片，複剥離打面
293	D9—227	1a	黒耀石f	1.7	1.7	0.6	1.7	接合5，打面再生剥片，複剥離打面，尾部末端に微細な剥離痕有り
294	D8—37	1c	黒耀石a	2.8	2.2	0.5	1.2	打面再生剥片，複剥離打面，両側縁部に微細な剥離痕有り
295	C9—2	1a	黒耀石f	2.2	2.7	1.2	2.1	打面再生剥片，複剥離打面
296	D9—369	1a	黒耀石f	2.1	1.8	0.5	2.3	接合5，作業面再生剥片，右側縁部に加工を施しスクレイパーに転用
297	C9—11	1a	黒耀石c	1.4	2.0	0.6	1.2	接合2，打面作出剥片
298	D9—110	1a	黒耀石f	2.7	1.5	0.9	3.0	使用痕を有する剥片，右側縁部に微細な剥離痕有り
299	D9—109	1b	黒耀石d	2.0	0.9	0.4	0.7	使用痕を有する剥片，尾部に微細な剥離痕有り
300	D9—149	1a	黒耀石f	1.8	1.0	0.5	0.9	使用痕を有する剥片，右側縁部に微細な剥離痕有り
301	I8—26	2	黒耀石d	2.1	1.7	0.6	1.0	使用痕を有する剥片，右側縁部に微細な剥離痕有り
302	H8—124	2	黒耀石b	2.5	1.6	1.4	1.3	
303	D8—33	1c	黒耀石b	1.9	2.8	0.4	3.3	尾部欠損
304	D9—15	1a	黒耀石d	1.8	2.1	0.3	1.9	
305	E9—80	1b	黒耀石b	1.3	1.3	0.2	0.4	
306	E7—23	1c	黒耀石f	1.4	1.2	0.1	0.6	被熱
307	H9—8	2	黒耀石f	1.7	1.4	0.6	1.0	尾部欠損
308	E8—240	1c	黒耀石b	1.5	1.7	0.3	0.7	
309	D8—146	1c	黒耀石d	1.3	1.5	0.2	0.5	
310	C9—20	1a	黒耀石h	2.8	1.7	1.1	3.8	接合1、楔形石器

2．その他の遺物

（1）ナイフ形石器（第36図311）

第2ブロックより、黒い縞が多少ある不透明で良質の黒耀石を用いたナイフ形石器が出土した。先端及び基部を欠損するが、素材は縦長剥片を用いており、両側縁に調整加工を施している。これらの在り方は、正面の右側側縁上部先端を作出するための調整加工、あるいは側刃縁から基部への調整が顕著であり、背縁の基部側の調整は微細なものである。このような調整加工により、石器の形状が三角形に近く整形されたものと考えられる。刃部の裏面には、上記の調整加工とは違い、使用によるものと考えられる平坦な剥離痕が顕著に観察される。

（2）スクレイパー（第36～40図）

スクレイパーは本石器群における中形石器の代表で18点と多くの資料があり、ホルンフェルス1点以外はその石材に黒色安山岩を用いている。これらのうちには、剥片の端部に急峻な刃部を作出した「掻器」と捉えることが可能なもの（312、313）や、剥片の側縁に連続した調整加工が施される「削器」と捉えられるもの（296、317、318など）がある。しかし、それらの刃部の角度にはあまり差が無く、この分類に含まれないものも多いため、これら全体をスクレイパーと総称し分類した。

312～315は比較的急角度の調整加工が施され、凸刃の刃部を有するものである。縦長剥片を用い、その端部に弧状の刃部を作出した典型的な掻器ではないが、これらには掻器的な機能を想定することが可能であろう。特に312などは、素材の用い方、刃部の形状などからして、掻器として捉えうるものであろう。

316は急角度の調整加工により、尖った刃部を形成するものである。素材となる剥片の形状を大きく変えるように調整加工が施されており、その際に作出された調整剥片が左側縁部に接合することが認められている。

296、317～319は、剥片の側縁に連続した調整加工を施したものである。これらには黒耀石で細石核の作業面更新剥片を再利用した小形のもの（296）、中形のもの（318）、大形のもの（317）、刃部が複数で小形のもの（319）がある。

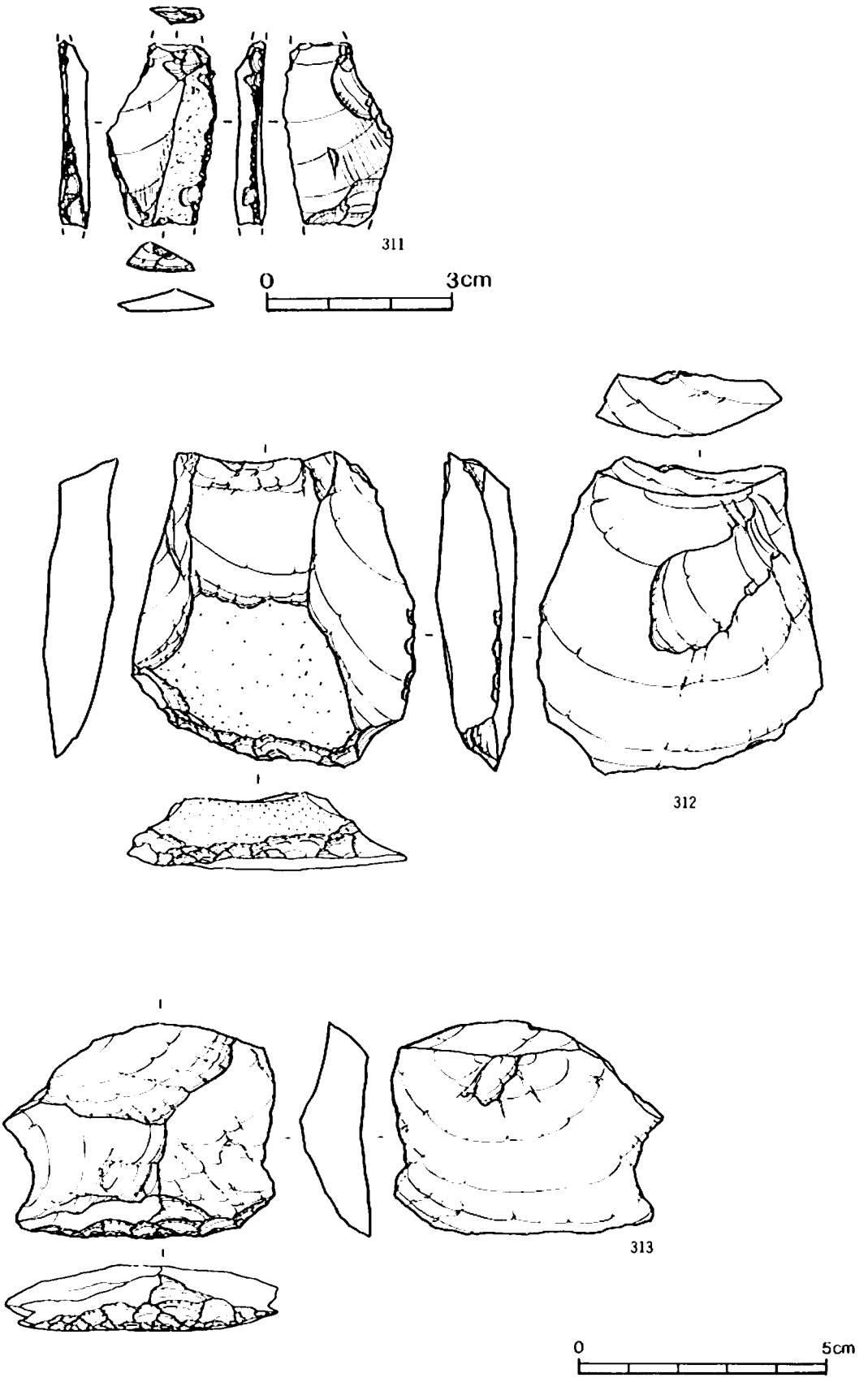
320～322は、数回の比較的大きな剥離によって刃部を作出したものである。これらのうち320と322は厚みのある素材であるため、調整加工の剥離が大きくなったと考えられる。石核として考えることができるかもしれないが、剥離された剥片を石器の素材として用いたと考えるにはその剥離面が小さく、またそうした剥片を用いた石器が本石器群には見当たらないため、スクレイパーの一種としておきたい。また321は、ランダムではあるが調整加工の在り方は、前記の剥片の一側縁に連続して調整加工の施されたスクレイパーに近いものかもしれない。

323、324はランダムなあるいは微細な調整加工を施したものである。323は剥片の側縁の一部に多少連続して調整加工が施されている。324は、板状の石核（残核）を用い微細なやや連続した調整加工を施しているため、あるいは前記の剥片の一側縁に連続した調整加工を施すスクレイパーに近いものかもしれない。

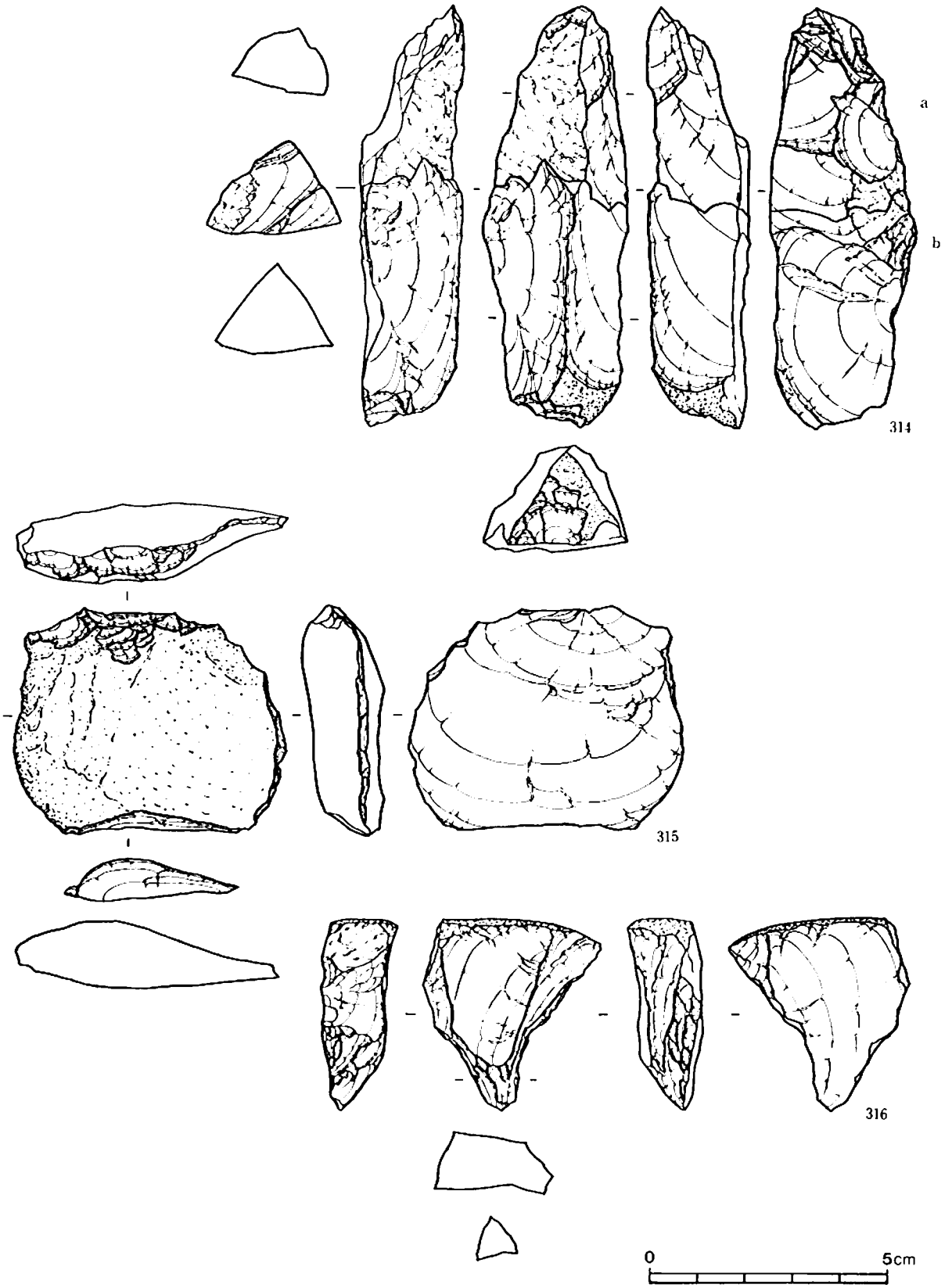
325～328は、一部に連続した調整加工が観察され、スクレイパーの欠損したものと考えられる。325は粗く鋸歯状に調整加工が施されている。また、329は先端が尖るように調整加工が施されている。

（3）楔形石器（第41図310、330、331）

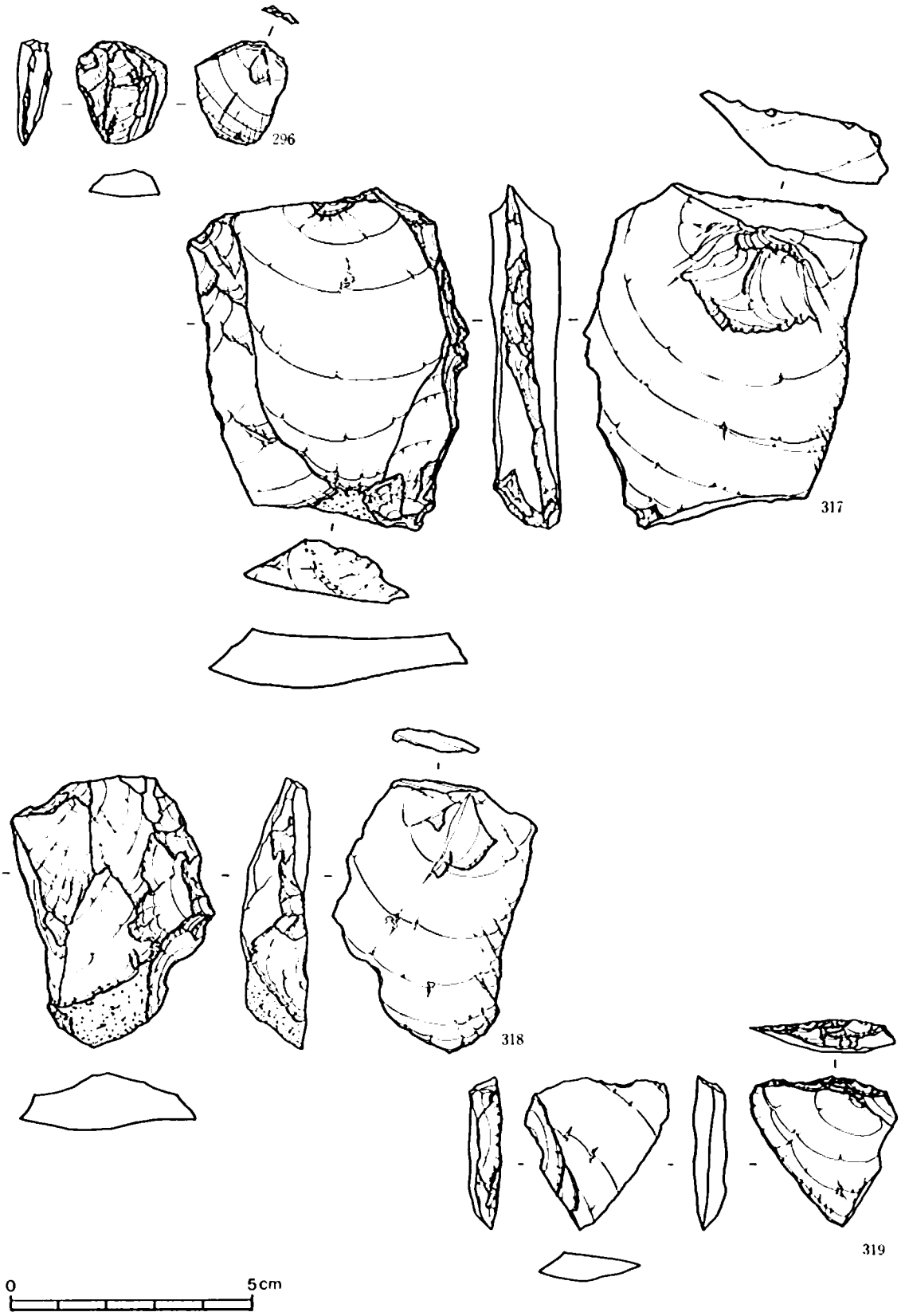
本遺跡出土の楔形石器は、黒耀石2点とチャート1点の計3点で、比較的緻密な石材を用いている。310は



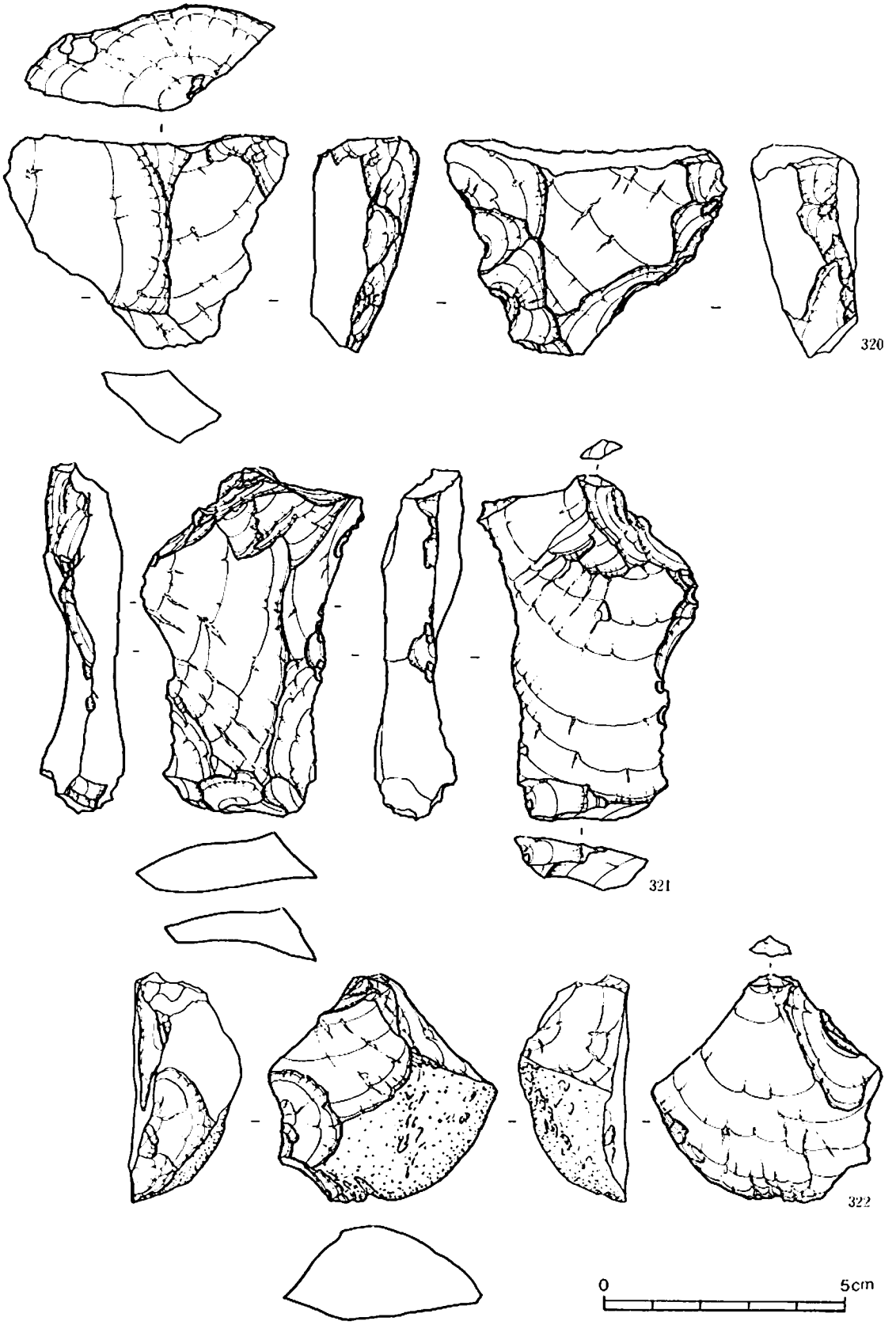
第36図　ナイフ形石器・スクレイパー（1）



第37図　スクレイパー（2）



第38図　スクレイパー（3）



第39図　スクレイパー（4）

第40図　スクレイパー（5）

前述の接合資料１に含まれるものであり、細石核の素材を得る工程で生じた剥片を素材としている。また、330は接合資料ではないものの黒耀石ｆに分類され得るものであり、310と同様な過程で生じた剥片を素材としている可能性が強い。331は青黒色の比較的緻密質なチャートの剥片を用いており、本石器群にはチャートを用いた細石刃が存在しないことから、この１点に関しては細石刃製作工程には関係しないものと考えられる。

（４）二次加工痕を有する剥片（第41図）

加工痕を有するが連続した調整加工ではなく、その意味が不明であるものを二次加工痕を有する剥片とした。

332は、横長剥片の周縁に連続したものではないが大きめのものが数カ所、折れ面にも一カ所に調整加工が施されている。333は縦長剥片の側縁の一部に数回の加工痕を有するが、他の側縁に比較的顕著な使用痕をも有している。334は左半分を欠損しているが下縁と裏面の一部に、また335は裏面の下部にそれぞれ加工痕を有するものである。

（５）使用痕を有する剥片（第42、43図）

293、294、298～301は黒耀石の小形剥片を用いている。これらのうち293、294は細石核の打面再生剥片であり、他も細石核の調整剥片と考えられるため、おそらくそれらを再利用したものであろう。本石器群においては細石核の調整剥片を再利用し石器とする例は特徴的に見受けられ、スクレイパーに再加工した296などもその一例である。

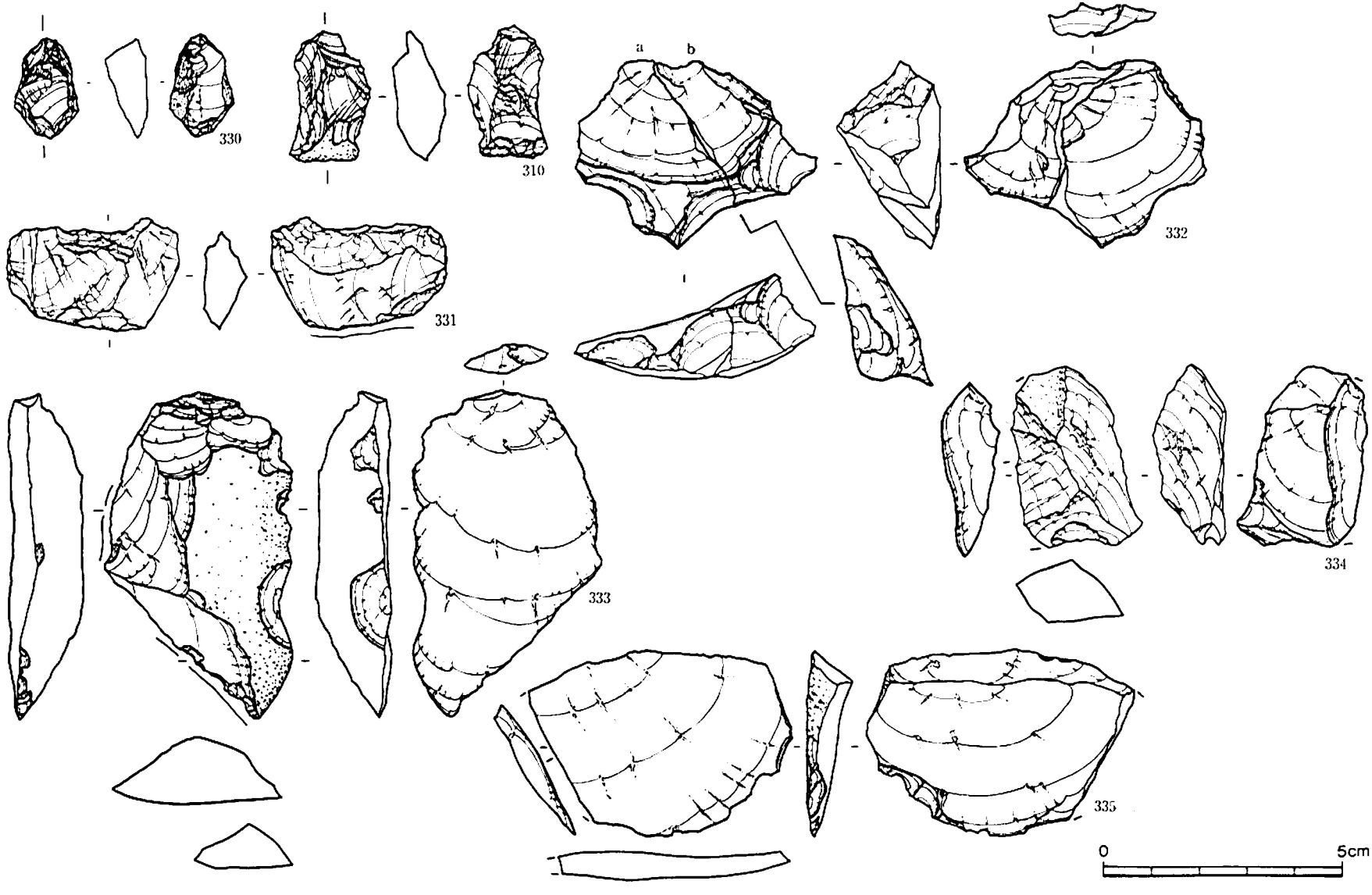
中形のものは、339、340の２点以外は石材に黒色安山岩を使用しており、また337～339、344の４点以外は縦長剥片を用いるというような傾向にある。336～339は比較的顕著な剥離痕が連続して観察されるものであり、うち336と337には二カ所に使用痕が観察される。また接合はしないものの339は、剥片359、石核373と同一個体である。340～344には使用痕と考えられる微細な剥離痕が観察される。また340は珪質頁岩で、本石器群においては同一の個体は検出されていない。

（６）剥片（第44～49図）

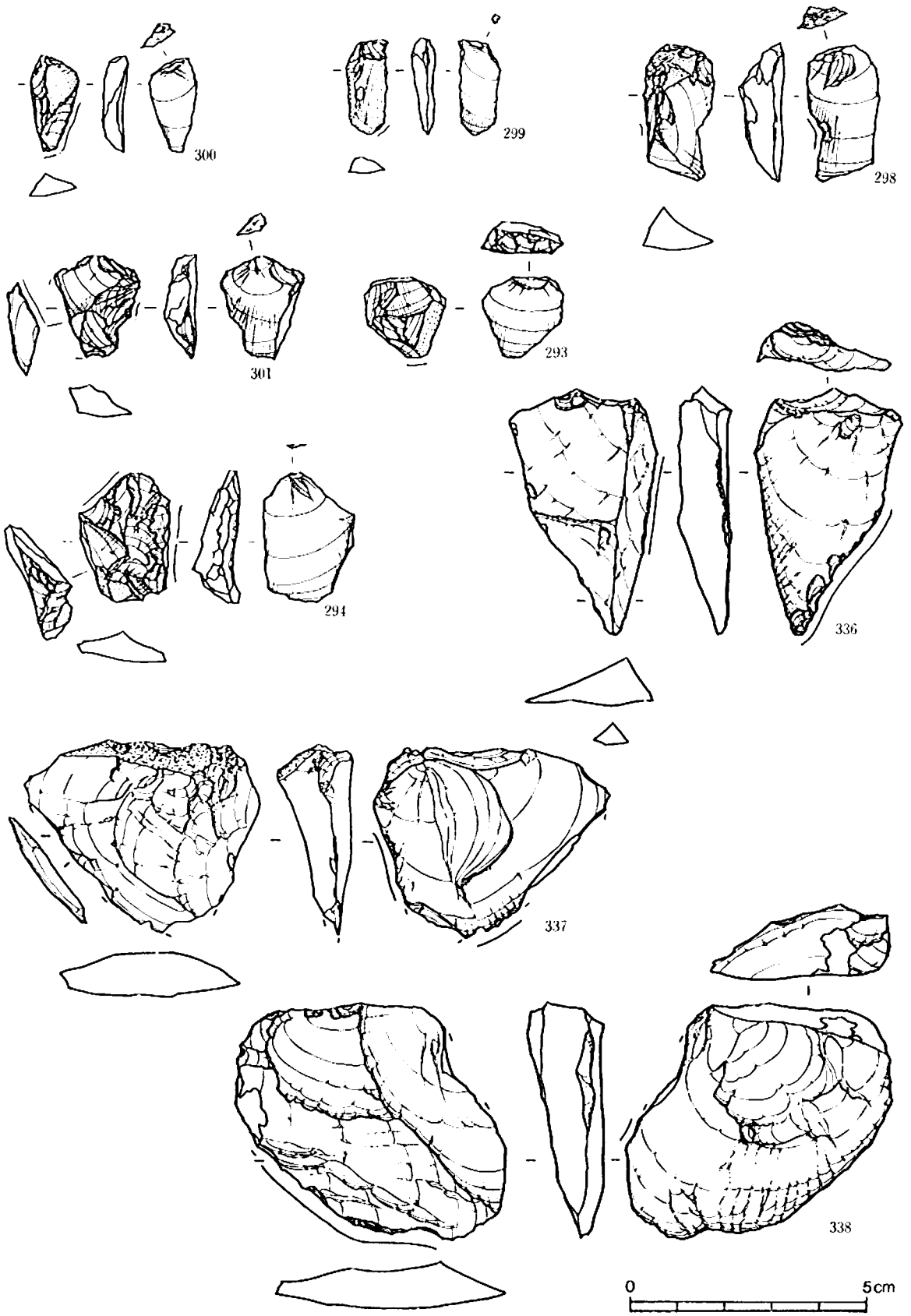
黒色安山岩と黒色頁岩の中形から大形の剥片を、長幅比約1.3をもって縦長剥片と横長剥片に分類したが、これらの剥片類はそのままでも使用されていたであろうし、スクレイパー等の石器の素材としての意味を有していたものとも考えられる。

縦長剥片に分類されるもの（345～352、368）のうち345～348の表面にみられる剥離痕を観察すると、連続して縦長剥片を剥離したことが理解できる。黒色頁岩の347と348は同一の個体が本石器群にはなく、また345、346についても接合資料が存在しない。このような状況から、遺跡内で行われた石器製作では連続して縦長剥片を剥離することはなかったものと考えられる。しかしこれらの剥片の存在から、連続した縦長剥片を剥離する技術が同時期に存在していたことは明らかであろう。

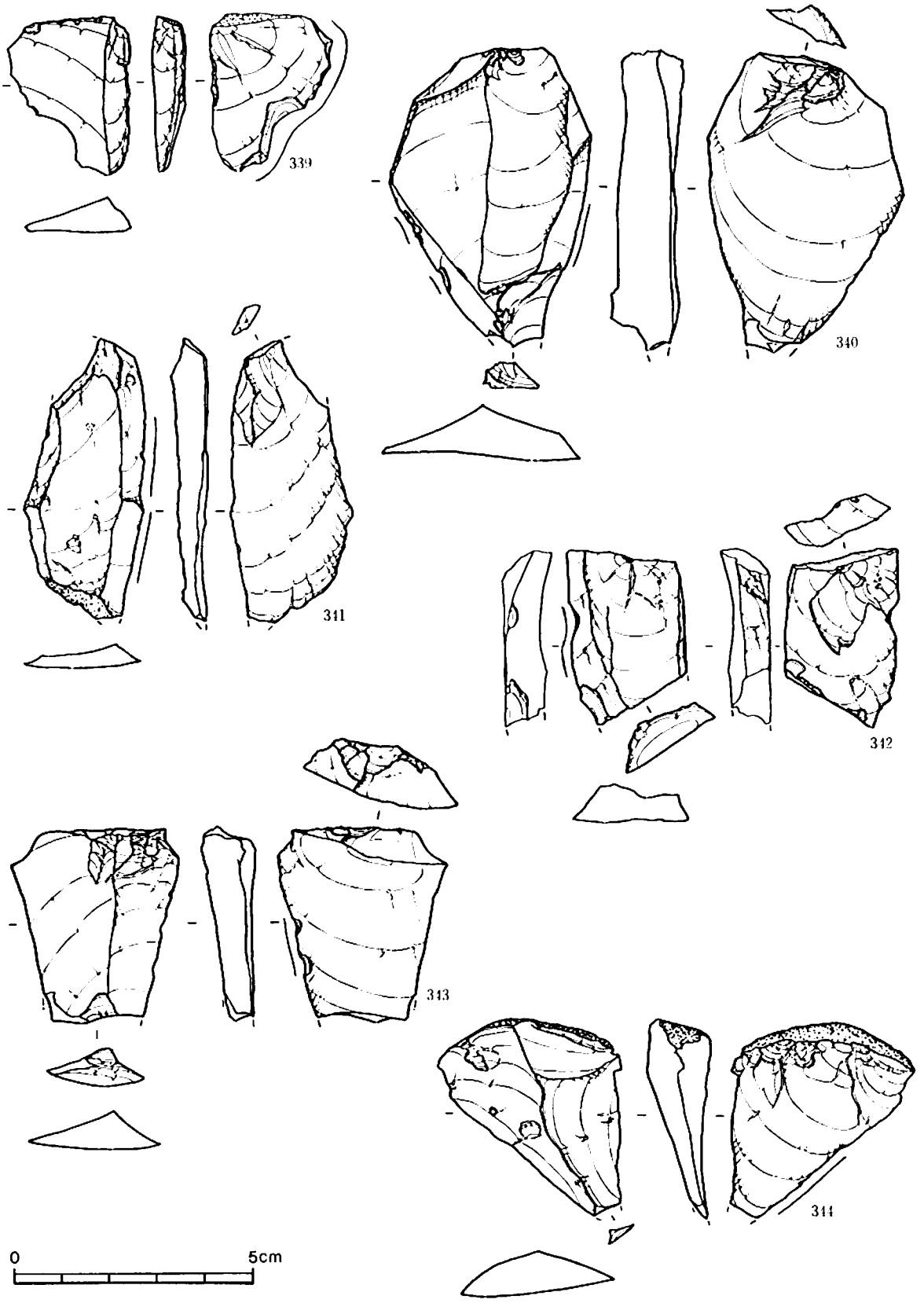
横長剥片（353～367、369、370）は比較的不定形なものが多く、形状による分類は難しい。353、354、356、357は長さが幅よりも大きく、縦長剥片の一部に近いものである。362は表面をポジティブで大きな剥離面が覆い、大形剥片を素材とした石核から剥離されたものと考えられ、363もそれに類する剥離技術によるものと考えられる。365～367は黒色頁岩であるが、本石器群には同一母岩の石核はなく、また対応する剥・砕片も



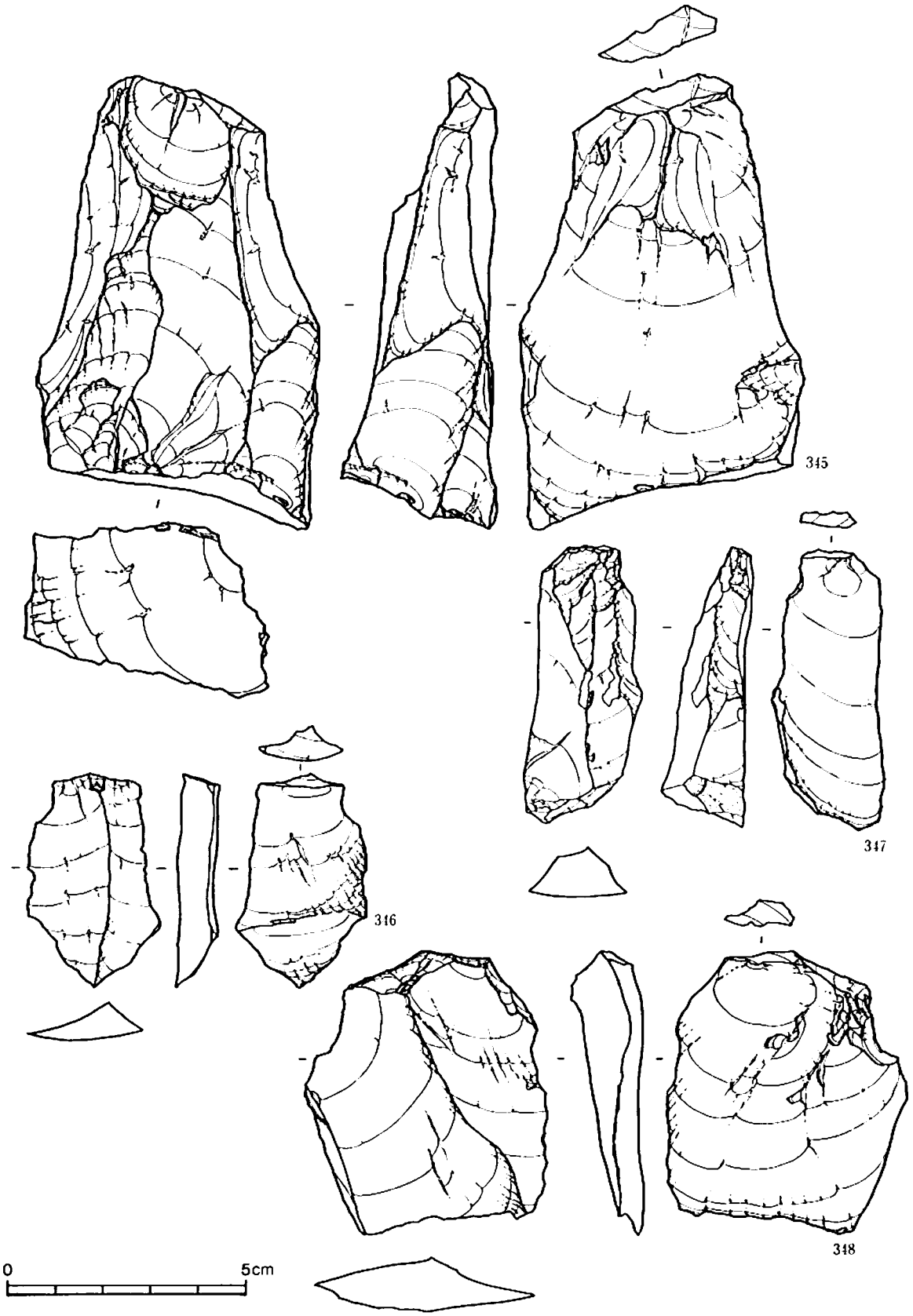
第41図　楔形石器・二次加工痕を有する剥片



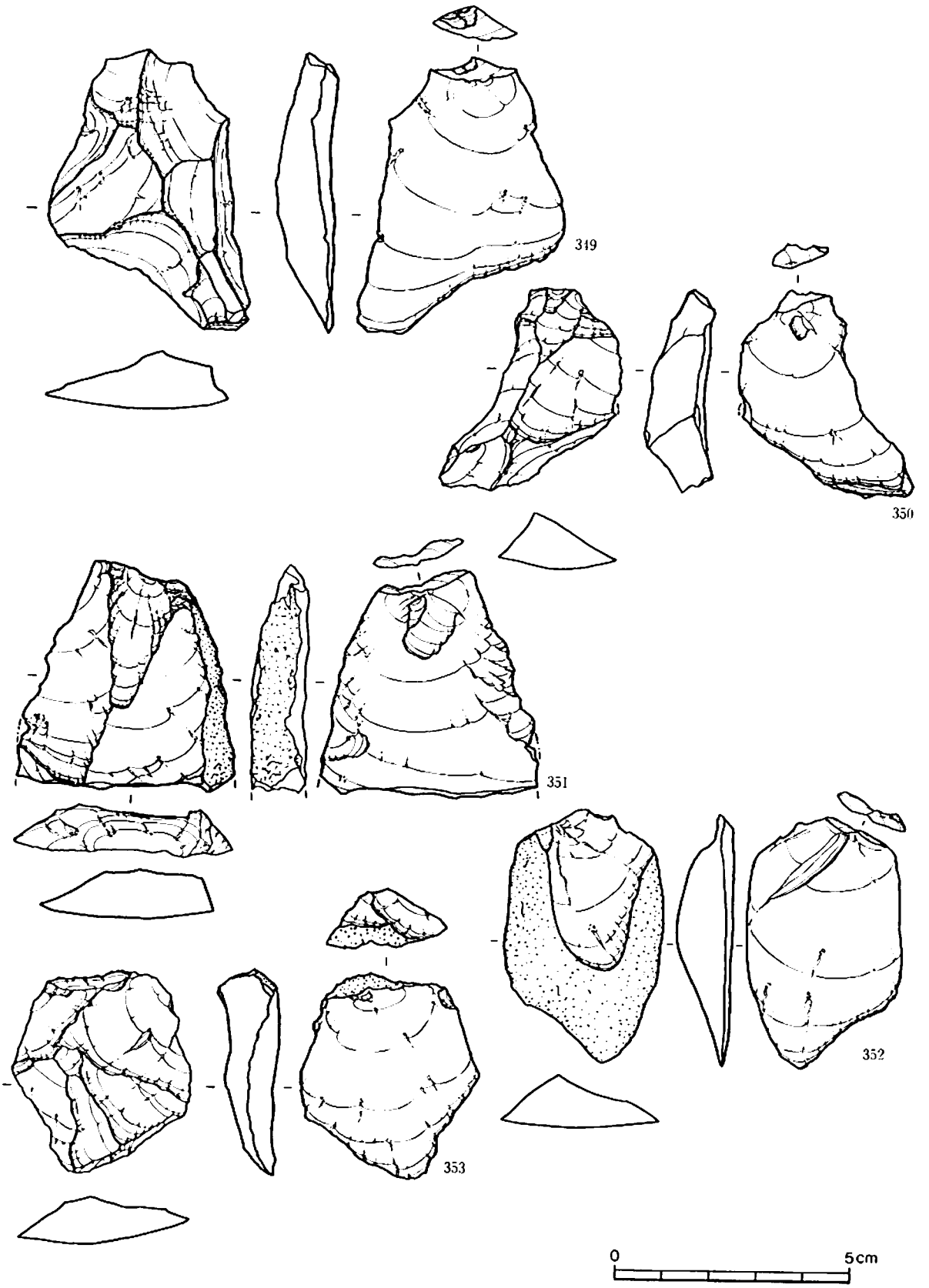
第42図　使用痕を有する剥片（1）



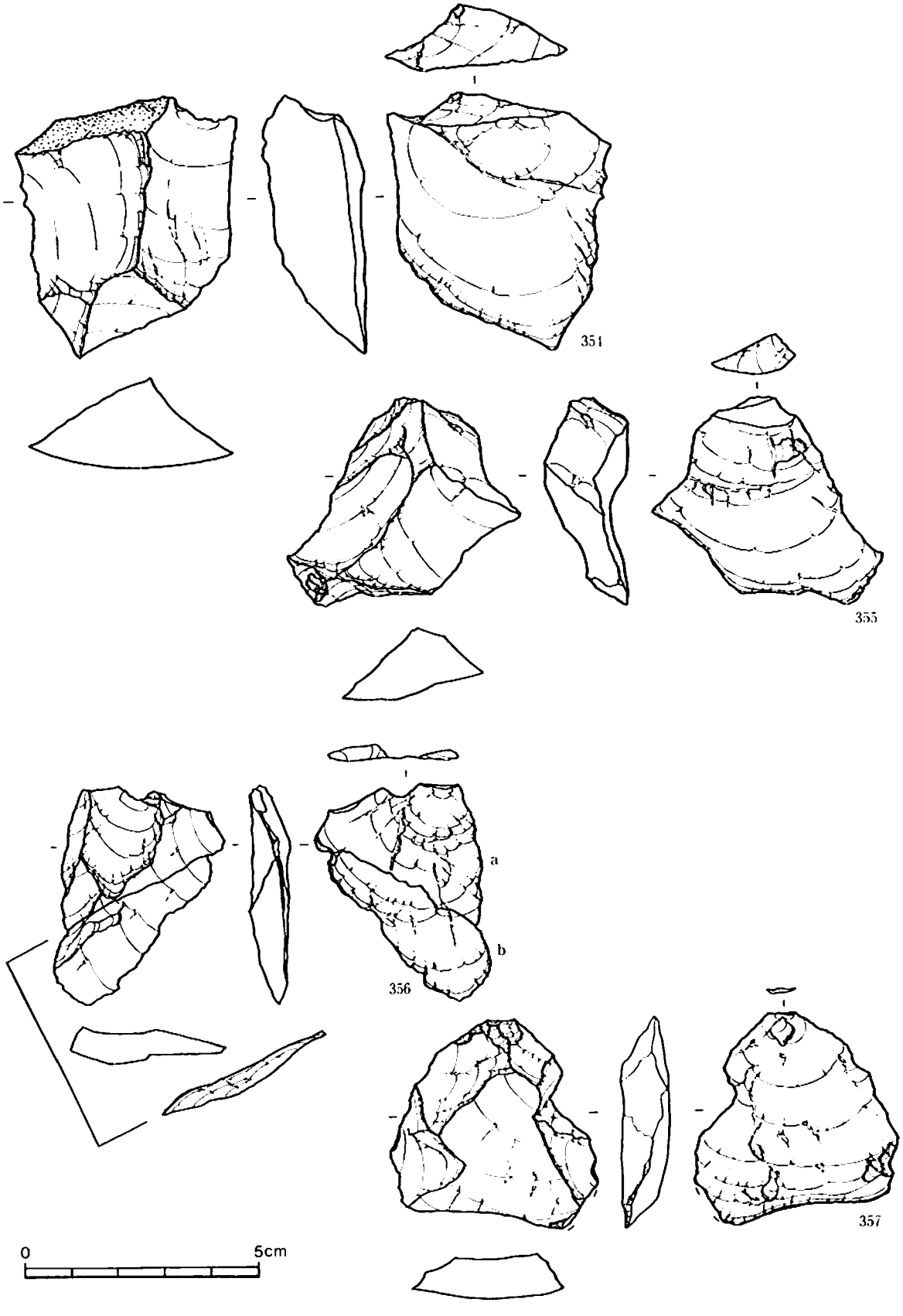
第43図　使用痕を有する剥片（2）



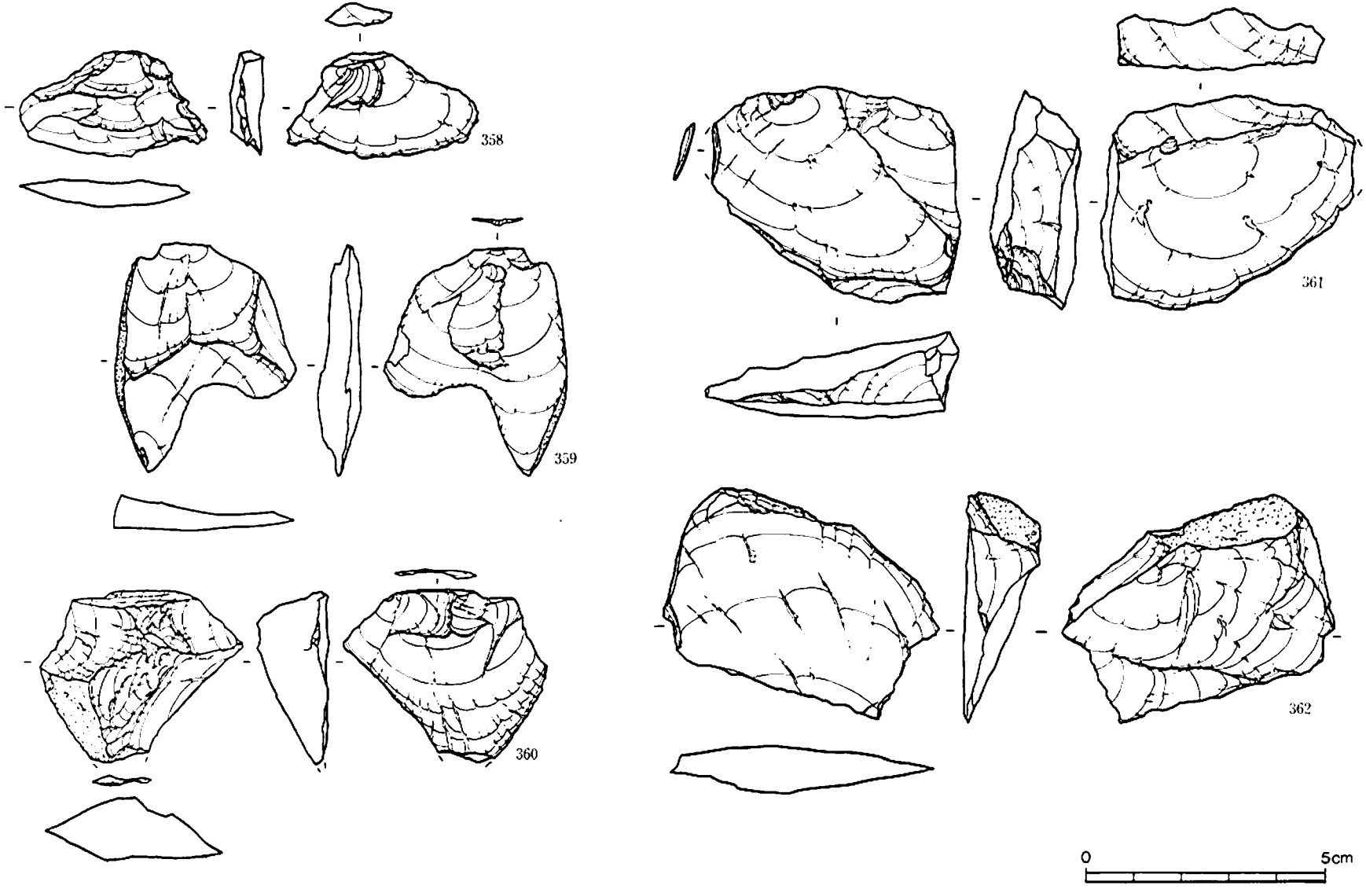
第44図　剥片（1）



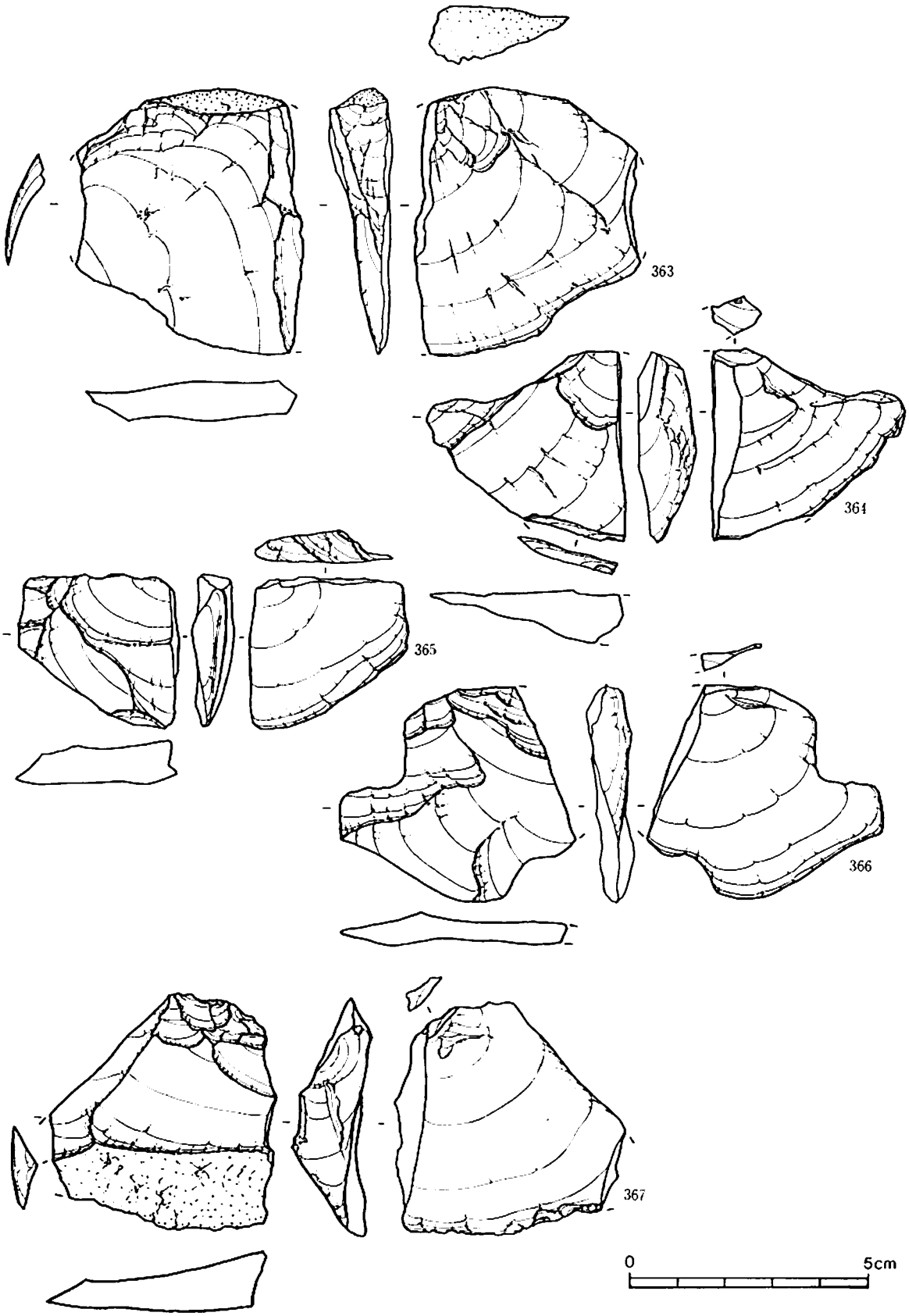
第45図　剥片（2）



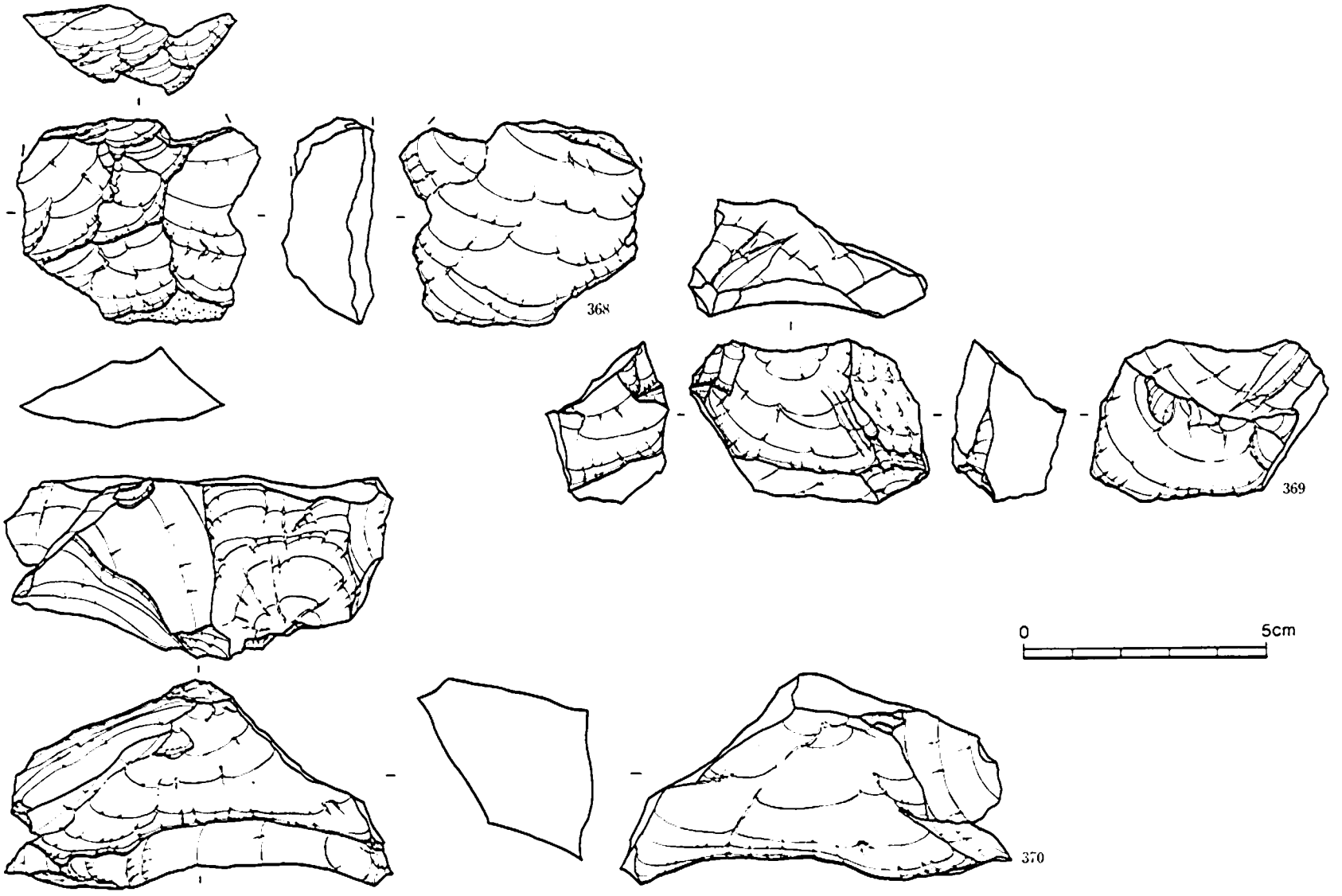
第46図　剥片（3）



第47図　剥片（4）



第48図　剥片（5）



第49図　剥片（6）

殆どないことからみて、剥片の状態で遺跡内へ持ち込まれたものと考えられる。369および370は、石核を大きく割り取ってしまった剥片であろう。また、359は接合はしないものの石核373と同一個体である。

（7）石核（第50～52図）

本石器群から出土した中形の石核は8点である。その形状はサイコロ状、チョッパー状、亀甲状と横長剥片を剥離するものが主体であり、縦長剥片を剥離するものは接合資料7の石核378のみである。これら石核の剥離作業面を検討すると、主に横長剥片を中心として剥片剥離がなされており、その大きさから主に中形の石器の素材を本石器群に供給していたと考えられる。

石核の素材の多くは不明であるが、チョッパー状の373は礫であり、また亀甲状の376は作業面の一部にポジティブな剥離面が残るため剥片であることが理解できる。さらに376においては裏面に連続した剥離痕が観察されるが、表面に残るポジティブな剥離面とそれらとは180°逆方向であることから、連続して剥離された縦長剥片が素材であると考えられる。

373は剥離作業面の状況と全体の形状から、礫器と捉えることが可能とも考えられる。しかし、①刃部にあたる部分の角度が鈍く、使用等によって残される刃こぼれが観察されないこと　②この石核から剥離された剥片が、使用痕を有する剥片（339）として使用されていること　③剥片359も同一個体であるがこれら3点が接合せず、この石核から剥離された他の剥片が別の場所で何らかの目的で使用された可能性が大きいことなどの理由から、剥片を利用するために剥離作業がなされたと考え石核とした。

375のaとbは折れたもので、石核としては欠損しているが、接合した状態で1点の石核として捉えられるものであろう。

（8）黒色安山岩の剥離に関する接合資料（第53～56図）

接合資料7（第53図）

縦長剥片の剥離工程を示す接合である。剥片（377）の一部には礫面が残り、表面の剥離方向も一定していない。しかし石核に残された剥離面を観察すると、裏面には377と同方向からのネガティブな剥離面が観察され、欠損してはいるものの、同一の打面を利用していた可能性がある。また、石核の右側面には何らかの石核調整痕が観察される。

接合資料8（第54図）

縦長剥片（379）と横長剥片（380）の接合であるが、380はヒンジ・フラクチャーにより剥離が収束してしまったと考えられるかもしれない。しかし、379とは剥離軸がややずれているため、連続した縦長剥片剥離を行ったものかどうかは不明である。接合資料の右側はポジティブな剥離面であり、また左側は側方からの大きな剥離であるため、剥片素材の石核を大きく剥離した後、その際に生じた稜の部分から剥離作業が開始されたものであると考えられる。

接合資料9（第55図）

不等辺の三角形状の剥片同士の接合で、後から剥離された剥片（382）は、その縁辺に使用によると考えられる微細な剥離痕が連続して観察される。接合資料の正面および右側面は原材分割時の大きな剥離面の一部

と思われ、原礫の分割により石核の素材が準備されたものと考えられる。

接合資料10（第56図）

サイコロ状の石核（384）から、打面を頻繁に転位しながら剥片剥離を行ったことを示す接合である。剥片（383）表面の剥離面は、主要剥離面の剥離方向と90°ないし180°異なるものであり、また石核においても、同一作業面から連続して剥片剥離が行われたと考えられるものが殆どないため、90°を基本とする頻繁な打面の転位の状況が理解できる資料である。

黒色安山岩は、本石器群においては黒耀石についで資料が多く、中形の石器の素材を供給した中心的な石材であり、中形の石器が主に剥離されている。そのため、この剥片剥離技術の在り方を検討することにより、本石器群中での中形石器の製作技術を明らかにすることができるものと考えられる。

中形の剥片では、長幅比が1.3以下になる横長剥片が多くみられる。これらの剥片剥離技術には、亀甲状の石核（374～376）から剥離されるものと、打面転位を頻繁に繰り返し、石核がサイコロ状（371、372、接合10）になるものがある。

横長剥片剥離は、亀甲状の石核あるいはサイコロ状の石核からなされるものがあると考えられるが、横長剥片の剥離面などの観察からだけでは、どの様な石核に対応するものか理解し難いものもある。しかし、横長剥片はスクレイパー（313、319、322）、加工痕を有する剥片（332、335）、使用痕を有する剥片（337、338、344）等の石器として利用されており、本石器群の素材を得るための重要な剥片剥離技術の一つであるといえよう。

縦長剥片剥離で、345や石核376の素材などは、連続した縦長剥片剥離技術によって得られたものである。また黒色安山岩ではないが、黒色頁岩の剥片347・348あるいは珪質頁岩の使用痕を有する剥片340等の背後にも、連続した縦長剥片剥離技術の存在が充分に予想できよう。その他、スクレイパー317、使用痕を有する剥片341～343、剥片346・351等は、連続した縦長剥片剥離技術によるものかどうかは不明であるが、明らかに縦長剥片剥離を意識したものであるといえよう。また接合資料７・８は、この様な剥片剥離工程を示すものである。

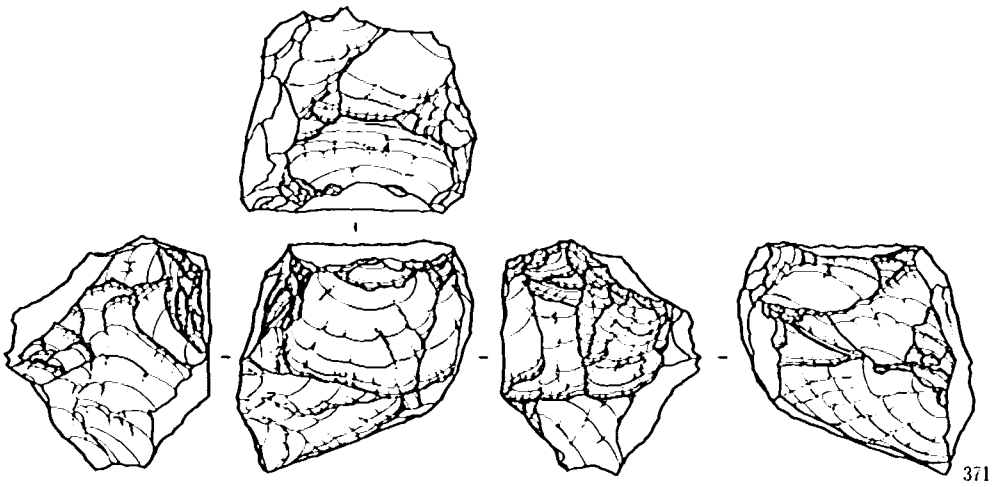
また349、350等は、縦長剥片でもその表面に残された多方向から剥離された剥離面の状況から、横長剥片の内でも幅よりも長さの大きいものなどと同様な剥片剥離技術によるものであり、あるいはそういった剥離工程において偶然に剥離されたものとも考えられる資料である。

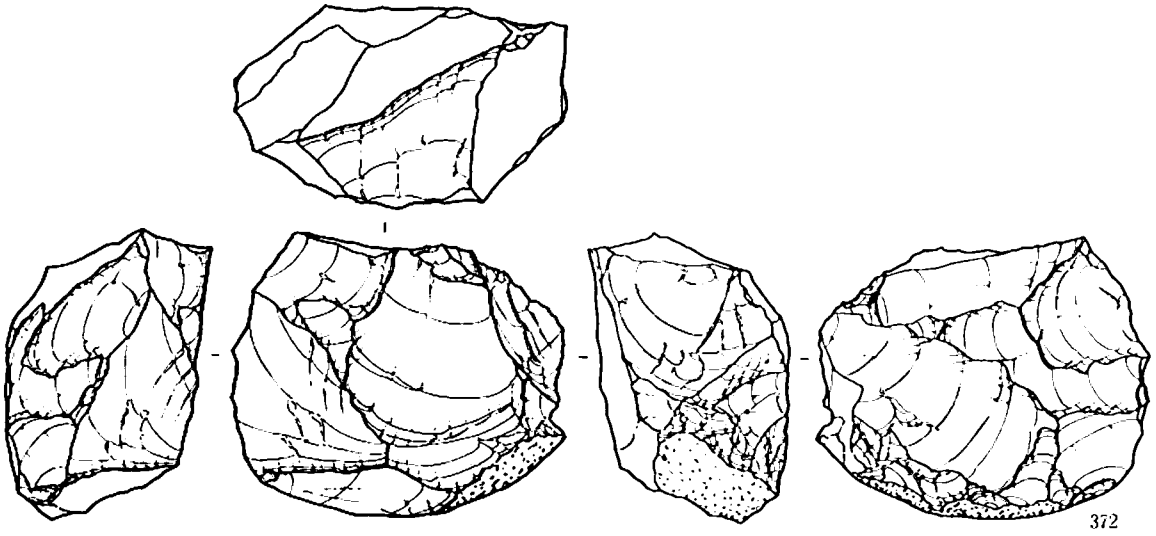
これらの石核の素材については、分割等による大形剥片を素材としたもの（335、337、362、376、接合資料８・９）があり、主に横長剥片剥離工程で用いられた可能性がある。しかし、礫あるいは大形の剥片を原材としているものかどうかという状況を推測でき得る資料は、接合資料等を含め、本石器群には殆ど残されていないといえよう。

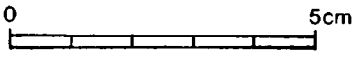
（９）礫器（第57～63図）

一般に素材となる礫の一部に粗く調整加工を施して刃部とする礫器は、本石器群では平均重量1,167.1ｇと重量感があり、敲石と共に大形石器として位置付けられるものである。石材は、385の１点を除き、遺跡周辺で普遍的に得られる粗粒安山岩を用いており、大形石器の石材として共通するものである。

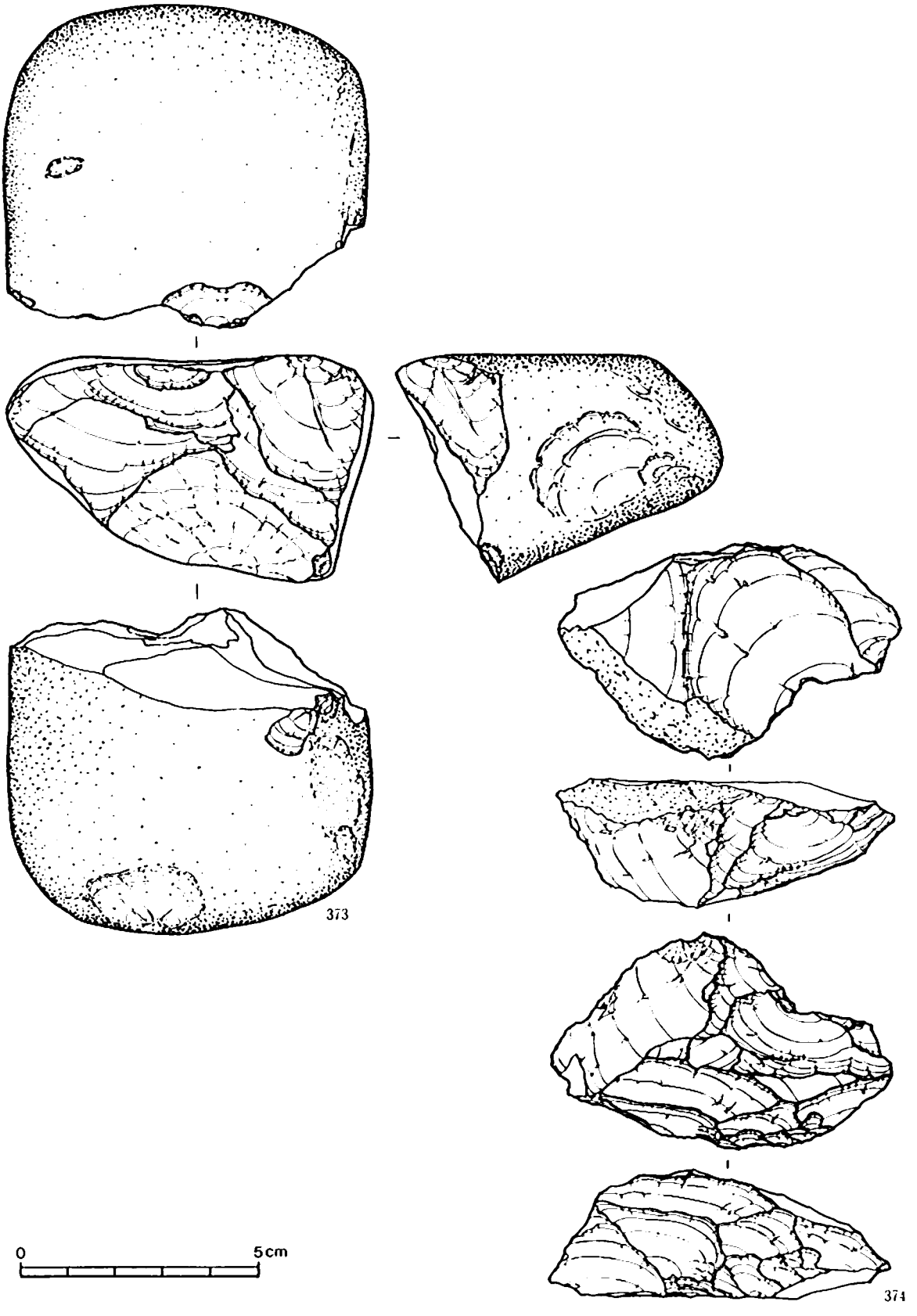
刃部は、基本的に片刃であり、その裏面には使用による刃こぼれと考えられる小剥離痕が観察されるもの（386、387、389、390等）が多い。刃部は礫の一辺に設定されるものが一般的で最も多いが、もう一辺（393）、



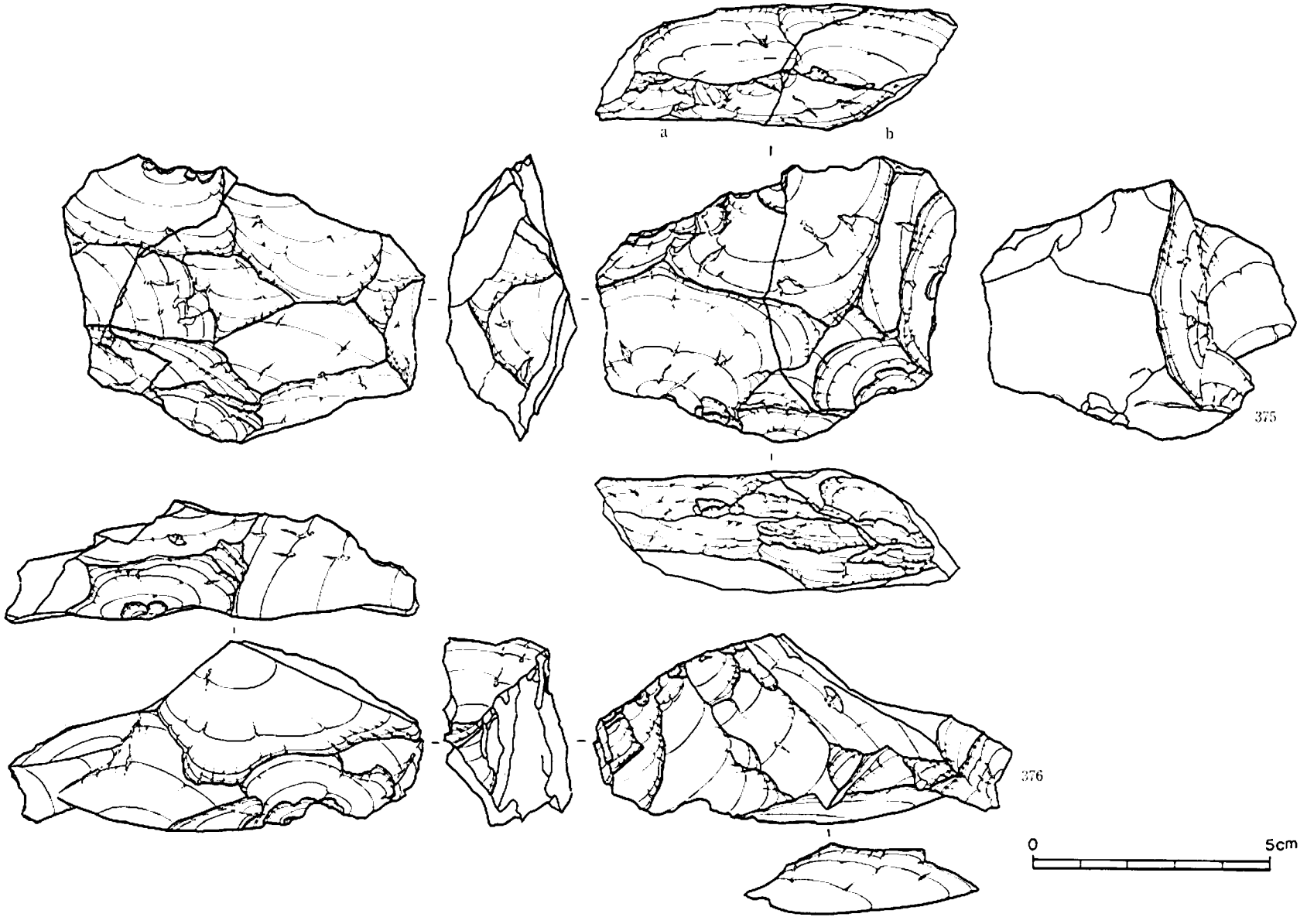




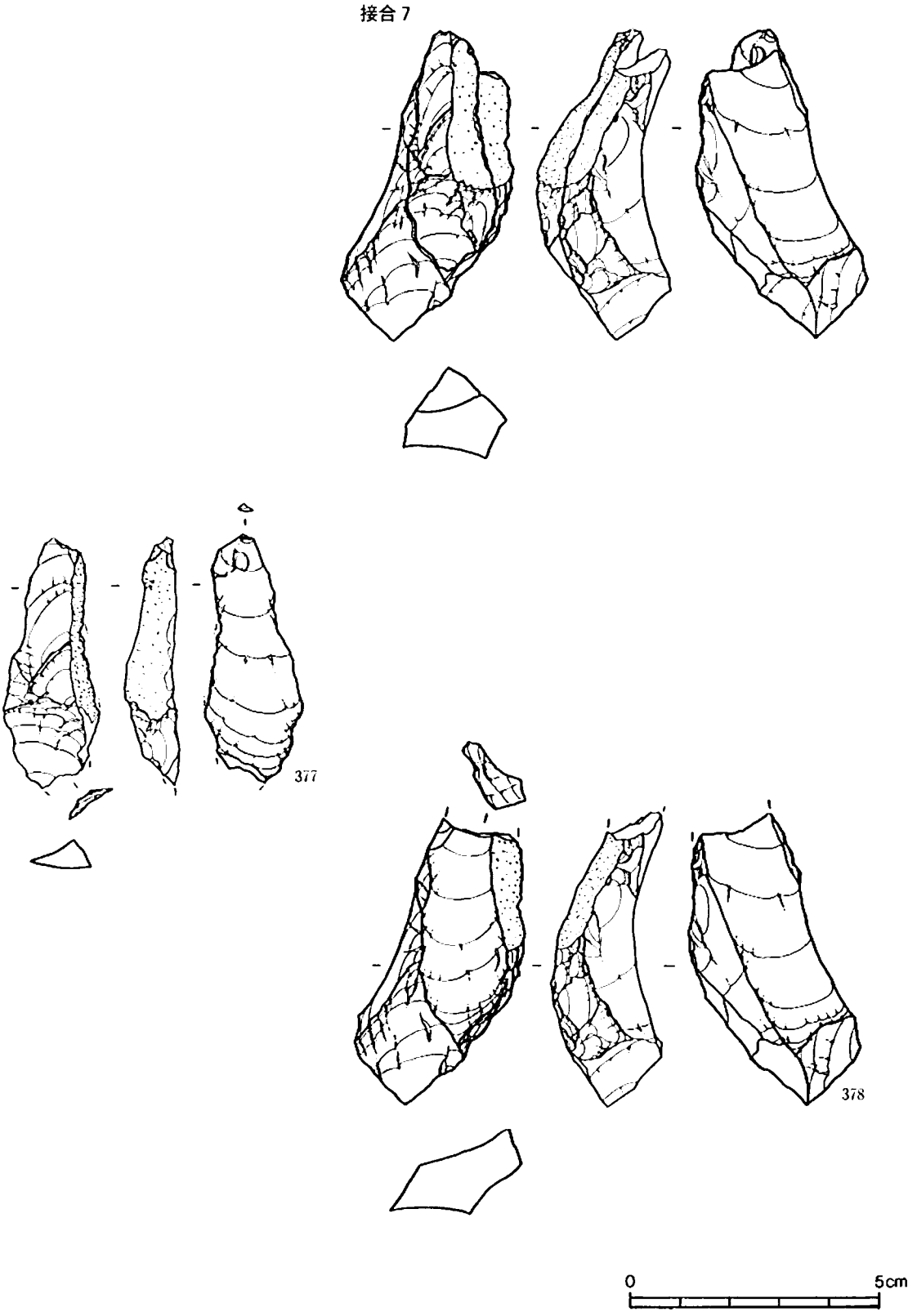
第50図　石核（1）



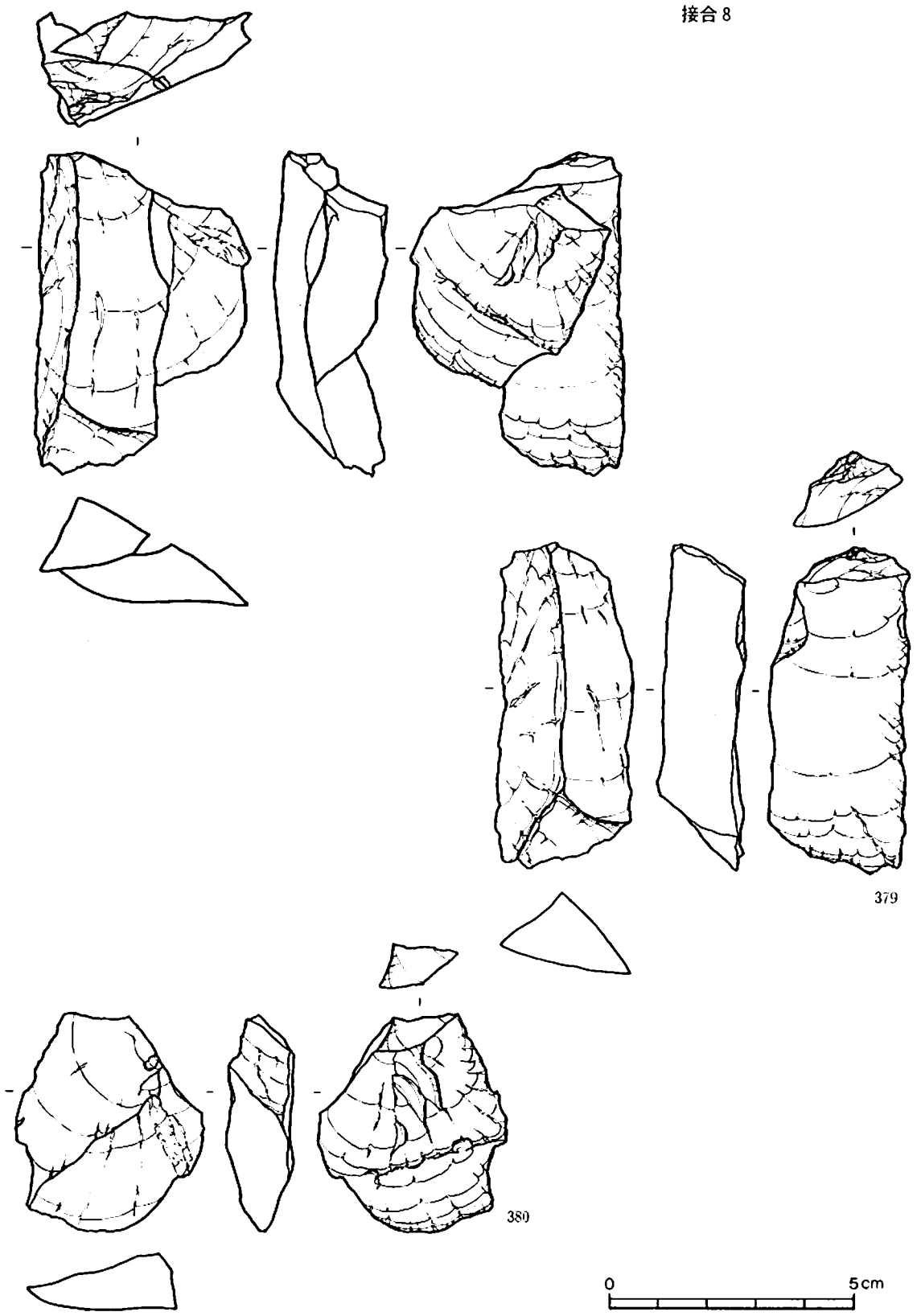
第51図　石核（2）



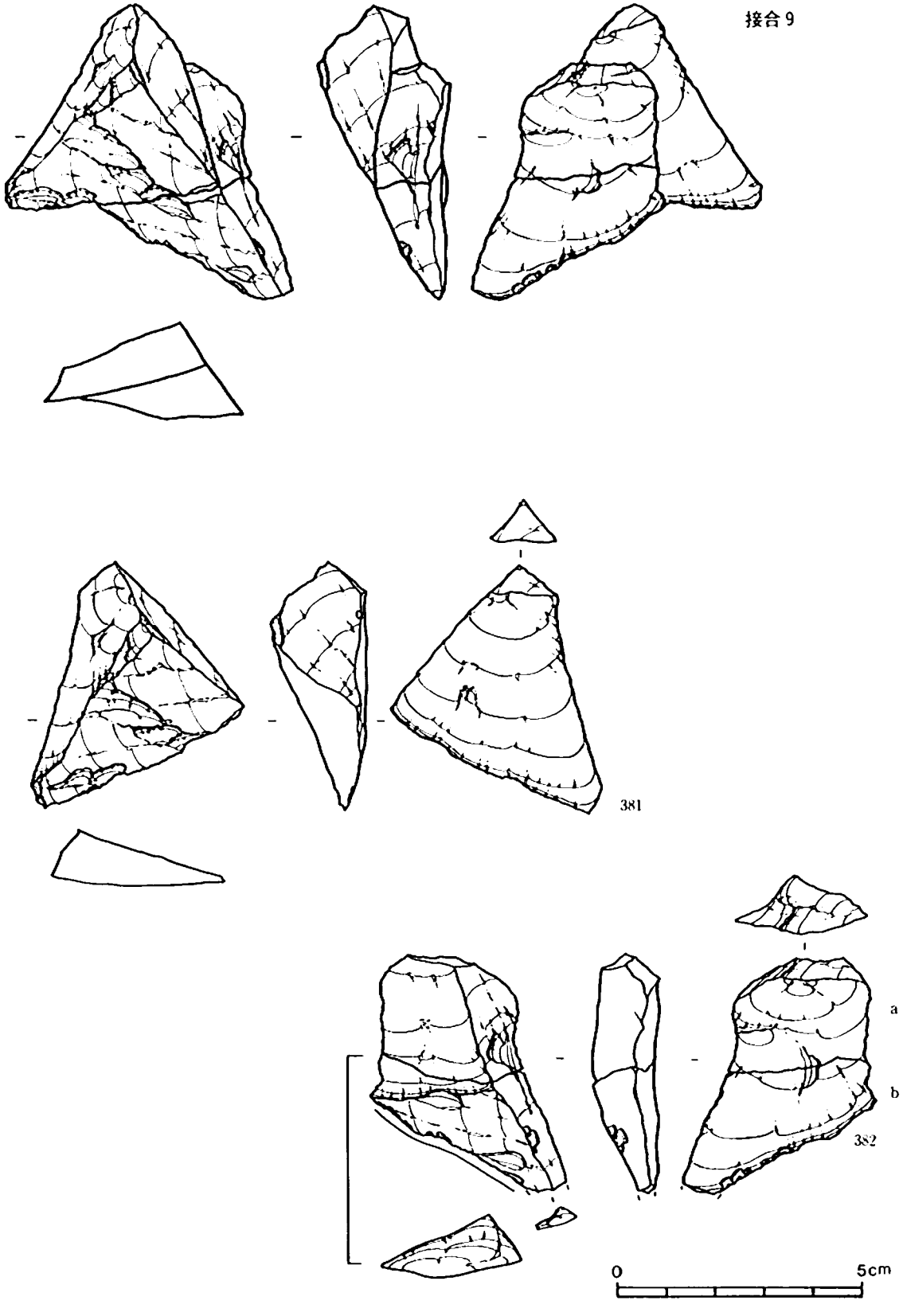
第52図　石核（3）



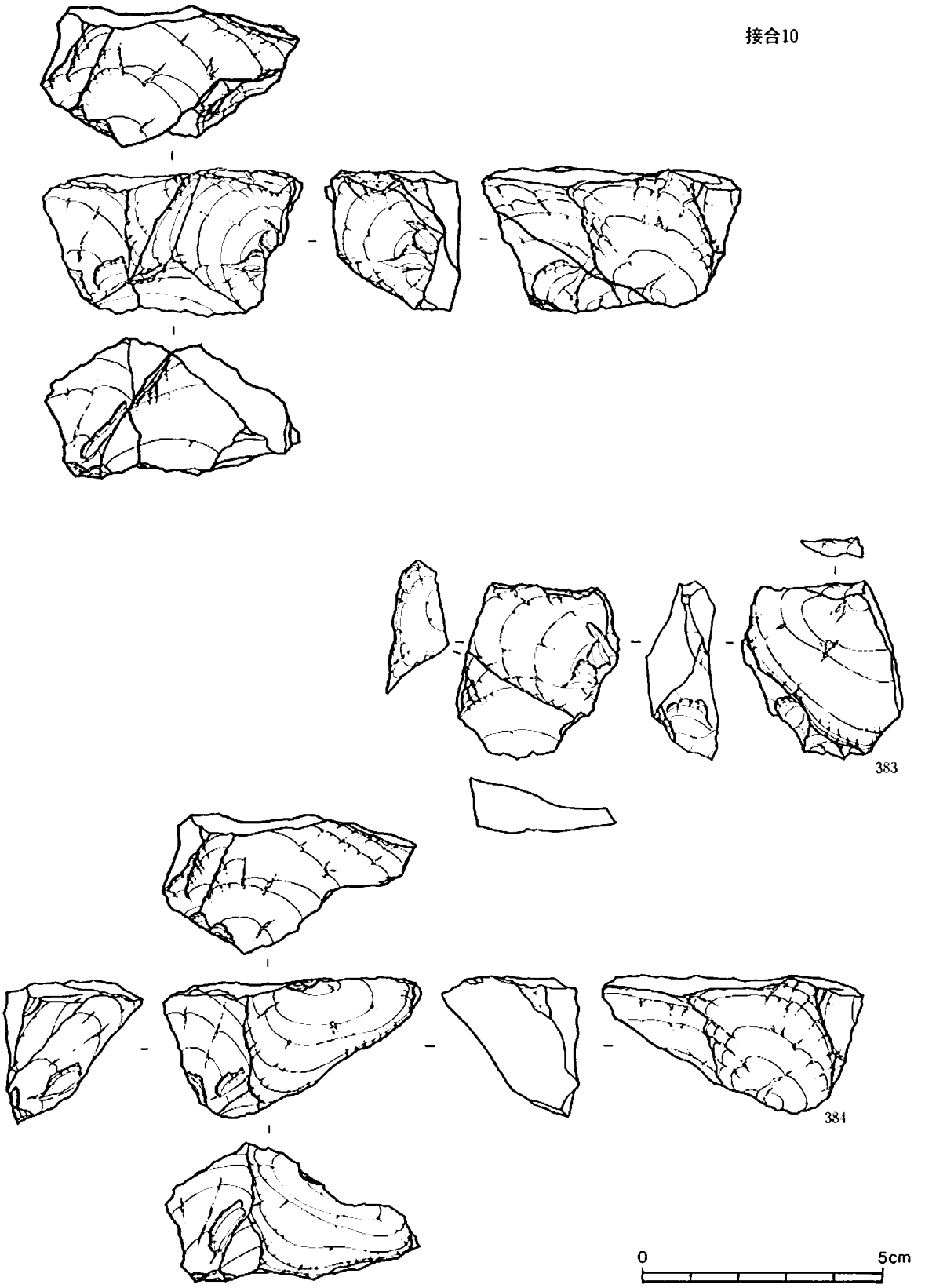
第53図　接合資料 7



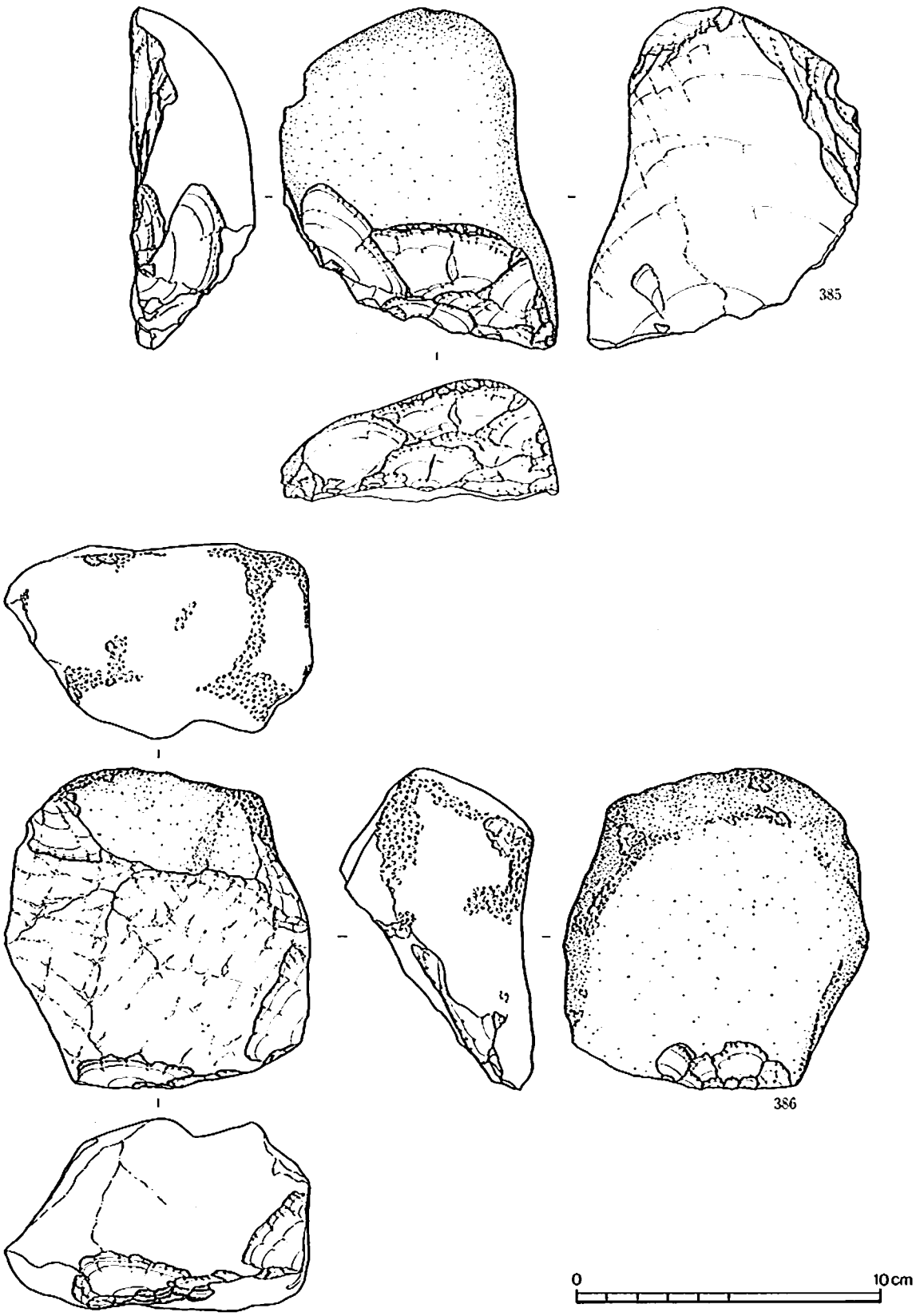
第54図　接合資料 8



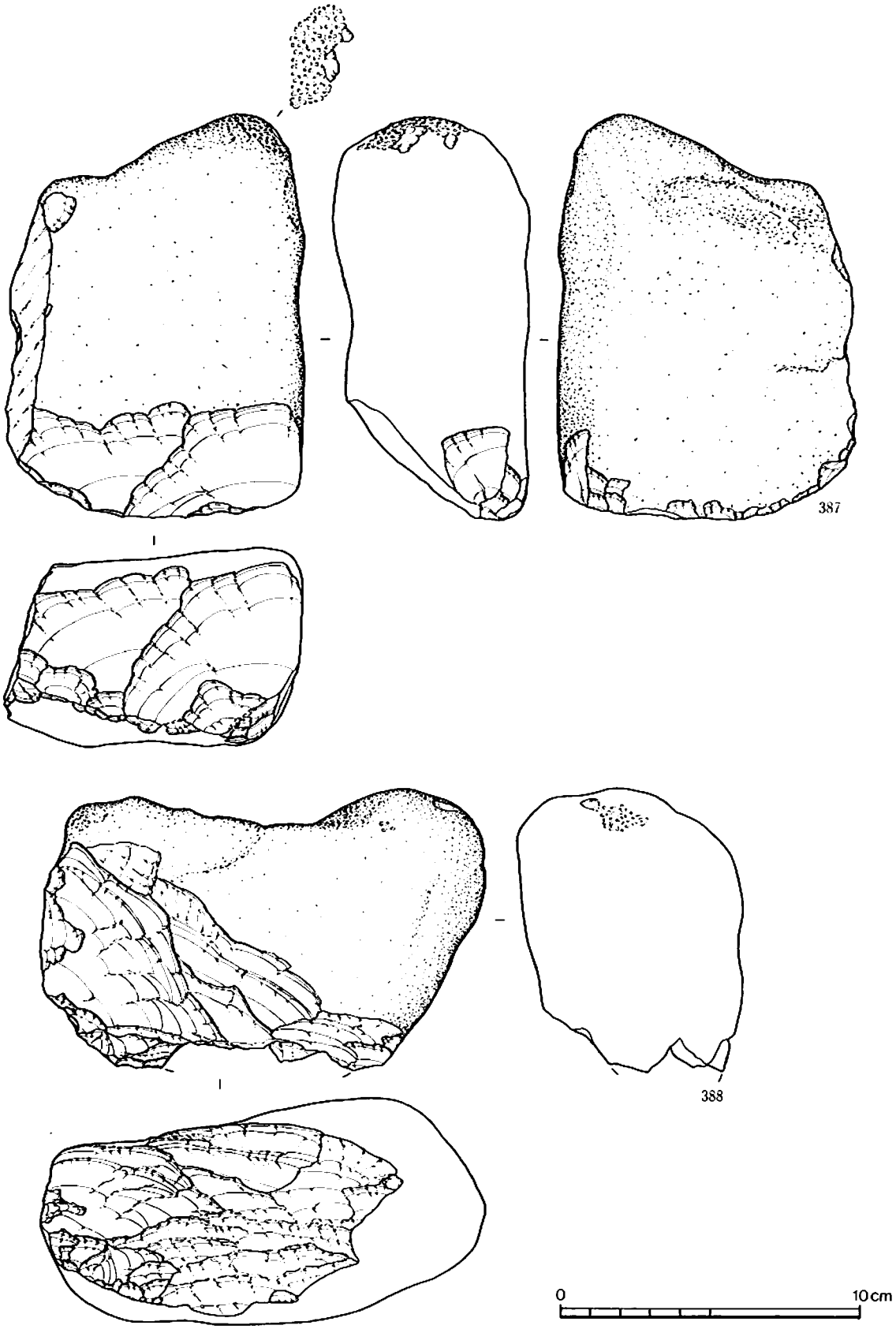
第55図　接合資料 9



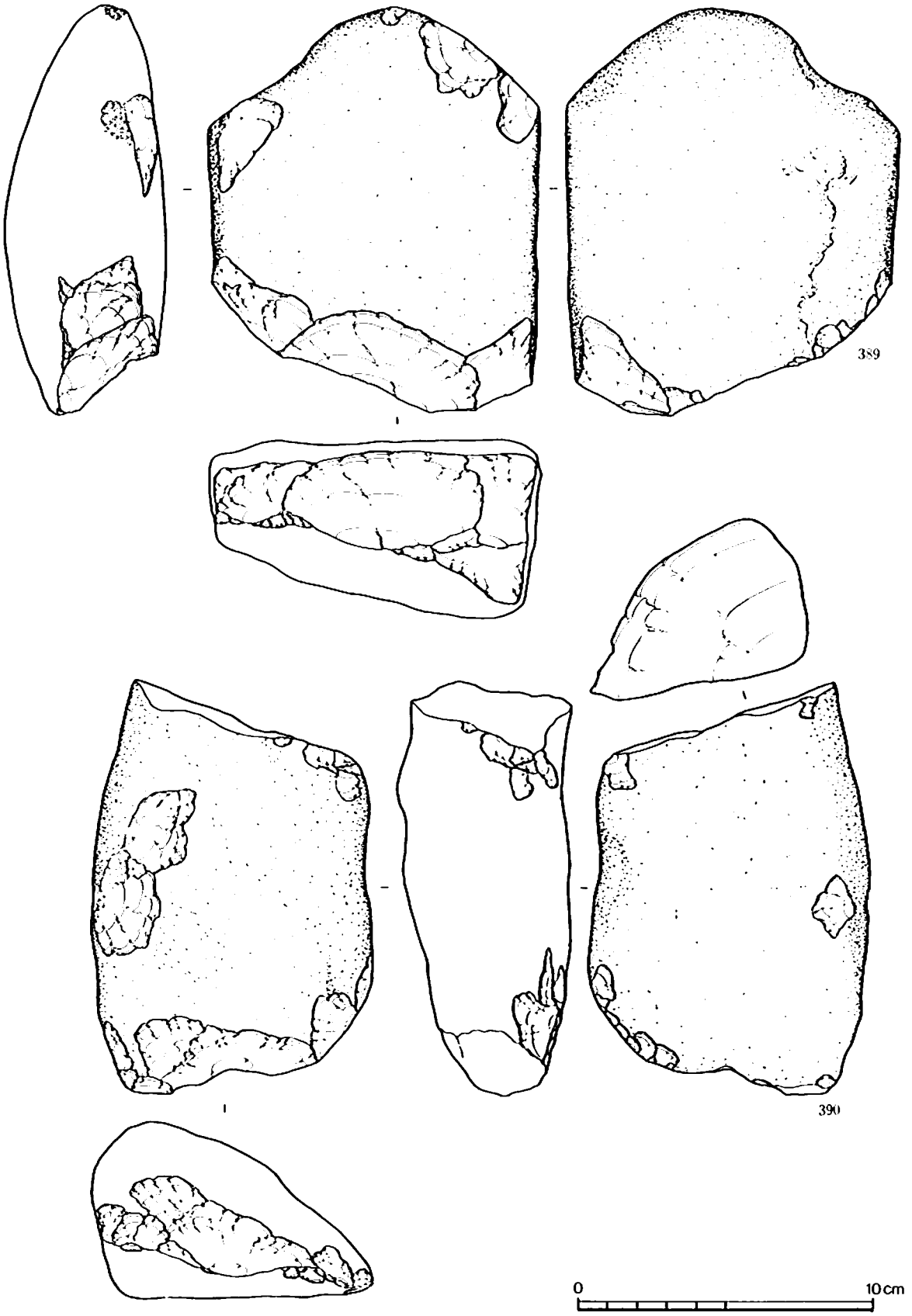
第56図　接合資料10



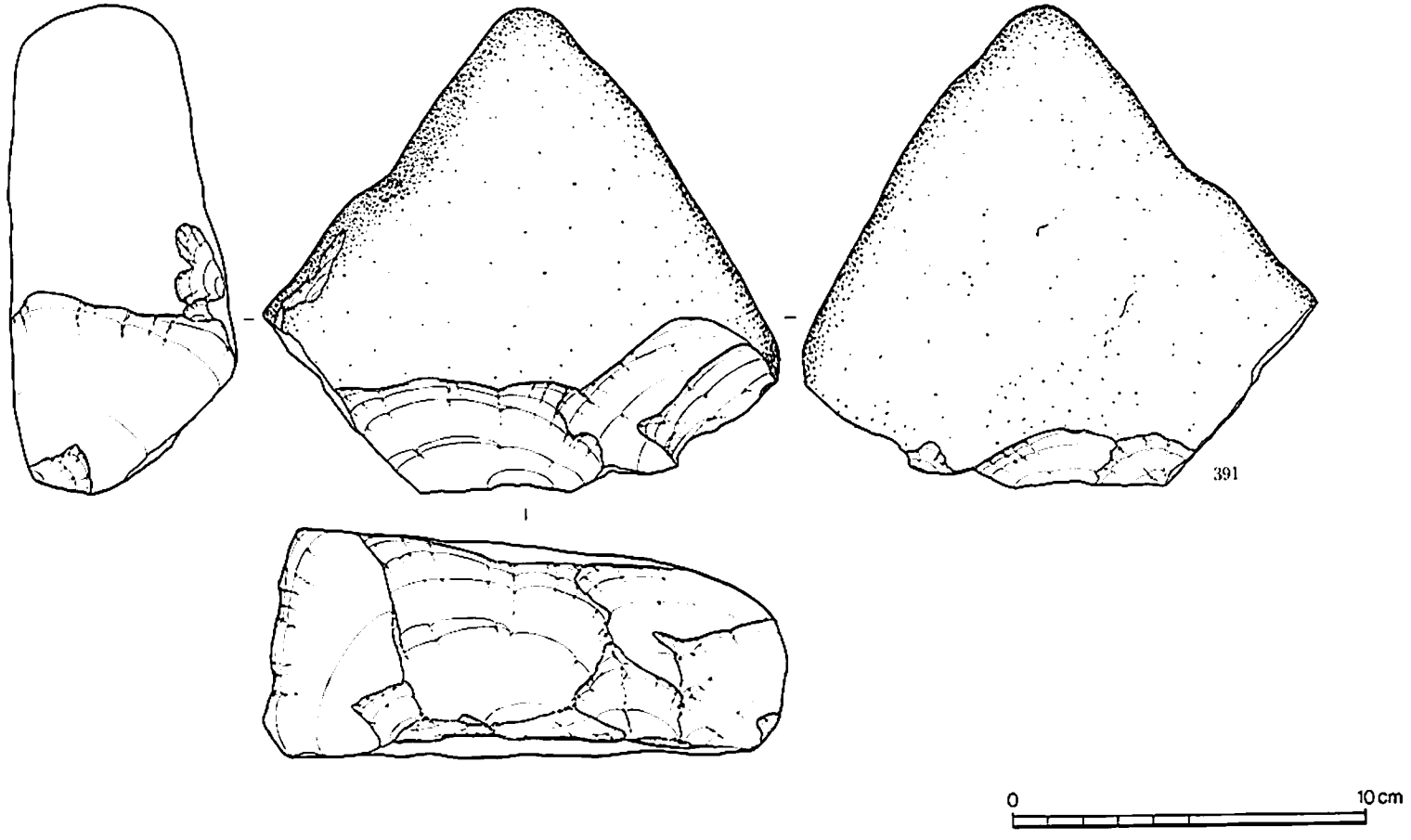
第57図　剥器（1）



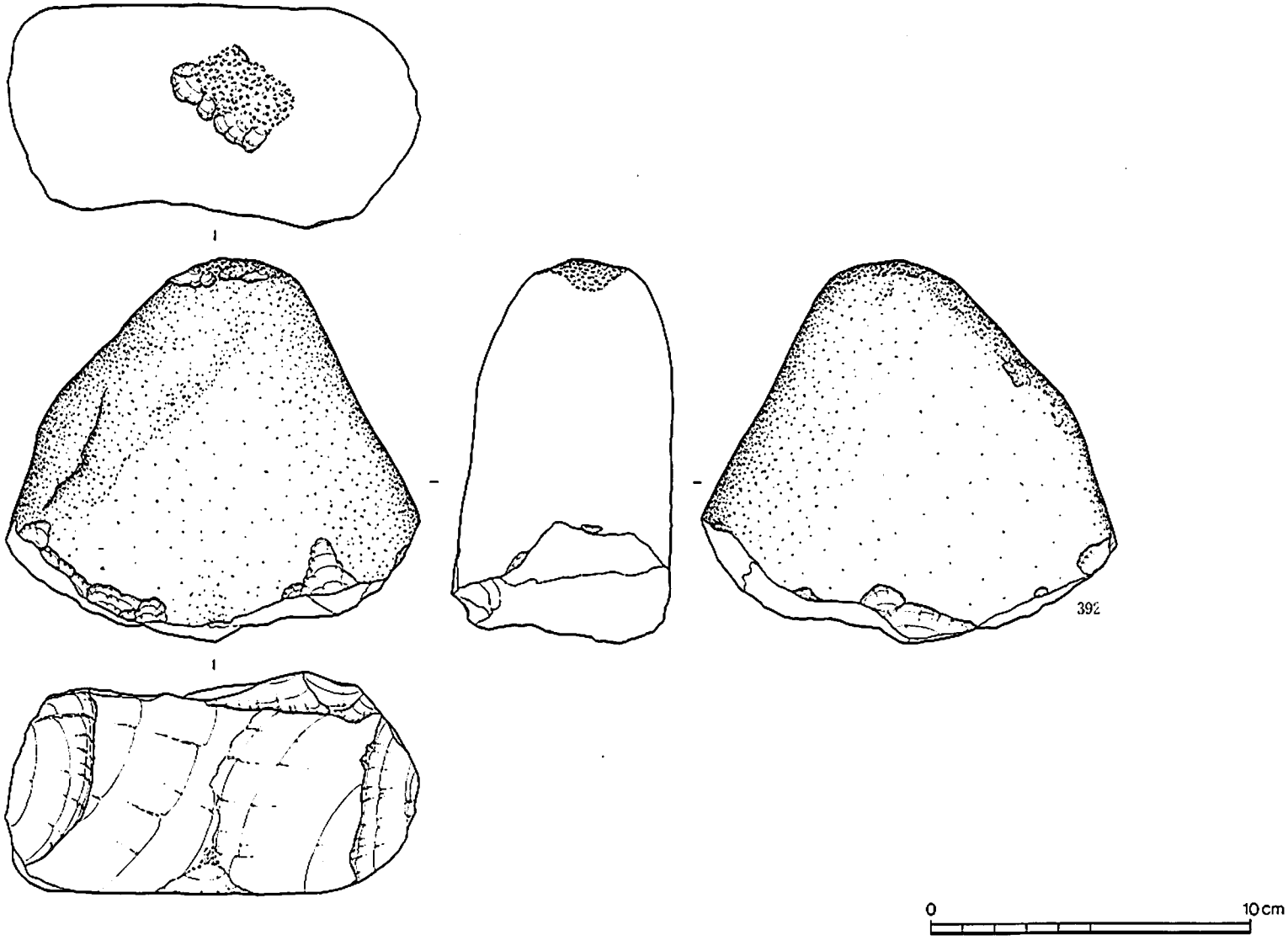
第58図　礫器（2）



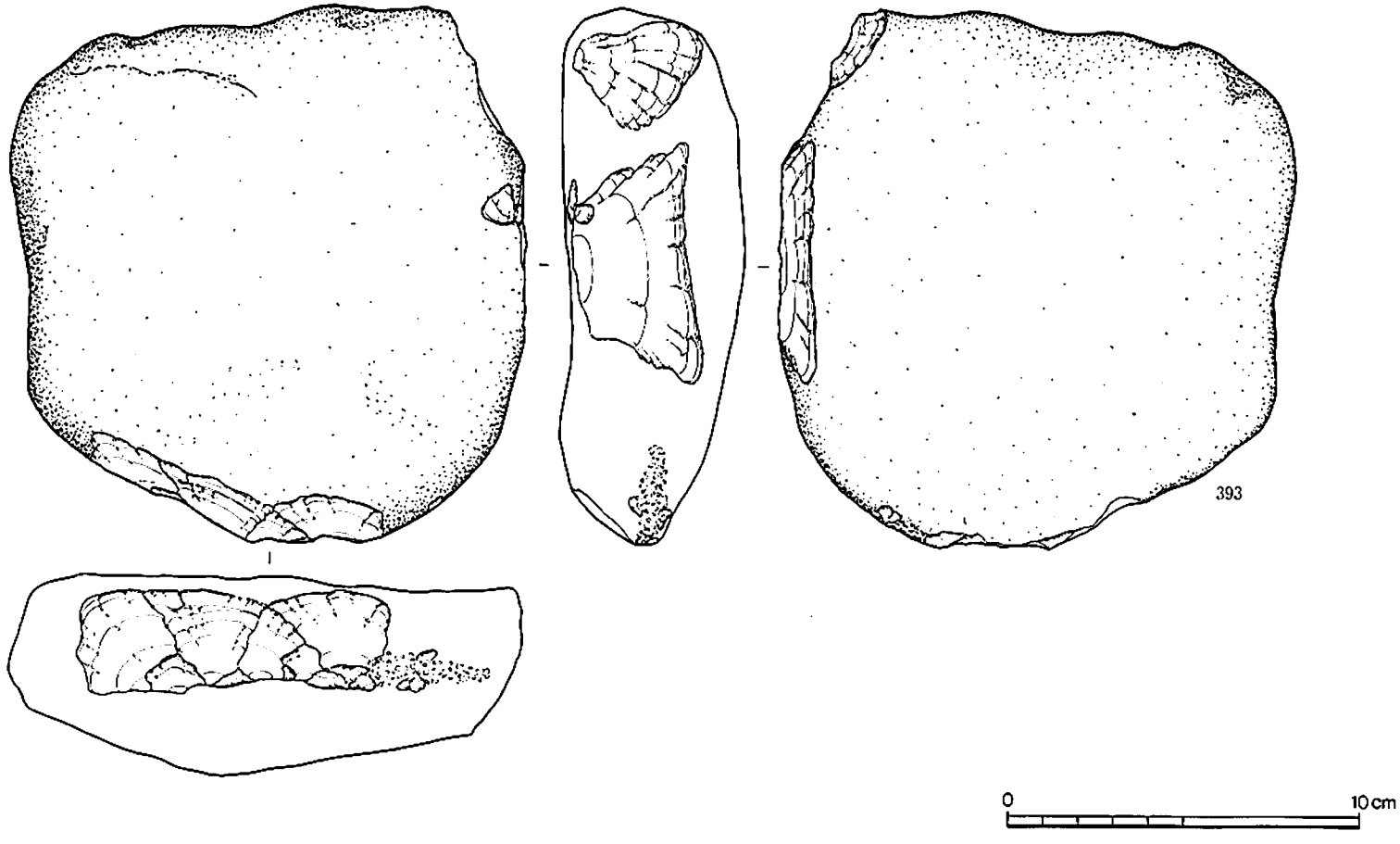
第59図　礫器（3）



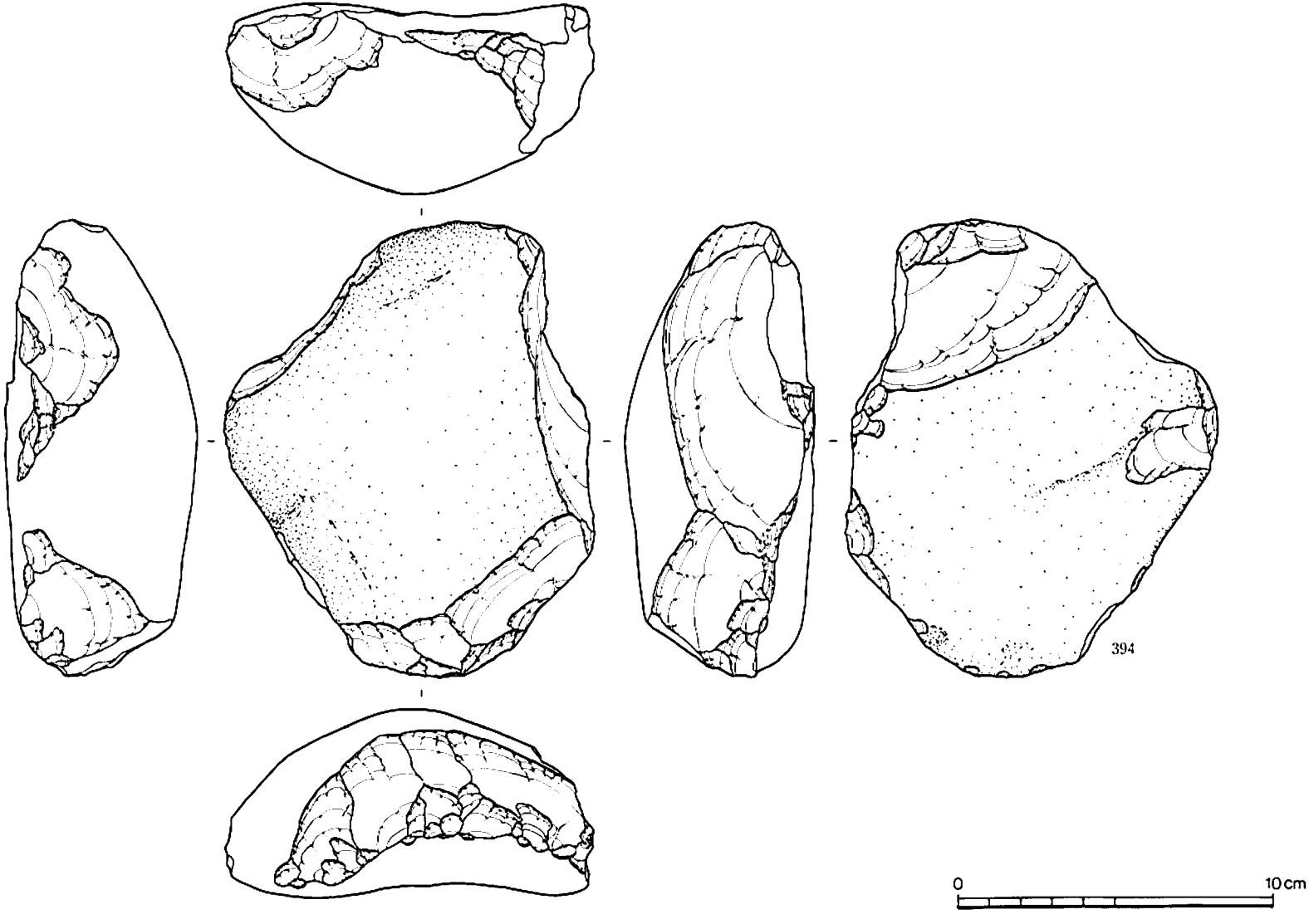
第60図　礫器（4）



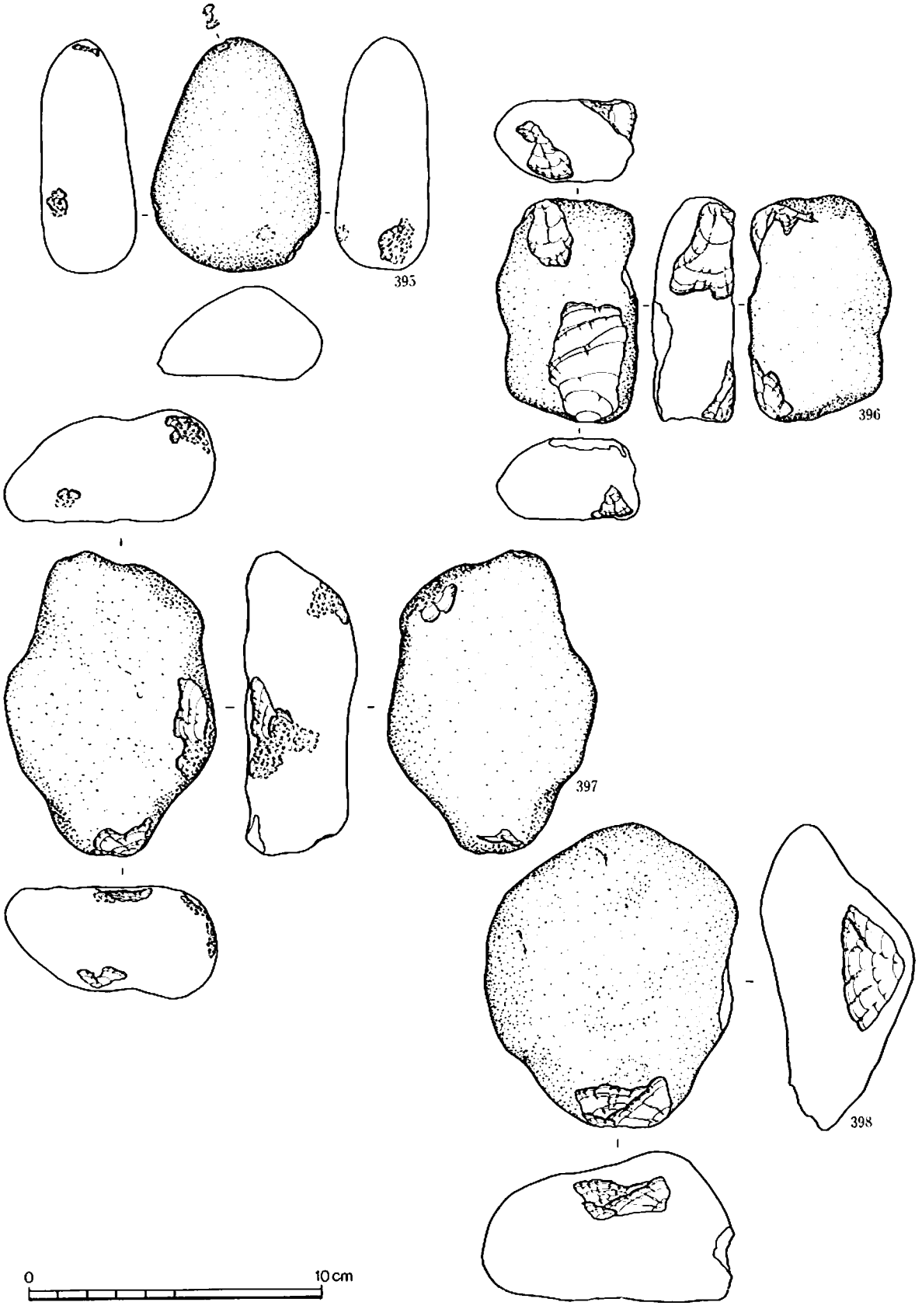
第61図　礫器（5）



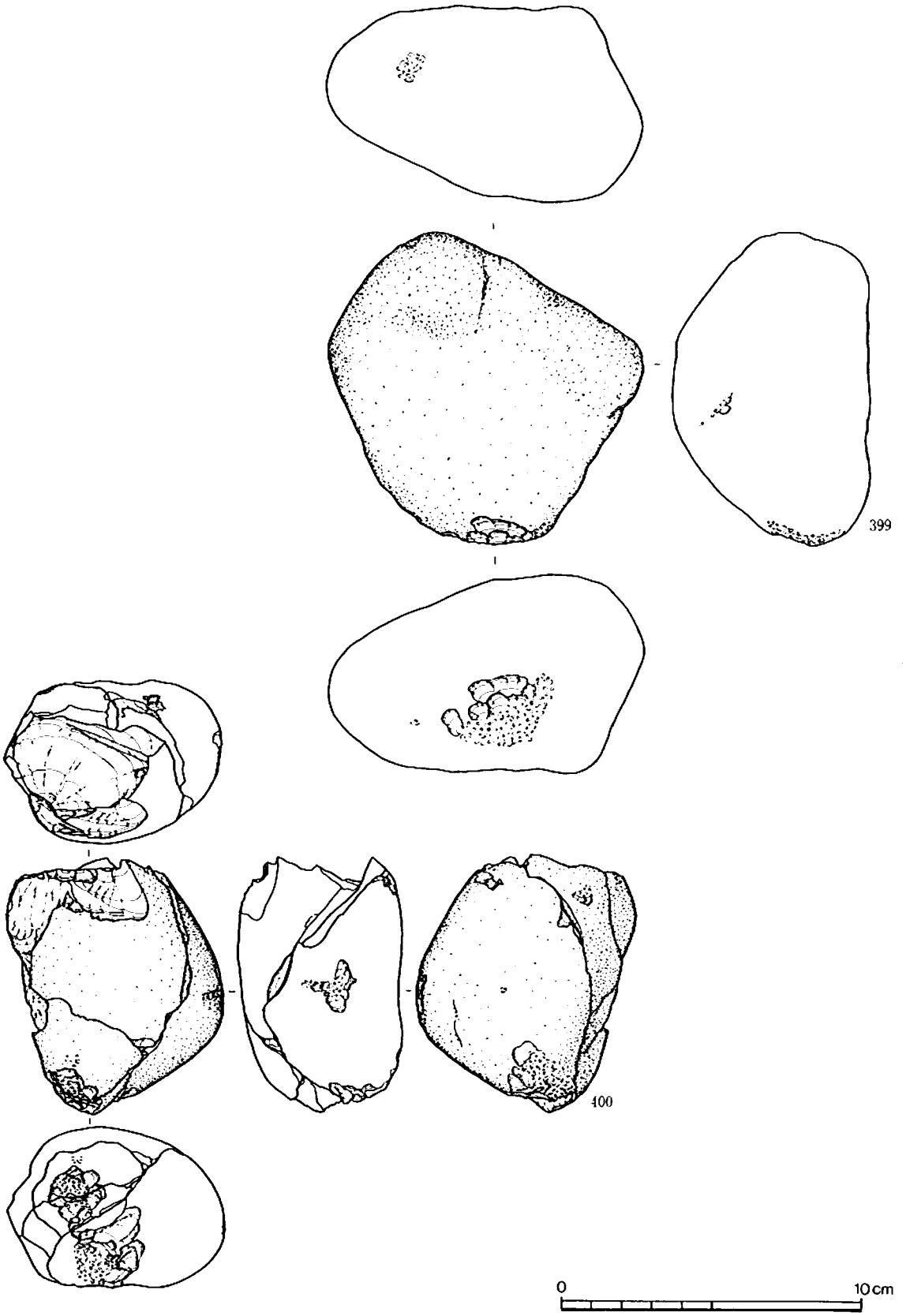
第62図　礫器（6）



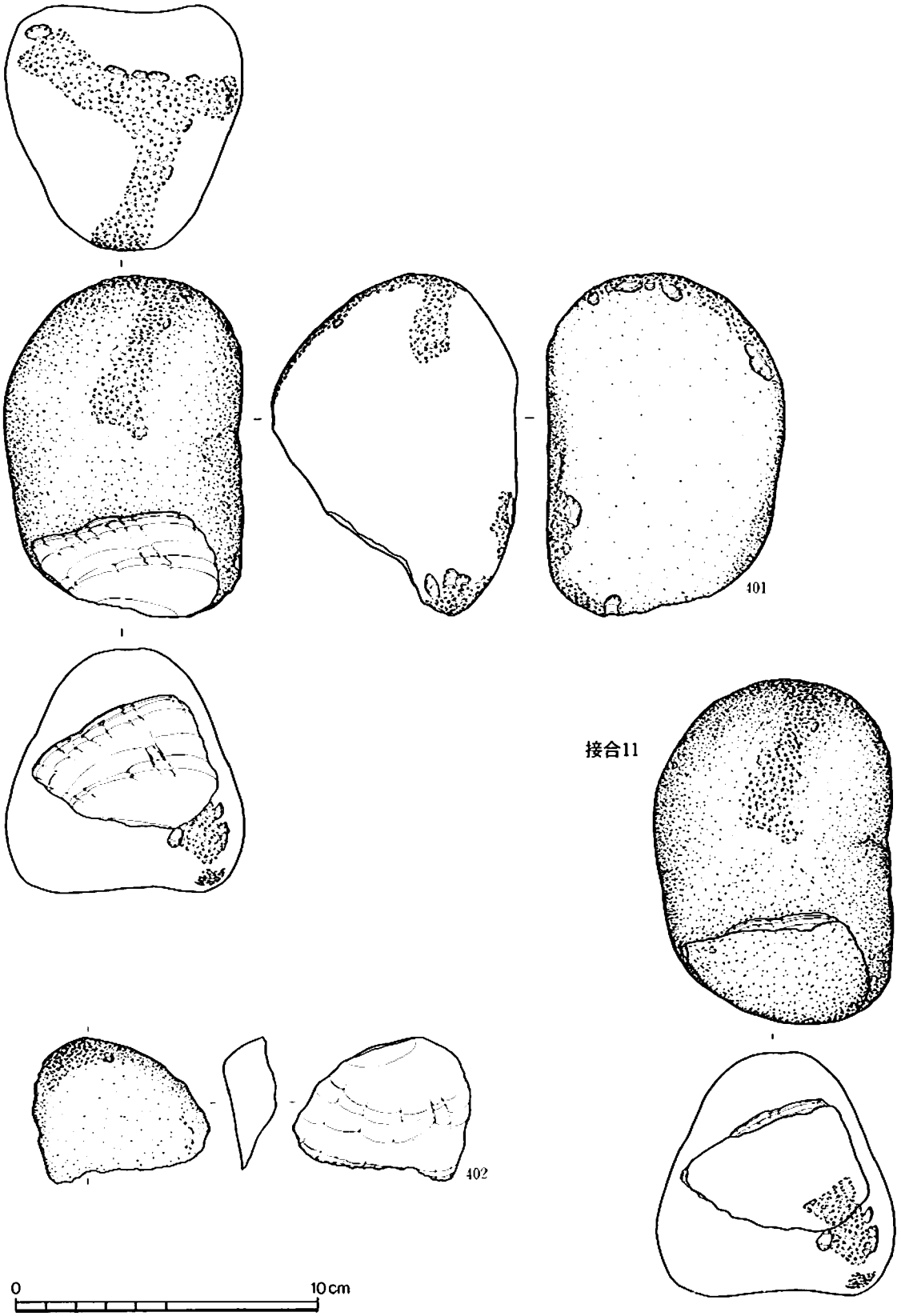
第63図　礫器（7）



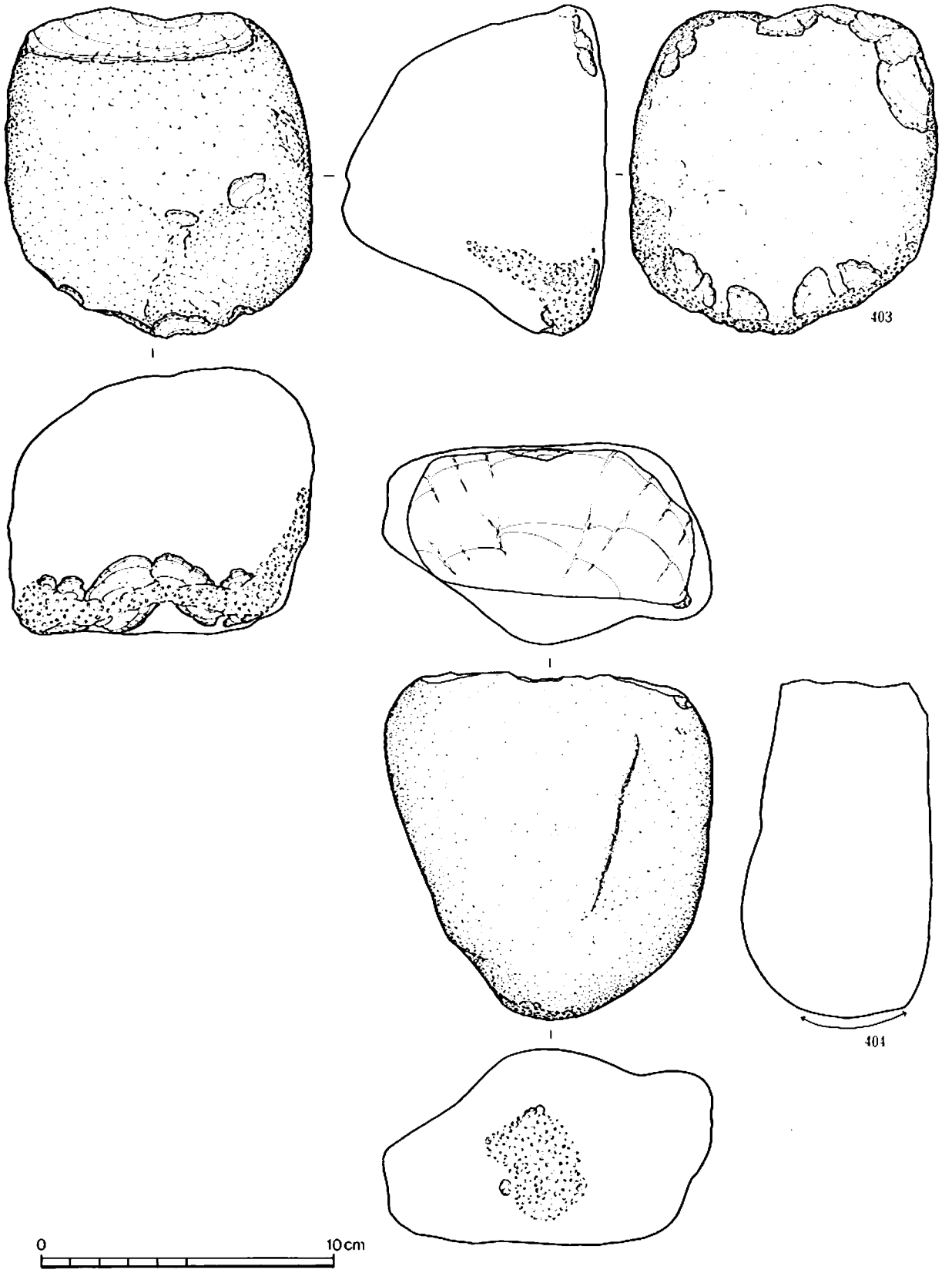
第64図　敲石（1）



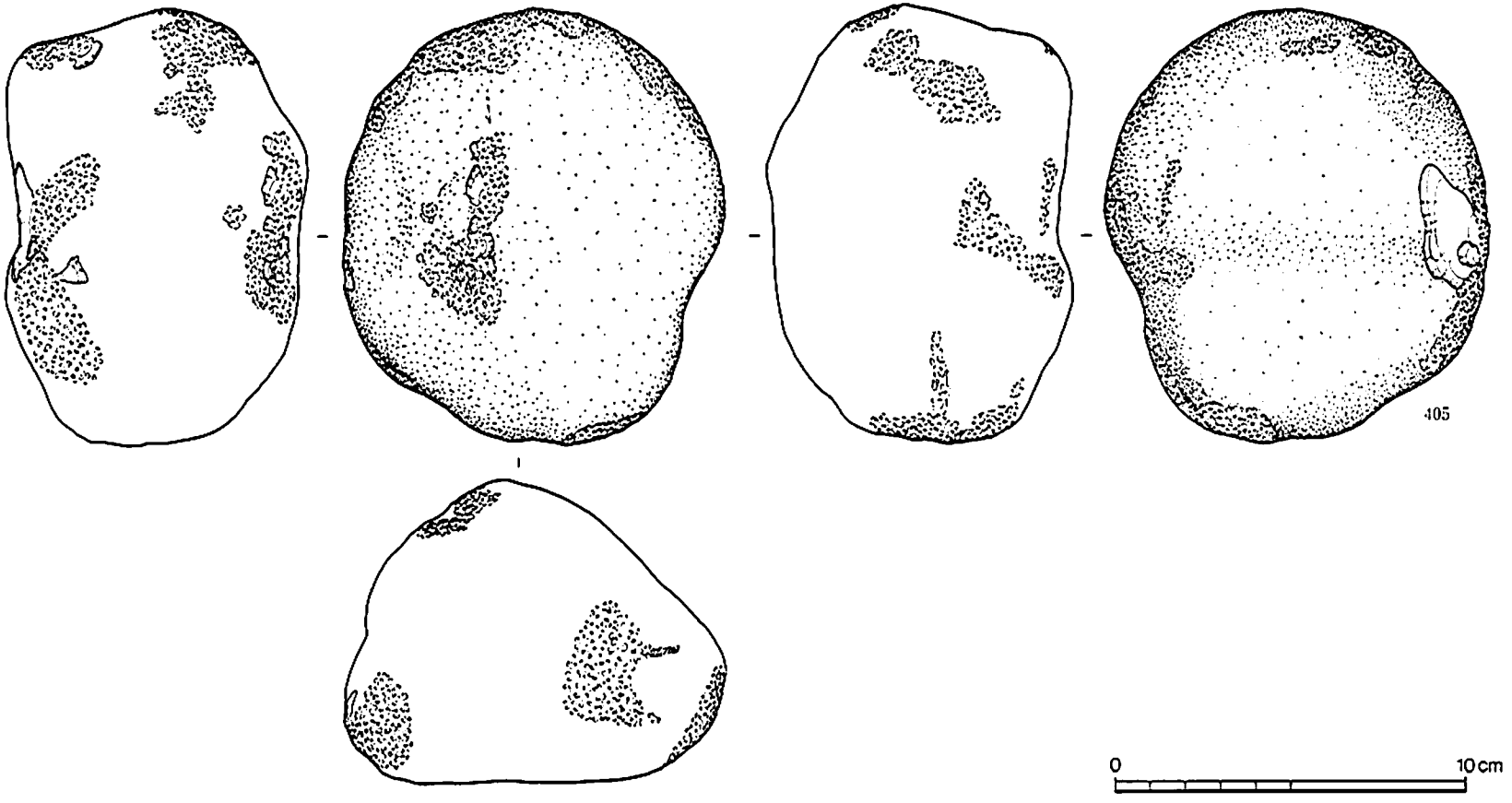
第65図　敲石（2）



第66図　敲石（3）・接合資料11



第67図　敲石（4）



第68図　敲石（5）

あるいは器体をまわるもの（394）も見受けられる。また刃部の角度を観察すると、比較的鋭角なもの（386）からほぼ直角に近いもの（392）までバラエティーに富むが、特に鈍角なものは礫器として扱ってよいものかどうかは疑問が残ると考えられる。また、刃部以外の礫面等に敲打痕のあるもの（386～389、392）があり、これらは礫器としてだけではなく、敲石と同様の用途にも使用されていた可能性が強い。

また385については、石材が砂岩で素材も剥片を用いるなど、スクレイパーとして理解できるものであるかもしれないとも考えられる。しかし、大形で重量感があり、表面を広く礫面が覆い、調整加工も大きいことなど、スクレイパーとしては特異なものであるため、礫器の一種として理解を試みた。

（10）敲石（第64～68図）

礫をほとんど加工することなく、何らかの敲打に使用し、その痕跡をとどめる石器を敲石とし、本石器群からは10点が検出されている。平均重量は755.1ｇで、それらは重量を基に100ｇ台のものを小形、300ｇ以上1 kg未満のものを中形、1 kg以上のものを大形として分類が可能である。使用石材は、400の1点のみ砂岩で、他はすべて粗粒安山岩の礫を用いている。敲打痕を観察すると、一カ所にみられるもの1点（404）、上下など二カ所にみられるもの3点（396、398、399）、三カ所にみられるもの3点（395、397、400）、周縁を使用したもの3点（401、403、405）であり、ほとんどか一端のみの使用ではなく、頻繁に作業面を変えていたことが理解できる。

これら10点と比較的多くの敲石は、小形あるいは中形のものは二、三カ所に敲打痕を有するものであり、周縁を使用したものは401以外は大形のものに限られている。礫器にも敲打痕を有するものが見受けられるが、それらについても739ｇと最軽量の1点（386）を除いた全てが1 kg以上であり、大形の敲石に対応する重量である。また大形の敲石および敲打痕を有する礫器は、共に潰れたような敲打痕を有しており、同様な目的に使用された可能性が高いと思われる。その目的に関しては、例えば植物の加工具としての用途などが考えられるが、理科学分析などにより実証された訳ではなく、今後の課題としておきたい。

接合資料11（第66図）

敲石使用時にその衝撃によって破損した破片と本体の接合である。接合距離は約20cmと比較的至近である。

ナイフ形石器計測表

番号	遺物No	所属	石材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	素材	備考
311	H9-15	2	黒曜石	先端および基部欠損	3.0	1.8	0.5	2.4	刃器	刃部裏面に使用痕

スクレイパー計測表

番号	遺物No	所属	石材	完形度	長さ	幅	厚さ	重量	素材	刃部	備考
312	D9-332	1b	黒色安山岩	完形	6.4	5.8	1.6	64.1	縦長剥片	凸刃、急角度	
313	D9-373	1b	黒色安山岩	完形	4.4	5.5	1.4	32.2	横長剥片	凸刃、急角度	
314a	E8-47	1b	黒色安山岩	完形	8.8	3.1	2.2	56.1	縦長剥片カ	凸刃、急角度	
314b	D9-260	1a									
315	D7-2	1c	ホルンフェルス	尾部欠損	4.7	5.8	1.5	44.7	横長剥片	二ケ所、急角度、微細	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　材	刃　部	備　考
316	E8-120	1b	黒色安山岩	完形	4.0	3.8	1.6	21.6	剥片	尖刃、急角度	
317	D9-79	1a	黒色安山岩	尾部欠損	7.1	5.9	1.4	60.6	縦長剥片	直刃、鋸歯状	
318	D9-138	1a	黒色安山岩	完形	5.6	4.2	1.4	30.6	縦長剥片	直刃、鋸歯状	
319	E8-68	1b	黒色安山岩	完形	3.1	3.0	0.7	5.7	横長剥片	直刃、急角度	
320	E7-63	1c	黒色安山岩	上半部欠損	4.5	5.9	2.3	46.6	剥片	尖刃、鋸歯状	
321	D9-124	1a	黒色安山岩	完形	7.3	4.6	2.1	45.4	縦長剥片	ランダムな加工	
322	D8-169	1b	黒色安山岩	完形	4.8	4.8	2.3	42.0	横長剥片	ランダムな加工	
323	D9-101	1b	黒色安山岩	完形	5.8	3.4	1.2	17.0	縦長剥片	直刃、ランダムな加工	
324	E8-174	1b	黒色安山岩	完形	4.2	3.7	1.5	20.0	石核	直刃、微細加工	
325	H8-102	2	黒色安山岩	一部残	3.3	3.2	1.2	14.0	縦長剥片カ	直刃、鋸歯状	
326	H8-23	2	黒色安山岩	上半部欠損	2.1	2.5	1.2	5.4	縦長剥片カ	直刃	
327	C9-16	1a	黒色安山岩	一部残	2.5	1.3	0.7	2.5	剥片	直刃	
328	C9-33	1a	黒色安山岩	一部残	1.7	4.4	1.2	6.1	剥片	ランダムな加工	
329	D8-142	1c	黒色安山岩	一部残	2.1	1.2	1.1	2.1	剥片	微細加工	

楔形石器計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　材	備　考
330	D9-78	1a	黒耀石 f	完形	2.2	1.4	1.0	2.5	剥片	
331	H7-1	2	チャート	完形	2.4	3.7	1.0	8.7	剥片	

二次加工痕を有する剥片計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　材	備　考
332a	D9-286	1b	黒色安山岩	完形	4.0	5.1	2.2	25.3	横長剥片	欠損面に加工痕
332b	E8-20	1c								
333	D9-115	1a	黒色安山岩	完形	6.9	4.0	1.6	40.3	縦長剥片	
334	E9-130	1b	黒色安山岩	左半欠損	3.8	2.7	1.5	13.3	横長剥片	
335	D8-50	1b	黒色安山岩	左端欠損	3.9	5.6	1.0	20.7	横長剥片	

使用痕を有する剥片計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　材	備　考
336	D8-126	1b	黒色安山岩	完形	5.7	3.1	1.1	12.3	縦長剥片	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　　材	備　　考
337	D8-21	1b	黒色安山岩	尾部欠損	4.0	5.0	1.6	22.9	横長剥片	
338	E7-5	1c	黒色安山岩	右端欠損	5.0	5.6	1.6	37.1	横長剥片	
339	D9-278	1a	黒色頁岩	完形	3.3	2.6	0.7	4.9	縦長剥片	
340	E8-11	1b	珪質頁岩	尾部欠損	6.3	4.2	1.4	29.3	縦長剥片	
341	D9-126	1a	黒色安山岩	左・尾端欠	5.9	2.6	0.8	8.3	縦長剥片	
342	D8-133	1b	黒色安山岩	下半部欠損	3.7	2.5	1.1	9.3	縦長剥片	
343	E9-121	1b	黒色安山岩	下半部欠損	4.1	3.5	1.1	13.9	縦長剥片	
344	I8-9	2	黒色安山岩	尾端欠損	4.1	3.9	1.3	13.2	縦長剥片	

剥片計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　　材	備　　考
345	D8-70	1c	黒色安山岩	完形	9.5	5.9	3.3	148.2	縦長剥片	
346	D9-98	1b	黒色安山岩	完形	4.5	2.3	0.9	7.9	縦長剥片	
347	E8-113	1c	黒色頁岩	完形	5.9	2.5	1.8	20.0	縦長剥片	
348	C9-22	1a	黒色頁岩	完形	6.0	5.1	1.5	30.3	縦長剥片	
349	D8-3	1b	黒色安山岩	完形	6.0	4.4	1.3	24.2	縦長剥片	
350	D9-65	1a	黒色安山岩	完形	4.3	3.8	1.5	15.0	縦長剥片	
351	D9-53	1b	黒色安山岩	下半部欠損	4.9	4.7	1.2	30.4	縦長剥片	
352	D8-82	1b	黒色安山岩	完形	5.4	3.4	1.2	19.1	縦長剥片	
353	H8-89	2	黒色安山岩	完形	4.4	3.8	1.3	16.6	横長剥片	
354	D8-122	1b	黒色安山岩	完形	5.6	4.8	2.2	45.9	横長剥片	
355	E9-72	1b	黒色安山岩	完形	4.4	5.0	1.8	19.8	横長剥片	
356a	D8-85	1b	黒色安山岩	完形	4.7	3.7	0.9	9.1	横長剥片	
356b	D8-130	1b								
357	D8-36	1c	黒色安山岩	右端欠損	4.5	4.4	1.1	20.4	横長剥片	
358	D9-210	1a	黒色安山岩	完形	1.2	4.0	0.7	5.7	横長剥片	
359	C9-27	1a	黒色頁岩	完形	4.8	3.8	0.9		横長剥片	
360	E9-92	1b	黒色安山岩	尾端欠損	3.6	4.3	1.5	16.7	横長剥片	
361	H8-16	2	黒色安山岩	左端欠損	4.5	5.2	1.9	35.7	横長剥片	
362	E8-16	1c	黒色安山岩	完形	4.8	5.8	1.6	33.8	横長剥片	
363	E8-188	1b	黒色安山岩	左・右欠損	5.6	4.8	1.4	29.2	横長剥片	

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　　材	備　　考
364	D9-81	1b	黒色安山岩	右・尾欠損	4.0	4.2	1.2	14.4	横長剥片	
365	D8-100	1c	黒色頁岩	右半欠損	3.2	3.4	0.9	11.1	横長剥片	
366	D8-101	1c	黒色頁岩	右半欠損	4.5	5.0	0.9	15.5	横長剥片	
367	D8-26	1b	黒色頁岩	左・右欠損	5.0	4.8	1.6	29.7	横長剥片	
368	E9-105	1b	黒色安山岩	上半部欠損	4.2	5.1	1.9	35.9	縦長剥片	
369	E8-24	1b	黒色安山岩	完形	3.3	4.9	2.4	32.2	横長剥片	
370	D8-32	1c	黒色安山岩	完形	4.3	8.1	3.7	92.2	横長剥片	

石核計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	備　　考
371	D9-325	1a	黒色安山岩	サイコロ状	3.8	3.9	3.4	53.3	
372	D9-187	1a	黒色安山岩	サイコロ状	4.7	5.5	3.2	90.9	
373	D9-364	1a	黒色頁岩	チッパー状	4.8	8.2	6.9	301.9	339、359と同一個体
374	D7-1	1c	黒色安山岩	亀甲状	2.7	7.2	4.5	68.3	
375a	D8-49	1b	黒色安山岩	亀甲状	6.1	7.7	2.7	106.7	
375b	D8-22	1b							
376	D8-8	1b	黒色安山岩	亀甲状	4.0	8.9	2.7	68.0	縦長剥片を素材とする

接合資料計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	器　　種	備　　考
(接合　7)					6.3	3.5	2.7	32.1		
377	E8-13	1b	黒色安山岩	尾部欠損	5.0	1.9	1.1	6.9	剥片	
378	D9-309	1b		上半部欠損	5.9	3.5	2.2	25.2	石核	
(接合　8)					6.7	4.4	2.3	49.7		
379	C9-37	1a	黒色安山岩	完形	6.7	2.8	1.8	30.7	剥片	
380	D9-129	1a		完形	4.5	3.9	1.4	19.0	剥片	
(接合　9)					6.1	6.0	2.7	39.9		
381	C9-1	1a	黒色安山岩	完形	5.1	4.4	2.0	22.4	剥片	
382a	D9-167	1b		尾端欠損	2.6	2.9	1.4	9.6	使用痕を有する剥片	
382b	D9-194	1b			2.8	4.0	1.4	7.9	使用痕を有する剥片	
(接合　10)					3.0	5.4	2.9	44.1		

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	器　　種	備　　考
383	E8-119	1b	黒色安山岩	左半欠損	3.7	3.4	1.5	15.5	剥片	
384	E9-56	1b		完形	3.0	5.4	2.9	28.6	石核	
(接合　11)					11.2	7.9	9.1	928.8	敲石	
401	D9-357	1a	粗粒安山岩	完形	11.2	7.9	9.1	884.5	礫	
402	D9-154	1a		完形	4.8	5.8	1.7	44.3	砕片	

礫器計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　　材	刃　部	備　　考
385	E8-258	1c	砂岩	完形	11.3	9.2	4.1	414.4	剥片		
386	D9-339	1b	粗粒安山岩	完形	10.5	10.1	6.4	739.4	礫		
387	D9-347	1b	粗粒安山岩	完形	13.1	10.0	6.6	1,277.7	礫		
388	D9-353	1b	粗粒安山岩	刃部欠損	9.4	15.0	7.6	1,272.1	礫		
389	D9-363	1a	粗粒安山岩	完形	13.7	11.3	6.1	1,162.3	礫		
390	E8-252	1b	粗粒安山岩	完形	14.0	9.6	6.0	991.0	礫		
391	F7-5	1c	粗粒安山岩	完形	13.8	14.8	6.5	1,564.0	礫		
392	C9-56	1a	粗粒安山岩	完形	11.9	13.0	6.9	1,318.2	礫		
393	D9-342	1b	粗粒安山岩	完形	15.3	14.8	5.7	1,755.0	礫		
394	C9-55	1a	粗粒安山岩	完形	14.5	11.9	6.0	1,177.2	礫		

敲石計測表

番号	遺物No	所属	石　材	完形度	長さ	幅	厚さ	重　量	素　　材	敲　石	備　　考
395	I 9-32	2	粗粒安山岩		8.0	5.7	3.2	158.9	礫	三ケ所	
396	D9-366	1a	粗粒安山岩		7.2	4.8	2.3	137.5	礫	上・下端	
397	E8-259	1c	粗粒安山岩		10.4	7.2	3.8	325.1	礫	三ケ所	
398	E8-257	1c	粗粒安山岩		10.7	8.6	5.2	470.8	礫	二ケ所	
399	D9-337	1b	粗粒安山岩		10.4	10.6	6.6	820.8	礫	二ケ所	
400	E8-81	1c	砂岩		8.5	7.3	5.4	403.6	礫	三ケ所	
403	D9-345	1b	粗粒安山岩		11.3	10.5	9.1	1,378.7	礫		
404	E8-260	1c	粗粒安山岩		11.9	11.2	6.7	1,312.1	礫		
405	E8-251	1b	粗粒安山岩		12.6	10.9	8.7	1,615.0	礫		

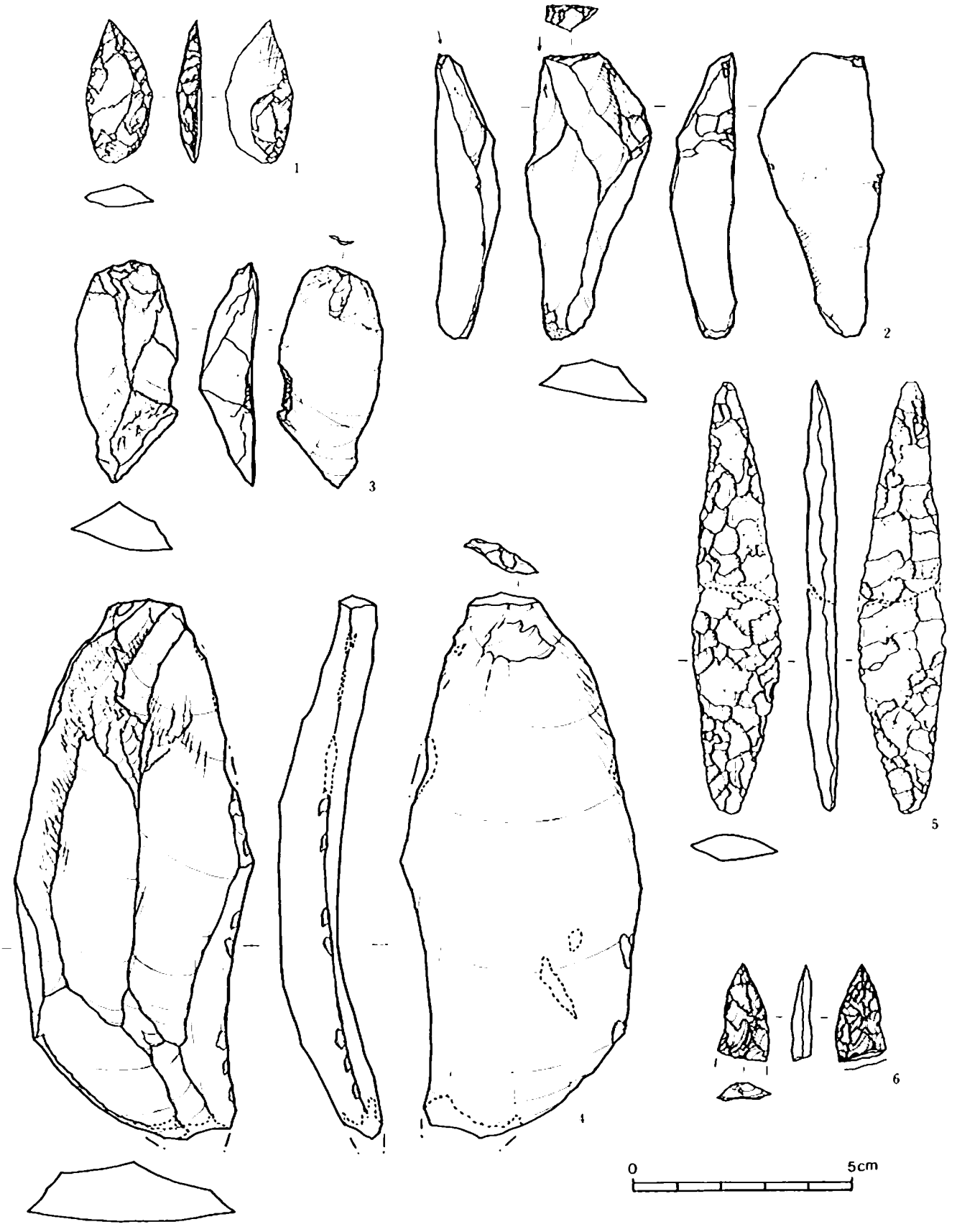
3．旧石器調査区外出土の遺物（第69図）

本遺跡全体では、まとまった出土状況を示さないものの、旧石器時代調査区以外の他時期の遺構や包含層からも、当該時期の石器が数点出土している（1～4）。また、発掘調査以前に遺跡内および隣接地で採集された遺物の中にも、旧石器時代の石器と考えられるものが数点認められる（5、6）。これらの資料は、必ずしも出土状況の良好なものとは言い難いが、本遺跡の細石器文化以外の時期に関する情報としては重要なものであると考えられる。

1は、旧石器調査区の北方約160mの地点で、縄文時代包含層中から出土した木葉形の小形槍先形尖頭器である。透明でやや灰色味がかった良質な黒耀石の横長剥片を素材として、表面周辺と裏面の一部に調整加工が施された周辺加工のものであり、そのうち裏面に施された調整加工は、素材剥片のバルブの膨らみを除去するためのものと考えられる。長さ3.3cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ2.27gを測る。2は、調査区の北約70mに位置する中世堀跡（SD01）覆土出土の彫器である。凝灰岩の石刃の下半部を素材として、断ち切るように調整加工を施して打面を設定し、その左端を打点として一条の彫刃面を作出している。また、右側縁の一部および左下部の一部に調整加工と考えられる加工痕が観察される。長さ6.5cm、幅2.9cm、厚さ1.5cm、重さ16.6gを測る。また本遺跡からは、旧石器時代の石刃と考えられるものも数点出土している。3は縄文時代中期の竪穴式住居跡（SI09）の覆土から出土した赤色チャート製の中形石刃である。表面の状況から、主要剥離面と同一方向の連続した石刃剥離工程から得られたものであることが伺える。頭部調整は顕著で、打面を小さく作出している。長さ5.1cm、幅2.4cm、厚さ1.3cm、重さ10.1gを測る。4は、2同様SD01覆土中より出土した、灰白色に風化した黒色頁岩製の大形石刃である。表面の剥離面は、主要剥離面と同一の方向から剥離されており、連続した石刃剥離工程中から剥離されたことが判る。打面調整が施されているものの、頭部調整は顕著ではない。なお、右側縁には不連続に小剥離痕が観察される。長さ13.5cm、幅5.5cm、厚さ2.4cm、重さ101.1gを測る。その他、1の東方約20mの縄文時代包含層より黒色頁岩製の石刃下半部が出土し、また調査区北西約50mの縄文時代前期の竪穴式住居跡（SI08）覆土から、石刃ではないが、水和層の状況から当該期のものと考察される黒耀石製の剥片の下半部が出土している。

また、本遺跡および周辺地では以前から地域住民により数多く遺物の表採がなされていたことは第II章で若干触れたが、それらの中で旧石器時代調査区の谷を隔てた西側の台地南東部より採集された遺物の一部を阿久沢恭二氏より当教育委員会に寄贈していただいた。その大半は縄文時代に属すると考えられる石鏃や剥・砕片であるが、旧石器時代あるいは縄文時代への過渡期の槍先形尖頭器と思われるものが2点含まれている。5は、黒色安山岩製で細身の柳葉形の槍先形尖頭器である。素材の状況を伺い知ることはできないが、器体の両面に入念な調整加工が施されている。器体中央やや下部にその最大幅がある細身の形状を呈しているため、旧石器時代から縄文時代への過渡期、縄文時代草創期に属するものと考えるのが妥当であろう。中央の一部を欠失するが、長さ9.9cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、重さ13.4gを測る。6は、乳白色の良質な黒耀石を用いた槍先形尖頭器の先端部である。調整加工が両面に施され、素材の状況は不明である。現存長は2.2cmであるが、本来は5cm程度の中形のものであったと推察される。現存幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.1gを測る。

これら旧石器時代調査区以外から出土した石器は、必ずしもブロックを形成するようなまとまりを有しておらず、また、単一の時期に帰属するものとは考えられない。しかし、これらの資料の存在により、細石器文化期に限らず旧石器時代から縄文時代草創期にわたるいくつかの時期に、本遺跡および周辺部を含めた広い範囲が、人々の生活の舞台として利用されていたと理解できる。



第69図　旧石器調査区外出土の石器

第Ⅳ章　成果と問題点

旧石器時代最終末期にあたる細石器文化は、その製作技術から南北二つの系統に大別されることは広く知られている。群馬県はこの両系統の交差点とも言うべく、今までに南北それぞれの系統に属する遺物が出土している。

北方系のものとしては、その代表的なものとして、ホロカ型の一種と見られる本村苗ケ島の桝形遺跡や同柏倉の柏倉芳見沢遺跡、富士見村龍ノ口遺跡があり、また湧別技法による細石核や細石刃を有するものとしては前橋市頭無遺跡や子持村押手遺跡、笠懸町稲荷山遺跡などが挙げられる。また、南方からのものとしては、相模野台地において堤隆氏のいう「船野型」の一群に近い新里村峯岸遺跡、そして本報告によるいわゆる野岳・休場型の市之関前田遺跡がある。

本遺跡発掘調査以前にも、いわゆる野岳・休場型の細石核や細石刃が隣接の大胡町や粕川村、新里村など赤城南麓の数遺跡で表採されていたが、文化層としてのまとまりをもって検出されたのは本遺跡が初めてであり、その調査意義は大きいと考えられる。特にその出土層序については、既に自然理科学的検証が得られていた頭無遺跡など北方系のものと対比することにより、細石器文化の層位的研究が進んでいる相模野台地と同様に南方系の文化が先行し、北方系のものが後出するといった成果を得ることができた。群馬県内のローム層中には鍵層となる浅間板鼻黄色軽石(As－YP)、浅間白糸軽石(As－SP)、浅間板鼻褐色軽石(As－BP)群などの火山灰があるが、これらは理科学的分析によっておおよその降灰年代が与えられている。本石器群の出土層位はAs－SP直下辺りに、また北方系の柏倉芳見沢遺跡や頭無遺跡の石器出土層位はAs－YP直下に比定されるが、降灰年代により石器群に実年代を与えることも大略可能であると言えよう。

また本稿でも述べたように、本石器群は細石刃関連の遺物は搬入品である黒耀石を使用し、スクレイパーなど他の石器は在地系の黒色安山岩や黒色頁岩を主に用いるというように、その器種により使用石材を選別していることは明白である。このような石材選定の在り方は、相模野台地における藤沢市代官山遺跡第Ⅲ文化層や大和市上草柳第3地点中央遺跡第Ⅰ文化層、中部高地における矢出川第Ⅰ遺跡などに類似性を求めることができ、南方系の文化の中でも特に古い段階に位置付けられよう。また、311のナイフ形石器については異論を唱える方も多いと思われるが、同一母岩の遺物が本石器群には一切無く、また先行する他時期の文化層も全く認められないため、このナイフ形石器は前記の上草柳第3地点中央遺跡第Ⅰ文化層や矢出川第Ⅰ遺跡と同様、本石器群に組成されるものと考えられる。

前述のように、群馬県内では南北両系統の細石器文化が検出されているが、特に宮城村内においてはホロカ型の一種である桝形遺跡と柏倉芳見沢遺跡、そして野岳・休場型の市之関前田遺跡と一村に両系統の遺跡が存在している。これらの遺跡はいずれも河川沿いの比較的痩せた台地上の平坦面に占地するが、赤城山南麓に関していえば、ホロカ型の遺跡は標高400m前後の比較的高所に位置し、野岳・休場型の遺跡は標高300m付近に位置する傾向が窺え、特に市之関前田遺跡と柏倉芳見沢遺跡は同一河川の右岸に標高差をもって占地している。これは、頭無遺跡や荒屋遺跡といった湧別技法のものが比較的低所の河岸段丘上に好んで占地するように、生態系（動・植物相）の違いが一つの要因として指摘されるが、本遺跡および柏倉芳見沢遺跡において行った理科学分析においてはこれと言った差異が認められていない。しかし、遺跡立地については今後当時の生活環境の復原と併せて考えて行かなければならない課題のひとつであろう。

また、もう一つの問題点として、ホロカ型と湧別技法による細石器文化の編年的位置付けがあげられる。

双方とも出土層位はAs－YPの直下にあるが、前述のように立地環境の違いにより同一遺跡において層位的に出土した事例が無く、両者併存の可能性さえ窺える状況である。しかし、本村におけるホロカ型の石器群は「桙形タイプ」と呼称できるほど在地化が進んでおり、純粋に東北系の頁岩を用いる湧別技法による頭無遺跡などと相互に併存し影響を与えあっていたとは考え難い。例えば南関東の相模野台地において、桙形タイプに類似する大和市下鶴間長堀遺跡と、珪質凝灰岩を主石材として使用する点などからみて荒屋タイプと考えることもできる上和田城山遺跡の層位的出土例から考えると、型式学的には湧別技法によるもののほうが一段階新しいものと考える方が妥当であるとも思われる。しかし、ホロカ型の石器技法が「桙形タイプ」のように完全に在地化していくためにはある程度の年数を経ているものと考えられ、また青森県東津軽郡蟹田町の大平山元Ⅱ遺跡を始めとした東北地方の遺跡においては、逆にホロカ型が新しくなるといった報告事例も多く、一概に型式のみで編年を語ることは不可能であろう。詳しくは柏倉芳見沢遺跡の報告書に記載する予定であるが、今後これらの事例を踏まえたうえでのさらなる研究が必要であろう。

今後資料の増加により、石器群の内容や編年的位置付けなどより明確な結論が示されていくものと思われるが、いずれにせよ細石器文化と呼称される旧石器時代最終末の一つの区分の中で、実際には幾つもの特徴的な石器文化が存在し移動していたわけであり、そのような変革の時期に赤城山南麓を中心としたこの地域が、多少の時間差はあったとしても、南北両系統の多岐に亙る文化の交差点として重要な役割を担っていたと考えられよう。

引用・参考文献

相田　薫他　1986『月見野遺跡群上野遺跡第１地点』大和市教育委員会

相沢忠洋・関矢　晃　1981『桜形遺跡』宮城村教育委員会

麻生　　優　1965「細石器文化」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』

安蒜　政雄　1979「日本の細石核」『駿台史学』第47号

　　1982「日本の細石器文化」『駿台史学』第60号

上田　薫・砂田佳弘　1986「代官山遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11

後野遺跡調査団編　1976『後野遺跡』勝田市教育委員会

織笠　　昭　1983「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集１―』

　　1984「細石器文化組成論」『駿台史学』第60号

川口　　潤　1990「埼玉県白草遺跡の細石刃文化」『考古学ジャーナル』No. 306

群馬県史編纂室　1988『群馬県史　資料編１』群馬県

小林　達雄　1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』No. 16

子持村史編纂室　1987『子持村史　上巻』子持村

杉原荘介・小野真一　1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』第３巻第２号

鈴木　次郎　1983「細石器（本州地方）」『季刊考古学』第４号

　　1989『相模野149遺跡』大和市教育委員会

鈴木次郎・矢島国雄　1988「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古』第24号

鈴木次郎・白石浩之　1980『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会

鈴木　忠司　1971「野尻遺跡における細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』第23巻第８号

　　1983「日本細石刃文化の地理的背景―先土器時代遺跡論の試み―」『古代学叢論』

　　1988「上野第Ⅱ文化層の位置づけをめぐって」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会

砂田　佳弘　1988「相模野の細石器」『神奈川考古』第24号

芹沢　長介　1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』第１巻第５号

戸沢　充則　1964「矢出川遺跡」『考古学集刊』第２巻第３号

　　1979「日本における細石器の研究」『駿台史学』第47号

堤　　隆他1983『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大和市教育委員会

　　1984『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書Ⅱ・Ⅲ』大和市教育委員会

堤　　隆　1987「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』第13号

橋本　勝雄　1989「東日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』No. 306

原田恒弘・中束耕志　1985「勢多郡富士見村龍ノ口遺跡試掘調査報告（１）」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第１号

細野　高伯　1990「市之関前田遺跡の細石刃文化」『第3回長野県旧石器時代文化研究交流会発表要旨』

前原　豊・関根吉晴　1988「群馬県柳久保遺跡群頭無遺跡」『第2回東北日本の旧石器文化を語る会』

宮城村史編纂委員会　1973『宮城村史』宮城村

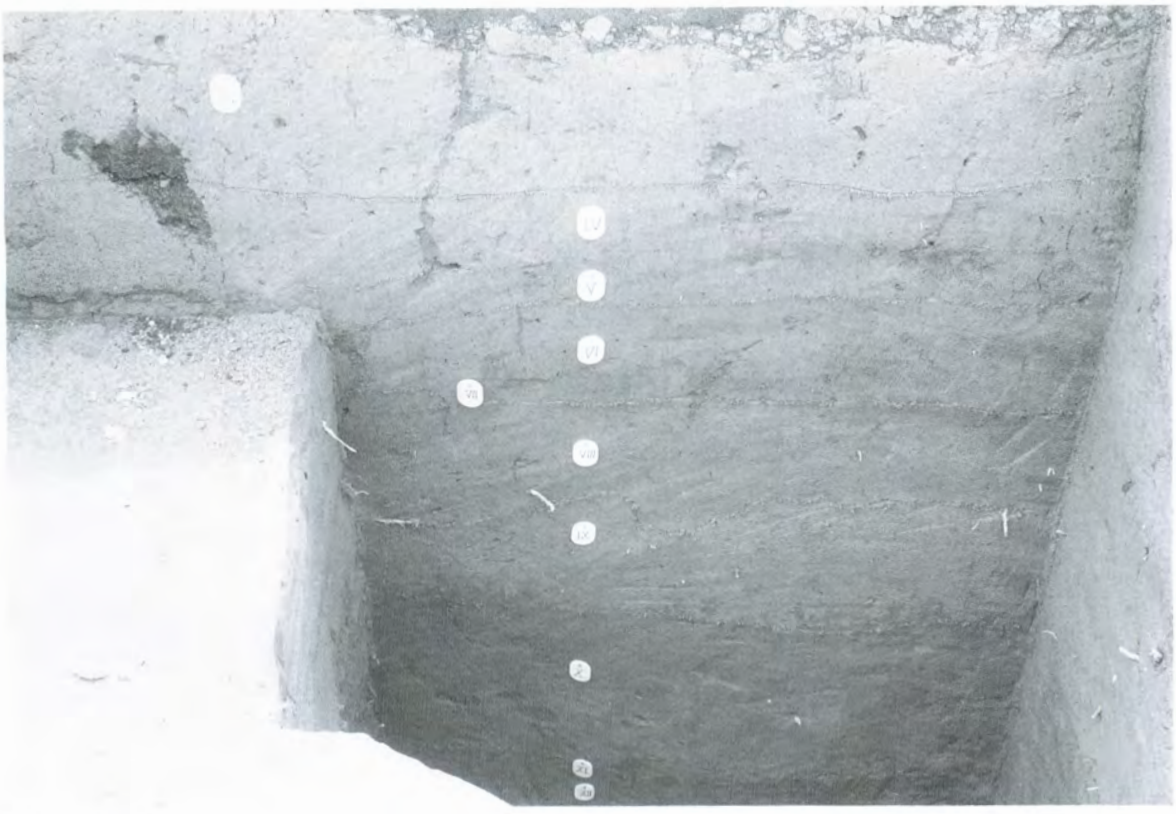
三宅　徹也　1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館

明治大学考古学研究室編　1982『報告・野辺山シンポジウム1981』

若月　省吾　1983「稲荷山遺跡、和田遺跡」『笠懸村史　別巻１』笠懸村

写　真　図　版

上空より見た市之関前田遺跡（右下が旧石器調査地点）



調査区土層断面

板鼻褐色軽石層上の炭化物・焼土

第 1 ブロック遺物出土状況　（北から）

第 1 ブロック遺物出土状況　（西から）

第 1 ブロック礫全景　　（北から）

第 1 ブロック礫中心部　　（北から）

第１ブロック調査風景　（南から）

第１ブロック礫全景　（南から）

第 2 ブロック遺物出土状況　（西から）

第 2 ブロック礫中心部　（東から）

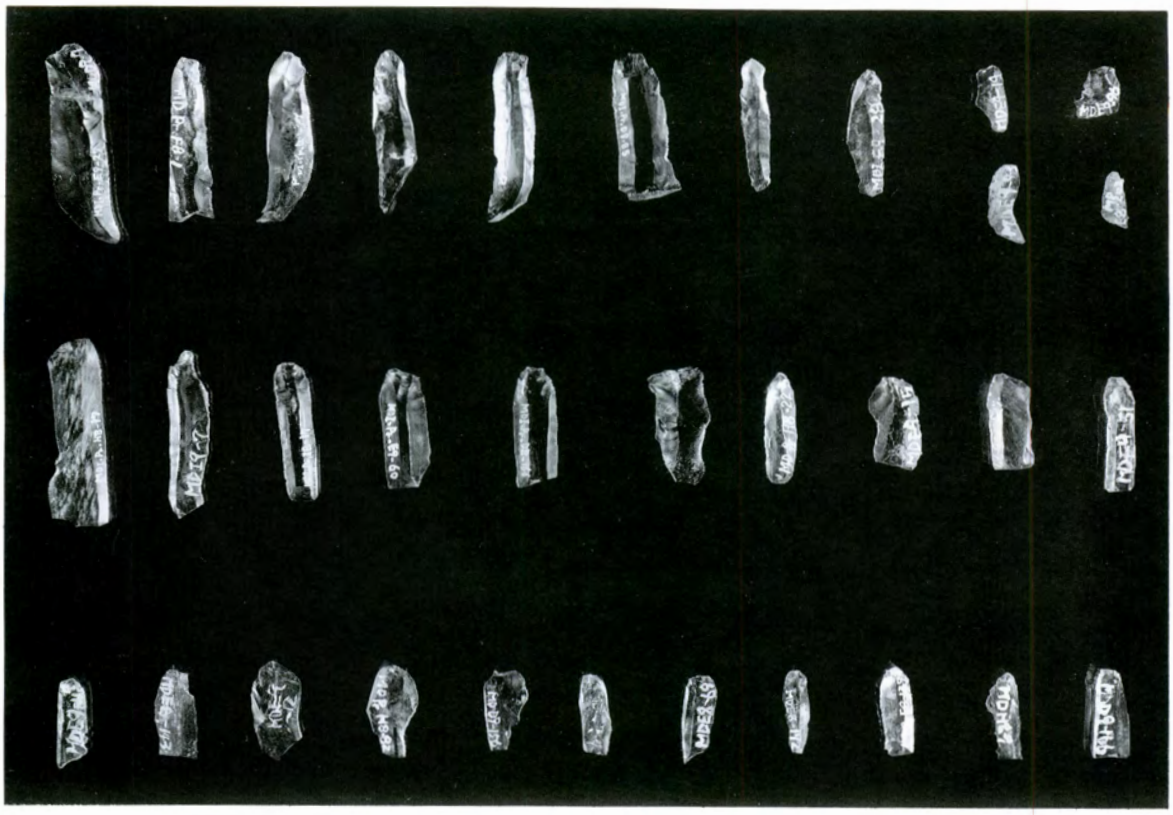
細石核出土状況

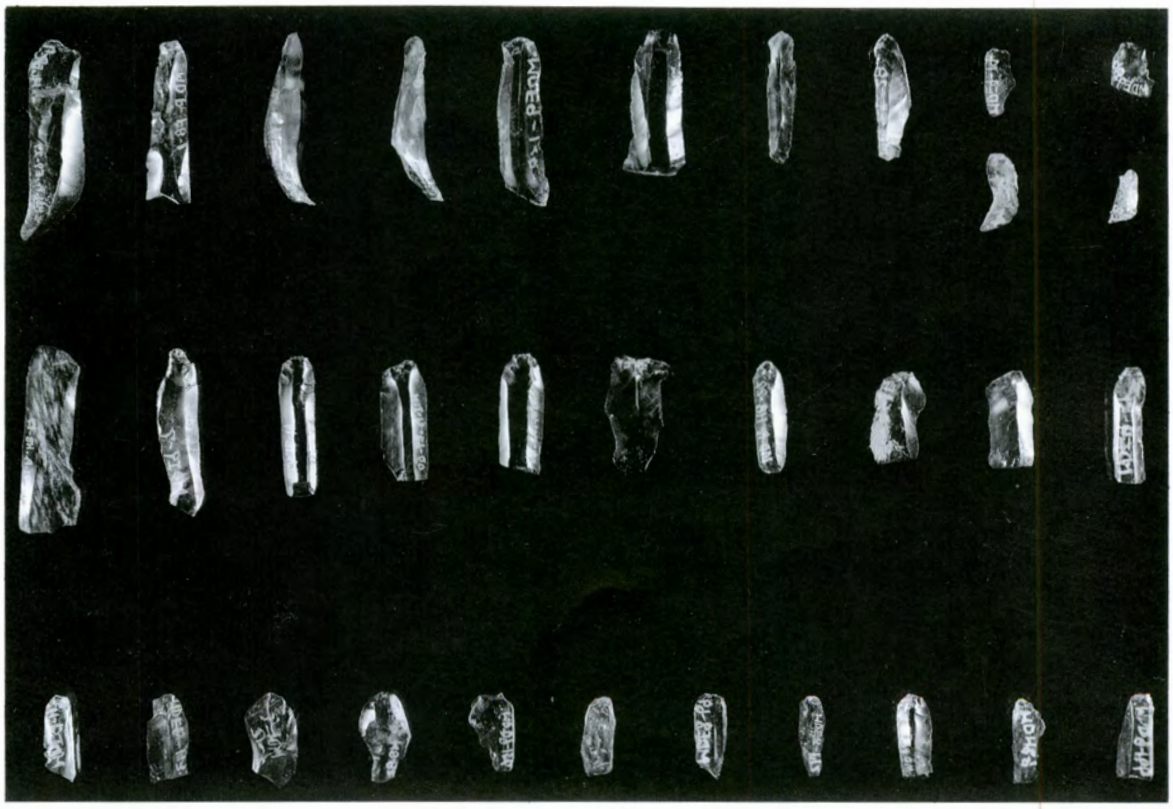
細石核出土状況

ナイフ形石器出土状況

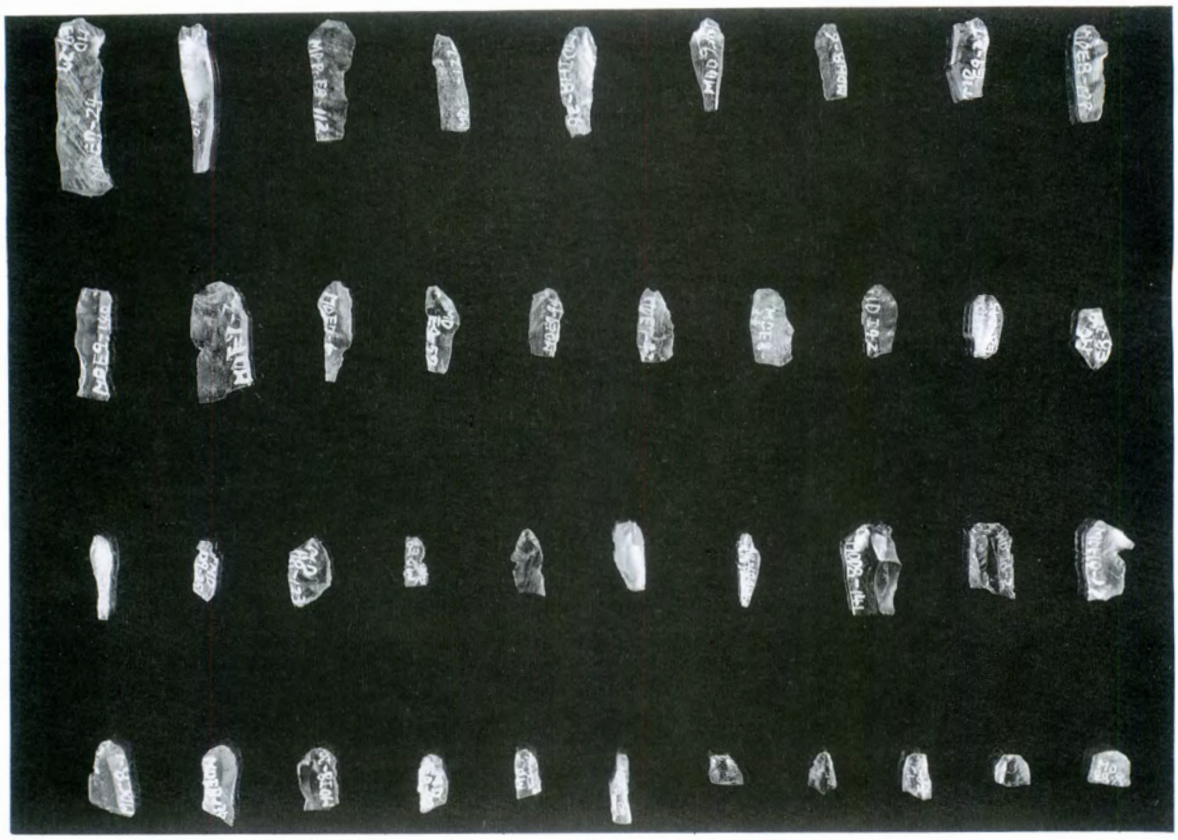
調査風景　　（北から）

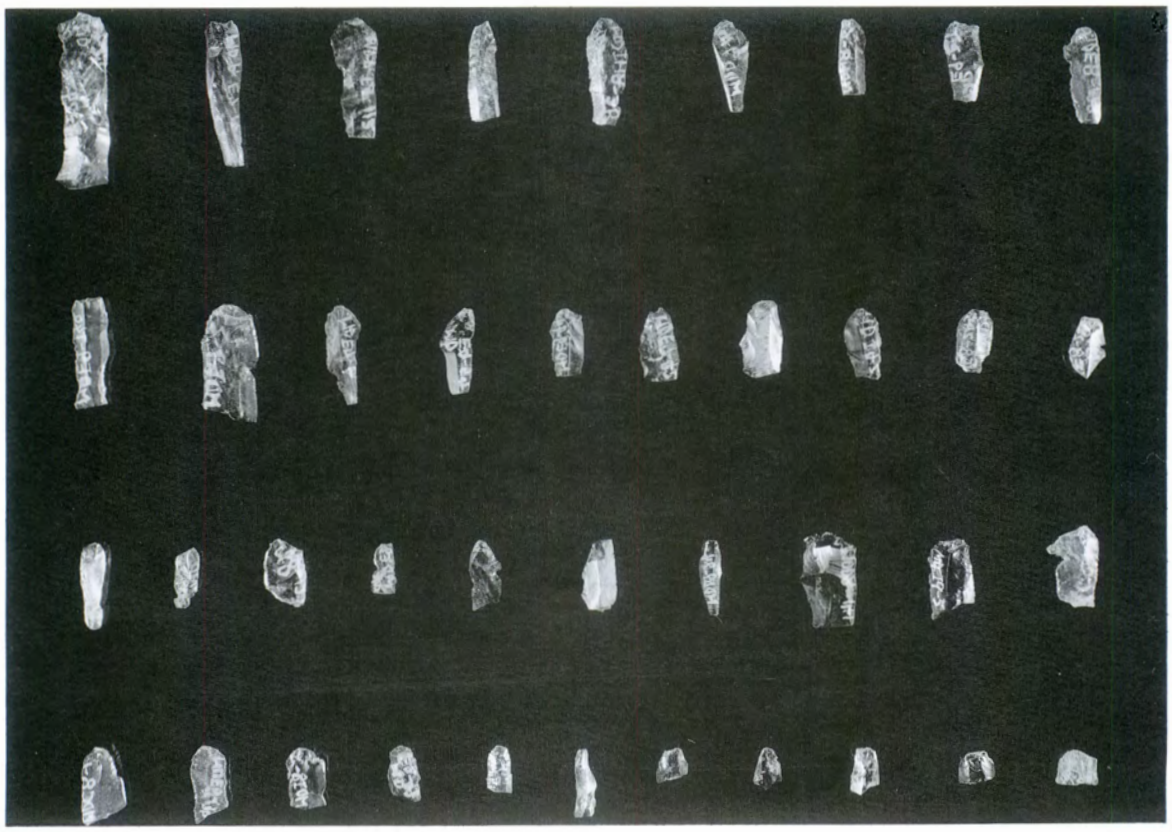
調査風景　　（北東から）



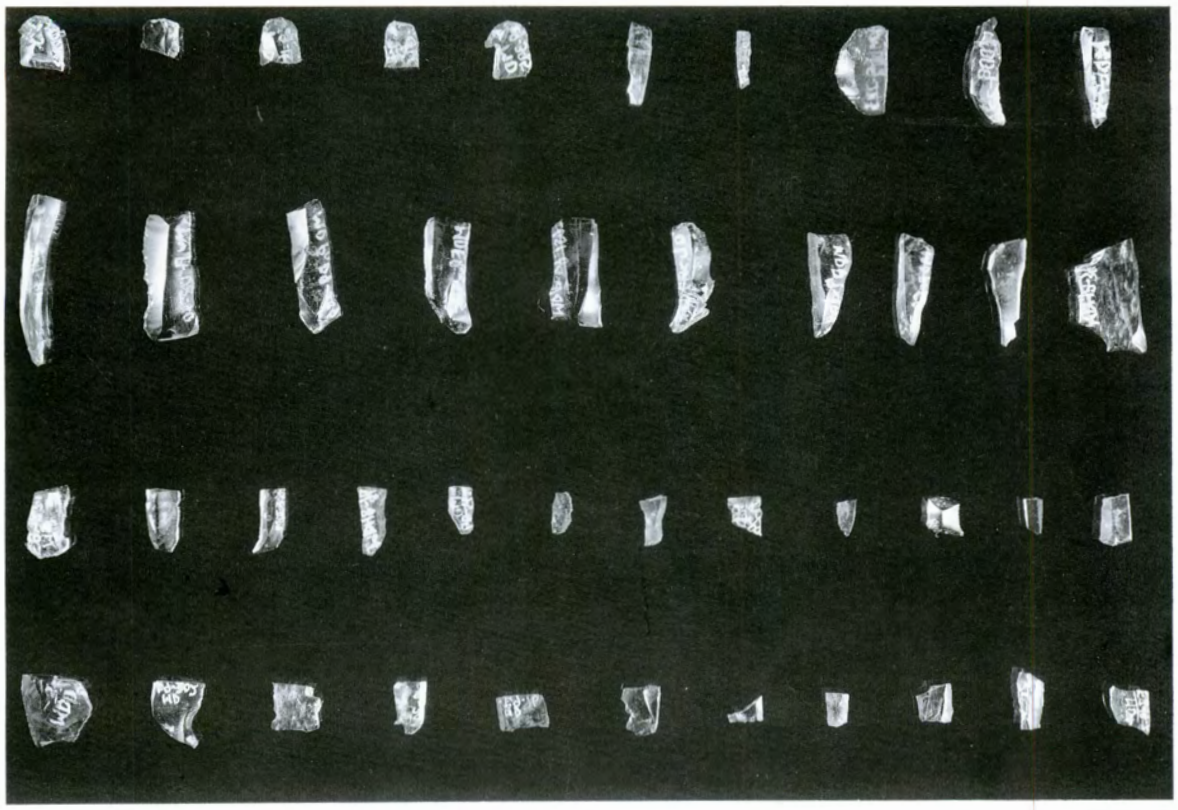


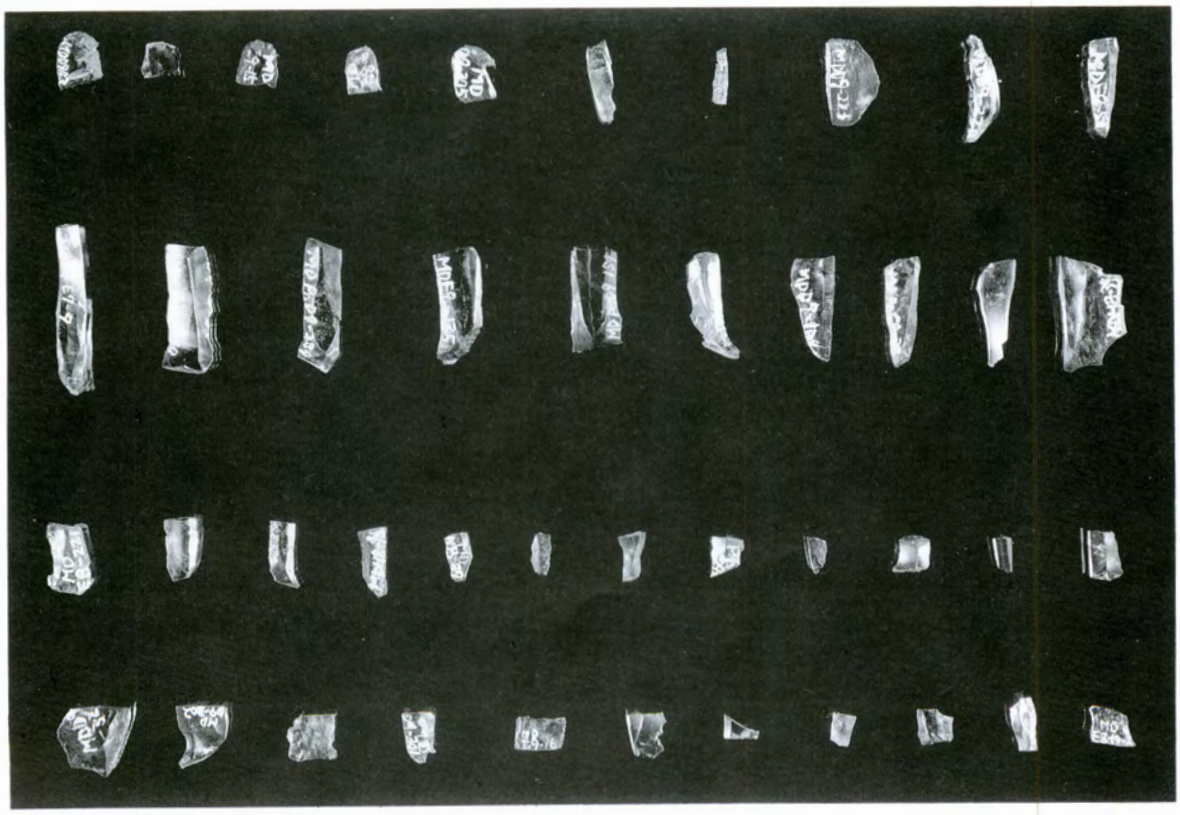
細石刃(1)（上：表，下：裏）　　（1／1）





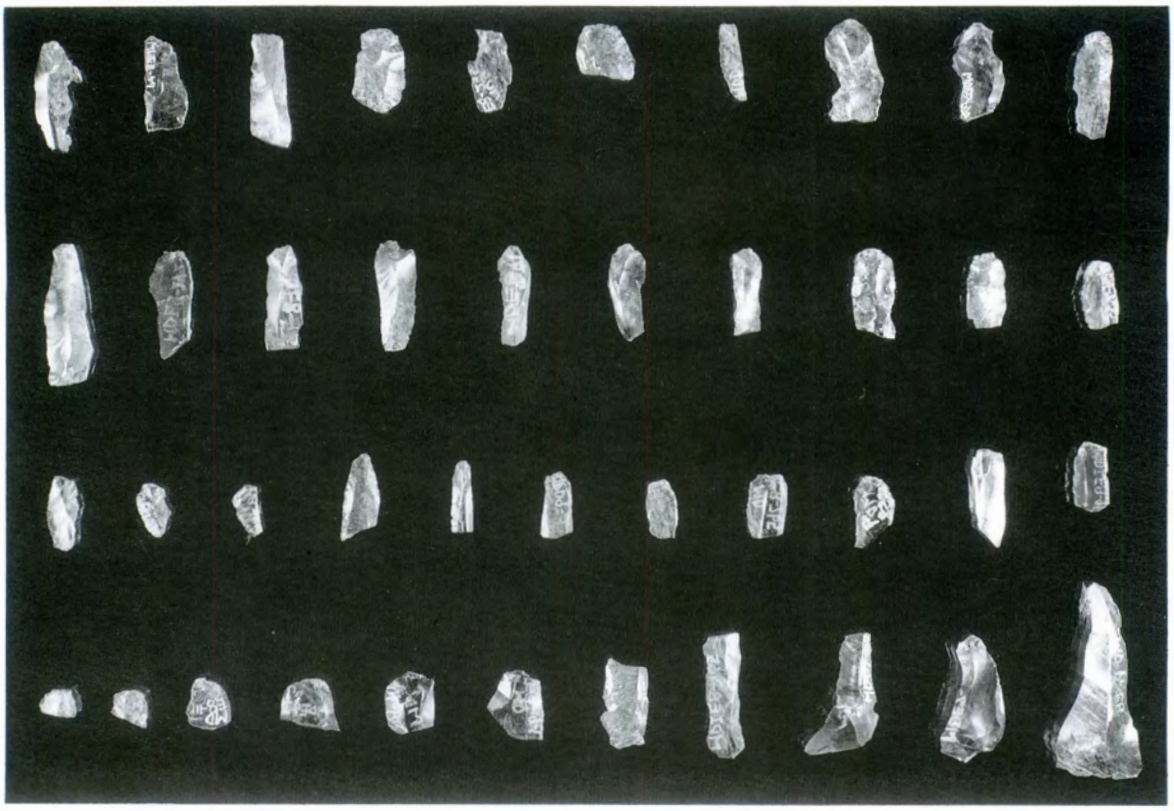
細石刃(2)（上：表，下：裏）　（1／1）

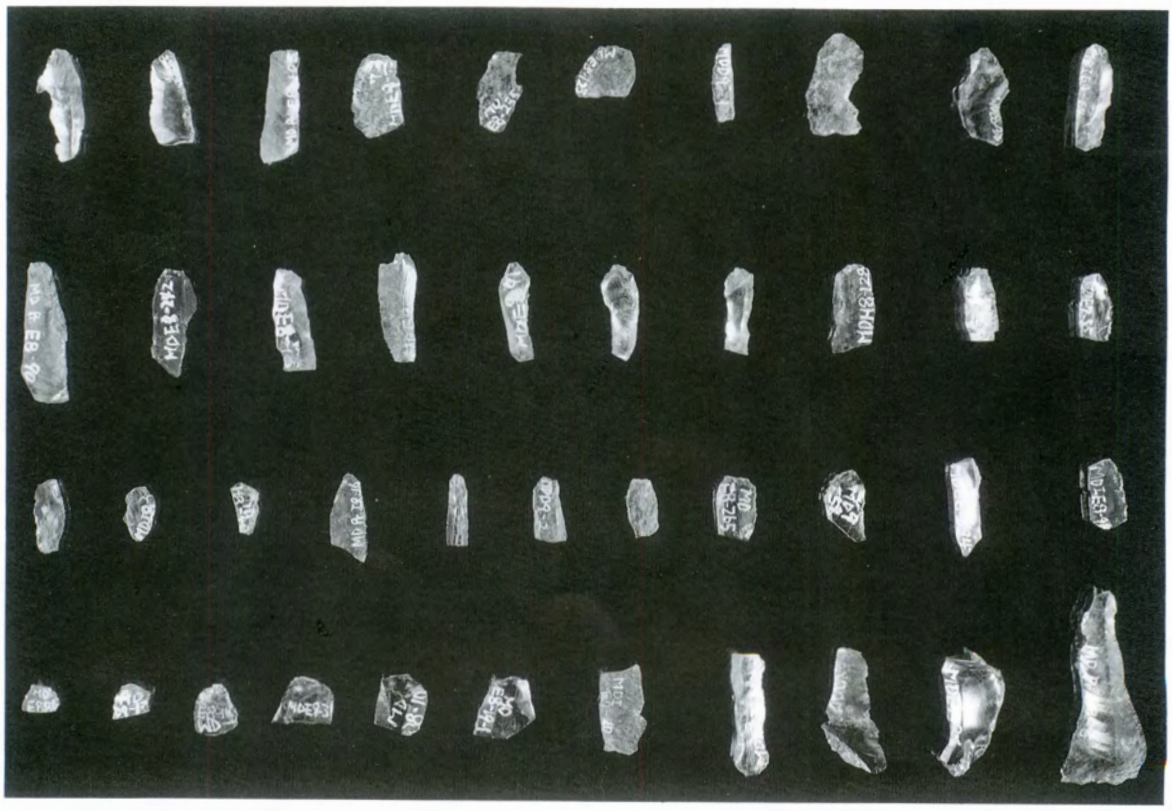




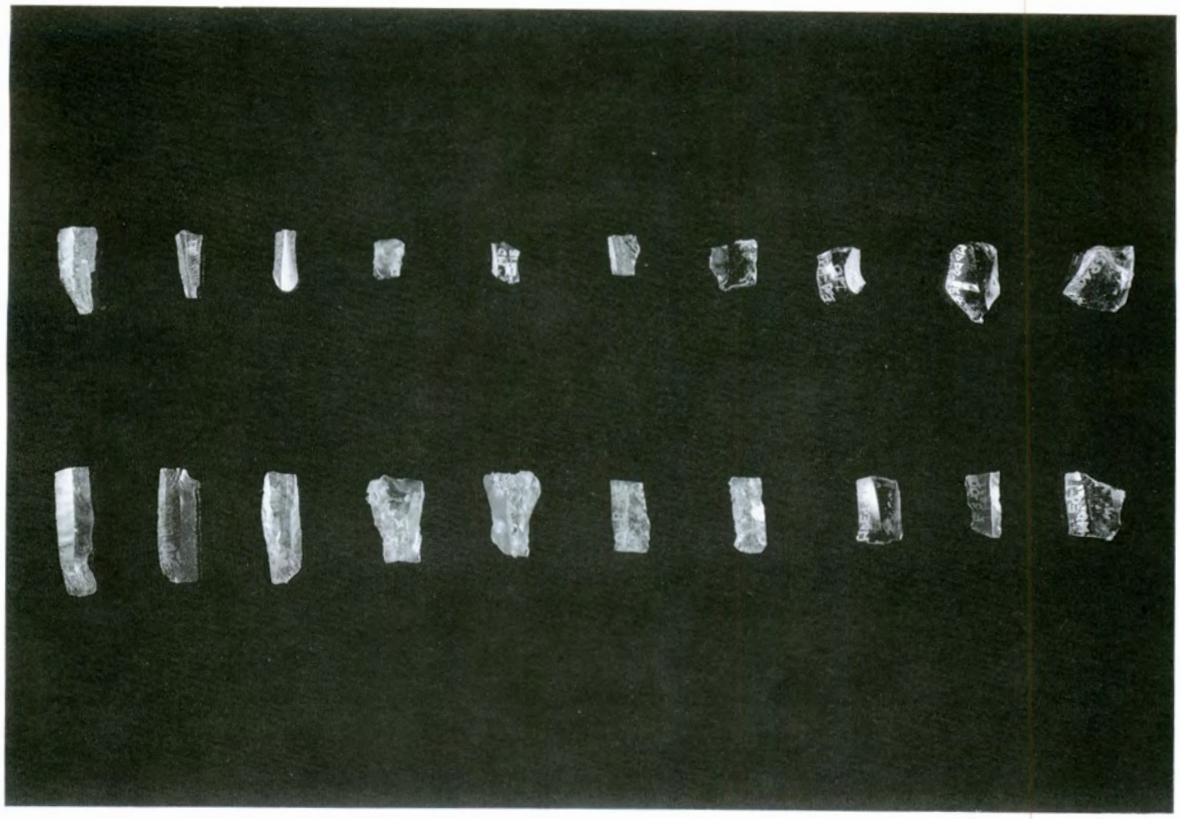
細石刃(3)（上：表，下：裏）

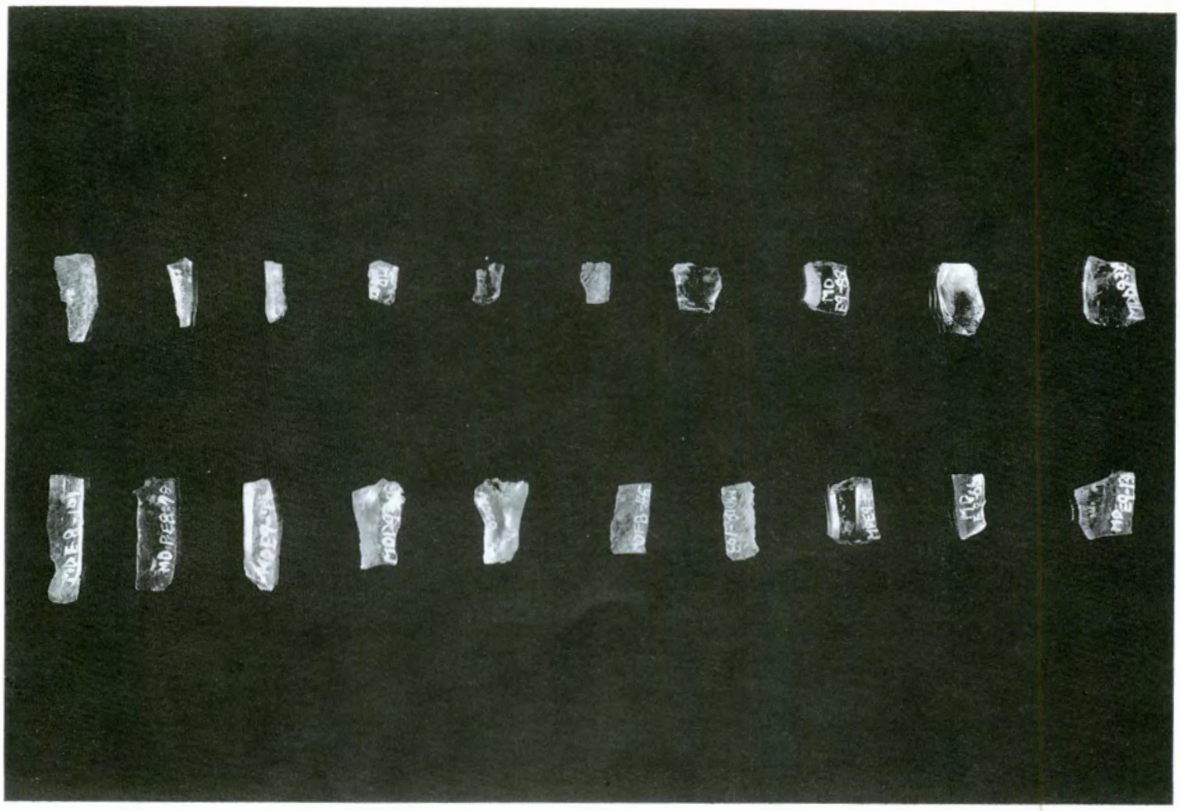
（1／1）



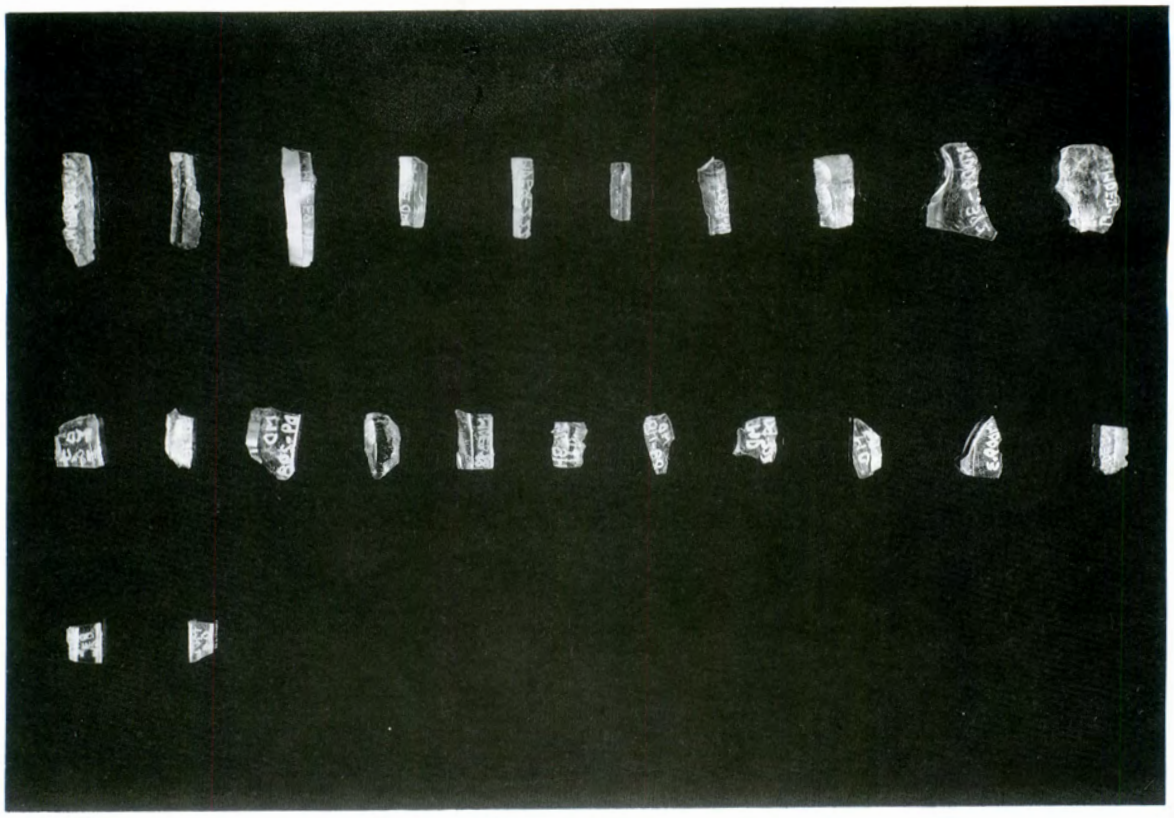


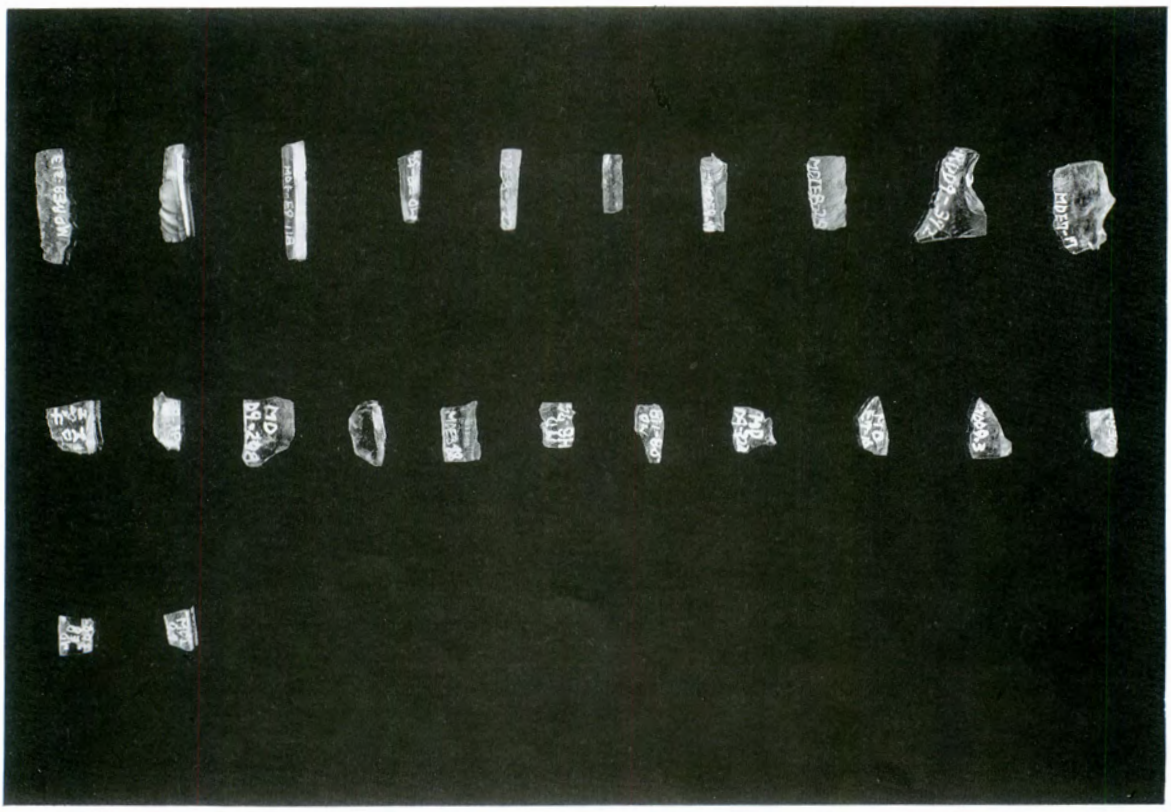
細石刃(4)（上：表，下：裏）　（1／1）





細石刃(5)（上：表，下：裏）　　（1／1）

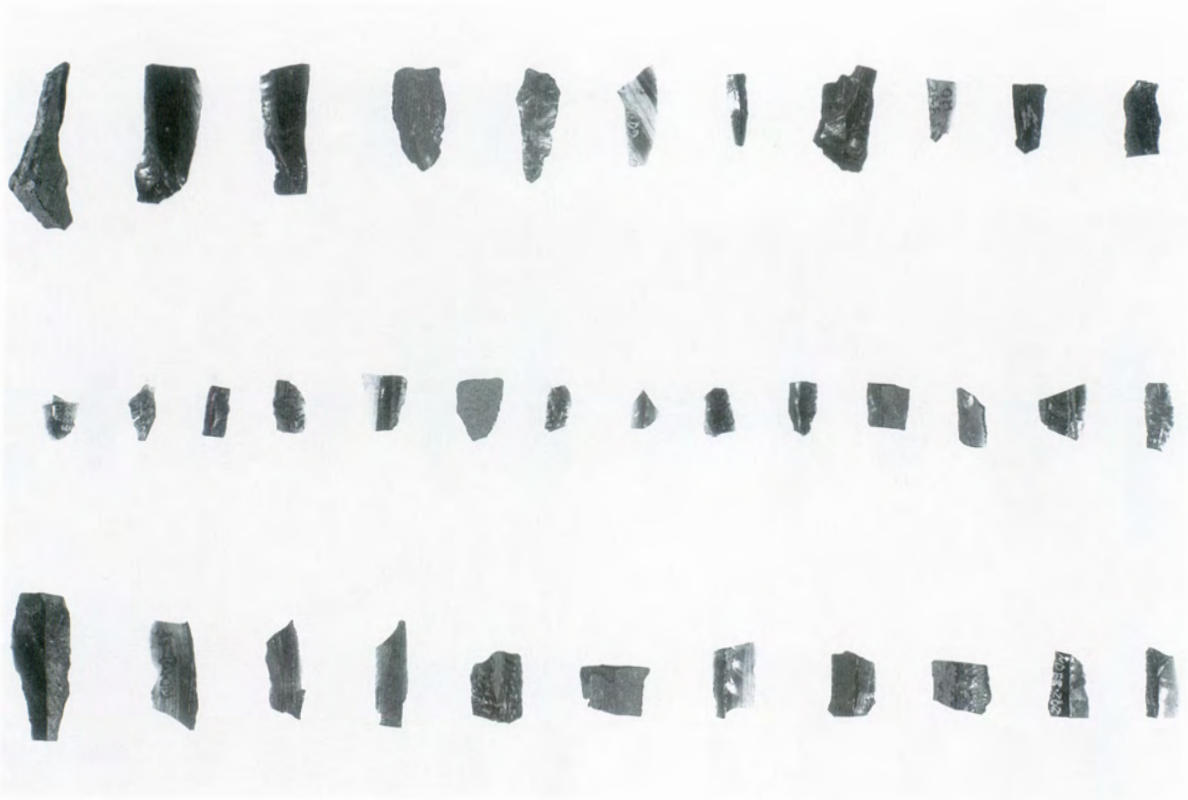




細石刃(6)（上：表，下：裏）　（1／1）

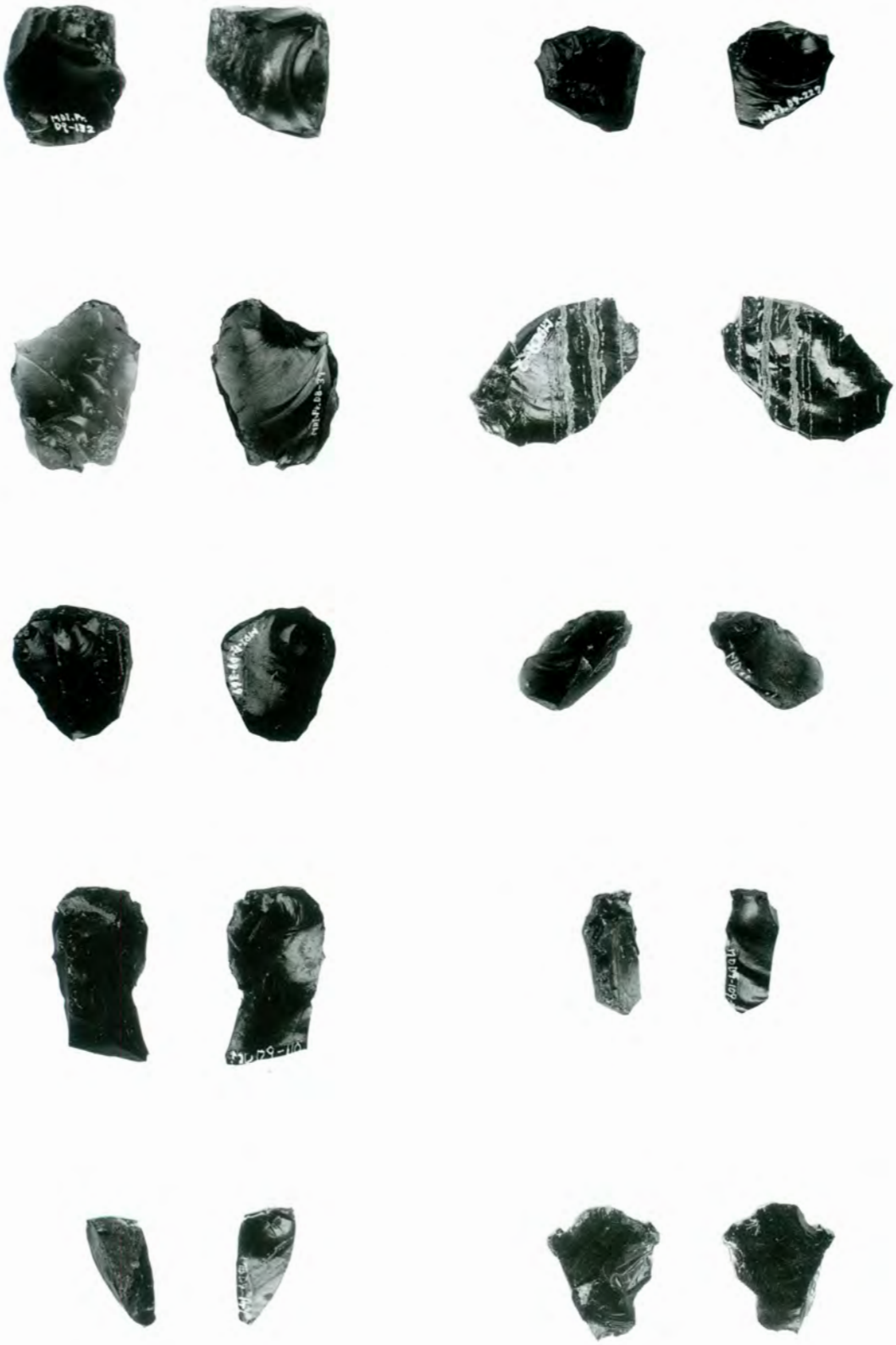
細石刃(7)　(上：表，下：裏)

(1／1)



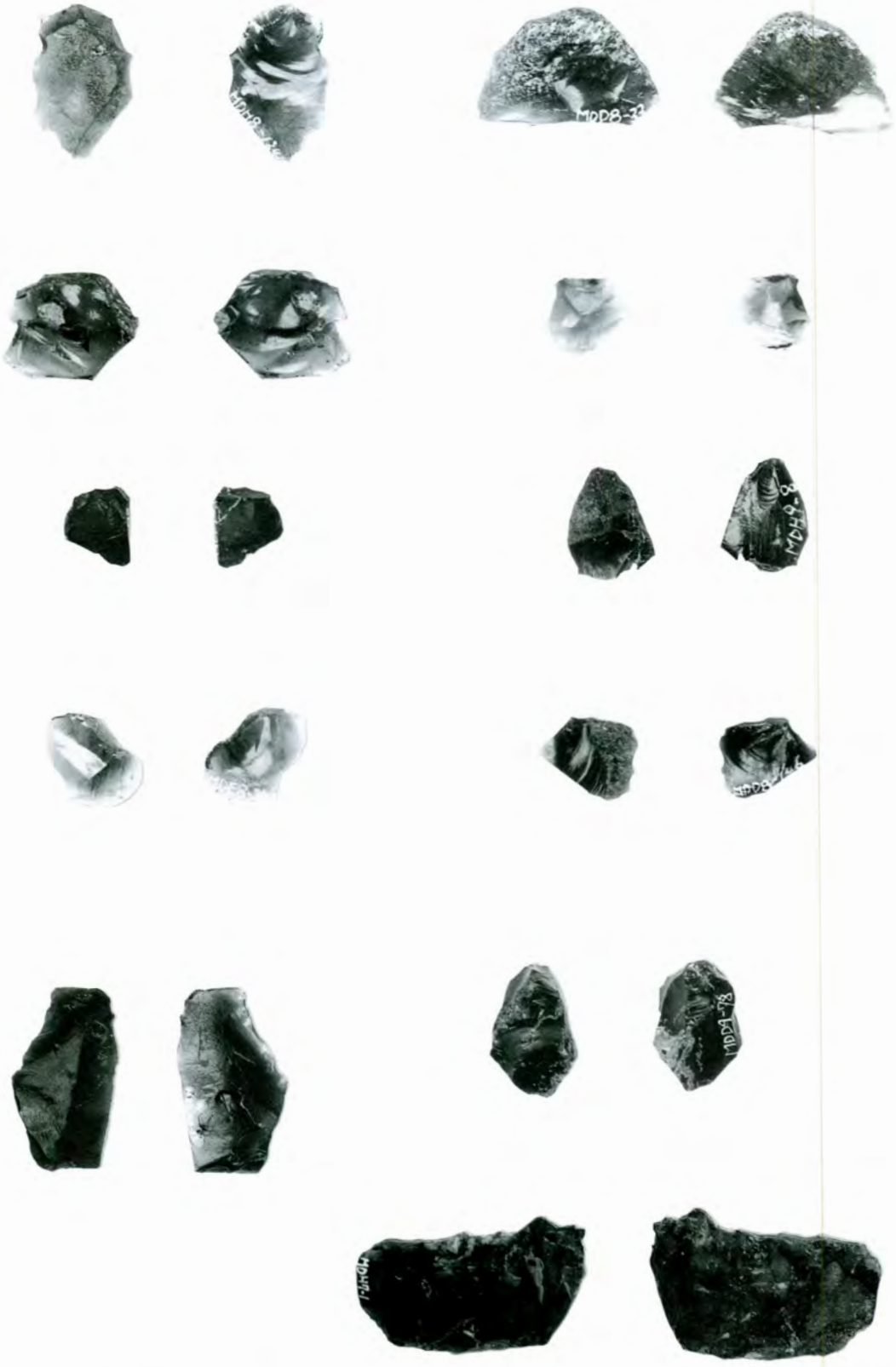
細石刃(8)（上：表，下：裏）　　（1／1）

細石核・細石核原形・細石核用素材　（1／1）



細石核調整剥片(1)

(1／1)



細石核調整剥片(2)・ナイフ形石器・楔形石器

(1／1)

接合資料１　　（１／１）

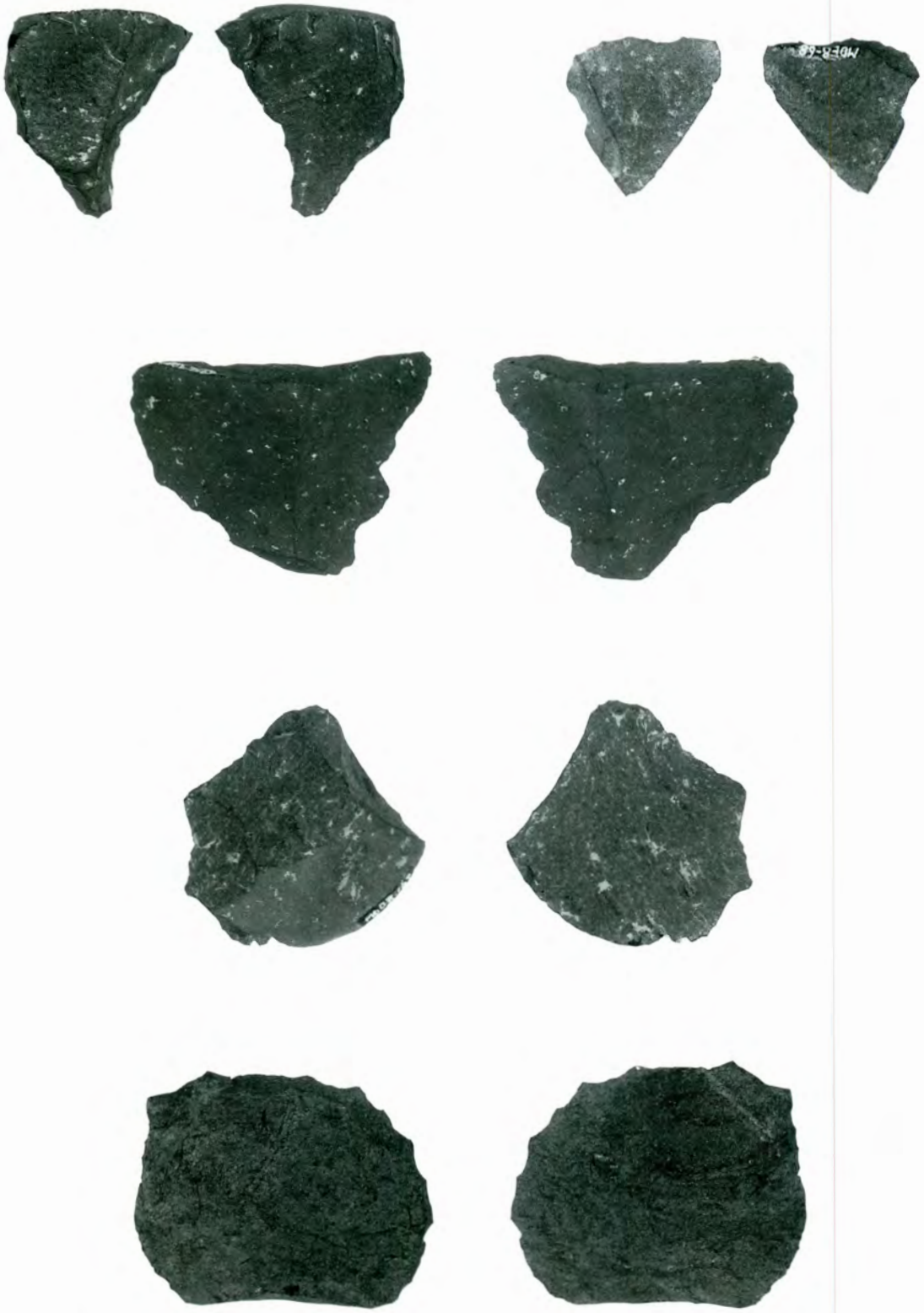
接合資料2（上）・3（下）

（1／1）

接合資料4（上）・5（中）・6（下）　（1／1）

スクレイパー (1)

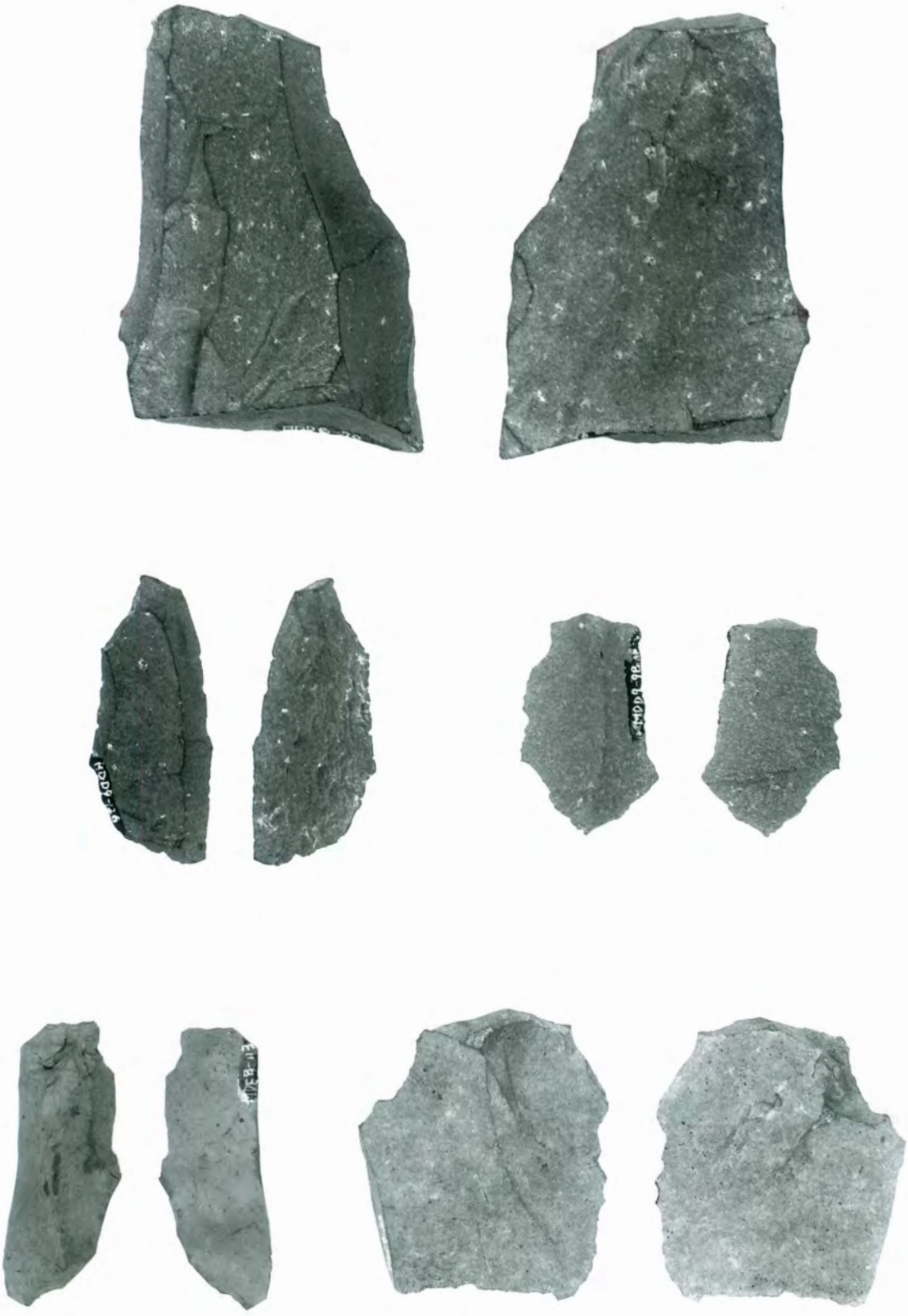
スクレイパー(2)



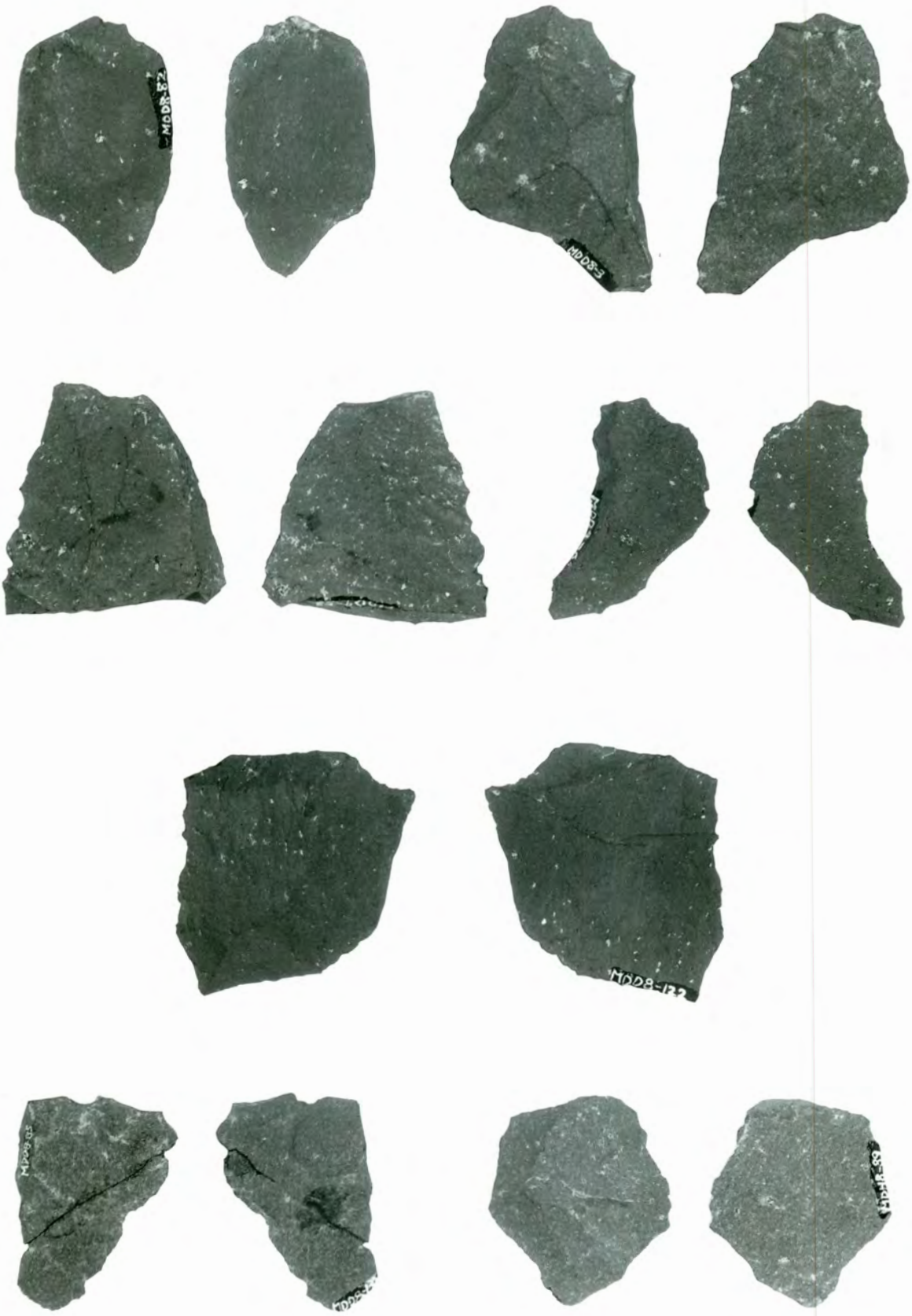
スクレイパー(3)

スクレイパー(4)・二次加工痕を有する剥片・使用痕を有する剥片(1)

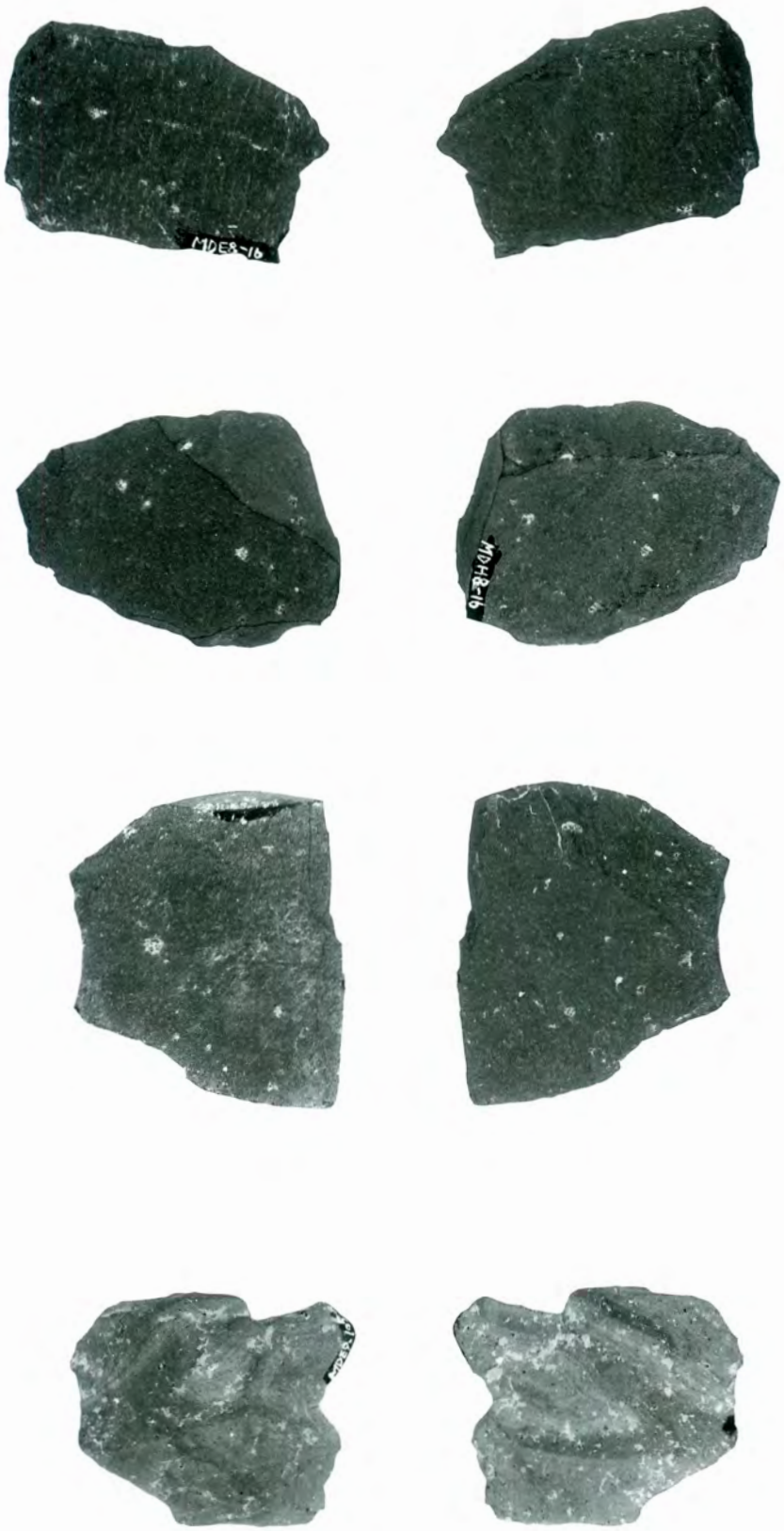
使用痕を有する剥片(2)



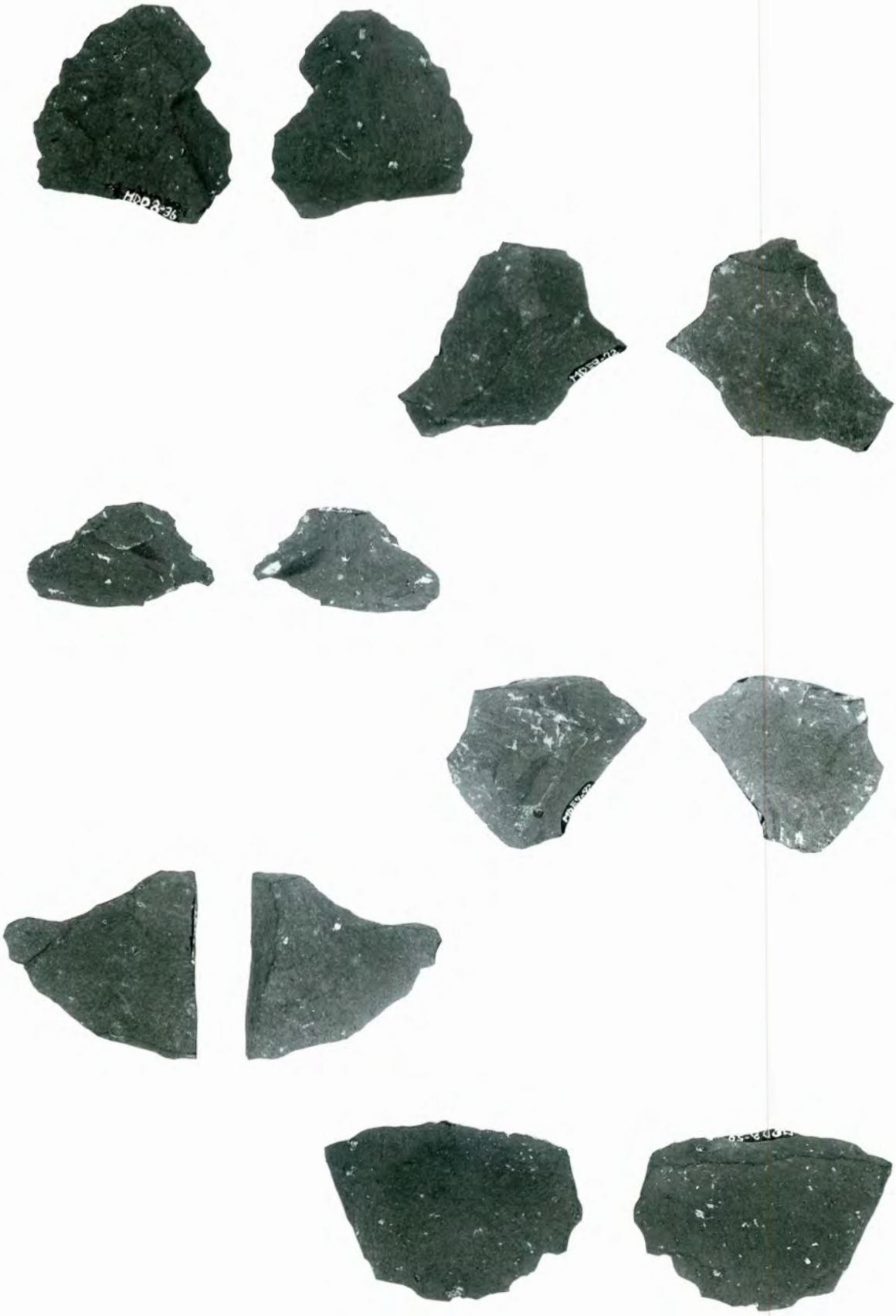
剥片(1)



剥片(2)



剥片(3)

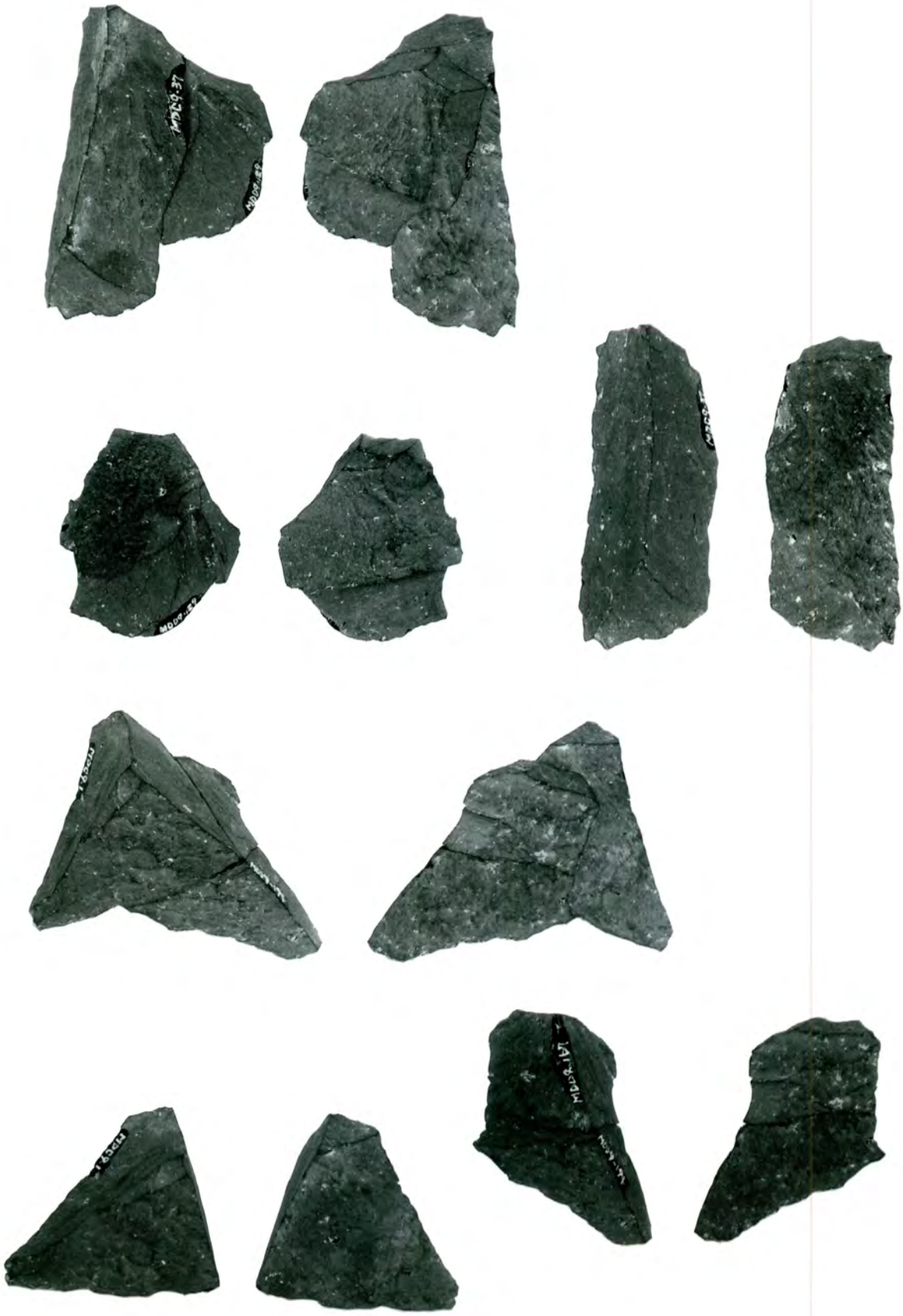


剥片(4)

石核(1)

石核(2)

接合資料7（上）・10（下）

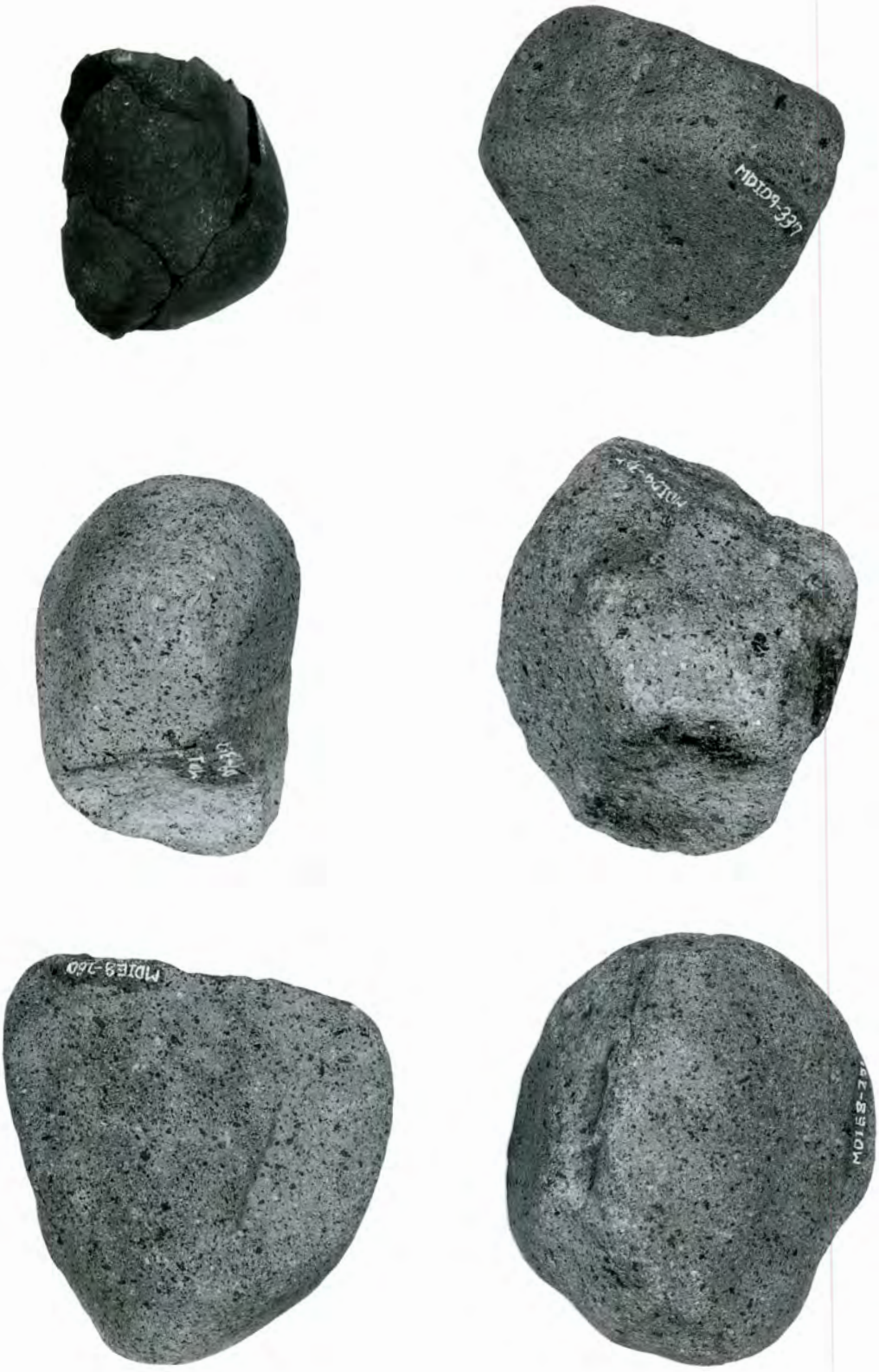


接合資料 8（上）・9（下）

礫器(2)

(1／2)

礫器(3)・敲石(1)　　(1／2)



敲石(2)

(1／2)

旧石器調査区外出の石器・調査前に採集された石器

市之関前田遺跡Ⅰ発掘調査報告書

1990年12月20日印刷
1991年3月20日発行

編集発行　宮城村教育委員会
群馬県勢多郡宮城村鼻毛石1711－8
〒371-02　電話0272－83－6886

印刷　朝日印刷工業株式会社